公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（47）

東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

田原迫ノ上遺跡３
（たはらさこのうえいせき）

立小野堀遺跡２
（たちおのぼりいせき）

（鹿屋市串良町細山田）

2022年３月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



田原迫ノ上遺跡（南西より高隈山地方向を望む）



立小野堀遺跡191・192・193号地下式横穴墓

序　　文

この報告書は，東九州自動車道（志布志IC～鹿屋串良JCT間）の建設に伴って実施された，鹿屋市串良町細山田に所在する田原迫ノ上遺跡・立小野堀遺跡の発掘調査の記録です。

田原迫ノ上遺跡では，平成22～26・28・30年度の調査で，縄文時代・弥生時代を中心に多数の遺構・遺物が発見されています。立小野堀遺跡では，平成22～24・26・30年度の調査で，古墳時代の地下式横穴墓と，それに伴う副葬品が発見されました。本書では，田原迫ノ上遺跡の平成26年度の弥生時代の調査成果と平成28・30年度の調査成果，立小野堀遺跡の平成30年度の調査成果を報告しています。

田原迫ノ上遺跡の縄文時代早期・弥生時代の竪穴建物跡や集石，遺構内外から出土した遺物や，立小野堀遺跡で発見された古墳時代の埋葬施設は，遺跡周辺だけでなく，大隅半島中央部における当時の人々の生活を解明する手がかりになるものと期待されます。

本書が，県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され，埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に，調査にご協力いただいた国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所，鹿屋市教育委員会，関係各機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼申し上げます。

令和４年３月

公益財団法人　鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター長　　中村　和美

報 告 書 抄 録

ふりがな	たはらさこのうえいせき　　たちおのぼりいせき
書名	田原迫ノ上遺跡３　　立小野堀遺跡２
副書名	東九州自動車道（志布志IC～鹿屋串良JCT間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第47集
編著者名	有馬孝一・髙吉伸弥・郷原麻鈴
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL 0995-70-0574　FAX 0995-70-0576
発行年月日	2022年３月

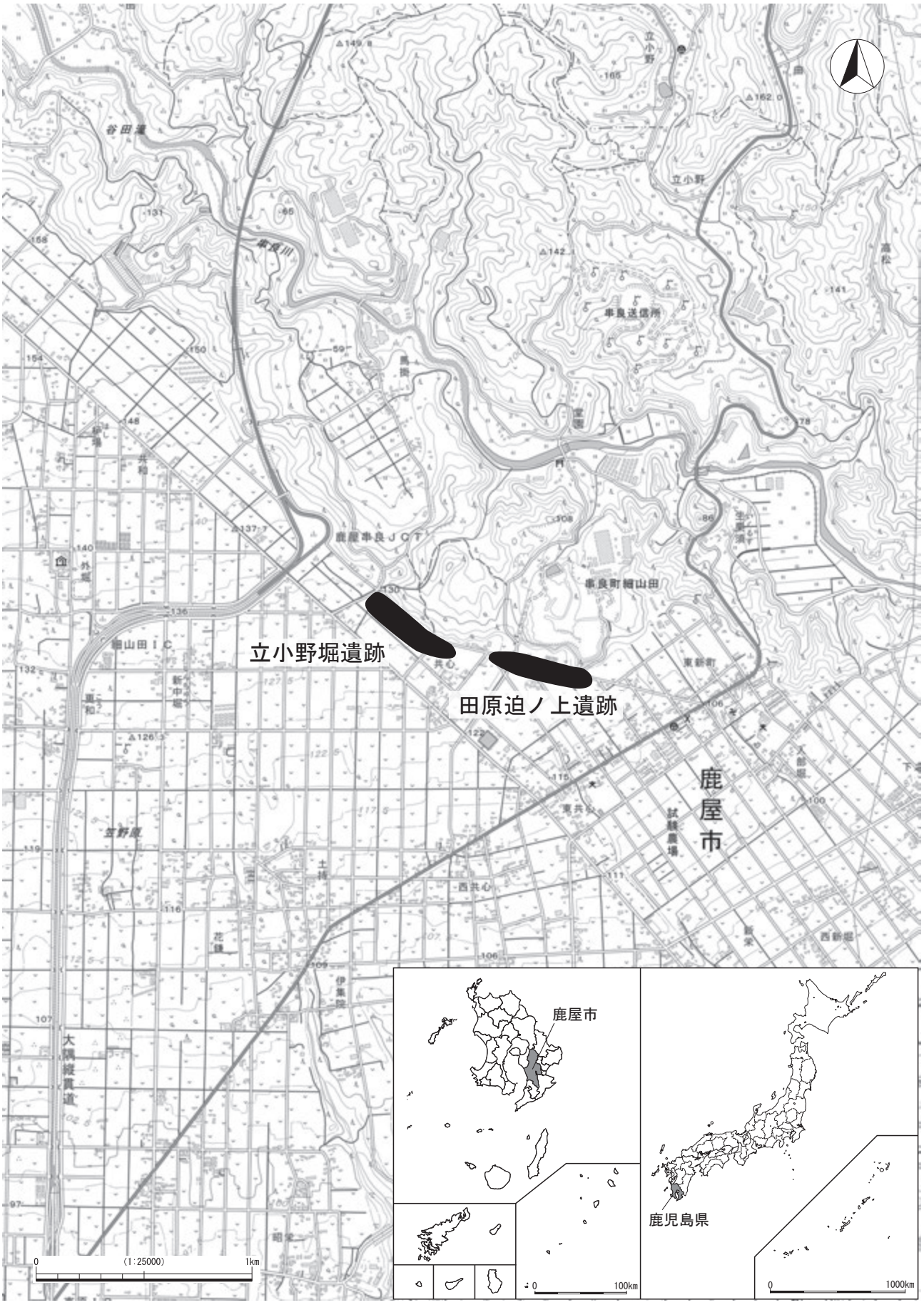
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 （今回報告分）	調査面積 （㎡）	調査原因
たはらさこのうえいせき 田原迫ノ上遺跡	かごしまけん 鹿児島県 かのやし 鹿屋市	46203	203-385	31° 26′ 40″	130° 54′ 50″	2014.05.12～2015.01.28	22,852	東九州自動車道（志布志IC～鹿屋串良JCT間）建設に伴う記録保存調査
						2016.05.09～2017.02.24	3,200	
						2018.09.25～2019.02.26	6,416	
たちおのぼりいせき 立小野堀遺跡	くしらちょう 串良町 ほそやまだ 細山田		203-384	31° 26′ 48″	130° 54′ 28″	2018.09.25～2019.02.26	1,190	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田原迫ノ上遺跡	集落跡	縄文時代早期	竪穴建物跡，土坑，集石，石器製作跡	前平式土器，石坂式土器，下剥峯式土器，押型文土器，塞ノ神式土器 石鏃，石斧，礫器，砥石，磨敲石類，石皿	—
	散布地	縄文時代前期 ～ 縄文時代晩期	—	野久尾式土器，春日式土器，宮之迫式土器，擬似縄文土器，市来式土器，丸尾式土器，納曽式土器，西平式土器，中岳Ⅱ式土器，入佐式土器，黒川式土器，刻目突帯文土器 石鏃，石核，礫器，剥片，石斧，磨敲石類	—
	集落跡	弥生時代	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，円形周溝，土坑，集石	山ノ口式土器，擬凹線文系壺	—
	散布地	時期不詳	帯状硬化面		—
立小野堀遺跡	地下式横穴墓	古墳時代	地下式横穴墓，土坑墓	成川式土器 鉄器（鉄剣，短剣，刀子，鉄鏃）	—

要約

田原迫ノ上遺跡は，縄文時代早期～弥生時代中期を中心とした複合遺跡である。縄文時代早期では，竪穴建物跡や集石などの遺構が検出されている。また，土器は石坂式土器を主体としており，縄文時代早期中葉から早期後葉をつなぐ時期の人々の生活を知る上で貴重な資料である。弥生時代中期では，竪穴建物跡や掘立柱建物跡，円形周溝などが検出され，大隅半島中央部での当時の集落の在り方の情報をもたらす遺跡である。

立小野堀遺跡は，古墳時代の地下式横穴墓群を中心とする，縄文時代前期から古墳時代までの複合遺跡である。今回の調査で新たに地下式横穴墓３基が検出され，『立小野堀遺跡』の報告と合わせると193基の地下式横穴墓の調査報告となる。刀子や短剣などの副葬品も出土しており，南九州の古墳時代を考える上で重要な遺跡である。



第１図　田原迫ノ上・立小野堀遺跡位置図

例　言

1　本書は，東九州自動車道（志布志IC～鹿屋串良JCT間）建設に伴う田原迫ノ上遺跡の発掘調査報告書第３巻・立小野堀遺跡の発掘調査報告書第２巻である。

2　本書に収録した遺跡は，鹿児島県鹿屋市串良町細山田に所在する。

3　発掘調査は，国土交通省九州地方整備局（以下，「国交省」という。）から鹿児島県教育委員会（以下，「県教委」という。）が受託し，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下，「埋文調査センター」という。）が実施した。

4　田原迫ノ上遺跡の発掘調査は，平成26年度は埋文調査センターが国際文化財株式会社に支援業務を委託して実施し，平成28・30年度は埋文調査センターが実施した。

5　田原迫ノ上遺跡の発掘調査における実測図の作成は，平成26年度は埋文調査センター調査担当者の指揮のもと，国際文化財株式会社が行った。平成28・30年度は，埋文調査センター調査担当者が行った。また，空中写真撮影は株式会社ふじたに委託した。

6　立小野堀遺跡の発掘調査は，平成30年度に埋文調査センターが実施した。

7　立小野堀遺跡の発掘調査における実測図の作成は，埋文調査センター調査担当者が行った。

8　整理作業・報告書作成事業は，令和元年度と令和３年度は埋文調査センターが実施した。

9　遺構番号は，過年度から引き続き調査を行った遺構があるため，『田原迫ノ上遺跡１・２』と『立小野堀遺跡』から継続する番号で付し，本文・挿図・表・図版の番号と一致する。

10　掲載した遺物の番号は通し番号で，本文・挿図・表・図版の番号と一致する。

11　本書で用いたレベル数値は，海抜絶対高である。

12　本書で使用した方位は，磁北である。

13　遺物の注記で用いた遺跡記号は以下のとおりである。
田原迫ノ上遺跡「田」　立小野堀遺跡「ＴＯ」

14　土色の表記は，「新版標準土色帖」（1970，農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。

15　本書に係る遺構図・遺物出土状況図及びトレースは，有馬・髙吉・郷原が整理作業員の協力を得て行った。

16　本書に係る出土遺物の実測及びトレース・レイアウトは，有馬・髙吉・郷原が整理作業員の協力を得て行った。また，田原迫ノ上遺跡出土石器の実測・トレースの一部を株式会社パスコに，立小野堀遺跡出土鉄器の実測・トレースを（公財）元興寺文化財研究所に委託した。

17　本書に係る自然科学分析は，土器の圧痕調査をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。炭化物の放射性炭素年代測定，種実同定を加速器分析研究所株式会社へ委託した。また，立小野堀遺跡出土鉄器の分析を（公財）元興寺文化財研究所に委託した。

18　出土遺物の写真撮影は，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，「県立埋文センター」という。）の写場にて，県立埋文センターの西園勝彦が行った。

19　本書の編集は主に郷原が担当し，執筆は以下のとおり分担して行った。

田原迫ノ上遺跡３

第Ⅰ章	発掘調査の経過	髙吉
第Ⅱ章	遺跡の位置と環境	髙吉
第Ⅲ章	田原迫ノ上遺跡の調査の方法と層序	髙吉　郷原
第Ⅳ章	田原迫ノ上遺跡の発掘調査の成果	
	遺構	髙吉
	土器	郷原
	石器	髙吉
第Ⅴ章	立小野堀遺跡の発掘調査の成果	
	発掘調査の方法と層序	有馬
	発掘調査の成果	有馬
第Ⅵ章	自然科学分析	郷原　有馬
第Ⅶ章	総括	髙吉　有馬

20　本書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は県立埋文センターで保管し，展示・活用を図る予定である。

凡　　例

1　本書掲載の遺構配置図・遺物出土状況図は，１グリッド（１マス）が10m四方であり，各図に縮尺を提示してある。

2　遺構

（１）各遺構の縮尺，略記号及び番号は次のとおりである。ただし，縮尺が異なる場合もあるので，各図に示してある縮尺を参照されたい。

遺構名	縮尺	略記号
竪穴建物跡	1：40	SH
掘立柱建物跡	1：60	SB
土坑	1：20 1：40	SK
集石	1：20	SQ
円形周溝	1：40	SX
帯状硬化面	1：800	SD
地下式横穴墓	1：40	SK
土坑墓	1：20	SK

（２）本書で用いた遺構図の網伏せ表現は，以下のとおりである。

炭混じりの土



（３）地下式横穴墓の解説に用いる呼称は，次頁のとおりである。

3　遺物

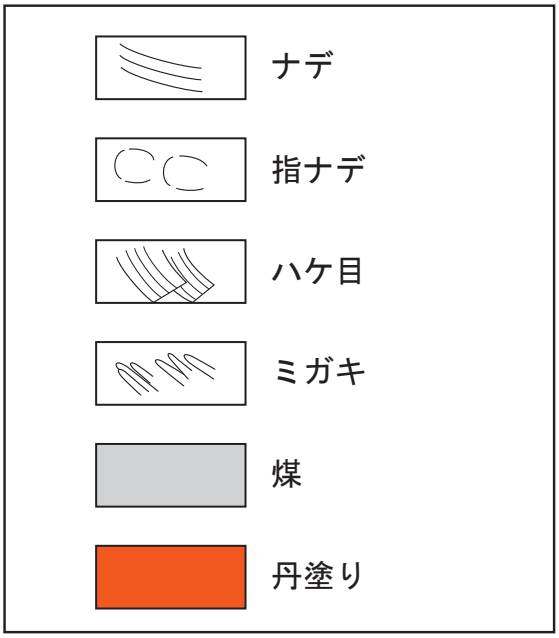
（１）掲載遺物の縮尺は，土器・石器ともに１：３を基本とし，石鏃等の小型石器は原寸とする。

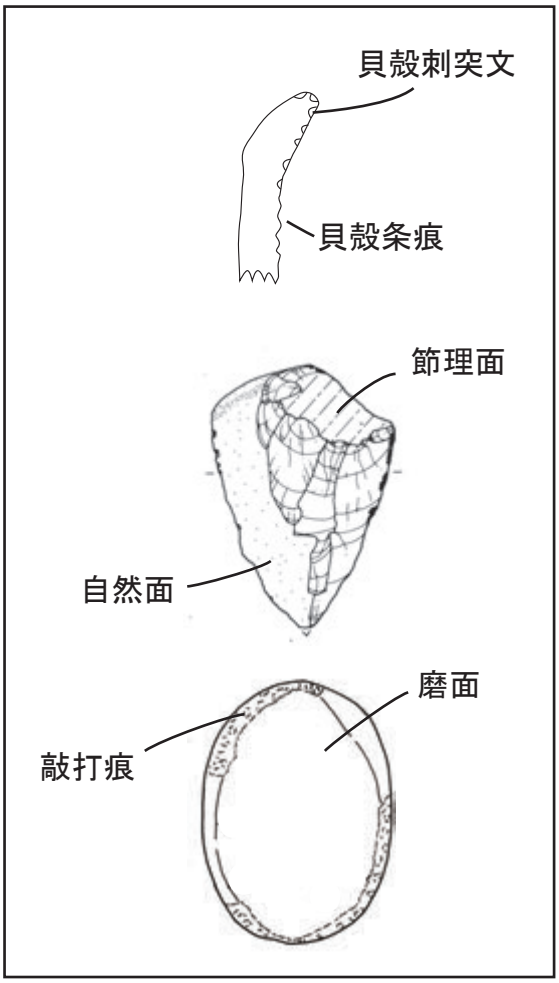
（２）鉄器は１：２を基本とし，刀剣類は１：４とする。５cm以下の小型鉄製品は原寸とする。

（３）磨石敲石類については，磨石・敲石・磨敲石の３つで表記している。磨敲石は，磨石と敲石の両方の特徴をもつものである。

（４）集石遺構一覧表の石材別個数の合計が総礫数と合わないものは，その他の石材があるためである。

（５）本書で用いた遺物の表現は，以下のとおりである。





本 文 目 次

巻頭図版
序文
報告書抄録
遺跡位置図
例言
凡例
目次
第Ⅰ章　発掘調査の経過 …… 1
　第１節　調査に至るまでの経緯 …… 1
　第２節　調査の組織 …… 2
　第３節　調査の詳細（日誌抄より） …… 2
　第４節　整理・報告書作成 …… 4
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 7
　第１節　地理的環境 …… 7
　第２節　歴史的環境 …… 7
　第３節　志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡 …… 11
第Ⅲ章　田原迫ノ上遺跡の調査の方法と層序 …… 16
　第１節　調査の方法 …… 16
　第２節　層序 …… 17
　第３節　出土遺物の分類 …… 23
第Ⅳ章　田原迫ノ上遺跡の発掘調査の成果 …… 29
　第１節　縄文時代早期の調査成果 …… 29
　　１　調査の概要 …… 29
　　２　遺構 …… 29
　　(1)　竪穴建物跡 …… 29
　　(2)　土坑 …… 29
　　(3)　集石 …… 31
　　３　遺物 …… 41
　　(1)　土器 …… 41
　　(2)　石器 …… 55
　第２節　縄文時代前～晩期の調査成果 …… 68
　　１　調査の概要 …… 68
　　２　遺物（土器） …… 68
　第３節　弥生時代以降の調査成果 …… 82
　　１　調査の概要 …… 82
　　２　遺構 …… 82
　　(1)　竪穴建物跡 …… 82
　　(2)　掘立柱建物跡 …… 89
　　(3)　円形周溝 …… 91
　　(4)　土坑 …… 92
　　(5)　集石 …… 95
　　(6)　帯状硬化面 …… 96
　　３　遺物 …… 97
　　(1)　土器 …… 97
　　(2)　石器 …… 105
　第４節　過年度調査の遺物 …… 115
第Ⅴ章　立小野堀遺跡の発掘調査の成果 …… 117
　第１節　発掘調査の方法と層序 …… 117
　　１　発掘調査の方法 …… 117
　　２　層序 …… 117
　第２節　発掘調査の成果 …… 117
　　１　調査の概要 …… 117
　　２　遺構 …… 117
　　３　遺物 …… 121
第Ⅵ章　自然科学分析 …… 133
　第１節　自然科学分析の概要 …… 133
　第２節　土器圧痕調査 …… 133
　第３節　田原迫ノ上遺跡・立小野堀遺跡における放射性炭素年代（AMS測定） …… 137
　第４節　田原迫ノ上遺跡・立小野堀遺跡から出土した炭化物の樹種・種実同定 …… 141
　第５節　立小野堀遺跡出土鉄製品の科学分析 …… 144
第Ⅶ章　総括 …… 152

挿 図 目 次

第１図　田原迫ノ上・立小野堀遺跡位置図
第２図　平成26年度調査範囲図（弥生時代） …… 5
第３図　平成28・30年度調査範囲図（縄文時代・弥生時代） …… 6
第４図　田原迫ノ上遺跡・立小野堀遺跡周辺遺跡地図 …… 10
第５図　東九州自動車道関連遺跡位置図 …… 15
第６図　田原迫ノ上遺跡土層断面図１ …… 18
第７図　田原迫ノ上遺跡土層断面図２ …… 19
第８図　田原迫ノ上遺跡土層断面図３ …… 20
第９図　田原迫ノ上遺跡土層断面図４ …… 21
第10図　田原迫ノ上遺跡土層断面図５ …… 22
第11図　縄文時代早期遺構配置図１ …… 25
第12図　縄文時代早期遺構配置図２ …… 26
第13図　縄文時代早期遺構配置図３ …… 27
第14図　縄文時代早期遺構配置図４ …… 28
第15図　竪穴建物跡22号・土坑106号 …… 30
第16図　竪穴建物跡22号出土遺物，土坑105号 …… 31
第17図　集石193～195号，出土遺物 …… 32
第18図　集石196・197号 …… 33
第19図　集石198号，出土遺物 …… 34
第20図　集石199号，出土遺物 …… 35
第21図　集石200～202号，出土遺物 …… 36
第22図　集石203号，出土遺物 …… 37
第23図　集石204号，出土遺物 …… 38

第24図　集石205号，出土遺物 …… 39
第25図　集石206・207号，出土遺物 …… 40
第26図　縄文時代早期土器分布図 …… 41
第27図　Ⅰ・Ⅳ－ａ類土器 …… 42
第28図　Ⅳ－ａ類土器 …… 43
第29図　Ⅳ－ａ・Ⅳ－ｂ類土器 …… 44
第30図　Ⅳ－ｂ・Ⅳ－ｃ類土器 …… 45
第31図　Ⅳ類土器胴部(1) …… 46
第32図　Ⅳ類土器胴部(2) …… 47
第33図　Ⅳ－底－ア類 …… 48
第34図　Ⅳ－底－イ・ウ・エ類 …… 49
第35図　Ⅴ類土器 …… 51
第36図　Ⅸ類土器(1) …… 52
第37図　Ⅸ類土器(2) …… 53
第38図　Ⅻ・ⅩⅥ・ⅩⅦ類土器 …… 54
第39図　縄文時代早期石器分布図 …… 55
第40図　石鏃，ドリル …… 56
第41図　スクレイパー，二次加工のある剥片 …… 57
第42図　石核，礫器 …… 58
第43図　礫器，磨製石斧 …… 59
第44図　磨石・敲石・磨敲石１ …… 60
第45図　磨石・敲石・磨敲石２ …… 61
第46図　磨石・敲石・磨敲石３，石皿，軽石製品 …… 62
第47図　縄文時代前～晩期土器分布図 …… 68
第48図　縄文時代中期土器 …… 69
第49図　縄文時代後期土器１ …… 70
第50図　縄文時代後期土器２ …… 71
第51図　縄文時代後期土器３ …… 72
第52図　縄文時代後期土器４ …… 73
第53図　縄文時代後期土器５ …… 74
第54図　縄文時代後期土器６，縄文時代晩期土器１…… 75
第55図　縄文時代晩期土器２，その他の土器１ …… 76
第56図　その他の土器２ …… 77
第57図　その他の土器３ …… 78
第58図　竪穴建物跡16号 …… 82
第59図　弥生時代遺構配置図１ …… 83
第60図　弥生時代遺構配置図２ …… 84
第61図　弥生時代遺構配置図３ …… 85
第62図　弥生時代遺構配置図４ …… 86
第63図　竪穴建物跡20号，出土遺物 …… 87
第64図　竪穴建物跡23号 …… 88
第65図　竪穴建物跡23号出土遺物１ …… 89
第66図　竪穴建物跡23号出土遺物２，掘立柱建物跡41号 …… 90
第67図　円形周溝11号 …… 91
第68図　土坑26・27号 …… 92
第69図　土坑27号出土遺物１ …… 93
第70図　土坑27号出土遺物２ …… 94
第71図　土坑27号出土遺物３，集石１～３号 …… 95
第72図　弥生時代以降土器分布図 …… 97
第73図　甕形土器１ …… 98
第74図　甕形土器２ …… 99
第75図　甕形土器３ …… 100
第76図　壺形土器１ …… 101
第77図　壺形土器２ …… 102
第78図　小型鉢形土器，蓋形土器，丹塗り壺形土器 …… 103
第79図　植物圧痕をもつ土器，古墳時代以降の土器・陶磁器 …… 104
第80図　Ⅲ～Ⅴ層石器分布図 …… 105
第81図　石鏃，剥片 …… 106
第82図　石核，礫器１ …… 107
第83図　礫器２ …… 108
第84図　打製石斧 …… 109
第85図　磨製石器・磨製石斧，磨敲石類 …… 110
第86図　過年度調査の遺物１ …… 115
第87図　過年度調査の遺物２ …… 116
第88図　立小野堀遺跡　遺構配置図（1） …… 118
第89図　立小野堀遺跡　遺構配置図（2） …… 119
第90図　立小野堀遺跡　平成30年度調査範囲図 …… 120
第91図　191号地下式横穴墓，出土遺物 …… 123
第92図　192号地下式横穴墓，出土遺物 …… 125
第93図　193号地下式横穴墓 …… 127
第94図　193号地下式横穴墓出土遺物（1） …… 128
第95図　193号地下式横穴墓出土遺物（2） …… 129
第96図　193号地下式横穴墓出土遺物（3） …… 130
第97図　６号土坑墓，出土遺物 …… 131
第98図　縄文時代早期遺構分布図 …… 153
第99図　弥生時代遺構分布図 …… 154

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… 9
第２表　志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡 …… 11
第３表　田原迫ノ上遺跡　基本層序 …… 17
第４表　石器の石材分類表 …… 24
第５表　縄文時代早期　竪穴建物跡計測表 …… 63
第６表　縄文時代早期　土坑計測表 …… 63
第７表　縄文時代早期　集石計測表 …… 63
第８表　縄文時代早期　遺構内出土土器観察表 …… 63
第９表　縄文時代早期　遺構内出土石器観察表 …… 63
第10表　縄文時代早期　遺構外出土土器観察表 …… 64

第11表　縄文時代早期　遺構外出土石器観察表 ‥ 67
第12表　縄文時代前～晩期　出土土器観察表 ‥‥ 79
第13表　弥生時代以降　竪穴建物跡計測表 ‥‥‥ 111
第14表　弥生時代以降　掘立柱建物跡計測表 ‥‥ 111
第15表　弥生時代以降　円形周溝計測表 ‥‥‥‥ 111
第16表　弥生時代以降　土坑計測表 ‥‥‥‥‥‥ 111
第17表　弥生時代以降　集石計測表 ‥‥‥‥‥‥ 111
第18表　弥生時代以降　遺構内出土土器観察表 ‥ 111
第19表　弥生時代以降　遺構外出土土器観察表 ‥ 112
第20表　古墳時代以降　遺構外出土土器観察表 ‥ 113
第21表　古墳時代以降　遺構外出土土器観察表
（陶器） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 113
第22表　Ⅲ～Ⅴ層出土石器観察表 ‥‥‥‥‥‥ 114
第23表　過年度調査の土器観察表 ‥‥‥‥‥‥ 116
第24表　過年度調査の石器観察表 ‥‥‥‥‥‥ 116
第25表　立小野堀遺跡　基本層序 ‥‥‥‥‥‥ 117
第26表　金属製品観察（1）刀剣類・刀子 ‥‥‥‥ 132
第27表　金属製品観察表（2）鉄鏃 ‥‥‥‥‥‥ 132
第28表　Ⅲ層出土土器観察表 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 132

遺構詳細観察表目次

191号地下式横穴墓 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 122
192号地下式横穴墓 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 124
193号地下式横穴墓 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 126

図 版 目 次

巻頭図版１
巻頭図版２

田原迫ノ上遺跡
図版１　田原迫ノ上遺跡土層断面図・作業風景 ‥ 155
図版２　竪穴建物跡22号，土坑105号・106号 ‥‥ 156
図版３　集石193号～200号 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 157
図版４　集石201号～204号 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 158
図版５　集石205号～207号 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 159
図版６　竪穴建物跡16号・23号・20号 ‥‥‥‥ 160
図版７　円形周溝11号，掘立柱建物跡41号
土坑26号・27号，遺物出土状況 ‥‥‥‥ 161
図版８　縄文時代早期遺構内遺物 ‥‥‥‥‥‥ 162
図版９　縄文時代早期土器（1）‥‥‥‥‥‥‥ 163
図版10　縄文時代早期土器（2）‥‥‥‥‥‥‥ 164
図版11　縄文時代早期土器（3）‥‥‥‥‥‥‥ 165
図版12　縄文時代早期土器（4）‥‥‥‥‥‥‥ 166
図版13　縄文時代早期石器（1）‥‥‥‥‥‥‥ 167
図版14　縄文時代早期石器（2）‥‥‥‥‥‥‥ 168
図版15　縄文時代中期･後期土器 ‥‥‥‥‥‥‥ 169
図版16　縄文時代後期土器（1）‥‥‥‥‥‥‥ 170
図版17　縄文時代後期土器（2）‥‥‥‥‥‥‥ 171
図版18　縄文時代晩期土器，その他土器 ‥‥‥‥ 172
図版19　竪穴建物跡20号出土土器 ‥‥‥‥‥‥ 173
図版20　竪穴建物跡23号出土土器 ‥‥‥‥‥‥ 174
図版21　土坑27号出土土器 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 175
図版22　弥生時代出土土器（1）‥‥‥‥‥‥‥ 176
図版23　弥生時代出土土器（2）‥‥‥‥‥‥‥ 177
図版24　石鏃，石核，剥片，礫器１ ‥‥‥‥‥‥ 178
図版25　礫器２，打製石斧，磨製石器，磨製石斧，
磨敲石 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 179

立小野堀遺跡
図版26　191号地下式横穴墓（SK253）‥‥‥‥‥ 180
図版27　192号地下式横穴墓（SK254）‥‥‥‥‥ 181
図版28　193号地下式横穴墓（SK255）‥‥‥‥‥ 182
図版29　191・192・193号地下式横穴墓，６号土坑墓
‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 183
図版30　192・193号地下式横穴墓出土鉄剣,鉄鏃,短剣
‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 184
図版31　191・193号地下式横穴墓出土鉄鏃,刀子 ‥ 185

田原迫ノ上遺跡３
（たはらさこのうえいせき）

第Ⅰ章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会（以下，「県教委」という。）は，文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し，諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は，東九州自動車道の建設を計画し，志布志IC～末吉財部IC区間の事業に先立って，事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下，「文化財課」という。）に照会した。

この計画に伴い文化財課は，平成11年１月に鹿屋串良JCT～末吉財部IC間を，平成12年２月には志布志IC～鹿屋串良JCT間の埋蔵文化財の分布調査を実施し，50か所の遺跡（854,100㎡）が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに，事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて，日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所，鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室，文化財課，埋蔵文化財センター（以下，「埋文センター」という。）の４者で協議を重ね対応を検討してきた。

その後，日本道路公団民営化の政府方針が提起され，事業の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。このような社会情勢の変化に伴い，遺跡の厳密な把握が要求されることとなり，埋蔵文化財の詳細分布調査，試掘調査，確認調査が実施されることとなった。

そこで，県教委は，まず平成13年１月29日から平成13年２月６日に調査の利便性や面積等を考慮して宮ヶ原遺跡，加治木堀遺跡，石綴遺跡，十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに，平成13年７月10日から７月26日に鹿屋串良JCT～末吉財部IC間の工事計画図をもとに33の遺跡について詳細分布調査と，平成13年９月17日から10月26日まで，平成13年12月３日から12月25日までの２期間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて，既に合意されていた本線工事用道路及び側道部分の確認調査も実施することとなり，関山西遺跡，関山遺跡，狩俣遺跡の３遺跡を対象に平成13年10月１日から平成14年３月22日にかけて確認調査を実施した。

平成14年４月には，志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡について再度分布調査を実施した結果，遺跡の調査対象面積が687,700㎡となった。

その後，日本道路公団民営化（現在の西日本高速道路株式会社）の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定，平成15年11月に暫定２車線施行に伴う議事確認書締結，同年12月に大隅IC（平成21年４月28日，「曽於弥五郎IC」へ名称変更）から末吉財部IC間の発掘調査協定書締結，平成16年３月に国土交通省九州地方整備局長，日本道路公団九州支社長，鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書締結が結ばれ，工事は日本道路公団が国土交通省から受託し，発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に再委託することとなり，これまでの確認書，協定書は引き続き効力を有することになった。

また，日本道路公団からの再委託は曽於弥五郎ICまでで終了し，曽於弥五郎ICからの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

田原迫ノ上遺跡のこれまでの調査経過は，以下のとおりである。

発掘調査

１　分布調査：平成13年７月
２　試掘調査：平成13年12月
３　本 調 査

田原迫ノ上遺跡の本調査は，平成22年度から埋文センターが本調査を以下のように行った。

平成22年度　平成22年５月６日～平成23年３月11日
平成23年度　平成23年５月９日～平成24年３月16日
平成24年度　平成24年７月２日～平成25年１月28日

平成25年度には，増大した国関係の事業に係る発掘調査をより円滑かつ効率的に実施するために，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下，「埋文調査センター」という。）が設立された。平成25・26・28・30年度の本調査は，文化財課からの委託を受けた埋文調査センターが以下のように行った。

平成25年度　平成25年６月３日～平成26年１月28日
平成26年度　平成26年５月12日～平成27年１月28日
平成28年度　平成28年５月９日～平成29年２月24日
平成30年度　平成30年９月25日～平成31年２月26日

整理作業・報告書作成作業

整理・報告書作成作業は，平成23年度から実施しており，平成23・24年度は埋文センターが行い，平成25・27・28・令和元・３年度は埋文調査センターが行った。平成26年度には縄文時代前期～弥生時代編を『田原迫ノ上遺跡１』として，平成29年度には縄文時代早期編を『田原迫ノ上遺跡２』として刊行している。

第２節　調査の組織

本報告書に係る本調査は，平成26・28・30年度に埋文調査センターが実施した。各年度の調査体制は以下のとおりである。

平成26年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　堂込　秀人
調査企画　〃　総務課長兼総務係長　山方　直幸
　　〃　調査課長　八木澤一郎
　　〃　調査第二係長　寺原　徹
調査担当　〃　文化財専門員　平　美典
　　〃　文化財専門員　上村　俊洋
事務担当　〃　主査　岡村　信吾

発掘調査支援業務委託

発掘調査の実施にあたり，埋文調査センターは「埋文調査センター埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき，国際文化財株式会社へ発掘調査の支援業務委託を行った。

委託先　国際文化財株式会社
契約期間　平成26年４月11日～平成27年３月12日
調査期間　平成26年５月12日～平成27年１月28日
委託内容　発掘調査支援業務　１式
　　測量業務　１式
　　土工業務　１式
担当者　主任技術者　平林　淳雄
　　主任調査支援員　鳥越　道臣
　　調査支援員　池内啓，山﨑良二，
　　青嶋邦夫，鵜久森彬，
　　加世田悠仁
検査　中間検査　平成26年10月21日
　　完成検査　平成27年２月24日（成果物）
　　平成27年３月３日（実地）

平成28年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　堂込　秀人
調査企画　〃　総務課長兼総務係長　有村　貢
　　〃　調査課長　八木澤一郎
　　〃　調査第二係長　宗岡　克英
調査担当　〃　文化財専門員　平　美典
　　〃　文化財専門員　立神　倫史
　　〃　文化財専門員　吉岡　康弘
　　〃　文化財専門員　石畑　浩一
　　〃　文化財調査員　大坪　啓子
　　〃　文化財調査員　中村　有希
事務担当　〃　主査　荒瀬　勝己

平成30年度

事業主体　国土交通省九州地方整備局
　　大隅河川国道事務所
調査主体　鹿児島県教育委員会
調査統括　公益財団法人鹿児島県文化振興財団
　　埋蔵文化財調査センター
　　センター長　前迫　亮一
調査企画　〃　総務課長兼総務係長　中村伸一郎
　　〃　調査課長　中原　一成
　　〃　調査第二係長　福永　修一
調査担当　〃　文化財専門員　徳永　智明
　　〃　文化財専門員　髙吉　伸弥
　　〃　文化財専門員　樋之口隆志
　　〃　文化財調査員　新屋敷久美子
　　〃　文化財調査員　郷原　麻鈴
事務担当　〃　主査　小牧　智子

第３節　調査の詳細（日誌抄より）

平成26年度

６月

Ｅ～Ｇ－36～42区：Ⅸ層～Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。集石167～170号，礫集積6号，土坑検出，写真撮影，実測。

７月

Ｋ－50～53区，Ｌ－50～56区，Ｍ－52～56区：Ⅸ層・Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｄ～Ｆ-36～42区：Ⅺ層・Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｊ－33～38区：集石172～175号検出，写真撮影，実測。

８月

Ｈ～Ｊ－50～53区，Ｉ～Ｋ-54～56区：Ⅸ層・Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｈ・Ｉ－34・35区，Ｂ・Ｃ－24～26区：Ⅲ層～Ⅴ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ⅵ層上面検出状況写真撮影。Ⅵ層上面コンタ図作成。掘立柱建物柱穴検出，写真撮影，実測。

９月

Ｈ－50～53区，Ｉ・Ｊ－50～56区：Ⅸ層・Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｈ－50～53・55・56区，Ｉ・Ｊ－50～56区：Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｈ・Ｉ－34～35区：Ⅸ層～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取

り上げ。Ｂ－25～26区：Ⅸ層～Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。連穴土坑27号，集石176～180号，土坑検出，写真撮影，実測。

10月

Ｈ～Ｌ－44～49区：Ⅸ層・Ｘ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｋ・Ｌ－50～56区，Ｍ－53～56区，Ｎ－56区：Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｈ～Ｊ－33～38区：Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ａ・Ｂ－25・26区：Ⅷ層上面遺構精査。竪穴建物跡17～20号検出，写真撮影，実測。連穴土坑28～38号，集石181～188号，土坑検出，写真撮影，実測。

11月

Ｍ・Ｎ－58区：Ⅷ層上面精査。Ｈ～Ｌ－44～49区：Ｘ層～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｈ～Ｊ－33～38区：Ⅸ層～Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴建物跡21・22号検出，写真撮影，実測。連穴土坑39～41号検出，写真撮影，実測。集石189・190号検出，写真撮影，実測。土坑検出，写真撮影，実測。

12月

先行トレンチ掘り下げ。Ｈ～Ｌ－44～49区：Ⅷ層上面精査。Ｈ～Ｊ－33～38区：Ⅺ層・Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。連穴土坑42～47号，集石191号，土坑検出，写真撮影，実測。空中写真撮影。環境整備。

１月

Ｈ～Ｌ－49・50区（ベルト部分）：Ⅷ層～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。集石192・193号検出，写真撮影，実測。撤収作業。環境整備。

平成28年度

５月

Ａ～Ｆ－２～８区：Ⅲ層～Ⅵ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。

６月

Ａ～Ｆ－2～8区：Ⅲ層～Ⅵ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。

７月

Ａ～Ｆ－2～8区：Ⅹ層・Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ａ・Ｂ－20・21区：Ⅲ・Ⅵ層，Ⅹ・Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｅ・Ｆ－36・37区：Ⅹ層・Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｆ－39区：Ⅹ層・Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。

10月

Ａ～Ｆ－2～8区：Ⅹ層・Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。土坑検出，写真撮影，実測。

11月

Ａ～Ｆ－2～8区：Ⅺ層・Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。ⅩⅢ層上面完掘状況写真撮影。

12月

ⅩⅣ層以下先行トレンチ調査（遺構・遺物なし），完掘状況写真撮影。Ｆ・Ｇ－23～34区：Ⅰ層～Ⅶ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴建物跡32号検出状況写真撮影，住居内遺物取り上げ。

１月

Ｆ・Ｇ－23～34区：Ⅰ層～Ⅶ層・Ⅸ層～Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴建物跡32号写真撮影，実測，遺物取り上げ。住居内土坑・ピット写真撮影。集石194号検出，写真撮影，実測。

２月

Ｆ・Ｇ－23～34区：Ⅲ層遺物取り上げ，Ⅹ層～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴建物跡16号・23号検出，写真撮影，実測。竪穴建物跡32号内土坑・ピット写真撮影，実測。集石195・196号検出，写真撮影，実測。撤収作業。

平成30年度

10月

Ｂ－23・24区：Ⅲ層～Ⅴ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。竪穴建物跡20号検出，写真撮影，実測。Ｃ～Ｆ－19～23区：Ⅲ層～Ⅴ層・Ⅸ層～Ⅺ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。集石197～199号，206号検出，写真撮影，実測。

11月

Ｃ～Ｆ－18～23区：Ⅸ層～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｈ・Ｉ－24～33区：Ⅲ層～Ⅶ層・Ⅷ層～Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。円形周溝11号，集石200号，竪穴建物跡22号，土坑検出，写真撮影，実測。

12月

Ｃ～Ｆ－18～23区：土坑検出，写真撮影，実測。集石198号写真撮影，実測。Ｈ・Ｉ－24～33区：Ⅲ層～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｅ・Ｆ－47～52区：Ⅲ層～Ⅶ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。

１月

Ｄ～Ｆ－18～23区：Ⅸ層～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｇ－44～48区：Ⅲ層～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。Ｇ～Ｈ－23～35区：Ⅱ層～Ⅹ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。

２月

Ｇ～Ｈ－23～35区：Ⅲ層～Ⅻ層掘り下げ及び出土遺物取り上げ。集石201～205号検出，写真撮影，実測。撤収作業。

平成30年度　立小野堀遺跡

平成30年12月

Ｄ～Ｆ－47～52区：Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅵ層掘り下げ。土坑252号検出，半截。写真撮影。

平成31年１月

Ｄ～Ｆ－47～52区：土坑252号半截，実測，写真撮影。

Ｈ～Ｊ－43・44区：表土掘り下げ。地下式横穴墓253号検出，竪坑・羨道半截，玄室掘り下げ。地下式横穴墓254号検出，竪坑半截・完掘，炭化物検出。地下式横穴墓255号検出，竪坑半截，玄室掘り下げ。実測，写真撮影。

平成31年２月

Ｈ～Ｊ－43・44区：地下式横穴墓253号竪坑～玄室実測，竪坑完掘，玄室掘り下げ，羨道検出・完掘，鉄器検出・完掘。地下式横穴墓254号炭化物実測，取り上げ，竪坑完掘，羨門検出，玄室掘り下げ，埋土断面・炭化物実測，羨道～玄室炭化物検出，取り上げ，完掘，鉄器検出・完掘。地下式横穴墓255号遺物取り上げ，羨道半截，竪坑完掘，玄室半截，羨道実測，羨道・玄室掘り下げ，鉄器検出・完掘。実測，写真撮影。

第４節　整理・報告書作成

本報告書に伴う整理・報告書作成作業は，令和元年度・令和３年度に埋文調査センターが実施した。調査体制及び作業内容と経過については，以下のとおりである。

１　作成体制

令和元年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局		
	大隅河川国道事務所		
作成主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団		
	埋蔵文化財調査センター		
		センター長	中原　一成
作成企画	〃	総務課長兼総務係長	中島　　治
	〃	調査課長	寺原　　徹
	〃	調査第二係長	有馬　孝一
作成担当	〃	文化財専門員	髙吉　伸弥
	〃	文化財調査員	郷原　麻鈴
事務担当	〃	主査	有川　剛弘

令和３年度

事業主体	国土交通省九州地方整備局		
	大隅河川国道事務所		
作成主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
作成統括	公益財団法人鹿児島県文化振興財団		
	埋蔵文化財調査センター		
		センター長	中村　和美
作成企画	〃	総務課長兼総務係長	中島　　治
	〃	調査課長	福永　修一
	〃	調査第二係長	有馬　孝一
作成担当	〃	調査第二係長	有馬　孝一
事務担当	〃	主事	上園　慶子

２　整理・報告書作成業務

（１）遺構・土層断面

実測図と台帳の照合，遺構図仕分け，図面の統合・調整・修正，遺構配置図作成，土層断面図作成・統合，レイアウト等

（２）遺物

ア　土器・石器共通

洗浄，注記，出土遺物仕分け，遺物と遺物台帳や遺構実測図との照合等

イ　土器

分類（部位・形式等），接合（簡易な復元含む），実測個体の選別，実測，拓本，トレース，レイアウト，観察表作成，原稿執筆，報告書掲載遺物写真撮影等

ウ　石器

一般礫との仕分け，分類（器種等），実測個体の選別等，実測，実測委託，トレース，レイアウト，観察表作成，原稿執筆，報告書掲載遺物写真撮影等

エ　自然科学分析

炭化物の年代測定・樹種同定委託等

３　整理・報告書作成の経過

整理・報告書作成の概要を整理作業及び報告書作成作業業務月報を基に，月ごとに記した。

令和元年度

４月

土器・石器洗浄，土器注記

５月

土器注記，ウォーターセパレーション，石器分類

６月

土器分類・接合，石器実測委託準備

７月

土器分類・接合，拓本，遺構図トレース

８月

土器実測，遺構図トレース，写真選別

９月

土器実測，遺構図トレース，石器実測

10月

土器・石器実測，トレース

11月

土器・石器実測，トレース，原稿執筆

12月

土器・石器実測，トレース，原稿執筆

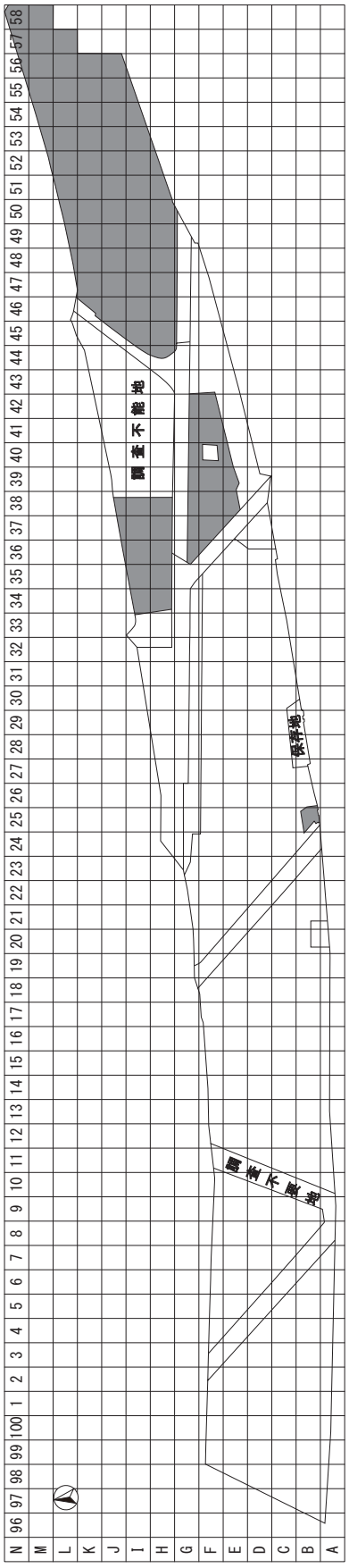
１月
土器実測，トレース，遺物写真撮影，原稿執筆，
レイアウト
２月
原稿執筆，レイアウト，廃棄礫処理
３月
成果物提出，完成検査，遺物収納

令和３年度（田原迫ノ上遺跡・立小野堀遺跡）
４月
土器実測，トレース，原稿執筆
５月
レイアウト，原稿執筆
６月
遺構図トレース，レイアウト，原稿執筆
７月
レイアウト，原稿執筆
８月
レイアウト，原稿執筆
９月
レイアウト，原稿執筆
10月
レイアウト，原稿執筆
11月
レイアウト，原稿執筆
12月
原稿入稿，校正
１月
校正，遺物収納準備
２月
校正，遺物収納準備
３月
成果物提出，完成検査，遺物収納，報告書刊行
（田原迫ノ上遺跡３・立小野堀遺跡２）

なお，立小野堀遺跡の過年度の発掘調査の経過，整理・報告書作成作業に関しては『立小野堀遺跡』を参照されたい。

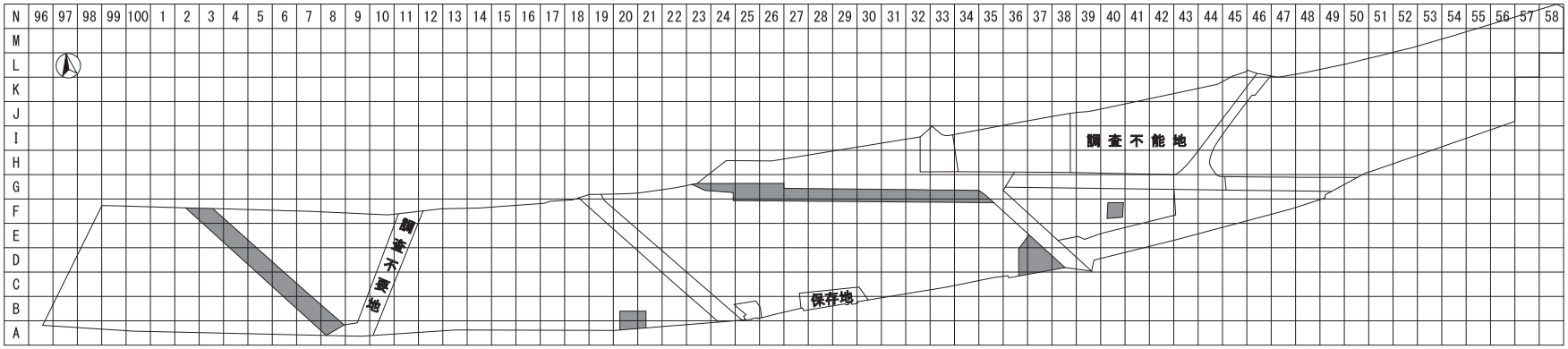
令和３年度の報告書作成指導委員会及び報告書作成検討委員会は，下記のとおりに実施した。

報告書作成指導委員会
６月10日・８月６日・10月５日・11月２日
11月24日　　（福永調査課長，他７名）
報告書作成検討委員会
11月26日　　（中村センター長，他５名）

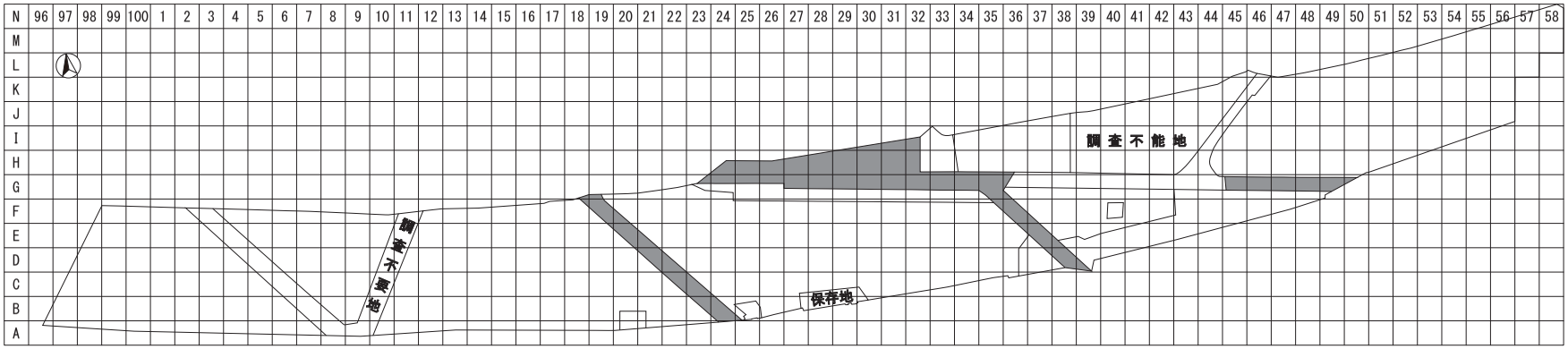


第２図　平成26年度調査範囲図（弥生時代）

平成28年度



平成30年度



第３図　平成28・30年度調査範囲図（縄文時代・弥生時代）

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

鹿屋市串良町は，大隅半島南東部のほぼ中央に位置し，東は東串良町，南は肝属川を隔てて肝付町，西は鹿屋市東原町，旭原町，笠之原町，北東は立小野台地を隔てて曽於郡大崎町と接している。

串良町が位置する大隅半島は，九州山地の延長をなす東西の山地，その間の丘陵，台地及び低地等の低地帯から構成され，地質は大部分がシラス，ボラ等の火山灰土壌となっている。

東側の山地は，志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地である。主峰は宮崎県内の鰐塚山（1,119m）で中生層の地質からなっている。

西側の山地は，北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された姶良カルデラのカルデラ壁を含み，南部の高隈山系へと連なっている。高隈山地は，北部の白鹿岳・荒磯岳等500～600m級の山々と，南部の大篦柄岳（1,236.8m）を主峰に横岳・御岳等1,000m級の山から構成される山容は急峻で深い森林に覆われている。

東西の山地は，ともに九州山地の延長をなし，それらの間は低地帯となり丘陵や台地及び低地となっている。これらの山地間を埋めるような形で，洪積世の火山活動による火砕流が堆積し，丘陵や台地が広く分布したシラス地形になっている。この火砕流は南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や湾奥に形成された姶良カルデラの入戸火砕流である。これらの火砕流をはじめとする噴出物が堆積後から現在に至るまで大小多くの河川で開折され，断片的な台地を残すだけの丘陵状地形や原面はほとんど浸食されず残った広大な台地となっている。

一方，低地は，高隈山地や鰐塚山地等を水源とする大小の河川が走り，志布志湾，鹿児島湾等に注いでいる。この河川は，上・中流域で狭い谷底平野を形成し，また，何段かの河岸段丘も認められる。

この大隅半島に位置する串良町の地形は，東西に6.5km，南北に13kmと狭長で，北部の山地中央において山地は少なく，笠野原台地と呼ばれる平坦なシラス台地からなっている。台地は「クロボク」と呼ばれる黒色火山灰土壌に覆われており，広大な畑地帯が形成されている。南部及び東部は，肝属川とその支流の串良川が流れ，それによる沖積地が広がり，約695haの水田地帯を形成している。また，北部には低い丘陵性の山地が存在するが，町域に占める割合は少ない。

田原迫ノ上遺跡，立小野堀遺跡は，この串良町の北東部に所在し，笠野原台地の縁辺部に位置する。標高は約120mで，遺跡の北側斜面を下ったところには，串良川が西から東に向かって蛇行して流れており，田原迫ノ上遺跡・立小野堀遺跡との比高差は約70mである。東側には牧山遺跡が隣接する。

第２節　歴史的環境

串良町では，昭和36，50～52年度に分布調査が行われ，数多くの遺跡が周知のものとなった。現在までに，詳細分布調査及び確認調査によりそれらの遺跡のエリアが確定しつつある。また，串良町における遺跡の大半は，笠野原台地の縁辺部に集中して立地していることが明らかになっている。

旧石器時代

田原迫ノ上遺跡・立小野堀遺跡周辺の二子塚Ａ遺跡において，旧石器時代の可能性がある剥片が数点出土している。

また，田原迫ノ上遺跡・立小野堀遺跡からやや離れるが，鹿屋バイパス建設に伴って発掘調査が行われた西丸尾遺跡・榎崎Ａ遺跡・榎崎Ｂ遺跡でナイフ形石器文化期～細石刃文化期の遺構・遺物が確認されている。

縄文時代

早期の遺跡としては，倉園Ｂ遺跡・下堀遺跡・益畑遺跡・高吉Ｂ遺跡などがあげられる。倉園Ｂ遺跡では，住居跡４軒・連穴土坑と断定できるものが10基・集石遺構60基が検出されている。下堀遺跡では，連穴土坑と断定されているものが10基・集石遺構が13基検出されている。本遺跡から３km離れた益畑遺跡では，竪穴建物跡２軒・連穴土坑16基・集石遺構85基・土坑160基が検出されている。中でも，1号竪穴建物跡は，長軸464cm，短軸287cm，深さ67cmで，竪穴部の２面にベッド状の張り出しをもつ。この建物跡の埋土中にはＰ13（桜島起源の薩摩火山灰：約9500年前）がレンズ状に堆積しており，その下位から前平式土器が出土したことから，上野原遺跡とほぼ同じ状況がうかがえる。高吉Ｂ遺跡では，ブリッジ部分から完形に近い石坂式土器が出土した連穴土坑１基を含む合計４基の連穴土坑・集石遺構141基などが検出されている。

前期の遺跡としては，神野牧遺跡・石踊遺跡などがあげられる。神野牧遺跡では，集石遺構３基が検出され，曽畑式土器・深浦式土器などが出土している。石踊遺跡では，深さ10cmの落ち込みの中に，磨石・敲石５個と角礫１個の上に約20cmの大きさの五角形状の板石が乗った

状態で検出された集石遺構１基，曽畑式土器・轟式土器が出土している。

中期の遺跡としては，前谷遺跡・岩崎遺跡などがあげられる。前谷遺跡では，竪穴建物跡５軒（方形状３軒・円形状２軒）・集石遺構１基などが検出され，春日式土器が出土している。岩崎遺跡は岩崎式土器の標識遺跡で，階段状の道が検出されている。

後期の遺跡としては，ホンドンガマ遺跡・十三塚遺跡・牧山遺跡などがあげられる。ホンドンガマ遺跡では，市来式土器に比定できる土器・石匙・打製石斧などが出土している。十三塚遺跡では，凹線文土器・市来式土器・三万田式土器が出土している。牧山遺跡では，西平式土器・中岳Ⅰ・Ⅱ式土器などが出土している。また，遺物が環状に集中する範囲があり，その内側からピットが同心円状に検出され，環状集落を呈していたと考えられている。

晩期の遺跡としては，宮下遺跡・柿之木段遺跡などがあげられる。宮下遺跡では，黒川式土器・夜臼式土器並行の刻目突帯文土器・組織痕土器（平織り）が出土している。柿之木段遺跡では，晩期の落し穴・土坑の他，石斧埋納遺構が検出されている。

弥生時代

大隅半島においても，前期の遺跡はわずかで，確認できる遺跡の規模としては小さく，分布も散発的である。宮下遺跡は，縄文時代晩期から弥生時代前期への移行期にある遺跡と考えられる。また，水の谷遺跡では，前期に該当する甕形や鉢形の弥生土器が出土している。

中期以降の遺跡としては，吉ヶ崎遺跡・前畑遺跡・王子遺跡・十三塚遺跡・本遺跡等があげられる。吉ヶ崎遺跡では，中期の竪穴建物跡が3軒検出されている。特に，１号建物跡はベッド状遺構を持ち，床面に焼土や炭化物が多く見られ，焼失家屋と思われる。そのためか，甕形土器・壺形土器の完形品が各４点と磨製石鏃・磨製石斧等が建物跡の床面から発見されている。前畑遺跡では，方形プランで約４ｍ四方を呈する竪穴建物跡３軒・平地式建物跡や高床倉庫と考えられる掘立柱建物跡８棟などが検出され，山ノ口式土器の範疇に属する在地系土器が出土している。王子遺跡では，竪穴建物跡27軒・棟持柱を有する掘立柱建物跡６棟・掘立柱建物跡８棟・土坑を有する建物跡２軒などが検出されている。十三塚遺跡では，張り出しのある竪穴建物跡が８軒検出され，建物内からは，壺形土器・甕形土器・棒状叩具・磨製石鏃・鉄鏃等が出土している。田原迫ノ上遺跡では，竪穴建物跡31軒・掘立柱建物跡40棟（内，棟持柱を有する掘立柱建物跡２棟）・柱穴跡６列が検出され，山ノ口式土器と多くの土製加工品も出土している。また，調査区外へ続く大型建物跡と考えられる柱穴列は，現地にそのまま保存されることとなった。

古墳時代

大隅半島，特に志布志湾沿岸部は古くから唐仁古墳群・塚崎古墳群・横瀬古墳群をはじめとする多くの古墳が存在することが知られている。また，南九州特有の地下式横穴墓も多く分布する地域である。

立小野堀遺跡では，約190基の地下式横穴墓と鉄剣や鉄鏃等数多くの副葬品が出土している。副葬品の中の青銅鈴は，環鈴の転用品で，国内最古級のものである。本遺跡に隣接する町田堀遺跡では，地下式横穴墓（内，１基は円形周溝を伴う地下式横穴墓）や鉄剣，異形鉄器等の副葬品が確認されている。

地下式横穴墓に関する遺跡は，鹿屋市の薬師堂古墳・祓川地下式横穴墓群・中尾遺跡・名主原遺跡，串良町の岡崎古墳群，大崎町の下堀遺跡などで出土している。これらの遺跡は，肝属川・串良川・持留川・姶良川・大姶良川流域に存在しており，地下式横穴墓の分布状況が明らかになりつつある。このことは，岡崎古墳群出土の３個体の初期須恵器・鉄鋌，中尾遺跡出土の象嵌が施された鉄剣・鉄刀と合わせて，当時の人々の生活を解明していく上で貴重な資料である。

集落遺跡として，本遺跡と同町内の小牧遺跡・川久保遺跡があげられる。小牧遺跡では，竪穴建物跡９軒・礫集積８基・花弁形建物跡２軒が検出されている。川久保遺跡では，竪穴建物跡27軒（内，鍛冶関連建物跡２軒）が検出され，鉄滓・鞴の羽口等が出土している。中でも，鞴の羽口は転用品のみでなく，専用として作られた可能性があるものも出土している。

古代・中世以降

串良町内における中世以降の遺跡は，県教育委員会発行の「鹿児島県中世城跡」では14カ所が報告されているが，詳細な調査はほとんどなされていない。

岡崎古墳群と甫木川を挟んだ西側の丘陵上に位置する稲村城跡は，16基の近世墓が検出され，土師器・青白磁・染付・備前焼・東播系須恵器等が出土している。下堀遺跡では，土坑墓・畝跡・溝状遺構の他，多くの柱穴・土坑や近世の可能性が高い炉跡も検出されている。柿之木段遺跡では，古代のカマド跡・溝状遺構・古道，中世～近世の溝状遺構・道跡・土坑が検出されている。十三塚遺跡では，古道跡が８条検出され，古道跡から陶磁器片が出土したことから近世以降の可能性が考えられている。

第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	種類	現状	時代	地形	遺構・遺物等	備考
1	鋤先	鹿屋市下高隈町	散布地	－	縄文時代,古代	－	－	－
2	遠見ヶ丘	曽於郡大崎町野方立小野・曲迫	散布地	畑地	中世	台地	－	－
3	立小野	鹿屋市串良町細山田立小野	散布地	畑地	縄文,弥生	台地	－	－
4	立小野Ａ	鹿屋市串良町細山田立小野	散布地	畑地	縄文	台地	－	－
5	立小野Ｂ	鹿屋市串良町細山田立小野	散布地	畑地	縄文	台地	－	－
6	高松	鹿屋市串良町細山田高松	散布地	畑地	弥生	台地	－	－
7	堂園	鹿屋市串良町細山田堂園	散布地	畑地	弥生,古墳	台地	－	－
8	細山田城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	城館跡	山林	中世	丘陵	－	－
9	生栗須	鹿屋市串良町細山田生栗須	包蔵地	畑地	弥生	台地	－	－
10	北原城跡	鹿屋市串良町細山田生栗須	城館跡	山林	中世	丘陵	－	－
11	北原墓地逆修古石塔群	鹿屋市串良町細山田北原	その他	－	中世,中世 鎌倉	台地		
12	北原古墳群	鹿屋市串良町細山田北原	古墳	畑地	古墳時代	台地		H27本調査
13	牧原	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生,古墳,古代	台地	－	－
14	石縊	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生,古墳	台地	竪穴建物	H20～本調査
15	十三塚	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生,古墳	台地	－	H20～本調査
16	立小野堀	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生,古墳,古代	台地	地下式横穴墓	H22～本調査本報告書
17	田原迫ノ上	鹿屋市串良町細山田	散布地 集落跡	畑地	縄文,弥生	台地	竪穴建物,掘立柱建物,周溝	H22～本調査本報告書
18	牧山	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	縄文,弥生,古墳	台地	轟式,埋設土器,石冠	H25～本調査
19	入部堀	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生,古墳	台地	－	－
20	町田堀	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	弥生, 古墳	台地	竪穴建物跡,製鉄工房跡,掘立柱建物跡	H25～本調査
21	川久保	鹿屋市串良町細山田川久保	散布地	畑地	弥生時代	台地	竪穴建物,掘立柱建物,鍛冶関連遺物	－
22	新堀	鹿屋市串良町細山田	散布地	畑地	縄文	台地	－	－
23	是ヶ迫	鹿屋市串良町細山田是ヶ迫	散布地	畑地	縄文,弥生	台地	－	
24	瓜々良蒔	鹿屋市串良町有里瓜々良蒔	散布地	畑地	弥生	台地	土器, 落とし穴	H12本調査
25	土持堀の深井戸	鹿屋市串良町細山田	包蔵地	－	近世	台地	深井戸	－

参考文献

吾平町教育委員会　2005「中尾遺跡Ⅳ」吾平町埋蔵文化財発掘報告書（19）

鹿児島県教育委員会　1997「大隅地区埋蔵文化財分布調査概要」鹿児島県埋蔵文化財発掘報告書（６）

鹿児島県教育委員会　1992「西尾丸遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘報告書（64）

鹿児島県教育委員会　2016「田原迫ノ上遺跡１」公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（５）

鹿児島県教育委員会　2016「町田堀遺跡」公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（７）

鹿屋市教育委員会　2008「名主原遺跡」鹿屋市埋蔵文化財発掘報告書（84）

串良町教育委員会　1990「岡崎古墳群」串良町埋蔵文化財発掘報告書（３）

串良町教育委員会　2005「益畑遺跡」串良町埋蔵文化財発掘報告書（11）



第４図　田原迫ノ上遺跡・立小野堀遺跡周辺遺跡地図

第３節　志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡

東九州自動車道の志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間には、第２表に示すとおり26か所の遺跡が存在する。ここでは調査済み及び調査中の遺跡の概要を記載する。詳細については各報告書等を参照していただきたい。

第２表　志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理･報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
1	見帰	志布志市 志布志町 志布志 台地上 標高約70m	H28年度 終了 H25・30年度 に埋文センタ 一調査 （隣接地）	H30年度 刊行 Ｒ２年度 隣接地刊行	旧石器	—	ナイフ形石器，細石刃，使用痕剥片，磨石，叩石，台石
					縄文早期	土坑，集石	吉田式，石坂式，押型文，下剥峯式，縄文系土器，石鏃，磨石，叩石，石核
					縄文中期	落とし穴，土坑	石鏃，石皿
					縄文後期	溝状遺構	岩崎上層式，丸尾式，辛川式，納屋向タイプ，西平式，中岳Ⅱ式，石匙，石錐，打製石斧，磨石，敲石，石錘
					弥生	—	突帯文，高付式
					その他の時代	土坑，溝状遺構	薩摩焼，染付
		旧石器時代から近世までの複合遺跡であり，主体となるのは縄文時代後期である。赤色顔料を塗布した台付皿形土器が出土し，溝状遺構から出土した丸尾式土器・西平式土器などの一括資料は後期後半の共伴関係をみるうえで貴重である。					
2	宮ノ上	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約45m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
3	安良	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約30m	H28年度 H29年度 終了	H30年度 Ｒ元年度 刊行	縄文早期	集石	前平式，小牧３Ａタイプ，轟Ａ式
					縄文中期	—	大平式，阿高式
					縄文後・晩期	土坑	丸尾式，西平系，組織痕土器，石鏃，スクレイパー，打製石斧，磨石，石錘，丸玉
					弥生中期	土坑	入来Ⅱ式，山ノ口Ⅱ式，磨製石鏃
					古墳時代	地下式横穴墓，溝状遺構	笹貫式，須恵器，鉄鏃，鉄鐸
					古代～中世	掘立柱建物跡，竪穴建物跡，土坑，溝状遺構，帯状硬化面，礫集積遺構	土師器，須恵器，国産陶器，カムィヤキ，瓦器，輸入陶磁器，滑石製石鍋，鉄関連遺物，銭貨，炭化米塊
					近世	土坑，帯状硬化面	薩摩焼，肥前系陶器，瀬戸系陶器，銭貨，鉄製品
		縄文時代から近世までの複合遺跡であり，中世前半の炭化米塊は県内最古の事例として注目される。					
4	水神松	志布志市 志布志町 安楽 安楽川左岸 標高約３m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
5	安楽小牧Ｂ	志布志市 志布志町 安楽 台地上 標高約50m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 Ｒ元年度 刊行	旧石器	—	ナイフ形石器，細石刃核，細石刃
					縄文草創期	集石	土器片，黒曜石剥片，磨石，敲石，石皿
					縄文早期	集石	加栗山式，札ノ元Ⅶ類，倉園Ｂ式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，平栫式，塞ノ神式，耳栓，石鏃，石匙，石錐，石核，磨製石斧，礫石器，異形石器
					弥生	—	入来Ⅱ式
					古代～近世	溝状遺構，帯状硬化面	土師器，須恵器，青磁，薩摩焼，染付，土製品，鉄製品，寛永通宝
		起伏のある地形に立地し，縄文時代早期を中心に旧石器時代，縄文時代草創期も出土した複合遺跡である。古墳群として遺跡登録されているが，これまでの調査では痕跡を含め古墳は確認されていない。					
6	次五	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約50m	H26年度 H27年度 終了 ※志布志市教育委員会調査	H29年度 刊行 ※志布志市教育委員会刊行	旧石器	—	畦原型細石刃核，細石刃，剥片
					縄文早期	落とし穴，連穴土坑，土坑，集石，磨石集積，配石遺構，石器製作跡	岩本式，前平式，志風頭式，東九州系無文土器，加栗山式，小牧３Ａタイプ，吉田式，岩ノ上タイプ，札ノ元Ⅶ類，倉園Ｂ式，石坂式，中原式，下剥峯式，桑ノ丸式，辻タイプ，押型文，手向山式，塞ノ神式，石鏃，スクレイパー，石核，磨製石斧，石錘，磨石・敲石類，石皿，トロトロ石器，異形石器
					縄文前期以降	落とし穴	—
		旧石器時代から縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代は，細石刃文化期の遺物が出土している。縄文時代早期前葉に該当する遺構や遺物が多く確認された。特に注目されるのは被熱破砕礫が多量に出土した点である。					
7	大代	志布志市 有明町 野井倉 台地縁辺部 標高約40m	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
8	木森	志布志市 有明町 野井倉 河岸段丘 標高約30m	H26年度 H30年度 終了	Ｒ３年度 刊行予定	縄文早期	連穴土坑，土坑，集石，土器集中	前平式，加栗山式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，石鏃，石匙，楔形石器，打製・磨製石斧，磨・敲石
					縄文中期	—	春日式，磨製石斧
					古代	—	須恵器
					中世	掘立柱建物跡，ピット列，ピット	土師器，青磁，白磁，滑石製石鍋片，常滑，備前，中国陶器
					時期不詳	土坑，不明遺構，溝状遺構	—
		縄文時代早期と中世を中心とする遺跡である。遺構では縄文時代早期の連穴土坑，土坑，集石，中世の掘立柱建物跡等が発見された。遺物は縄文時代早期の土器や石器を中心に，縄文時代中期から中世の遺物が出土している。また，鬼界カルデラ噴火による液状化現象（噴砂跡）が確認されている。					

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理･報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
9	田尾下	志布志市 有明町 野井倉 菱田川右岸 標高約５ｍ	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
10	春日堀	志布志市 有明町 蓬原 河岸段丘 標高約30ｍ	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 終了	H30年度 R元年度 (1)刊行 R２年度 R３年度 (2)刊行予定	縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，集石，土坑，土器集中，炭化物集中，落とし穴	前平式，加栗山式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，塞ノ神式，石鏃，削器，掻器，環状石斧，磨石・敲石類，台石・石皿類，石製品，異形石器
					縄文後期	落とし穴，土坑	丸尾式，石器
					弥　生	竪穴建物跡	山ノ口Ⅰ式
					弥生終末期～古墳前期	竪穴建物跡，土坑，遺物集中区	弥生終末期～古墳前期の土器，鉄鏃，敲石，磨敲石，砥石，台石，磨製石剣
					古墳終末期	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，溝跡，遺物溜まり，地下式横穴墓，遺物集中区	笹貫式新段階，甑，須恵器，鉄鏃，青銅製品，敲石，磨敲石，砥石，軽石製品，棒状石器
					古　代	掘立柱建物跡，ピット列，焼土跡	土師器，須恵器，軽石製品，土製品
					中　世	堀跡，道跡，ピット列，竪穴建物跡，土坑墓	土師器，常滑焼，白磁，青磁
					近　世	溝跡，道跡，貝溜まり	―
		縄文早期から中世を中心とする遺跡である。遺構は縄文時代早期の竪穴建物跡，連穴土坑，集石，落とし穴，弥生時代の竪穴建物跡，古墳～飛鳥時代の竪穴建物跡（焼失住居跡含む），掘立柱建物跡，溝状遺構，中世の掘立柱建物跡，堀跡が検出された。遺物は縄文時代早期の土器，石器等をはじめ，弥生時代から中・近世の遺物が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）の痕跡も確認されている。					
11	牧ノ上B	志布志市 有明町 野井倉 台地上 標高約47ｍ	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
12	稲荷堀	曽於郡 大崎町 菱田 台地上 標高約50ｍ	文化財課の試掘調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
13	平良上C	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約40ｍ	H26年度 H27年度 終了	H27年度 H28年度 刊行	縄文早期	竪穴住居跡，竪穴遺構，連穴土坑，土坑，集石，土器集中，チップ集中	岩本式，加栗山式，吉田式，石坂式，中原式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，石鏃，石匙，石錐，削器，掻器，楔形石器，打製･磨製石斧，磨石，敲石，凹石，砥石，石錘，石核，線刻礫
		縄文時代早期を中心とする遺跡である。遺構は竪穴建物跡，連穴土坑，集石，土坑が検出されている。遺物は，縄文時代早期の土器，石鏃，石匙，打製石斧，磨製石斧等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。					
14	宮脇	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約40ｍ	H27年度 H28年度 終了	H30年度 R元年度 刊行	旧石器	礫群	ナイフ形石器，三稜尖頭器，台形石器，細石刃，細石刃核，スクレイパー，掻器，使用痕剥片，磨石，叩石
					縄文早期	集石，土坑	志風頭式，加栗山式，札ノ元Ⅶ類，小牧３Ａタイプ，倉園Ｂ式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，手向山式，平栫式，塞ノ神式，打製石鏃，石匙，石錐，磨製石斧，磨石，叩石，石皿，軽石製品
					中世～近世	井戸状遺構	青磁，薩摩焼，寛永通宝
		旧石器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代では，石器製作に関連すると考えられる石核，フレーク，チップ等が出土している。縄文時代早期では，集石，土坑，土器集中，ピットと土器，石器等が出土している。鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象の噴砂跡も確認されている。					
15	堂園堀	曽於郡 大崎町 井俣 台地上 標高約45ｍ	文化財課の試掘調査及び埋文センターの確認調査により，本路線上には遺構・遺物がないことが確認されたため，本調査を実施せず。				
16	荒園	曽於郡 大崎町 仮宿 台地縁辺部 標高約50ｍ	H24年度 H25年度 H26年度 H30年度 終了 ※H24年度は埋文センター調査	H28年度 (1)刊行 H30年度 R元年度 R２年度 R３年度 (2)刊行予定	旧石器	―	ナイフ形石器，三稜尖頭器，細石刃，細石刃核，チップ
					縄文早期	集石，土坑，剥片・チップ集中	前平式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，手向山式，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，無文，轟Ａ式，石鏃，スクレイパー，石匙，耳栓，打製・磨製石斧，磨石，石皿
					縄文前期～晩期	―	轟Ｂ式，入佐式，石鏃，打製石斧，磨石，石皿
					弥　生	竪穴建物跡，土坑	吉ヶ崎式，山ノ口式，磨製石鏃未製品，砥石
					古　墳	竪穴建物跡	布留系土器，砥石，軽石製品
					古代以前	片薬研堀	―
					中世以降世	掘立柱建物跡，土坑，溝状遺構，帯状硬化面	土師器，東播系須恵器，備前焼，陶器，青磁，華南三彩，薩摩焼
		縄文時代早期から古墳時代を中心とする遺跡である。遺構は，縄文時代早期の集石，弥生時代・古墳時代の竪穴建物跡，古代以前の片薬研堀，中世の掘立柱建物跡等が検出され，遺物は縄文時代早期の土器，石器，弥生時代・古墳時代の土器，土師器，陶器，磁器等が出土している。また，鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象（噴砂跡）も確認されている。					

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理･報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
17	永吉天神段	曽於郡 大崎町 永吉 台地縁辺及び 河岸段丘 標高30～50m	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 終了 ※H24年度は埋文センター調査	H27年度 (1・第1地点)刊行 H28年度 (2・第2地点1) 刊行 H29年度 (3・第2地点2) 刊行 H30年度 (4・第3地点) 刊行 R元年度 (5・第2地点3) 刊行	旧石器	礫群，ブロック	尖頭器，ナイフ形石器，台形石器，剥片
					縄文早期	集石，土器埋設遺構	前平式，加栗山式，吉田式，手向山式，下剥峯式，押型文，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，条痕文，石鏃，石匙，石斧，磨石，敲石，石皿
					縄文前期	—	曽畑式
					縄文後期	—	岩崎上層式，北久根山式，中岳Ⅱ式
					縄文晩期	竪穴住居跡，落とし穴，土坑	入佐式，黒川式，刻目突帯文，管玉，打製石斧
					弥生	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，円形周溝墓，土坑墓群，土坑	入来式，山ノ口式，黒髪式，鉄鏃，磨製石鏃，管玉
					古墳	竪穴住居跡，土坑	成川式，須恵器
					古代	掘立柱建物跡，土坑	須恵器，土師器
					中世	掘立柱建物跡，土坑墓，地下式坑，火葬土坑，土坑	白磁，青磁，土師器，瓦質土器，東播系須恵器，備前焼，常滑焼，湖州六花鏡，砥石，石塔，古銭
					近世	近世墓	薩摩焼，染付，寛永通宝，石臼
					時期不明	掘立柱建物跡	—
		旧石器時代から近世までの遺跡である。弥生時代中期の円形周溝墓を頂点とする土坑墓群から，国内では最古級となる鉄鏃が出土した。中世では白磁，青磁，瓦質土器，東播系須恵器等が多量に出土した。また，地下式坑と呼ばれる中～近世の大型土坑も発見された。					
18	細山田段	鹿屋市串良町 細山田 曽於郡 大崎町 細山田 台地上 標高約95m	H25年度 H26年度 H27年度 終了	H26年度 H28年度 H30年度 R元年度 (1)刊行 R２年度 (2)刊行	縄文早期	集石，埋設土器	吉田式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，中原式，押型文，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，右京西式，石鏃，石匙，磨･敲石，石核
					縄文前・中期	土坑，土器集中	曽畑式，深浦式，大歳山式，鷹島式，船元式，石鏃，石匙，石錐，スクレイパー，二次加工剥片，磨石，敲石，石皿，石核，炭化種実
					縄文後期	土坑	辛川式，丸尾式，西平式，中岳Ⅱ式，石鏃，石匙，石錐，スクレイパー，磨･敲石，打製石斧，磨製石斧，石皿
					縄文晩期	—	入佐式，黒川式
					弥生前期	—	高橋式
					古墳	—	成川式
					時期不明	溝状遺構・古道	—
		縄文時代前期から中期初頭を中心に，縄文時代早期から近世までを含む遺跡である。縄文中期では170基を超える土坑が検出されたほか，在地系土器の深浦式土器，近畿地方の大歳山式土器や鷹島式土器，瀬戸内地方の船元式土器などが出土し，当時の遠隔地交流の一端が明らかとなった。					
19	小牧	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約60m	H27年度 H28年度 H29年度 終了	H30年度 R元年度 (1)刊行 R２年度 (2)刊行 R３年度 (3)刊行予定 作業中	旧石器	—	槍先形尖頭器，ナイフ形石器，三稜尖頭器，細石刃
					縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，土坑，集石	前平式，吉田式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，平栫式，塞ノ神式，苦浜式，条痕文，石鏃，石匙，石斧，磨敲石，石皿
					縄文前期	—	曽畑式，深浦式，磨石
					縄文後期	竪穴建物跡，石皿立石遺構，伏甕，石斧集積遺構，集石，土坑	阿高式系，岩崎上層式，指宿式，市来式，石鏃，横刃型石器，打製石斧，磨石，石皿，大珠
					縄文晩期	—	入佐式，黒川式，刻目突帯文
					弥生	—	入来式，山ノ口式，高付式，須久式系統，砥石
					古墳	竪穴建物跡，礫集積，土器溜，土坑	東原式，辻堂原式，笹貫式，布留系土器，須恵器，鉄鏃，鉄製品，敲石，勾玉，臼玉，管玉，軽石加工品
					古代	掘立柱建物跡，焼土跡，溝状遺構，土坑	土師器，須恵器，墨書土器，鉄器，土錘，焼塩土器，土製紡錘車
					中世以降	掘立柱建物跡，土坑，石組遺構，溝状遺構，杭列	土師器，東播系須恵器，白磁，青磁，墨書土器，石鍋，合子，鞴羽口，刀子，鉄製紡錘車，焙烙，古銭，薩摩焼
		旧石器時代から近世までの遺跡である。縄文時代早期前半から中葉の集落，後期の石皿遺構を伴う環状構造の集落とこれらに伴う遺物が特筆される。この他，古墳時代の花弁形建物跡を伴う集落や古代・中世の掘立柱建物跡群も発見されている。周辺の遺跡を含めて串良川沿岸における人間活動の変遷を追うことができる遺跡である。					
20	川久保	鹿屋市 串良町 細山田 河岸段丘 標高30～50m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 終了	H27年度 H29年度 H30年度 (1・C地点)刊行 R元年度 (2・B・D地点) 刊行 R２年度 (3・A地点) (4・A地点) 刊行 R３年度 作業中	旧石器	礫群	剥片尖頭器，ナイフ形石器，畝原型細石核
					縄文早期	竪穴建物跡，集石，土坑	岩本式，前平式，志風頭式，加栗山式，吉田式，倉園Ｂ式，石坂式，下剥峯式，押型文，塞ノ神式，苦浜式，轟Ａ式，石鏃，打製石斧，石皿
					縄文前期	集石	曽畑式，磨製石斧
					縄文後期	—	中岳式
					縄文晩期	集石	入佐式，黒川式，刻目突帯文
					弥生前期	—	高橋式
					弥生中期	竪穴建物跡	下条式，山ノ口式
					古墳	竪穴建物跡，鍛冶関連建物跡，竪穴遺構，溝状遺構，道跡	成川式，鞴羽口，高坏脚転用鞴羽口，鉄鏃，鉄滓，勾玉，管玉
					古代	掘立柱建物跡	須恵器，土師器
					中世	掘立柱建物跡，溝状遺構，道跡	青磁，白磁，瓦器椀
		旧石器時代から中世までの遺跡である。特に古墳時代では，集落を構成する多数の竪穴建物跡や鍛冶関連遺物を伴う遺構が発見されているほか，専用の鞴の羽口も出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。					

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理･報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代・時期	主な遺構	主な遺物
21	町田堀	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約90m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 終了	H27年度 ⑴刊行 H29年度 ⑵刊行	縄文早期	集石	下剥峯式，平栫式
					縄文後期	竪穴建物跡，埋設土器，落とし穴，土坑，石斧集積遺構	中岳Ⅱ式，石刀，石鏃，打製･磨製石斧，ヒスイ製垂飾，小玉，勾玉，管玉
					縄文晩期	—	黒川式，刻目突帯文
					弥生中期	竪穴住居跡	入佐式，山ノ口式，土製勾玉
					古　墳	竪穴建物跡，地下式横穴墓，円形周溝墓，溝状遺構	成川式，人骨，鉄剣，鉄鏃，刀子，ヤリ鉋，異形石器
					古　代	焼土跡，道跡	土師器，須恵器
		縄文時代早期から古代までの遺跡である。古墳時代の地下式横穴墓が92基発見され，円形周溝を伴う例も初めて確認されている。立小野堀遺跡や下堀遺跡等と類似性が想定され，高塚墳と共存する志布志湾沿岸部の地下式横穴墓との比較が可能になり，大隅半島の古墳時代像解明に必須の遺跡である。このほか，縄文時代後期の竪穴建物跡から，橿原文を施す完全な石刀が出土している。					
22	牧山	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約110m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 終了	H28年度 ⑴刊行 H30年度 R元年度 ⑵刊行 R２年度 R３年度 ⑶刊行予定	旧石器	—	剥片
					縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，土坑，集石，石器製作跡	吉田式，石坂式，下剥峯式，桑ノ丸式，押型文，石鏃，石匙，スクレイパー，磨石
					縄文前期	埋設土器（轟式）	轟Ｂ式，条痕文
					縄文後期	土坑，落とし穴状遺構，掘立柱建物跡，ピット，埋設土器，石器集中部	市来式，丸尾式，納屋向式，納曽式，西平式，辛川Ⅱ式，太郎迫式，中岳Ⅱ式，打製･磨製石斧，磨敲石，剥片，石核，石皿，石冠
					縄文晩期	—	入佐式，黒川式，刻目突帯文
					弥生中期	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑	入来式，山ノ口式，打製･磨製石斧，磨製･打製石鏃，磨石，敲石，石皿，青銅鑿
					中・近世	古道跡	青磁，白磁，薩摩焼
		旧石器時代から中世にかけての遺跡である。特に，縄文時代後期の建物跡を構成していた可能性のある柱穴群が環状に発見されており注目される。また，同時期のものと考えられる複数の埋設土器と石冠が１点出土している。弥生時代中期の青銅製鑿の出土も特筆される。					
23	田原迫ノ上	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約120m	H22年度 H23年度 H24年度 H25年度 H26年度 H28年度 H30年度 終了 ※H22～24は埋文センター調査	H26年度 ⑴刊行 H27年度 H28年度 ⑵刊行 R元年度 R３年度 ⑶刊行 ※H23～24は埋文センター作業	縄文早期	竪穴建物跡，連穴土坑，集石，落とし穴，土坑，石器製作跡	前平式，吉田式，倉園Ｂ式，石坂式，下剥峯式，辻タイプ，桑ノ丸式，中原式，押型文，手向山式，平栫式，塞ノ神式，石槍，石鏃，石匙，磨石，敲石，石皿，打製石斧
					縄文後期	落とし穴，礫集積	指宿式，市来式，石鏃，磨石
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	竪穴建物跡，大型建物跡，掘立柱建物跡，円形･方形周溝	山ノ口式・中溝式，擬凹線文系壺，土製勾玉，鉄器，磨製石鏃，石匙，砥石，敲石，台石
					古墳時代以降	溝状遺構，畝状遺構	土師器塊，薩摩焼
		縄文時代早期から弥生時代中期を中心とした遺跡である。弥生時代中期では，ベッド状遺構を伴う方形・円形の大型竪穴建物跡，棟持柱をもつ掘立柱建物跡２棟を含む建物跡群，柱穴列や円形・方形の周溝などが検出されており，大隅半島中央部における当該期の集落の様相を知る上で貴重な遺跡である。このほか，縄文時代早期の竪穴建物跡，連穴土坑などの遺構が多数発見されていることも注目される。					
24	立小野堀	鹿屋市 串良町 細山田 台地縁辺部 標高約125m	H22年度 H23年度 H24年度 H26年度 H30年度 終了 ※H22～24は埋文センター調査	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 ⑴刊行 R３年度 ⑵刊行 ※H24は埋文センター作業	縄文前・中期	—	深浦式
					縄文後期	—	指宿式，市来式，西平式
					弥生中期	—	山ノ口式
					古　墳	地下式横穴墓，土坑墓，溝状遺構	成川式，須恵器，鉄器（刀・剣・槍・鉾・刀子・鏃等），青銅鈴，人骨
					時期不詳	溝状遺構	—
		縄文時代前期から古墳時代までの遺跡である。特筆すべきは，古墳時代の地下式横穴墓が約200基発見されたことである。玄室内には鉄鏃や鉄剣等の鉄器，青銅製鈴等の副葬品と人骨が多数残っていたほか，墓周辺から多量の土器や須恵器が出土した。青銅製鈴をはじめ，多種多様な副葬品を伴った地下式横穴墓群の発見は，南九州の古墳時代墓制の様相全体を解明していく上で貴重な資料である。					
25	十三塚	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター調査	H22年度 刊行 ※埋文センター作業	縄文早期	—	石坂式
					縄文後期	—	凹線文，市来式
					縄文晩期	—	黒川式，三万田式
					弥生中期	竪穴建物跡，掘立柱建物跡，土坑	山ノ口式，土製勾玉，打製・磨製石鏃，磨石，敲石，砥石，棒状敲具，鉄鏃
					古　墳	—	成川式
					中世～近世	道路状遺構	加治木銭
		弥生時代中期を中心とする遺跡である。花弁形・方形・円形を呈する竪穴建物跡が発見された。出土遺物等から，王子遺跡や前畑遺跡等と同時期の集落跡と考えられる。また，集石が竪穴建物跡内から発見されている。７号住居跡の埋土内から，松木薗遺跡や永吉天神段遺跡から出土した鉄鏃と類似する無茎の鉄鏃が出土した。					
26	石縊	鹿屋市 串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※埋文センター調査	H22年度 刊行 ※埋文センター作業	縄文早期	集石，土坑	岩本式，前平式，志風頭式，石坂式，平栫式，貝殻条痕文土器，打製石鏃，磨石，敲石
					弥生中期	—	山ノ口式，須玖式
		縄文時代早期前半から早期末を中心とする遺跡である。鎌石橋式土器１個体と轟Ａ式土器が２個体出土し，両型式が同時期に存在した可能性を示唆する遺跡である。					



第５図　東九州自動車道関連遺跡位置図

第Ⅲ章　田原迫ノ上遺跡の調査の方法と層序

第１節　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法，整理報告書作成作業について簡潔に述べる。

１　発掘調査の方法

発掘調査は，平成22～26・28・30年度まで７年間に渡り実施した。本書で報告する平成26・28・30年度の調査対象表面積は13,730㎡，調査対象延面積は32,468㎡であった。

平成22年度に，高速道路建設予定地のセンター杭STA№.181とSTA№.182を基準にして，１グリッド10ｍ×10ｍの大きさで調査区設定を行った。グリッドは，その２点を結ぶ直線を東西方向の基準線とし，センター杭STA№.181と直行する直線を南北方向の基準線とした。その上で，センター杭STA№.181と直行する直線を軸として東に向けて10ｍ間隔に１，２，３，・・・と番号を付した。また，センター杭STA№.181から南に30ｍが，高速道路予定地南端を含む場所であったことから，この地点を南北方向の基準として北側に向けて10ｍ間隔にＡ，Ｂ，Ｃ，・・・とアルファベットを付し，Ａ－１区などと呼称することとした。

なお１区より西側は，発掘調査中で新たに広がった範囲のため，１区より西側は，100，99，98，・・・として，96区まで設定した。平成26年度から平成30年度までの間に実施した調査でも上記の区割りを踏襲した。

発掘調査は，基本的に重機で表土を除去した後，確認調査の結果に基づき，遺物包含層については人力で掘り下げを行い，遺物取り上げや遺構の検出を行った。無遺物層については，重機を用いて慎重に掘り下げを行った。遺構については，それぞれの遺構の特徴に適した道具（移植ゴテ・お玉・スプーン・竹べら等）を用いて慎重に調査を行った。また，遺構の実測や写真撮影を適宜行った。遺物は，平板実測またはトータルステーションで取り上げを行った。

なお，調査区の壁際を中心に幅１ｍ程の先行トレンチを設定し先に人力で掘り下げることで，地形や各層の把握に努めた。また，遺構の範囲確認やシミ状痕跡には，ミニトレンチを設定するなどして，上面での把握に努めた。

地形測量は，池田降下軽石層（Ⅵ層）と薩摩火山灰（Ⅻ層）上面で，平板測量及びトータルステーションを用いて実施した。

２　遺構の認定と検出方法

(1)　遺構の認定

検出面，埋土状況，規模等を複合的に判断し，担当職員で検討したうえで遺構の認定を行った。本編掲載の遺構の認定は，以下のとおりである。

ア　竪穴建物跡・土坑

形状，規模，埋土，壁の立ち上がり状況や床面（底面）の状況などで複合的に判断した。

イ　掘立柱建物跡

ピットの並びの間隔，角度等の状況などで複合的に判断した。

ウ　集石遺構

周辺の遺物出土状況や礫砕片等の広がりの範囲を複合的に判断した。

(2)　遺構の検出方法

Ⅲ層～Ⅴ層の調査では，遺物の取り上げとともに，竪穴建物跡，円形周溝，掘立柱建物跡などの遺構の検出と掘り下げを行った。Ⅱ層～Ⅴ層は，色調として黒褐色土と茶褐色土が交互に堆積しており，４つに分層した。Ⅲ層・Ⅳ層が弥生時代の遺物包含層であり，Ⅲ層が遺構の検出面であったものの，調査においては色調の区別が難しく，遺構の上面での検出には困難を伴った。最終的にピットの検出などが確実にできるのはⅣ層上面まで掘り下げてからが多かった。

鹿児島県内における縄文時代早期の遺物包含層は，アカホヤ火山灰（Ⅷ層）と薩摩火山灰（ⅩⅢ層）に挟まれている。本遺跡でも同様である。その二層の間の土壌は黒く，色調の判断が困難であるが，遺構の有無の判別をしやすいのが薩摩火山灰層上面である。当時の掘り込み面に限りなく近い位置（上層）での検出に努めるために，面的にジョレン等での精査を繰り返し行ったり，パミスの集中が見られる箇所にミニトレンチを設置したりして判断した。それでも，集石以外の遺構の多くは，薩摩火山灰層上面まで掘り下げないと検出できなかった。

３　整理作業・報告書作成作業の方法

平成28年度までの整理作業・報告書作成作業の方法については『田原迫ノ上遺跡１・２』を参照していただきたい。

令和元年度

平成26年度の縄文時代前期以降の発掘調査成果と平成28・30年度の発掘調査成果の整理を行った。図面整理は，遺構実測図，土層断面図等に仕分けし，台帳や遺物との照合を行った。

水洗いは，未洗い遺物や発掘現場で行った水洗いが不十分な遺物について行った。その際，遺物に付着している重要な情報を除去しないように洗うよう努めた。

注記は，水洗い終了後，順次行った。注記は，田原迫ノ上遺跡出土遺物である確認のため「田」を頭に，包含層から出土した遺物には続けて「区」・「層」を記入した。さらに，点上げにより取り上げた遺物には「取り上げ番号」を，一括で取り上げた遺物には「一括」を併せて記入した。また，遺構内遺物については「区」・「層」に続けて「遺構名称」を記入した。なお，小破片や器面の摩滅が著しいものについては注記を省略した。

分類・接合は，遺構内出土遺物と包含層出土遺物に分けた後，包含層出土土器については，土器の胎土や文様等で分類し，さらにグリッドごとに分けた後接合を行い，その後エリアを広げて接合する方法をとった。その後，実測する土器片の個体抽出を行い，土器の内外面の文様等を拓本で採取した。石器については，剥片石器と礫石器に分けた後，作業の効率化を図るため，一部石器実測委託を行った。

トレースは，外部委託以外の遺物，遺構，土層断面については手トレースで行った。遺構配置図，コンタ図はデジタルトレースで行った。

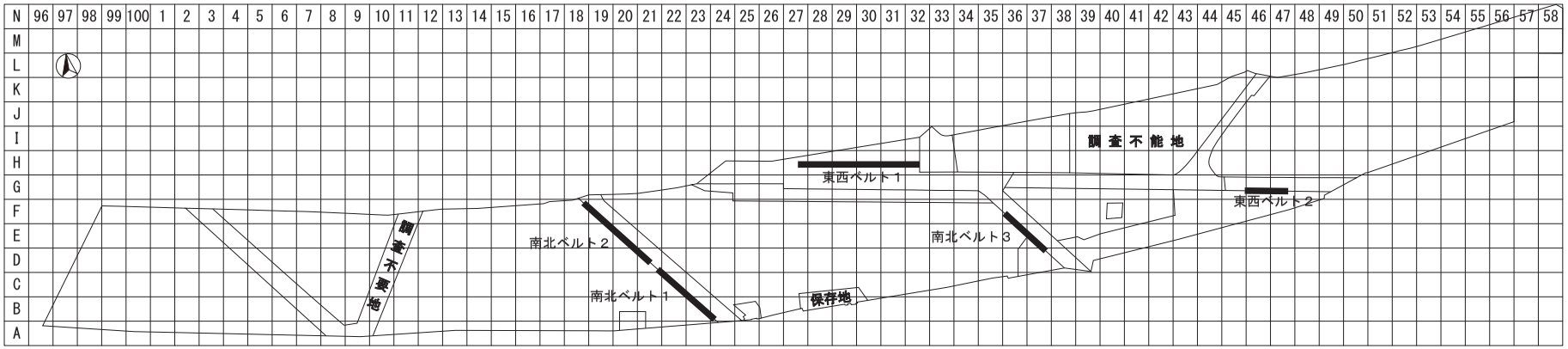
第２節　層序

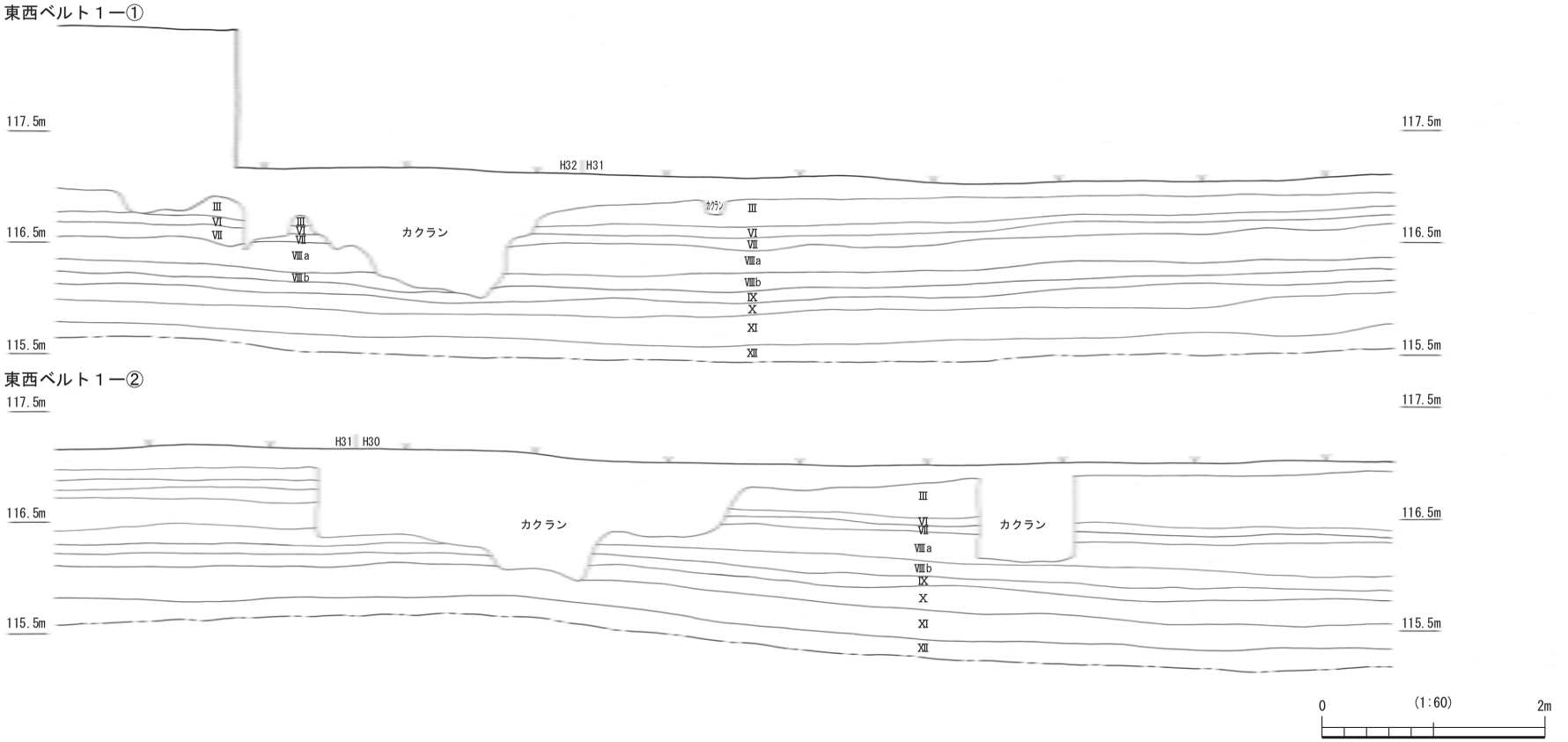
田原迫ノ上遺跡の基本土層及び遺物・遺構の年代を把握する手掛かりの一つとなる火山灰等の詳細については，以下のとおりである。

Ⅰ 層：旧耕作土や盛土で，表土とした。
Ⅱ 層：黒褐色土の無遺物層で，部分残存である。
Ⅲ 層：黒色系の色調をもつ層である。色調の違いで４層に細分した。
Ⅲa層：茶褐色土で，弥生時代の遺物包含層である。
Ⅲb層：茶褐色土で，Ⅲa層より若干明るく，開聞岳噴出の火山灰を含む，弥生時代の遺物包含層である。
Ⅲc層：黒褐色土で，弥生時代の遺物包含層である。
Ⅲd層：茶褐色土で，開聞岳噴出の火山灰（灰ゴラ）を含む，弥生時代の遺物包含層である。
Ⅳ 層：黒色系の色調をもつ層である。色調の違いで２層に細分した。
Ⅳa層：赤黒色土で，白色・黄色粒を含む。
Ⅳb層：黒褐色土で，黄色パミスを若干含む。
Ⅴ 層：茶褐色土で，縄文時代前期遺物包含層であるが，部分残存である。
Ⅵ 層：茶褐色土で，池田湖起源（約6,400年前）の火山灰層で軽石を含む。
Ⅶ 層：暗茶褐色土である。
Ⅷ 層：明橙褐色土で，鬼界カルデラ起源（約7,300年前）の噴出物を含むアカホヤ火山灰層である。堆積物の違いで２層に細分した。
Ⅷa層：明橙褐色土で，アカホヤ火山灰一次の軽石が点在するアカホヤ二次堆積層である。
Ⅷb層：明橙褐色土で，アカホヤ一次の軽石層である。
Ⅸ 層：黒褐色土で，多少粘質を帯びている。縄文時代早期後葉の包含層である。
Ⅹ 層：黒褐色土で，黄橙色パミスを含む。縄文時代早期後葉の包含層である。
Ⅺ 層：暗茶褐色土で，黄橙色パミスを含む。縄文時代早期中葉の包含層である。
Ⅻ 層：暗茶褐色土で，黄橙色パミスを含むが，Ⅺ層よりはパミスは少ない。縄文時代早期前葉～中葉の包含層である。
ⅩⅢ 層：黄白色で，桜島起源（P14：約12,800年前）の薩摩火山灰である。
ⅩⅣ 層：にぶい赤褐色で，粘質性が強く，「チョコ層」と言われる層である。

第３表　田原迫ノ上遺跡　基本層序

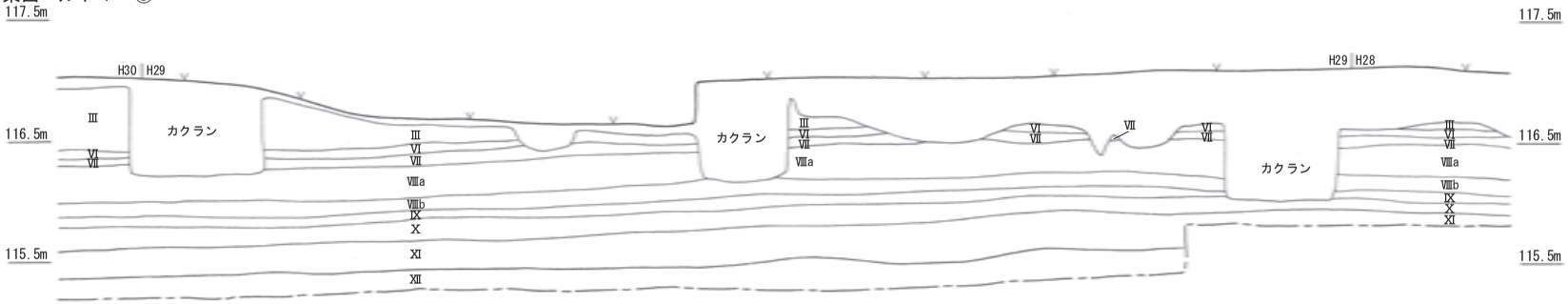
層名	特　　徴
Ⅰ層	表土
Ⅱ層	黒褐色土
Ⅲa層	茶褐色土
Ⅲb層	茶褐色土（開聞岳噴出火山灰混）
Ⅲc層	黒褐色土
Ⅲd層	茶褐色土（灰ゴラ混）
Ⅳa層	赤黒色土
Ⅳb層	黒褐色土（黄色パミス混）
Ⅴ層	茶褐色土
Ⅵ層	茶褐色土（池田降下軽石層）
Ⅶ層	暗茶褐色土
Ⅷa層	明橙褐色火山灰（アカホヤ二次堆積）
Ⅷb層	明橙褐色火山灰（アカホヤ軽石層）
Ⅸ層	黒褐色粘質土
Ⅹ層	黒褐色土（黄橙パミス混）
Ⅺ層	暗茶褐色土（黄橙パミス混）
Ⅻ層	暗茶褐色土（黄橙パミス混）
ⅩⅢ層	黄白色火山灰
ⅩⅣ層	にぶい赤褐色粘質土



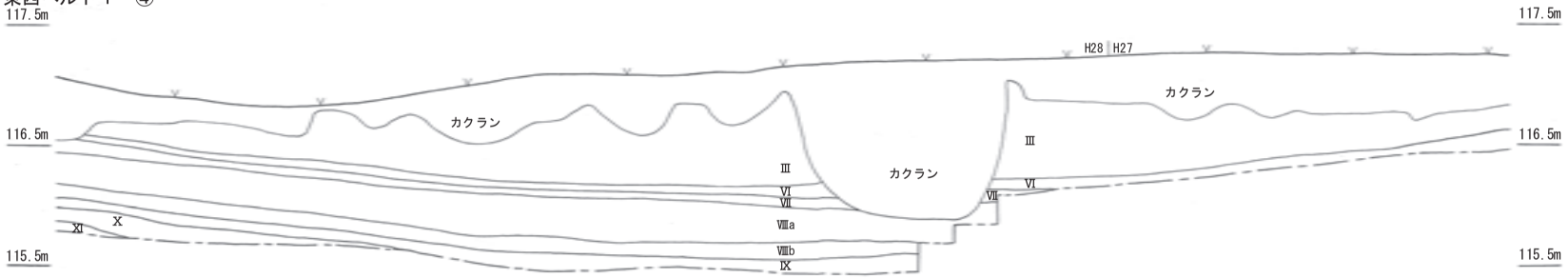


第６図　田原迫ノ上遺跡土層断面図１

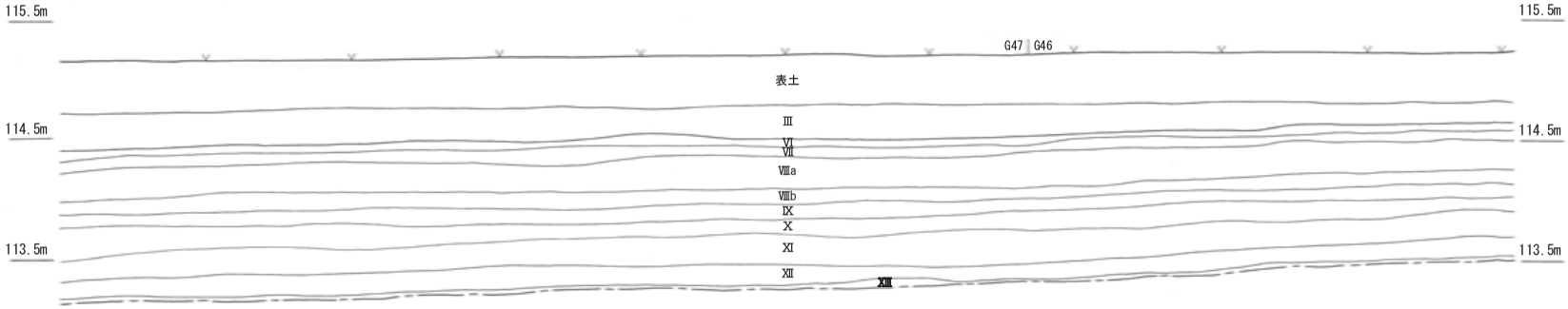
東西ベルト１－③

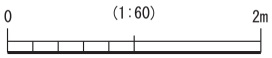


東西ベルト１－④



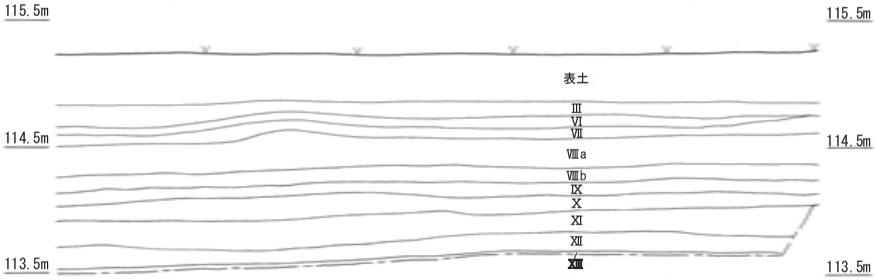
東西ベルト２－①



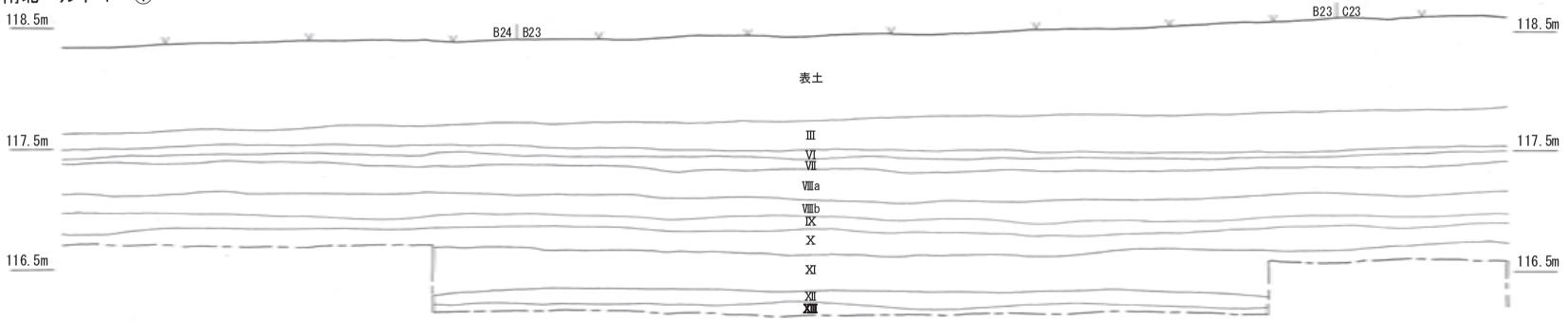


第７図　田原迫ノ上遺跡土層断面図２

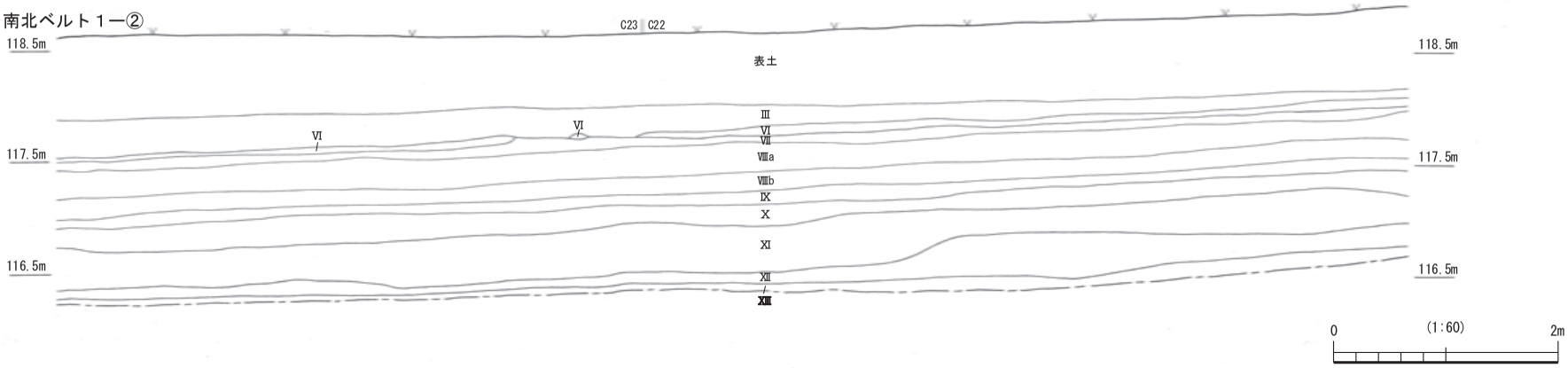
東西ベルト２ー②



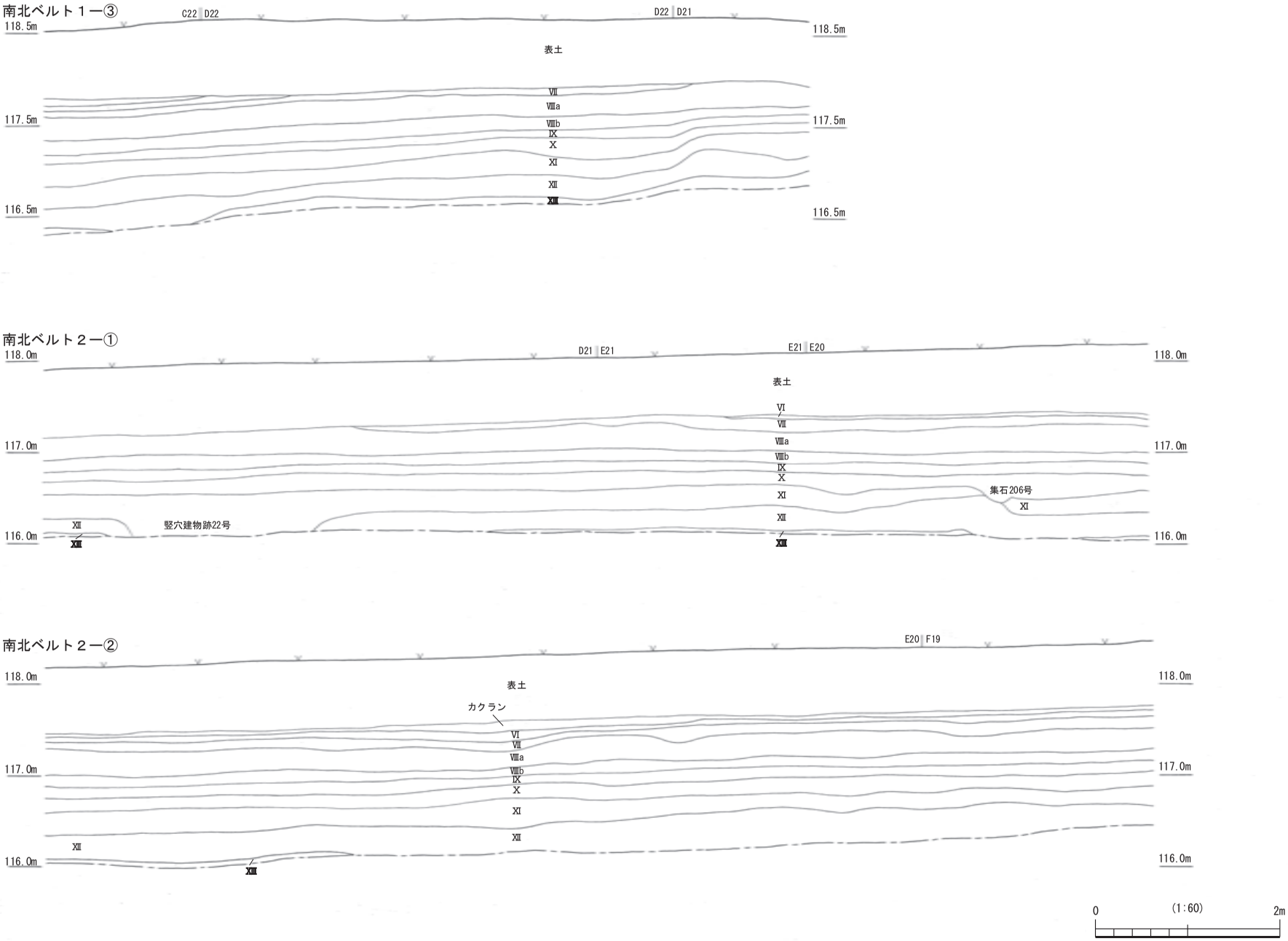
南北ベルト１ー①



南北ベルト１ー②

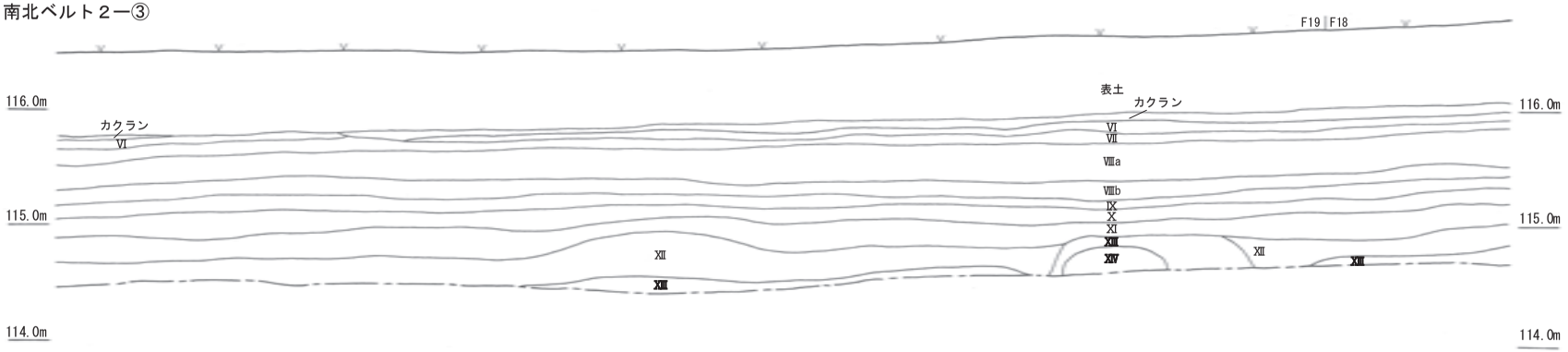


第８図　田原迫ノ上遺跡土層断面図３

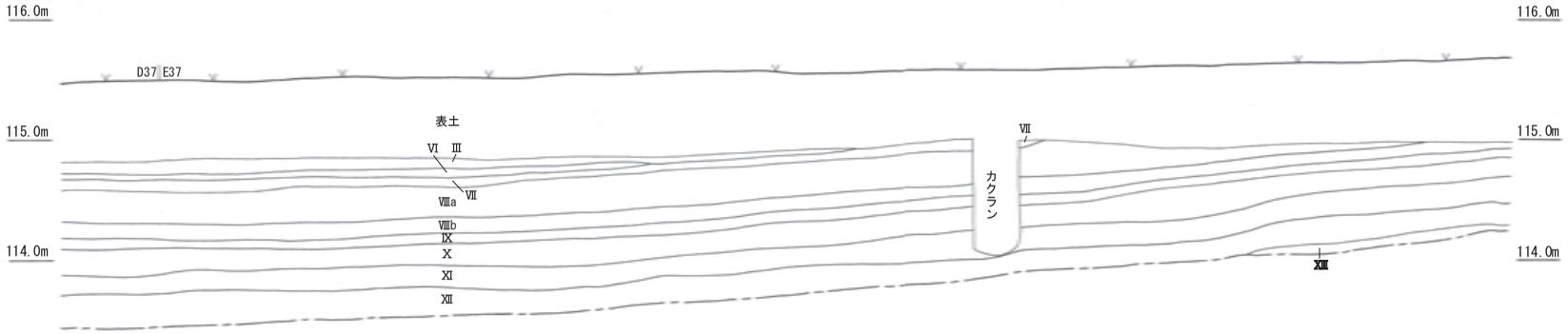


第９図　田原迫ノ上遺跡土層断面図４

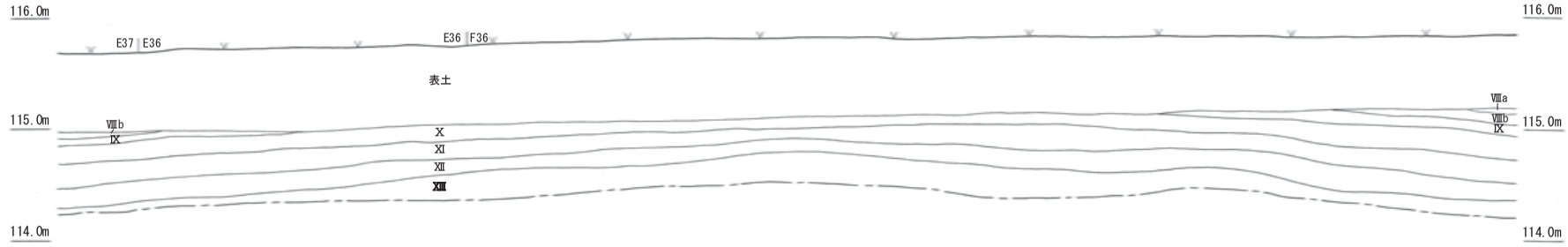
南北ベルト２ー③

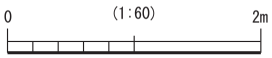


南北ベルト３ー①



南北ベルト３ー②





第10図　田原迫ノ上遺跡土層断面図５

第３節　出土遺物の分類

１　土器

(1)　縄文時代早期

『田原迫ノ上遺跡２』では，縄文時代早期の土器を器形や文様などでⅠ～ⅩⅦ類に分類している。よって，本書でもその分類を踏襲し，本書で報告する土器に沿うように加筆修正を行った。しかし，今回の調査では一部の分類しかみられなかったため，出土しなかった類については割愛する。詳細は『田原迫ノ上遺跡２』を参照されたい。

Ⅰ類

器形：胴部が直線的に立ち上がる。

文様・器面調整：胴部は貝殻刺突文や貝殻条痕を施す。内面調整はナデをおこなう。

Ⅳ類

器形：口縁部は外反，外傾，直行し，深鉢形と想定される。口縁部に瘤状突起をもつものもみられる。

文様・器面調整：口縁部は貝殻刺突文，胴部は貝殻条痕を施す。口唇部や底部端部にキザミを施すものもみられる。内面調整はナデをおこなう。

Ⅴ類

器形：口縁部は内湾もしくは直行する。口唇部に平坦面をもつ。

文様・器面調整：外面は貝殻刺突文を施す。内面調整はナデやミガキをおこなう。

Ⅸ類

器形：口縁部が外反し，深鉢形と想定される。

文様・器面調整：外面に押型文を施す。口唇部や口縁部内面に施すものもみられる。内面調整はナデをおこなう。

ⅩⅢ類

器形：胴部が屈曲し，口縁部は大きく外反すると想定される。

文様・器面調整：沈線や粘土紐貼り付けを施す。内面調整はナデやミガキをおこなう。

ⅩⅥ類

器形：口縁部がラッパ状に開く。胴部は膨らむものと直線的なものがみられる。

文様・器面調整：沈線や網目撚糸文を施す。

ⅩⅦ類

Ⅰ～ⅩⅥ類に分類できなかったものである。

(2)　縄文時代前～晩期

『田原迫ノ上遺跡１』では，縄文時代前～晩期の土器の出土数が少なかったため，分類を行わずに時期ごとに報告を行っている。本書では，時期ごとに土器を分類し，器形や文様などでさらに細分して，その特徴について記述する。

縄文時代前期

時期を明確に断定できるものは出土しなかった。

縄文時代中期

口縁部が開き，粘土紐をめぐらせるもの。

キザミや刺突を施した粘土紐を貼り付けるもの。

縄文時代後期

口唇部が波状を呈し，口縁部に凹線や沈線による文様帯をもつもの。

凹線に囲まれた部分に貝殻刺突を施すもの。

把手をもつもの。

肥厚した口縁部が大きく外反し，口縁部内面に文様をもつもの。

口縁部の断面が三角形を呈し，外面に爪形文や貝殻刺突文を施すもの。

沈線や刺突連点文などを施し，器面調整は丁寧なナデやミガキをおこなうもの。

底部に編物圧痕が残るもの。

縄文時代晩期

口縁部が屈曲し，器面調整はミガキをおこなうもの。

鞠形で，口縁部に粘土紐を貼り付けるもの。

突帯にキザミをもつもの。

その他土器

これまでの特徴に当てはまらないものである。縄文時代前期土器である可能性があるものも，ここに含まれる。

貝殻条痕を施すもの。

沈線や条痕を施すもの。

ミガキを施すもの。

(3)　弥生時代以降

『田原迫ノ上遺跡１』では，弥生時代の土器を器形を基準に分類して掲載している。よって，本書でも器形ごとに分類を行い，その特徴について記述する。また，古墳時代以降の土器や陶器については，時期が明確でないため，おおよその時代で区分した。

甕形土器

口縁部が開き，胴部はやや膨らみをもちながら脚部へ

とすぼまる器形である。胴部外面に三角突帯をめぐらせるものや，穿孔を施すものがみられる。内外面ともにナデをおこなうが，指押さえが多く残る土器も確認できる。

壺形土器

口縁部が開き，頸部がくびれる器形である。口縁部にキザミを施すものや，頸部から胴部にかけて突帯を施すもの，円形浮文を施すものがみられる。

小型鉢形土器

胴部に丸みをもつ器形である。

蓋形土器

甕形土器の蓋で，裾部外面にキザミを施した突帯をめぐらせる。突帯をもたず，穿孔をもつものもみられる。

丹塗り壺形土器

器面を丹塗りし，さらにミガキをおこなうことで文様を施す。

植物圧痕をもつ土器

土器の表面に付着した植物や，粘土に練りこまれていた植物の痕跡がみられる土器である。レプリカ・セム法を用いて，圧痕の詳細について記述する。

古墳時代以降の土器

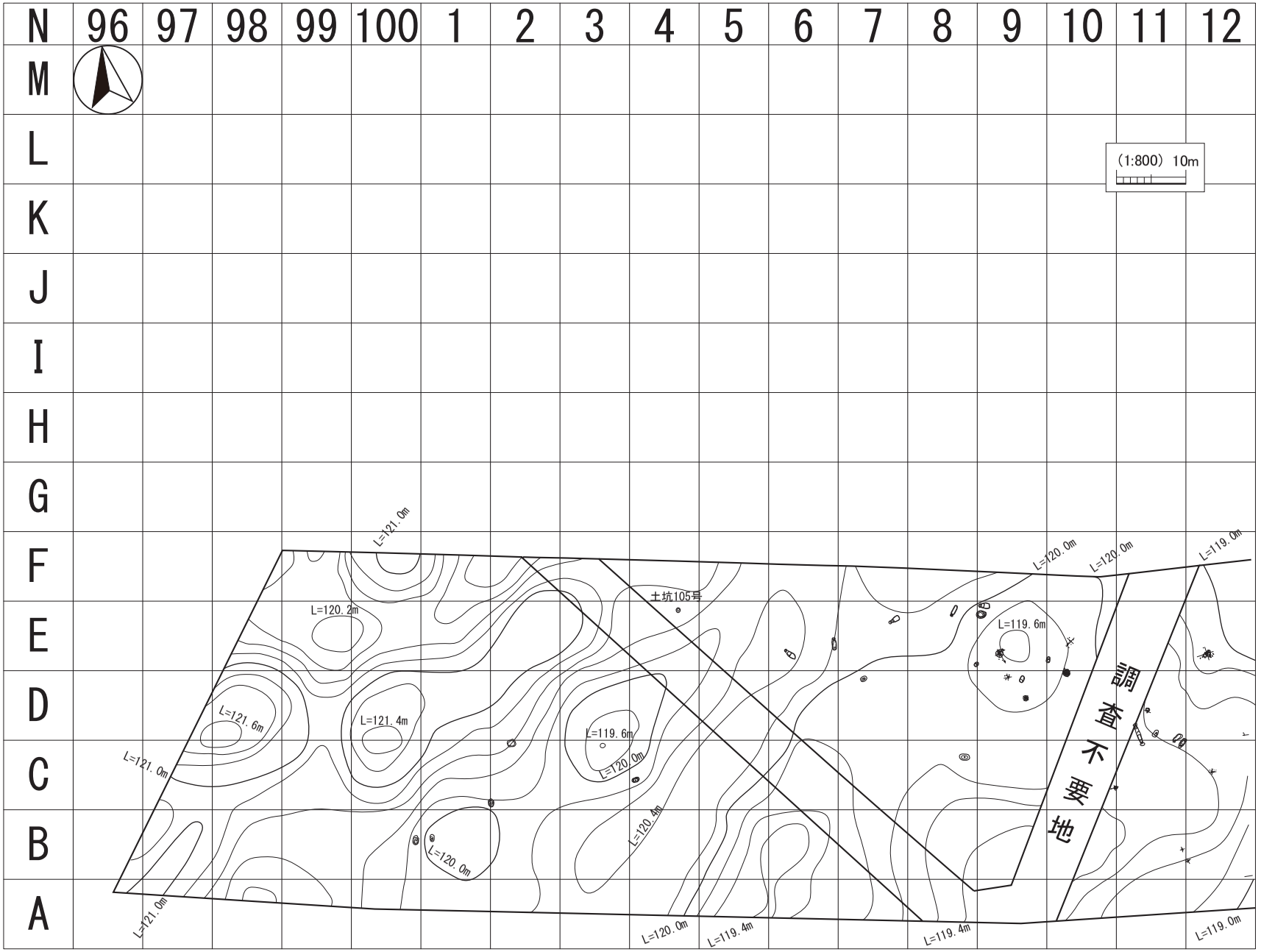
古墳時代の甕形土器，古代の土師器の埦，近世の薩摩焼などである。

２　石器

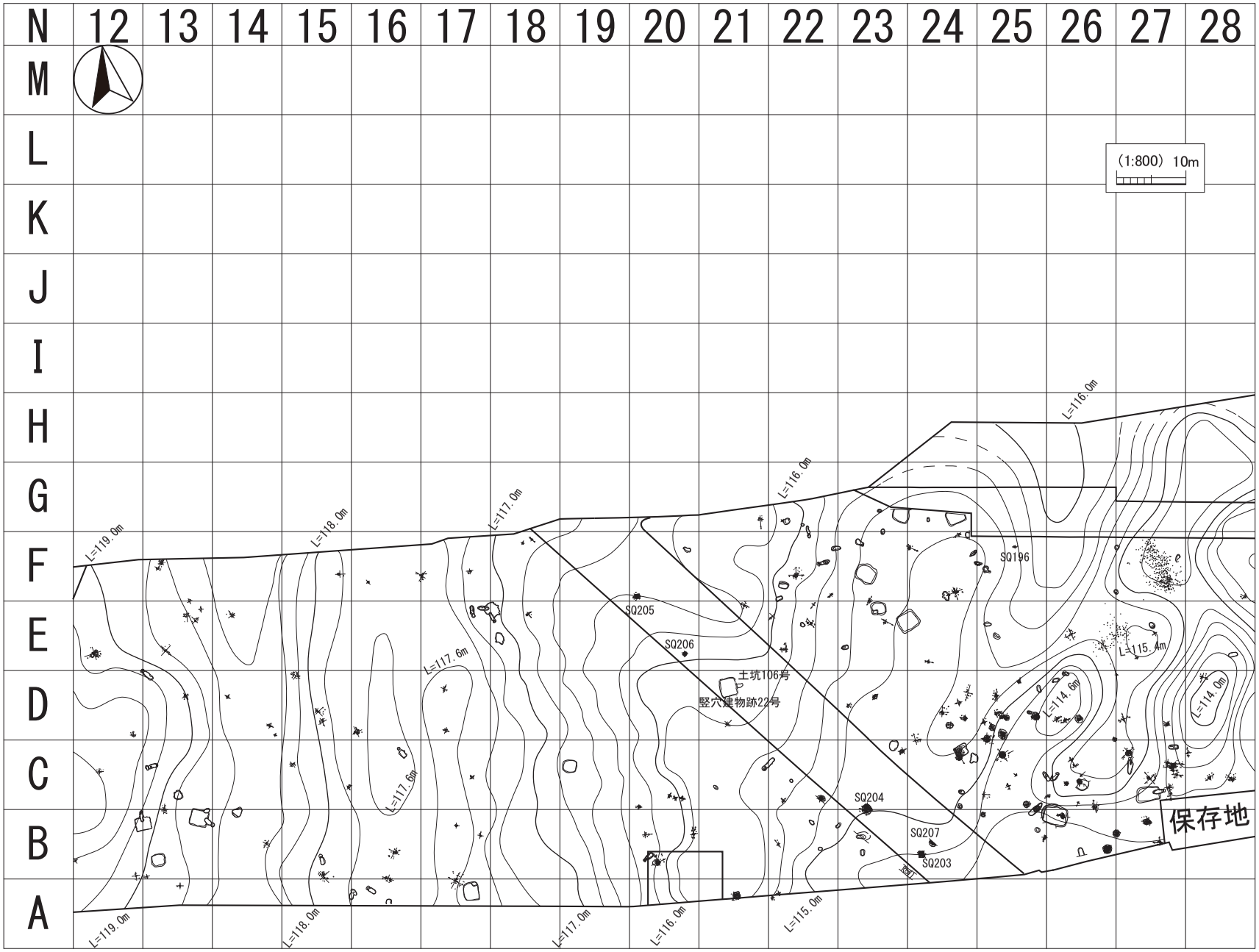
石器は出土数が少なかったので，分類は行わなかった。石材表のみ掲載し，遺物の特徴は文章中に記載する。

第４表　石器の石材分類表

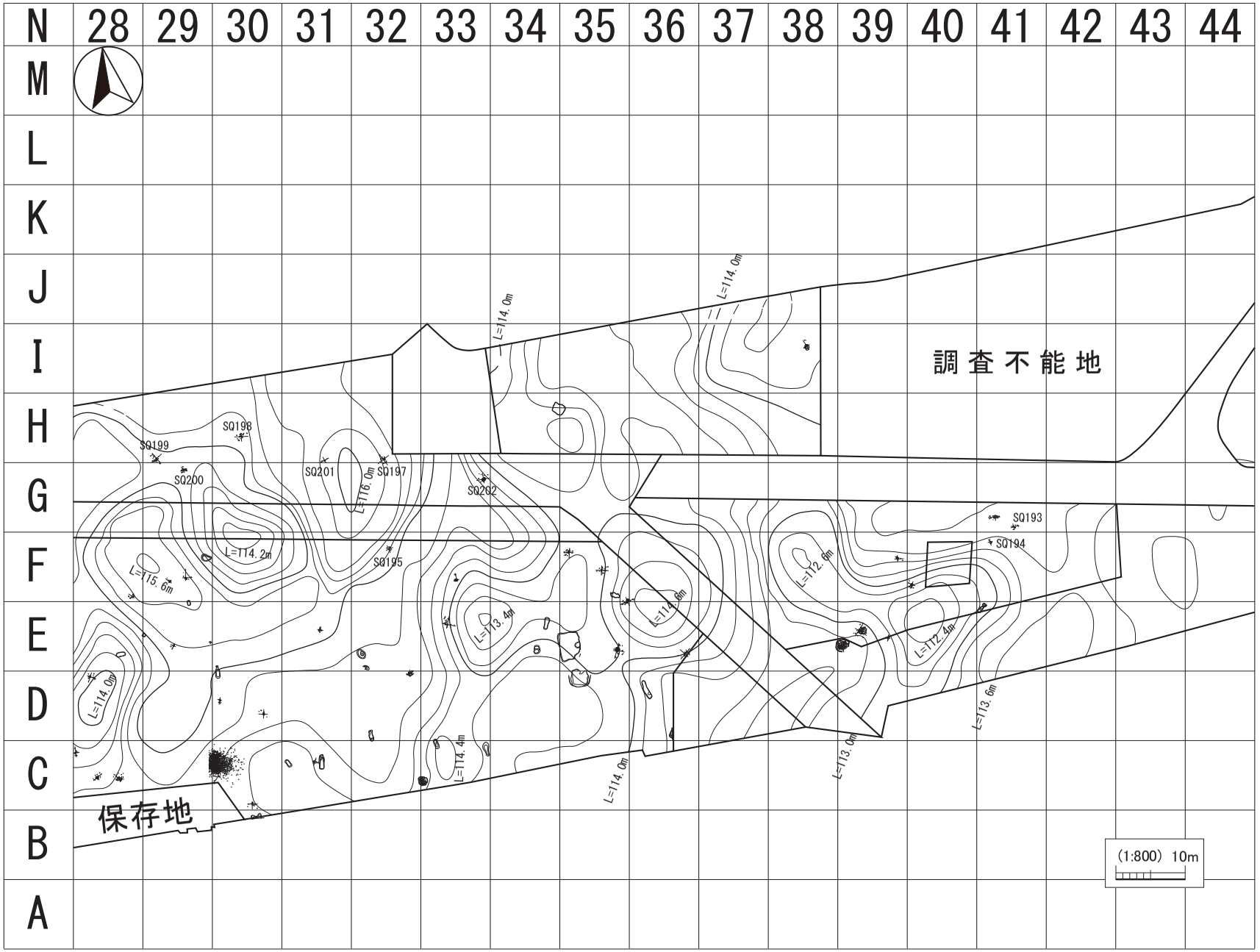
石材	分類	特　　徴
安山岩	ＡＮ	・石英質の不純物を含み，基調は滑らかでガラス質に富む質感のもの。 ・不純物をわずかに含み，基調はややざらついた質感のもの。 ・色調は，黒灰色～青灰色系である。
チャート	ＣＨ	・珪質分に富み，節理が発達せず，剥離面は滑らかで，油脂光沢であるもの。 ・珪質分に富み，節理がやや発達するもの。 ・珪質分にやや乏しく，節理がやや発達し，透明感や油脂光沢もほとんどないもの。 ・色調は，白～灰色系，青灰色～緑色系，黒色系と様々である。
ホルンフェルス	ＨＦ	・熱変成した泥岩～頁岩質のもので，粒子が比較的細かいもの。 ・色調は，黒～暗灰色系，茶色～ベージュ系，白色系と様々である。
黒曜石	ＯＢ１	・不純物を多く含むもので，全く光を通さないもの。 ・色調は漆黒である。
	ＯＢ２	・不純物を多く含むもので，光を通すもの。 ・色調は黒色～アメ色である。
	ＯＢ３	・不純物を含まないか，わずかに含むもので，透明度が高いもの。 ・色調は，アメ色～黒色，オリーブ色である。
	ＯＢ４	・不純物をほとんど含まないか，わずかに含むもので，良質でガラス光沢をもつもの。 ・色調は黒色である。
	ＯＢ５	・不純物をほとんど含まないか，わずかに含むもの。 ・色調は黒灰色である。
	ＯＢ６	・不純物をほとんど含まないか，わずかに含むもの。 ・色調は青灰色である。
	ＯＢ７	・不純物をほとんど含まないか，わずかに含むもの。 ・色調は灰色～オリーブ灰色である。
	ＯＢ８	・微細な不純物を含むもの。 ・色調は，乳白色である。
頁岩	ＳＨ	・珪質分に富み，油脂光沢のあるもの。 ・珪質分がほとんどなく，無光沢で，節理は発達せず，緻密で良質のもの。 ・色調は，暗灰色～灰色系，黒色～暗灰色系と様々である。
その他	―	タンパク石，玉髄系，花崗岩，凝灰岩，砂岩



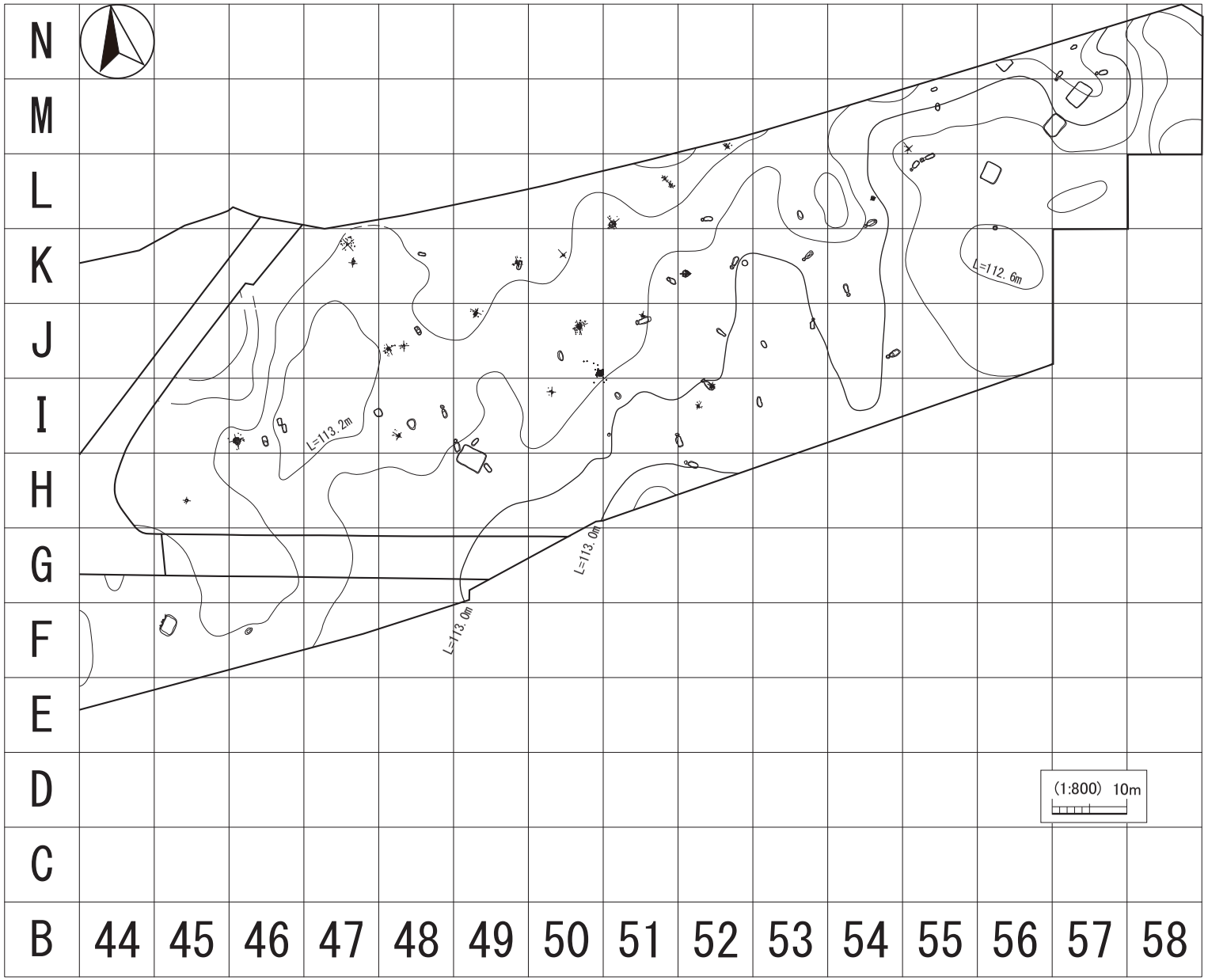
第11図　縄文時代早期遺構配置図１



第12図　縄文時代早期遺構配置図２



第13図　縄文時代早期遺構配置図３



第14図　縄文時代早期遺構配置図４

第Ⅳ章　田原迫ノ上遺跡の発掘調査の成果

第１節　縄文時代早期の調査成果

１　調査の概要

本遺跡における縄文時代早期の該当層は，Ⅷ（アカホヤ火山灰）層とⅩⅢ（薩摩火山灰）層に挟まれた，Ⅸ～Ⅻ層である。調査区全域でこれらの層を確認することができた。Ⅸ～Ⅻ層の各層の色調は酷似しており，遺構検出は困難を極めた。極力上位の層で遺構を検出しようと慎重な調査を進めたが，本来の掘り込み面で検出できていない遺構も少なくないと考えられる。

縄文時代早期の遺構については，Ⅸ～ⅩⅢ層上面で検出した。検出した遺構は，平成26年度に集石遺構が２基，平成28年度に土坑が１基，集石遺構が３基，平成30年度は竪穴建物跡が１軒，土坑が１基，集石遺構が10基である。層位については検出時の認定を生かしている。しかし，整理作業・報告書作成作業時に，発掘調査時の所見や写真，周囲の遺物出土状況なども加味して判断し，修正，再認定を行った遺構もある。なお，遺構配置図については，これまで検出した遺構も含めて第11図～14図に示した。

包含層出土遺物は，土器は石坂式土器を中心に様々な器形・文様の土器が出土している。石器は石鏃等の狩猟具や石斧・磨石・敲石等の加工具が出土している。そのうち土器143点，石器55点を図化した。上記土器の分布については第26図，石器の分布については第39図に示した。また，土器の分類については第Ⅲ章の第３節「出土遺物の分類」で示している。

遺構・遺物について，各項で詳細を述べることとする。

２　遺構

(1)　竪穴建物跡

竪穴建物跡は，平成30年度の調査で１軒検出した。

竪穴建物跡22号・土坑106号（第15・16図）

竪穴建物跡22号は，Ｄ－21区で検出された。検出面はⅩⅢ層上面である。実際の掘り込み面はもっと上位の層であったと考えられる。調査区の壁側で方形プランの対角線で切れる形で検出したため，断面は対角線上で記録し，その後，調査区を広げて全面を検出した。建物南東壁側で土坑106号と切り合っているが，Ａ－Ａ’の断面図が記録できなかったため，切り合いの関係は不明確である。平面形状は長軸260cm，短軸250cmの方形を呈している。検出面からの深さは50cmである。掘り方はⅩⅣ層に達している。柱穴は確認されなかった。床面に炭混じりの土が広がっている部分があり，その範囲を平面図に網掛けで示している。

埋土は４層に分けられる。埋土１は黒褐色土で粘質はやや弱く締まりはやや強い。白色パミスと黄橙色のパミスを含む。埋土２は黒褐色土で粘質・締まりともにやや強い。白色パミスと黄橙色のパミスを多量に含む。埋土３は粘質・締まりともにやや強い黒褐色土で，白色パミスと黄橙色のパミスを多量に含む。Ⅺ層とⅫ層の混土で，ⅩⅣ層の土がブロック状に入っている。埋土４は黒褐色土で粘質が強く締まりがやや弱い。白色パミスと黄橙色のパミスを含む。埋土３とⅩⅣ層の混土である。

埋土中から出土した遺物は石皿１点，台石１点，磨石１点，礫１点である。特徴等をより分析できる石皿１点，磨石１点，台石１点を図化した。１はホルンフェルス製の磨石で，埋土２から出土した。球形の円礫で，あらゆる面を磨面として使用している。２は凝灰岩製の石皿で埋土４から出土した。扁平な大型の円礫の表裏両面を磨面に使用している。３はホルンフェルス製の台石で，埋土３から出土した。表面に擦痕が見られる。破損しており，全形は不明である。

土坑106号は，竪穴建物跡22号の南東側ⅩⅢ層上面で検出された。実際の掘り込み面はもっと上位の層であったと考えられる。長軸100cm，短軸55cm程の楕円形を呈していたと思われるが，竪穴建物跡22号と切り合っており，全形は不明である。遺物は確認されなかった。

埋土は２層に分けられる。埋土５は黒褐色土で粘質がやや弱く，締まりがやや強い。白色パミス及び黄橙色パミスを中量含む。埋土６は黒褐色土で埋土１より粘質が強く，締まりが強い。白色パミス及び黄橙色パミスを含んでいるが，埋土５よりパミスの量は多い。

(2)　土坑

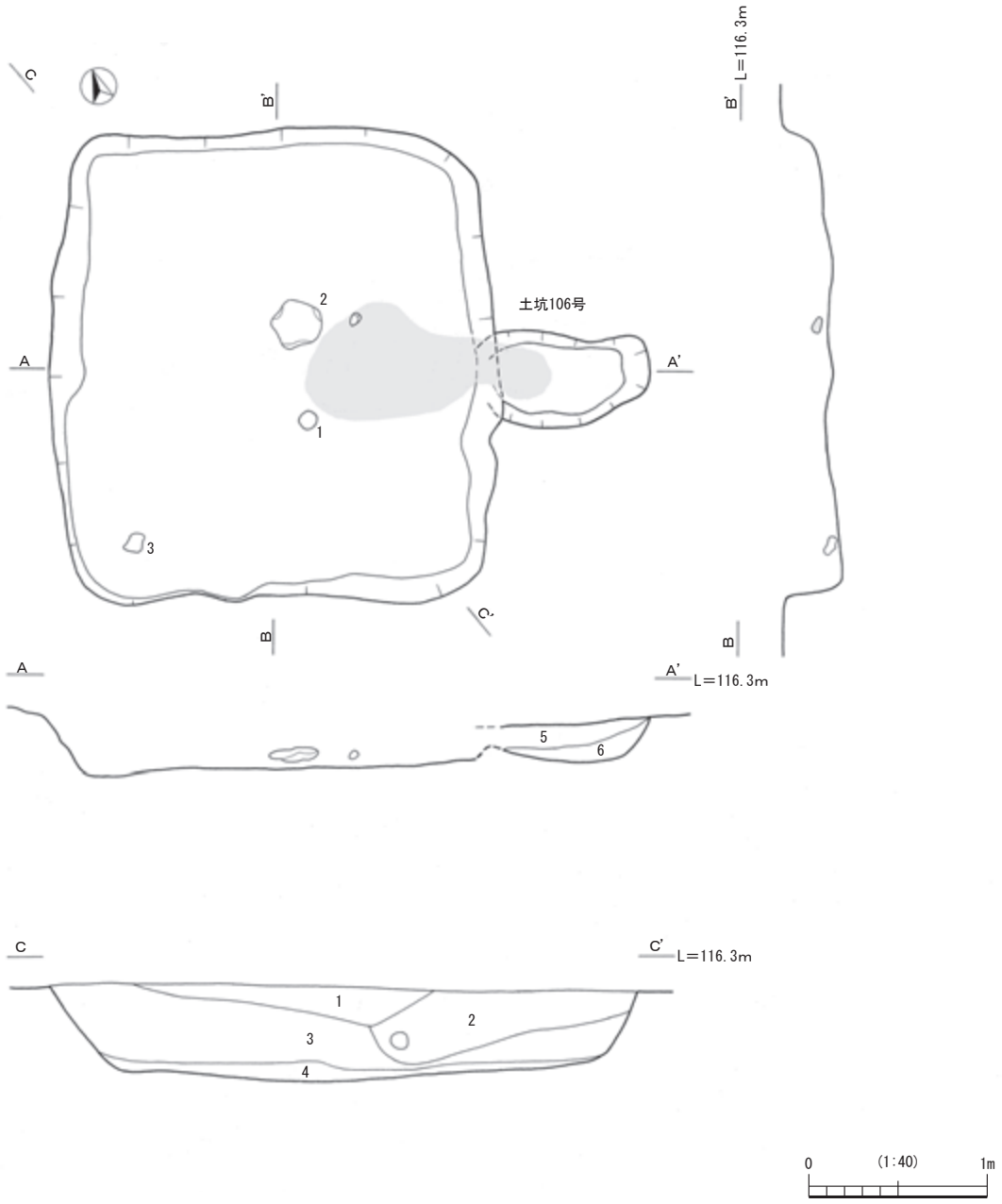
土坑は平成28年度の調査で１基，平成30年度の調査で１基検出された。

土坑105号（第16図）

Ｅ－４区，Ｘ層で検出された。長軸70cm，短軸60cmの均整のとれた楕円形である。掘り込みの深さは約25cmで，Ⅺ層を掘り込んでいる。底面はほぼ平坦である。遺物は確認されなかった。

埋土は黒色の単層で，黄橙色パミスと灰色粒を少量含む。過年度調査で近隣に落とし穴が検出されている。

竪穴建物跡22号



埋土１　黒褐色土　しまりやや強　粘質やや弱
　　１㎜大の白色パミスと２～10㎜大の黄橙色パミスを中量含む。
埋土２　黒褐色土　しまりやや強　粘質やや強
　　１㎜大の白色パミスと２～20㎜大の黄橙色パミスを多量含む。
埋土３　黒褐色土　しまりやや強　粘質やや強
　　１㎜大の白色パミスと２～25㎜大の黄橙色パミスを多量含む。
　　埋土２よりもパミスが高密度に入っている。Ⅺ層とⅫ層の
　　混土でⅩⅣ層がブロック状に含まれる。
埋土４　黒褐色土　しまりやや弱　粘質強
　　１㎜大の白色パミスと２～15㎜大の黄橙色パミスを中量含む。
　　ⅩⅣ層の土が多く含まれる。
埋土５　黒褐色土　しまりやや強　粘質やや弱
　　１㎜大の白色パミスと２～10㎜大の黄橙色パミスを中量含む。
埋土６　黒褐色土　しまりやや強　粘質やや強
　　１㎜大の白色パミスと２～20㎜大の黄橙色パミスを多量含む。

第15図　竪穴建物跡22号・土坑106号

(3)　集石

集石は平成26年度に２基，平成28年度に３基，平成30年度に10基検出された。集石については，『田原迫ノ上遺跡２』の分類と同様に，上野原遺跡・稲荷迫遺跡（県立埋文センター）の分析方法を参考に次のように分類した。各集石のタイプの分類については，後で集石一覧表に示している。

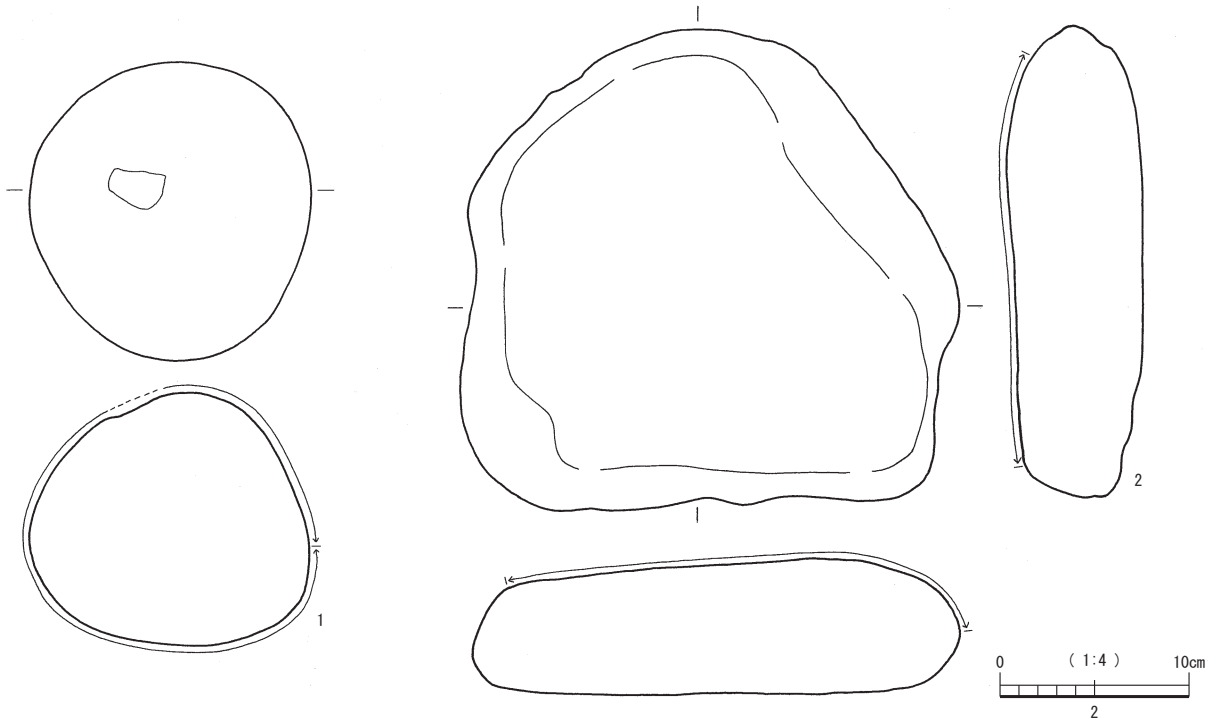
タイプⅠ：明確な集中部が見られず，掘り込み部のないもの。（集石193号～200号）

タイプⅡ：明確な集中部が見られ，掘り込み部のないもの。（集石201号）

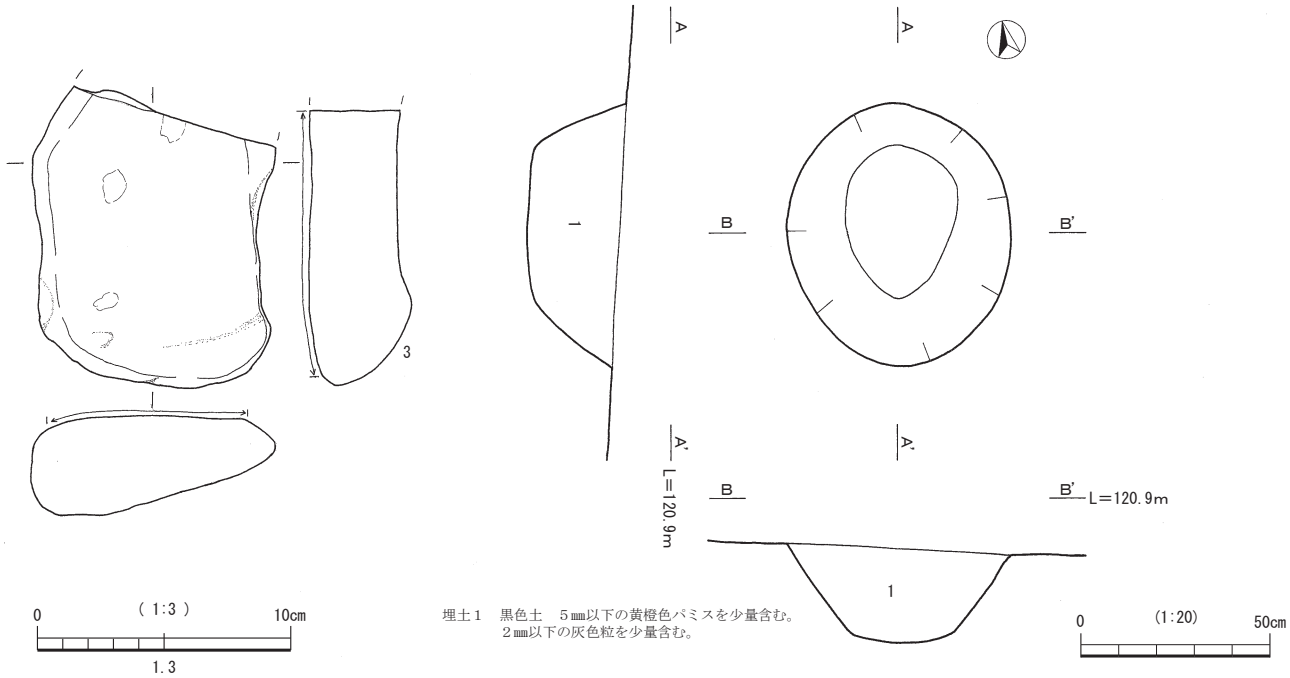
タイプⅢ：明確な集中部が見られ，掘り込み部のあるもの。（集石202号～207号）

タイプⅣ：明確な集中部は見られないが，掘り込み部のあるもの。（今回の調査範囲からは検出されなかった）

また，集石から出土した石器は残存率が高いもの，磨面や敲打痕が明瞭なものについて図化している。



土坑106号



第16図　竪穴建物跡22号出土遺物，土坑105号

タイプⅠ

集石193号（SQ193：第17図）

Ｇ－41区，XI層で検出された。構成礫総数は13個である。礫は中心から半径0.75mの範囲に広がる。

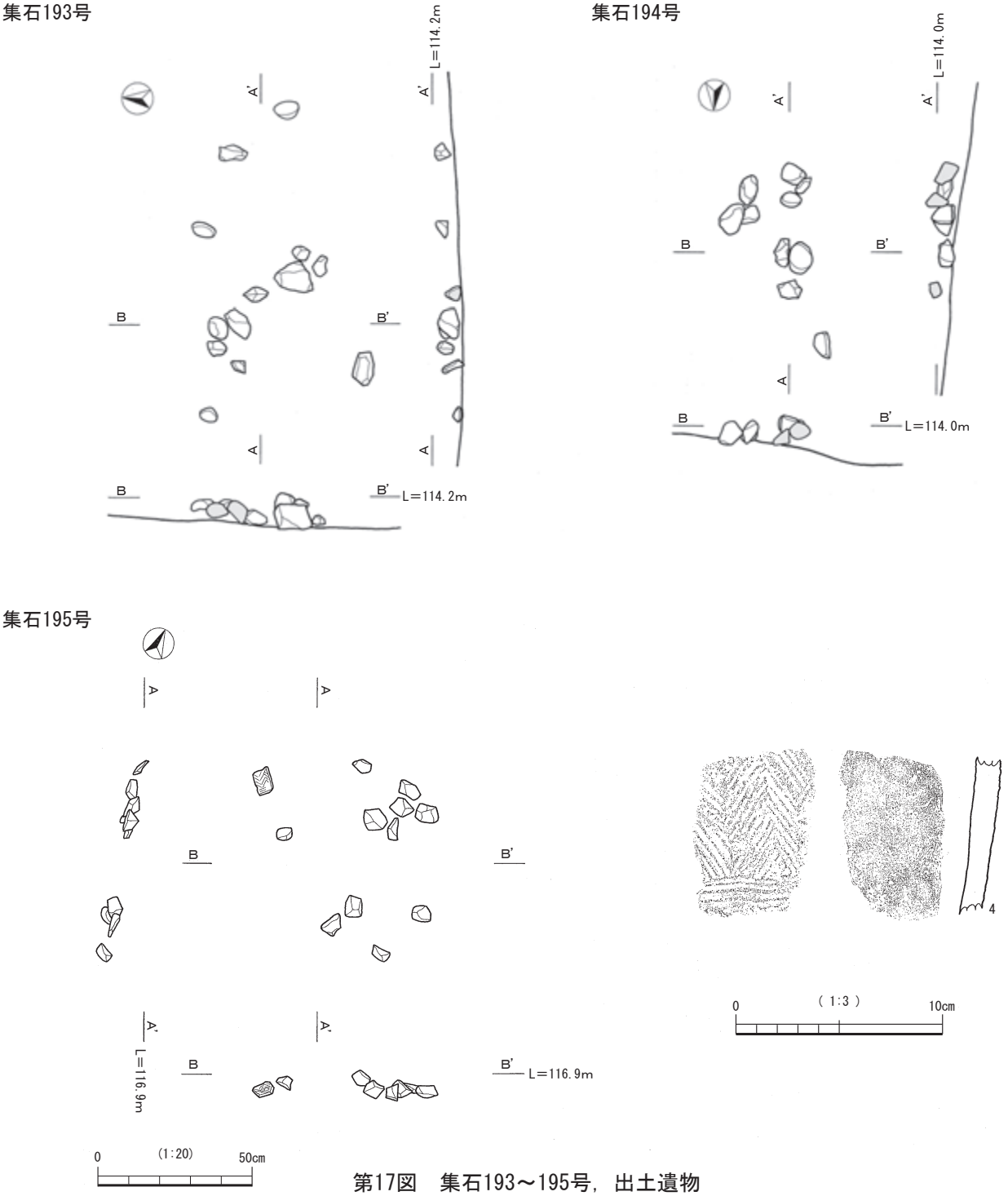
集石194号（SQ194：第17図）

Ｆ－41区，XI層で検出された。構成礫総数は10個で，２，３個ずつまとまった状態で散在し，中心から半径0.40mの範囲に収まる。遺物は確認されなかった。

集石195号（SQ195：第17図）

Ｆ－32区，Ｘ層で検出された。構成礫総数は11個である。礫は中心部から半径0.45mの範囲に広がる。凝灰岩が主体で構成され，磨石が２点出土しており，１点は熱を受けている。残存部分が少ないため，図化はしていない。

遺構内から土器が１点検出されており，図化した。４はⅣ類の土器の胴部片で，上部に貝殻条痕を綾杉状に施し，下部は横位に施す。内部はナデ調整を施す。



第17図　集石193～195号，出土遺物

集石196号（SQ196：第18図）

F－25区，X層で検出された。構成礫数は31個で，礫は中心から半径0.65mの範囲に広がる。安山岩と凝灰岩が主体で,200g以下の礫が多いが,1000gの礫１つも含まれる。遺物は確認されなかった。

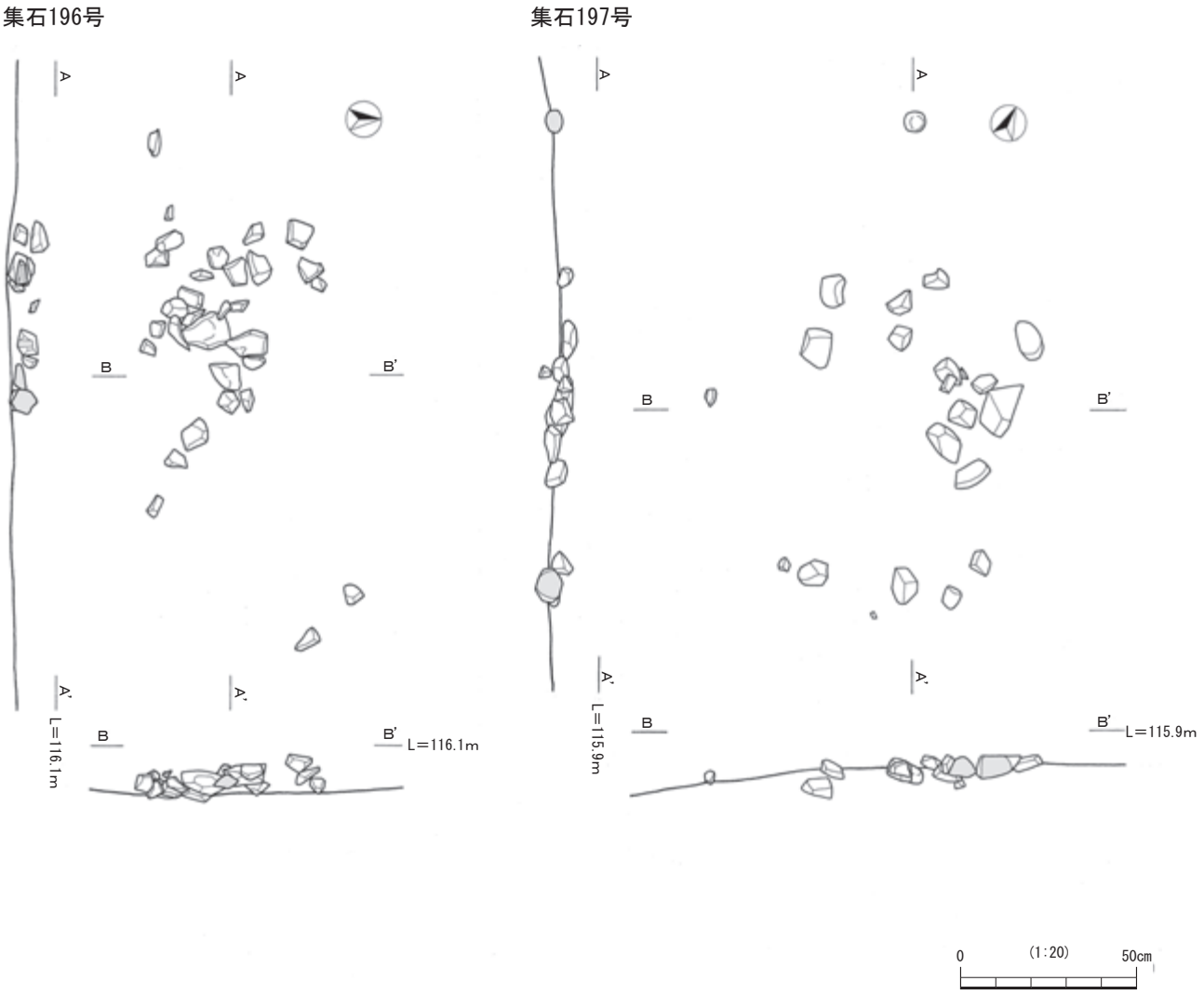
集石197号（SQ197：第18図）

G－32区，XI層で検出された。構成礫総数は21個である。礫は中心から半径0.85mの範囲に広がる。安山岩が主体で，約30％の礫が熱を受けている。300g以下の礫が多いが，1360gの礫１個も含まれる。遺構内から貝殻条痕を施した土器が出土しているが，小片のため詳細は不明である。

集石198号（SQ198：第19図）

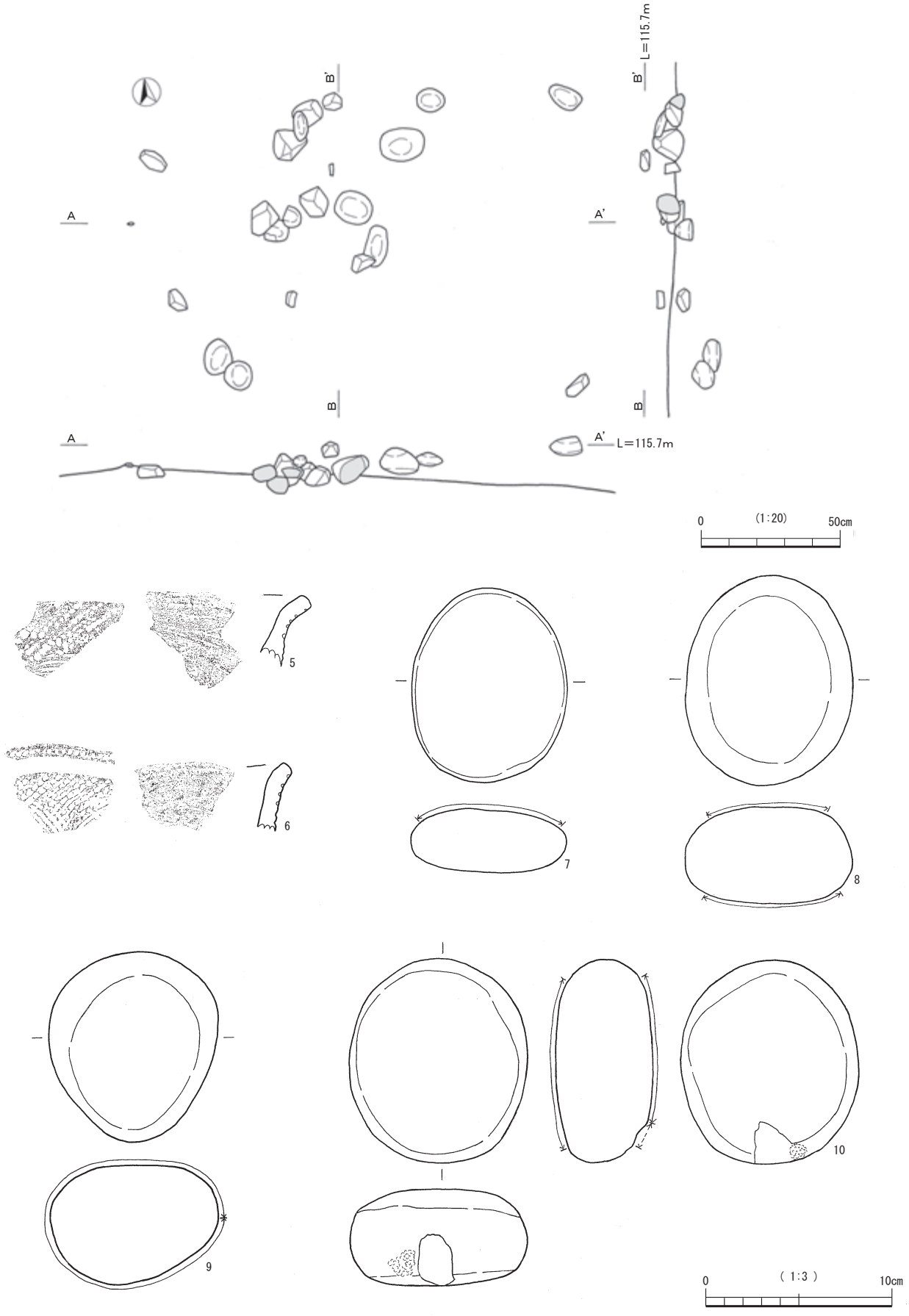
H－30区，XI層で検出された。構成礫総数は20個である。礫は中心から半径0.60mの範囲に広がる。安山岩が主体で，約25％の礫が熱を受けている。600g以下の礫が多いが1650，1760，1930gの大きい礫も３個含まれる。円礫が多く出土している。

遺構内から土器が２点出土しており，図化した。５，６は，Ⅳ類土器の口縁部である。５は口縁が外反し，口縁部外面には貝殻刺突文を横位に施す。胴部外面に貝殻条痕を横位に施す。内面はナデ調整を施す。６は口縁が外反し，口縁部外面には貝殻刺突文を斜位に施し，口縁端部に貝殻刺突文を横位に施す。胴部外面は貝殻条痕を斜位に施す。内面はナデ調整を施す。石器は磨石が８点，磨敲石が２点，剥片が１点出土している。そのうち４点を図化した。７，８は安山岩製の磨石である。扁平な円礫の表裏面を磨面として使用している。９はホルンフェルス製の磨石である。球状の礫の全面を磨面として使用している。10は磨敲石である。偏平な安山岩の円礫の表裏面を磨面として使用している。側面には敲打痕が認められる。



第18図　集石196・197号

集石198号



第19図　集石198号，出土遺物

集石199号（SQ199：第20図）

Ｈ－29区，XI層で検出された。構成礫総数は33個である。礫は中心から半径1.05mの範囲に広がる。安山岩，砂岩，凝灰岩が主体で，約70％の礫が熱を受けている。

遺構内から土器の小片が出土しており，図化した。11は器壁が厚く，胴部外面に貝殻条痕文を斜位に施す。内面はナデ調整をおこなう。石器は石皿片が１点出土しており，図化した。12は凝灰岩製で平坦な磨面を有し被熱している。

集石200号（SQ200：第21図）

Ｇ－29区，XI層で検出された。構成礫総数は22個である。礫は中心から半径0.55mの範囲に広がる。半数以上が安山岩で，他に砂岩，凝灰岩で構成され，約40％の礫が熱を受けている。遺物は確認されなかった。

タイプⅡ

集石201号（SQ201：第21図）

Ｈ－31区，XI層で検出された。構成礫総数は９個である。礫は中心から半径0.10mに集中し，その周囲にも散在する。構成礫は安山岩のみで，被熱痕は見られなかった。磨石が４点，磨敲石が１点出土している。細片のため図化には及ばなかった。

タイプⅢ

集石202号（SQ202：第21図）

Ｇ－33区，Ｘ層で検出された。構成礫総数は27個である。礫が中心から半径0.25mの範囲に集中している。長軸62cm，短軸46cm，深さ７cmの浅い楕円形の掘り込みを伴う。ほぼ安山岩で構成され，600g以下の礫が多い。磨石が２点，磨敲石が３点，礫器が１点出土しており，２点を図化した。13は安山岩製の磨敲石である。円礫を活用しており，表面と側面の一部に敲打痕が見られる。14はホルンフェルス製の礫器である。扁平な礫を打ち欠き，鋭利な部分を作出している。

集石203号（SQ203：第22図）

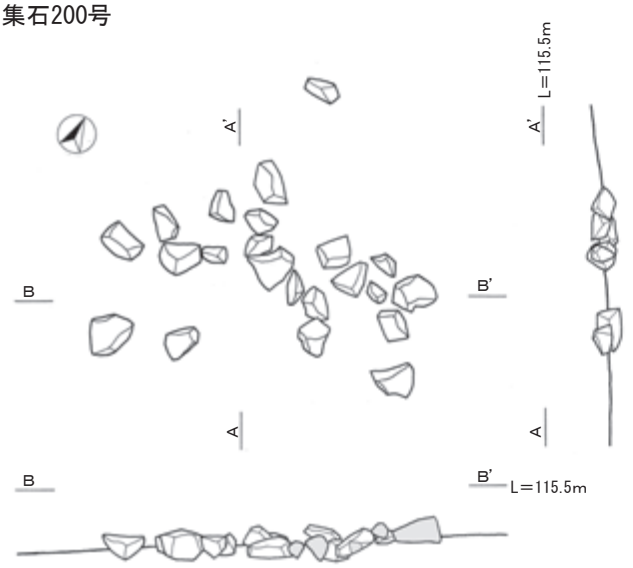
Ｂ－24区，Ｘ層で検出された。構成総礫数は99個で安山岩が主体である。1000g以上の礫が36個含まれ，中には人頭大の礫もある。礫は中心から半径0.50mの範囲に集中している。長軸114cm，短軸106cm，深さ35cmの方形に近い形状の掘り込みを伴う。

敲石１点，石皿の破片２点が出土しており，図化した。15・16は安山岩製の石皿破片である。全形は不明だが，使用面は断面レンズ状に浅く凹む。

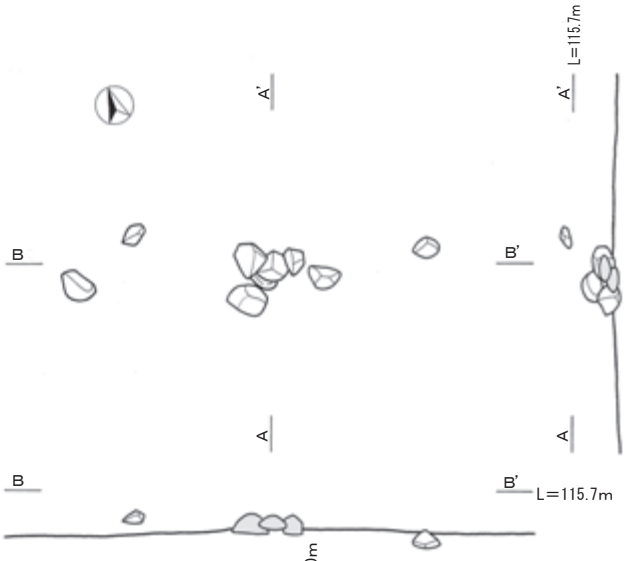


第20図　集石199号，出土遺物

集石200号

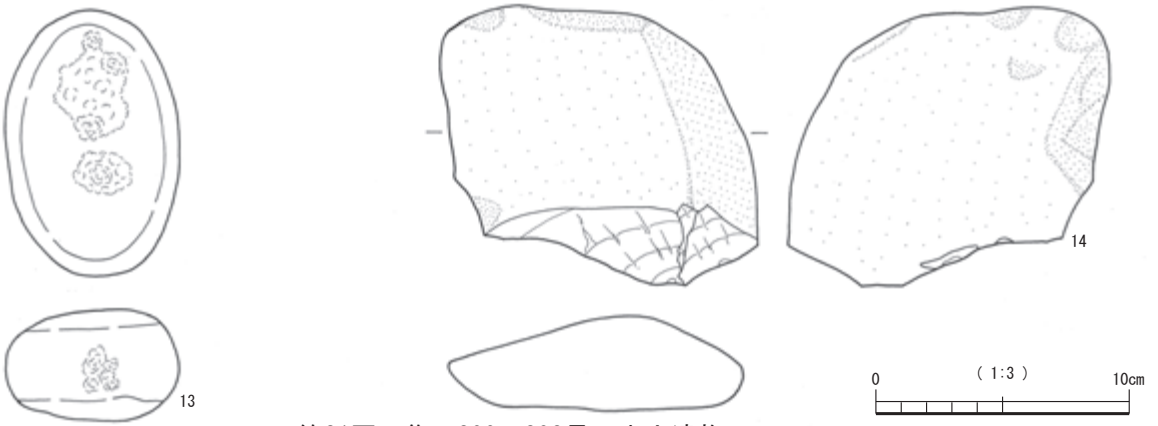


集石201号



集石202号





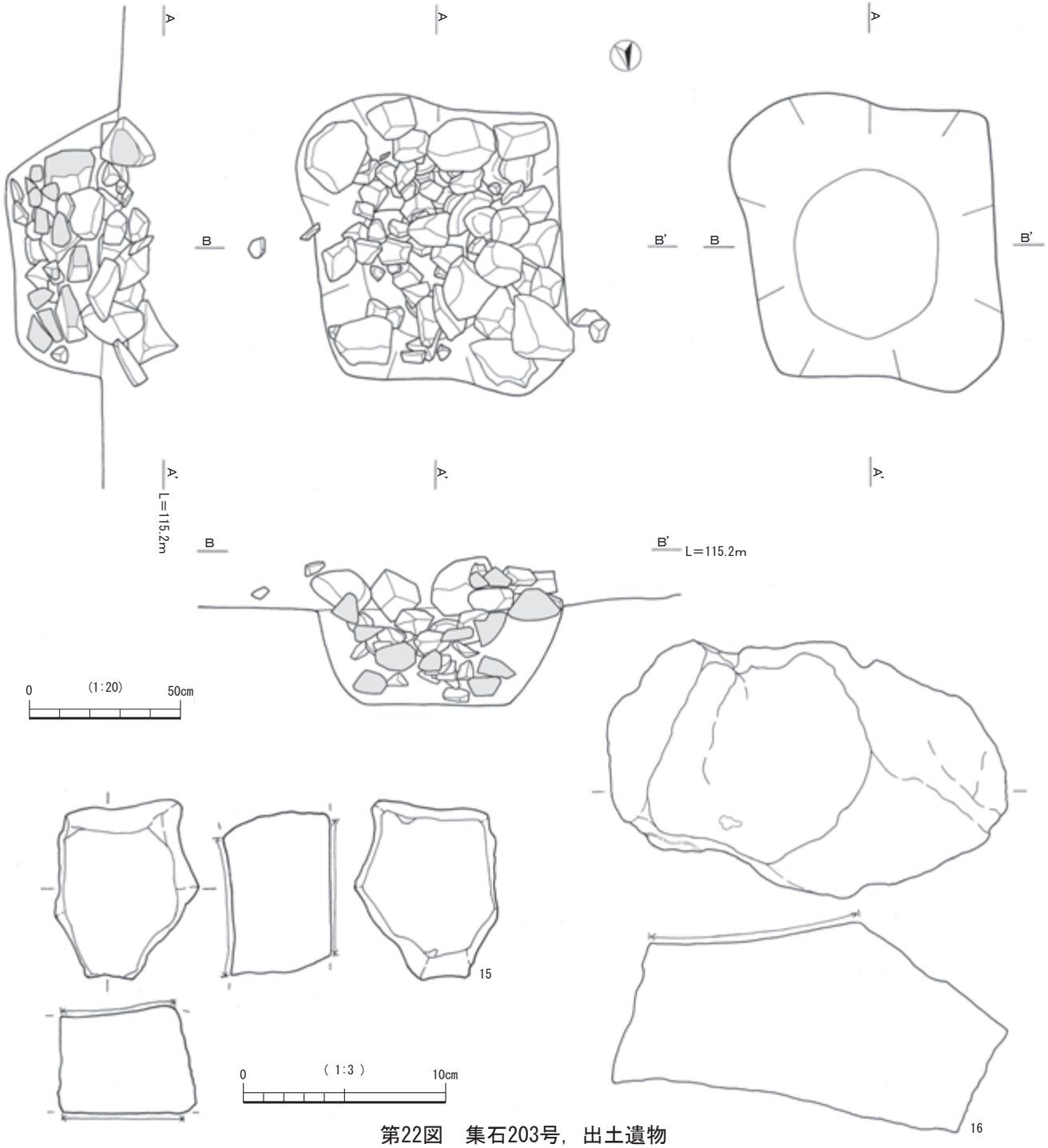
第21図　集石200～202号，出土遺物

集石204号（SQ204：第23図）

Ｃ－23区，XI層で検出された。掘り込みの埋土がＸ層相当だったため，帰属層はＸ層と考える。構成総礫数は224個である。礫の集中部は半径0.60mで，その中心から半径1.05mの範囲に礫全体が広がる。長軸148cm，短軸144cm，深さ54cmの掘り込みを伴い，検出面から底面部まで礫が密集している。安山岩が約半数を占め，次いでホルンフェルス，凝灰岩が多い。構成礫全体の約15%が熱を受けている。100g以下の礫が多いが，1000g以上の礫も26個あり，中には人頭大の礫も含まれる。

遺構内から土器小片が１点出土した。表面の剥落が激しく，器種は不明である。石器は磨石３点，敲石１点，石皿破片４点，剥片１点が出土している。そのうち１点を図化した。17は石皿の破片である。凝灰岩製で若干凹んだ磨面を有する。また，埋土中から出土した炭化物（資料No１～３）は，年代測定でそれぞれ7529～7470，7532～7477，7527～7463calBCという結果を得た。

集石203号



第22図　集石203号，出土遺物

集石204号



第23図　集石204号，出土遺物

集石205号（SQ205：第24図）

Ｆ－20区，XI層で検出された。構成礫総数は72個である。礫の集中部は半径0.30mで，その中心から半径0.85mの範囲に礫全体が広がる。長軸80cm，短軸60cm，深さ９cmの掘り込みを伴う。安山岩が主体で，構成礫全体の約50％が熱を受けている。

遺構内からⅣ類土器の口縁部が出土しており，図化した。18は口縁が外反し，口縁部外面は貝殻刺突文を横位に６条巡らす。胴部は貝殻条痕を綾杉状に施し，口唇部にはキザミを施す。内面はナデ調整を施す。また，石皿の破片が２点出土しており，１点を図化した。19は石皿の破片である。安山岩製で幾分凹んだ磨面を有する。

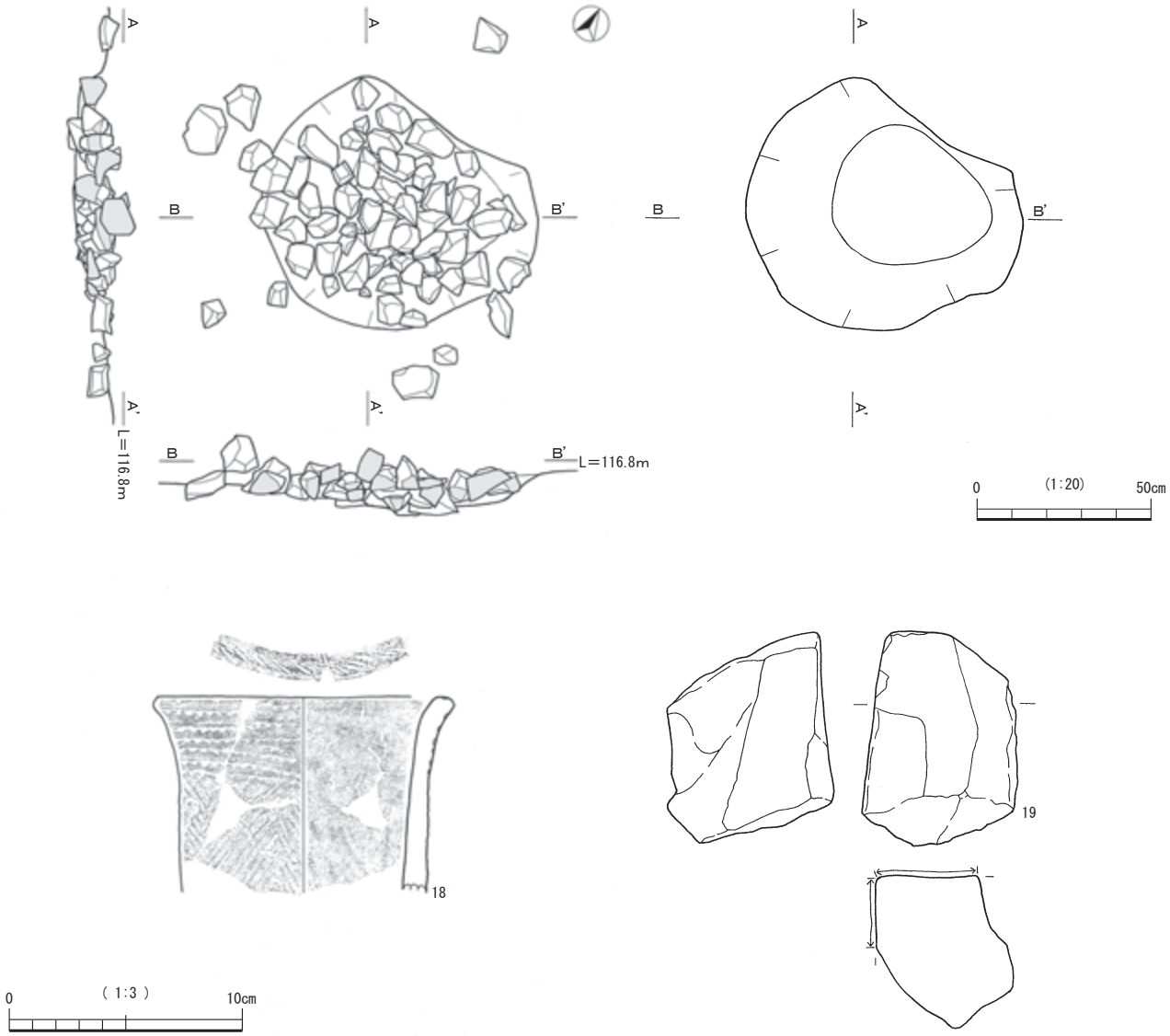
集石206号（SQ206：第25図）

Ｅ－20区，XI層で検出された。構成礫総数は27個である。礫の集中部は半径0.25mで，その中心から半径0.40mの範囲に礫全体が広がる。長軸70cm，短軸60cm，深さ９cmの掘り込みを伴う。安山岩が主体で，約50％の礫が熱を受けている。600g以下の礫が多いが，約1500gの礫１個も含まれる。磨敲石が３点出土しているが図化には至らなかった。

集石207号（SQ207：第25図）

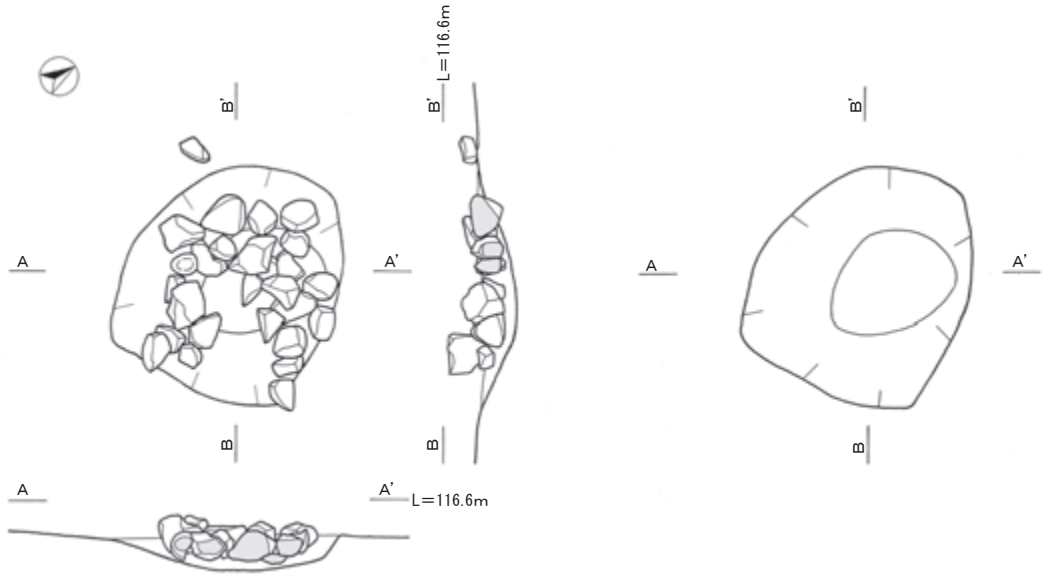
Ｂ－24区，Ｘ層で検出された。遺構の西側は畑管の埋設により削平されており，半掘での調査となった。構成礫総数は114個である。礫の中心部は半径0.40mで，その中心から0.60mの範囲に礫が広がる。深さ37cmの掘り込みを伴う。安山岩と凝灰岩が主体で，約60％の礫が熱を受けている。400g以下の礫が多い。

石器は磨石が１点出土しており，図化した。20は砂岩製の磨石である。平坦な磨面を有する。

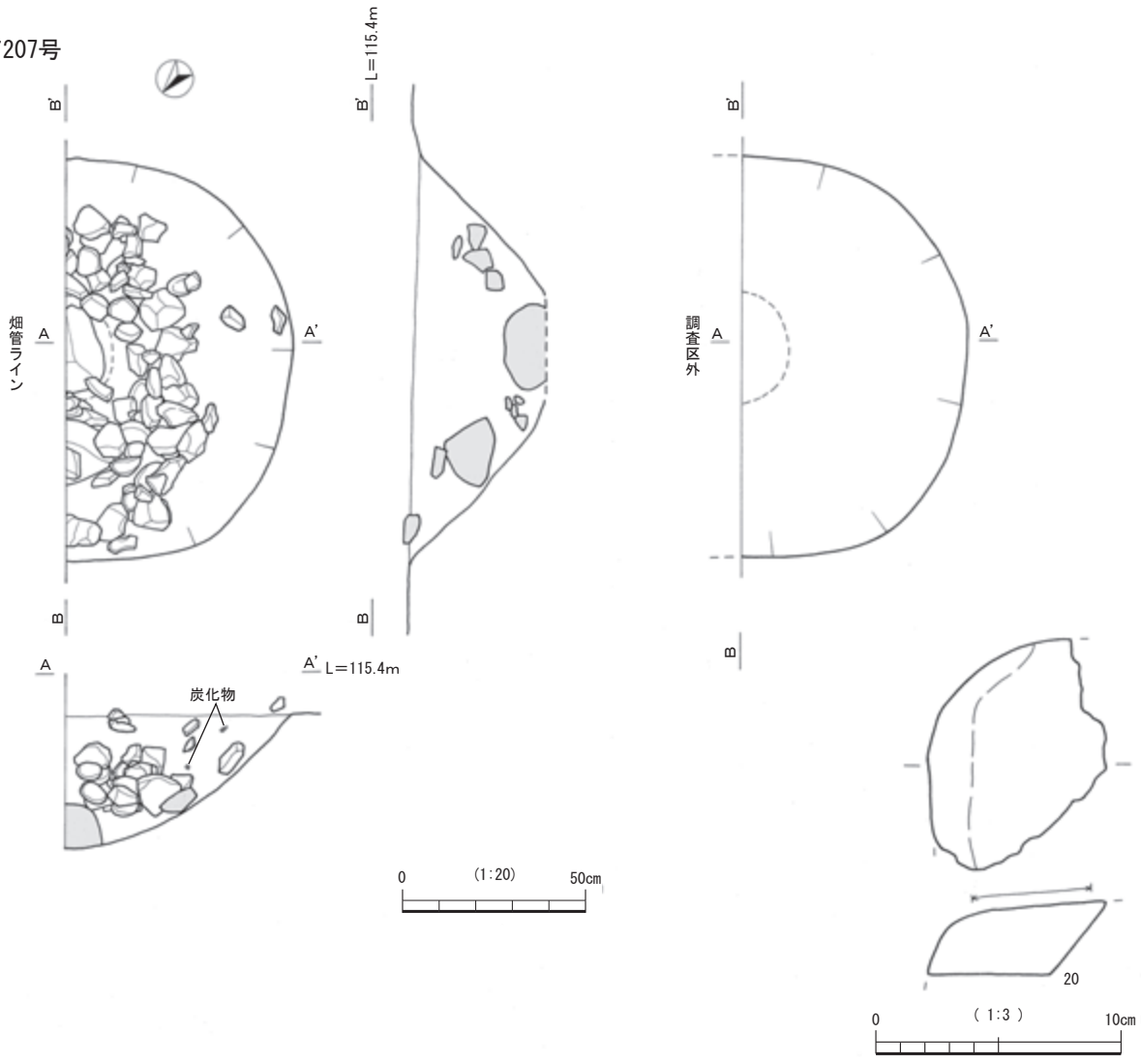


第24図　集石205号，出土遺物

集石206号



集石207号



第25図　集石206・207号，出土遺物

３　遺物

(1)　土器

ここでの分類は基本，『田原迫ノ上遺跡２』の分類を踏襲する。しかし今回の調査範囲からは，全体の器形が窺える資料は出土しなかった。よって数の少ないものや細分できないものについては，大分類にとどめた。

『田原迫ノ上遺跡２』では，出土した縄文時代早期の土器をⅠ～ⅩⅦ類に分類している。それによれば，Ⅳ類土器が最も多く出土し，次いでⅨ類土器となる。今回の調査範囲から出土した土器は，破片を接合してⅠ類土器が６点，Ⅳ類土器が326点，Ⅴ類土器が69点，Ⅸ類土器が43点，ⅩⅢ類土器が３点，ⅩⅣ類土器が73点，ⅩⅦ類の土器が37点であった。今回の調査範囲から出土しなかった分類の土器については，本書では分類の詳細について明記しない。以下，出土した土器を分類ごとに記述する。

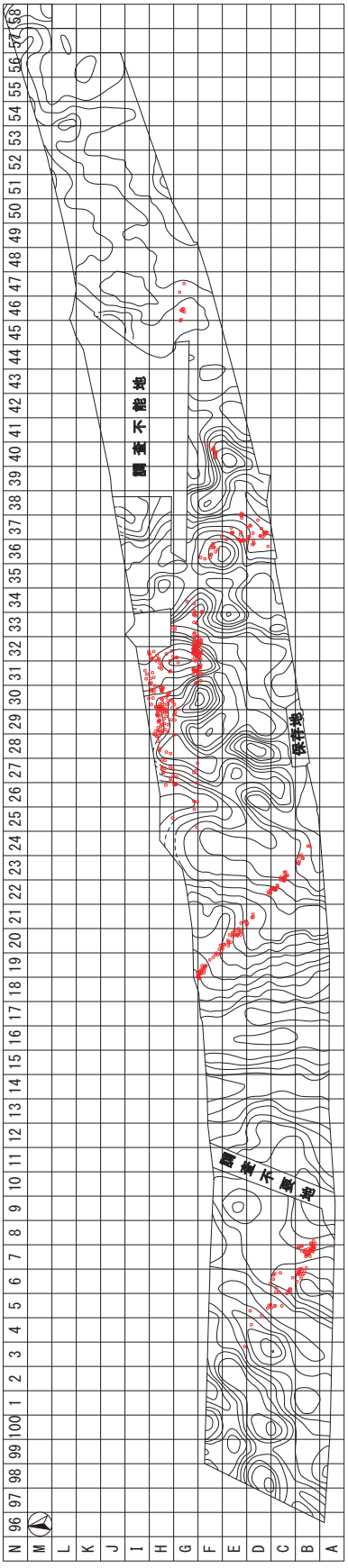
Ⅰ類土器（第27図21～26）

６点を図化した。全体の器形が窺える資料は出土していないが，底部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がる円筒形土器と想定される。胴部に貝殻刺突文と貝殻条痕を施す。

21～26は，全て胴部である。21は，胴部外面に縦位の貝殻刺突文を密に施す。胎土に金雲母を含む。内面調整はナデをおこなう。22は胴部外面に斜位の貝殻条痕を施した後，縦位もしくは斜位の貝殻刺突文を交差させるように施文する。内面調整はナデをおこなう。23は胴部外面に幅広い縦位の貝殻条痕を施した後，横位の貝殻刺突文を施す。24はわずかに外反する。胴部外面の上部には横位の，下部には縦位の貝殻刺突文を施す。内面調整は丁寧なナデをおこなう。25は器壁が厚く，胴部外面に縦位の貝殻刺突文と横位の貝殻条痕を施す。胎土に小礫を含み，内面調整はナデをおこなう。26は器壁が厚く，胴部外面に斜位の貝殻刺突文を交差させるように施す。胎土に小礫を含む。

Ⅳ類土器（第27～34図27～96）

70点を図化した。全体の器形を窺える資料は出土していないが，残存部形状から平底の深鉢形土器と想定される。口縁部の傾きには，外反・外傾・直行の３タイプがみられ，胴部は口縁部から底部にかけややすぼまる。貝殻刺突文による口縁部文様帯をもち，胴部外面には貝殻条痕を施す。また，口縁部文様帯と胴部外面の文様との間に，横位の貝殻刺突文を施すものもみられる。胴部外面の底付近に，横位の貝殻条痕文を施すものや，底部外面端部にキザミを施すものもある。以下，口縁部・胴部・底部ごとに記述する。



第26図　縄文時代早期土器分布図

Ⅳ類土器口縁部

口縁部の傾きから，以下の３タイプに細分した。

ａ：外反するもの（口縁端部が外反するものも含む）

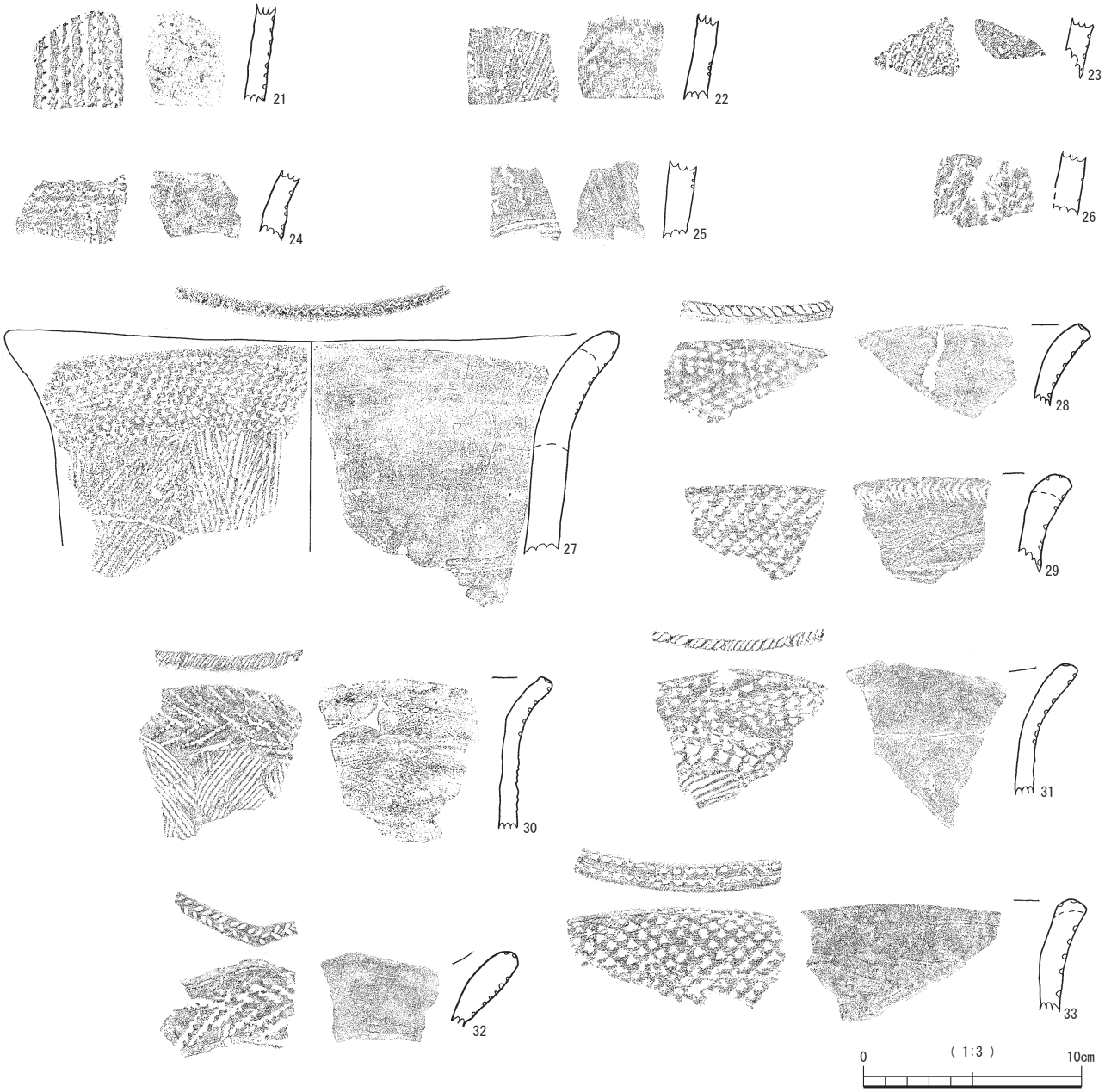
ｂ：外傾するもの

ｃ：直行するもの

Ⅳ－ａ類（第27～29図27～48）

27～48は，口縁部及び口縁端部が外反するものである。

27～33は，口縁部文様帯に斜位の貝殻刺突文を羽状に施す。27は，復元口径27.8cmを測り，口縁部が波状を呈する可能性が考えられる。器壁は約1.5cmと，他より厚い。口縁部文様帯の上下に，横位の貝殻刺突文を施す。胴部外面に，浅い斜位の貝殻条痕を綾杉状に施す。内面調整は極めて丁寧なナデを施すが，部分的に輪積み痕を残す。28は，口唇部内側に浅い米粒状のキザミを施す。内面調整は丁寧なナデをおこなう。29は，口唇部内側にキザミを羽状に施す。内面調整はナデをおこなう。30は平坦に整形した口唇部に，浅いキザミを斜位に施す。胴部外面に，明瞭な斜位の貝殻条痕を綾杉状に施す。内面調整は他と比べて粗い。31は，口縁部が緩やかな波状を呈すると考えられる。胴部外面に明瞭な貝殻条痕を施す。内面調整は丁寧なナデをおこなう。32は口縁部が波状を呈し，口唇部に浅い米粒状のキザミを羽状に施す。内面調整は丁寧なナデをおこなう。33は口唇部の平坦面とその内側に，貝殻刺突を２条施す。内面調整は丁寧なナデをおこなう。



第27図　Ⅰ・Ⅳ－ａ類土器

34～36は，口縁部文様帯に横位の貝殻刺突文を施す。34は口唇部のやや内側にキザミを施す。胴部外面に斜位の貝殻条痕を綾杉状に施す。35は，平坦に整形した口唇部に浅いキザミを施す。胴部外面に，浅い斜位の貝殻条痕を羽状に施す。36は，胴部外面に縦位の貝殻条痕を施す。内面調整は極めて丁寧なナデをおこなう。

37・38は，口縁部文様帯に斜位の貝殻刺突文を施す。37は口縁部文様帯と胴部の境に，横位の貝殻刺突文を施す。胴部に浅い貝殻条痕が短く残る。内面調整は横方向のナデをおこなう。38は胴部外面に斜位の貝殻条痕を綾杉状に施す。内面調整はナデをおこなう。

39は，口縁部文様帯に貝殻刺突文を羽状に施す。口唇部とその内側に，貝殻刺突を施す。胴部外面に，深い貝殻条痕文を角度の浅い斜位に施す。口縁部内面のナデ調整と胴部内面のケズリの境に，ゆるやかな稜をもつ。

40～46は，口縁部文様帯に横位の貝殻刺突文を施す。40は，復元口径14.0cmを測る。胴部外面は，器面調整も綾杉状の貝殻条痕も粗い。41は，口縁部が波状を呈し，口唇部にキザミを施す。胴部外面に，綾杉状の貝殻条痕を施すが，幾分規格性が崩れる。口縁部内面はナデを，胴部内面はケズリをおこなう。42は，口縁端部が強く外反する。胴部外面に，綾杉状の貝殻条痕を施す。口縁部内面は稜をもち，稜の上位はナデを，下位にはケズリ後ナデをおこなう。43は，胴部外面に横位の貝殻条痕を施す。口縁部内面は稜をもち，稜の上位はナデを，下位にはケズリをおこなう。全体的に器面調整は粗い。44は，胴部外面に綾杉状の貝殻条痕を施すも，規格性を失う。口縁部内面は稜をもち，稜の上位はナデを，下位にはケズリをおこなう。胴部外面に煤が付着する。45・46は同一個体と考えられる。胴部外面に綾杉状の貝殻条痕を施す。口縁部内面は稜をもち，稜の上位はナデを，下位にはケズリをおこなう。

47・48は，口縁部文様帯に斜位の貝殻刺突文を施す。47は，平坦に整形した口唇部にキザミを施す。口縁部文様帯と胴部の境に，横位の貝殻刺突文を施す。胴部外面に，綾杉状の貝殻条痕を施す。内面調整は丁寧なナデをおこなう。48は，口唇部に沿って貝殻刺突を施す。口縁部文様帯の貝殻刺突文は密である。胴部外面に規格性の乏しい綾杉状の貝殻条痕を施す。口縁部内面は稜をもち，稜の上位はナデを，下位にはケズリをおこなう。

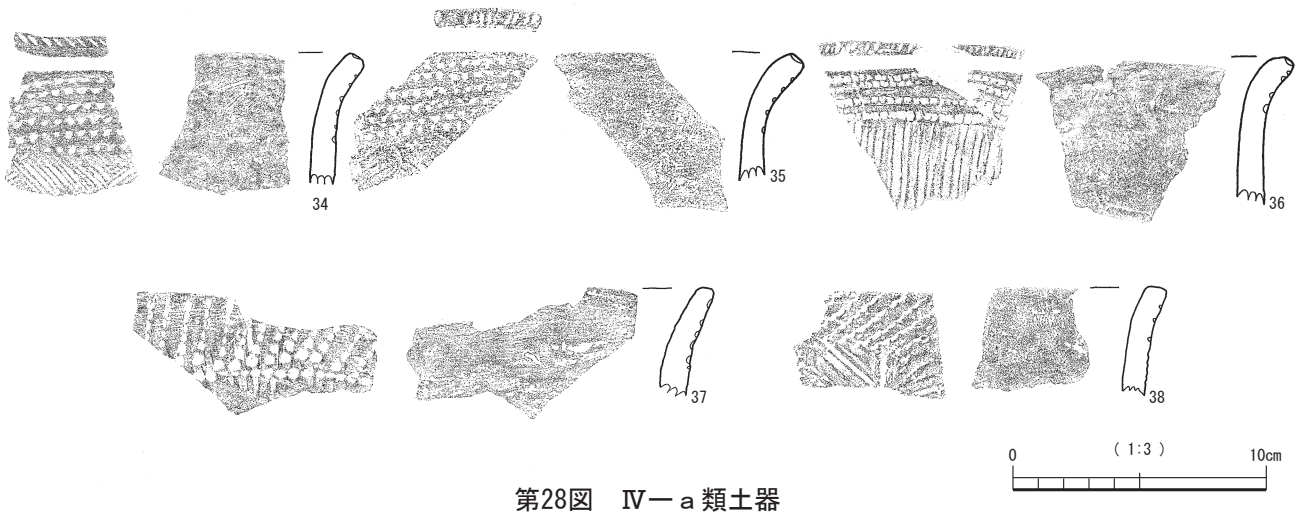
Ⅳ－ｂ類（第29・30図49～53）

49～53は，胴部から口縁部にかけて直線的に外傾するものである。

49～51は，口縁部文様帯に縦位の貝殻刺突文を施す。49は，口唇部に２条の貝殻刺突を施す。口縁部外面に施された縦位の貝殻刺突文は，雑然としている。胴部外面に，綾杉状の貝殻条痕を施す。内面調整は全面的にケズリをおこなうが，口縁部付近のみ一部ナデをおこなう。50は口縁部断面が方形で，器壁も一定する。口縁部文様帯の上下に，横位の貝殻刺突文を施す。胴部外面に，綾杉状の貝殻条痕が規格性をもって施される。内面調整はケズリ後ナデをおこなう。51は，復元口径29.0cmを測る。口縁部に瘤状突起をもち，残存部の状況から２～３個の瘤があったと想定される。平坦に整形した口唇部の一部に，浅いキザミを施す。口縁部文様帯直下に，横位の貝殻刺突文を施す。胴部外面に，浅い貝殻条痕を綾杉状に施すが，規格性に乏しい。瘤状突起にも貝殻刺突文が施される。内面調整はナデをおこなう。

52は，口縁部外面に横位の貝殻刺突文を施す。口唇部に２条の貝殻刺突を施す。胴部外面に，横位や斜位の貝殻条痕を施す。内面調整はケズリをおこなう。

53は，口縁部に添付された縦長の瘤状突起である。51と類似するためこの項目で記述した。全体的に摩耗しているが，瘤状突起には全体的に貝殻刺突を施していたと考えられる。瘤状突起には，焼成前に器壁に沿って穿たれた孔が上下２ヶ所に観察できる。



第28図　Ⅳ－ａ類土器



第29図　Ⅳ－ａ・Ⅳ－ｂ類土器

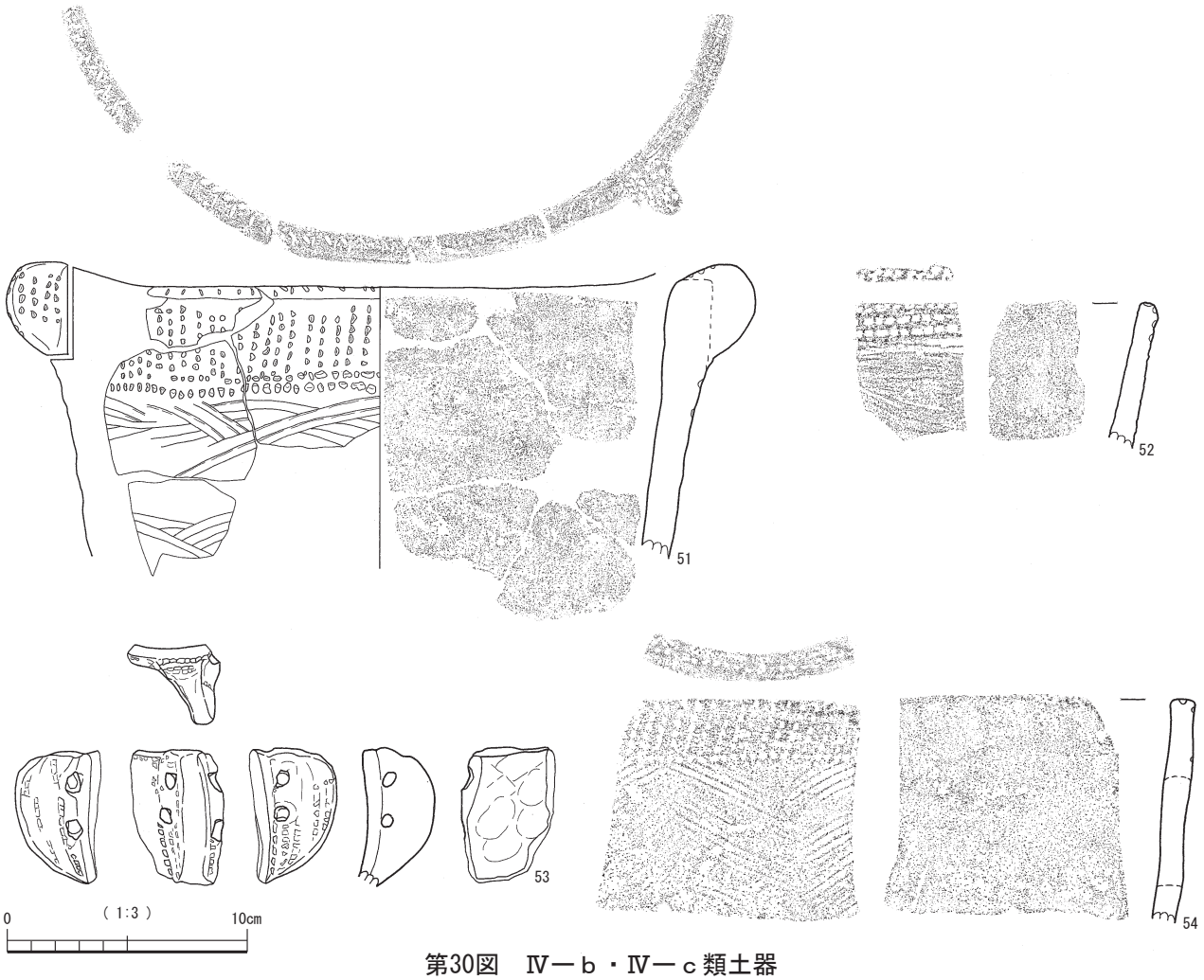
Ⅳ－ｃ類（第30図54）

54は，胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものである。平坦に整形した口唇部に，貝殻刺突を施す。口縁部文様帯に斜位の貝殻刺突文を，その直下には横位の貝殻刺突文を１条施す。胴部外面に綾杉状の貝殻条痕を施す。内面調整はナデをおこなう。

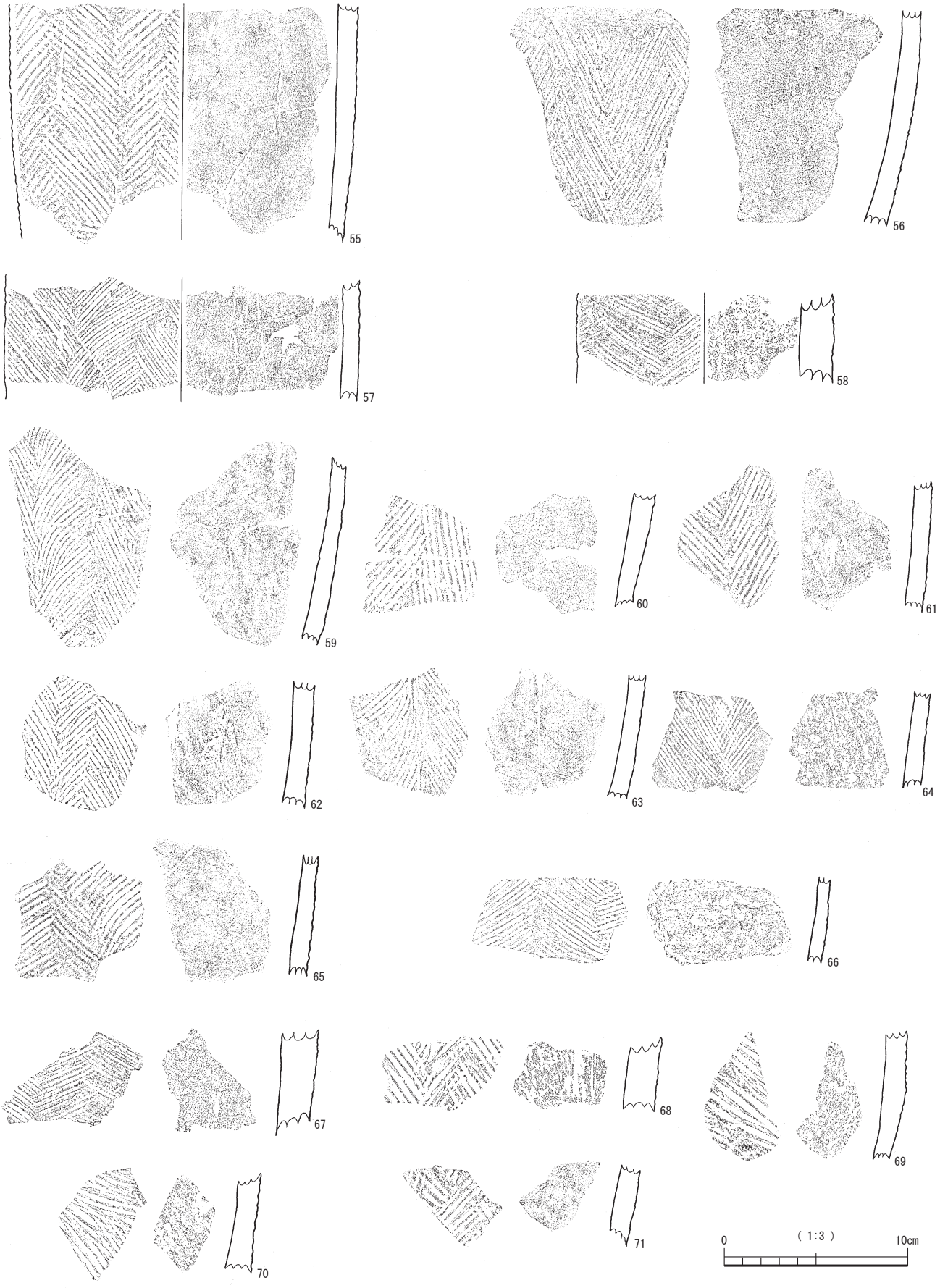
Ⅳ類土器胴部（第31・32図55～79）

55～79は，口縁部や底部と接合しなかった胴部で，外面に綾杉状の貝殻条痕を施すものである。

55～71は，綾杉状の貝殻条痕に規格性がみられる。55は直線的に立ち上がる。外面に施された明瞭な綾杉状の貝殻条痕の下位に，横位の貝殻条痕が若干残るため，底部付近であると考えられる。内面調整は丁寧なナデをおこなう。56は，やや膨らみをもちながら立ち上がる。外面の貝殻条痕は浅く，全体的に摩耗している。外面上部に，貝殻条痕をナデ消している部分が確認できる。内面調整はナデをおこなう。57は器壁が薄く，外面に煤が付着する。内面調整はナデをおこなう。58は器壁が非常に厚い。外面の貝殻条痕は，浅いが明瞭である。59は器壁が薄く，器面調整は粗い。60は器壁が厚く，外面の貝殻条痕は深い。内面調整はナデをおこなう。61は器面調整が粗く，内面調整はケズリ後ナデをおこなう。62は器壁が厚い。外面の貝殻条痕は深く，内面調整はケズリ後ナデをおこなう。63は，外面の貝殻条痕が浅い。内面調整は，左上方向にナデをおこなう。64は，外面に施された貝殻条痕が細かい。内面調整はケズリをおこなう。65は器面調整が少し粗く，内面調整はナデをおこなう。66は器壁が薄い。外面の貝殻条痕は浅いが明瞭である。内面調整はケズリをおこなう。67は器壁が非常に厚い。外面の貝殻条痕は浅いが明瞭である。68は器壁が非常に厚く，外面の貝殻条痕が深い。内面調整はケズリをおこなう。69は器壁が厚く，外面の貝殻条痕が深い。内面調整はケズリ後ナデをおこなう。70は器壁が厚く，外面の貝殻条痕が深い。内面調整はケズリ後ナデをおこなう。71は器壁が厚い。内面調整は丁寧なナデをおこなう。72～79は，綾杉状の貝殻条痕の規格性が崩れる。72・73は，外面上部に斜位の貝殻刺突が確認できることから，口縁部付近と考えられる。72の器面調整は全体的に粗く，73の内面調整はナデをおこなう。74は器壁が薄い。内面



第30図　Ⅳ－ｂ・Ⅳ－ｃ類土器



第31図　Ⅳ類土器胴部(1)

調整は上方向のケズリをおこなう。75は，外面の貝殻条痕が浅い。内面調整はナデをおこなう。76は外面の貝殻条痕は浅く，全体的に摩耗している。内面調整は粗い。77は器壁が厚い。外面の貝殻条痕に，施文の始点が確認できる。内面調整はナデをおこなう。78の内面調整は上方向のケズリをおこなう。79は器壁が厚く，外面の貝殻条痕は浅い。内面調整はナデをおこなう。

Ⅳ類土器底部

口縁部と接合しなかった底部である。胴部外面下部の横位の貝殻条痕と，底部外面端部のキザミの有無を基準に，以下の４タイプに細分した。

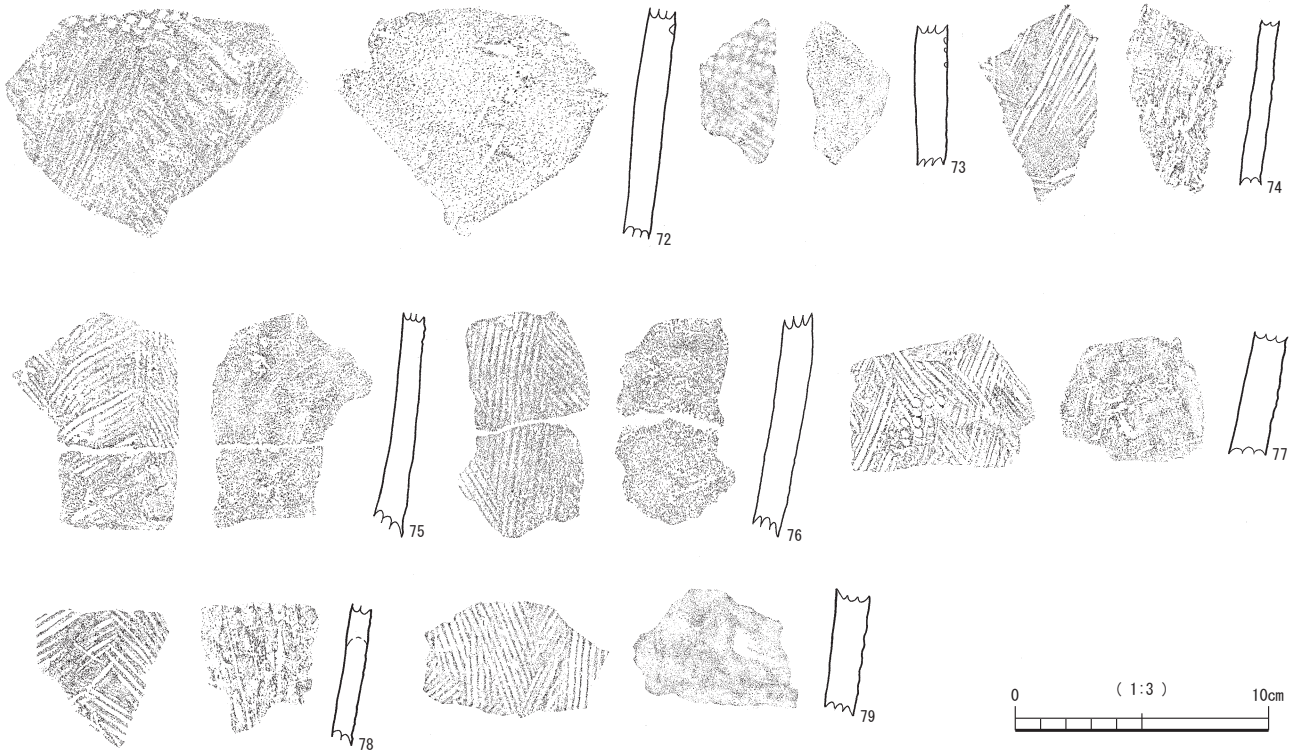
	横位の貝殻条痕	キザミ
ア類	○	○
イ類	○	×
ウ類	×	○
エ類	×	×

Ⅳ－ア類（第33図80～85）

80～85は，胴部外面下部に横位の貝殻条痕を，底部外面端部にキザミを施すものである。80は，復元底径14.0cmを測る。底面の器壁は厚いが，胴部の立ち上がりの器壁は薄い。胴部外面の施文は不明だが，下部に横位の貝殻条痕を施す。底部外面端部にキザミを均等に施す。外面は摩耗しており，内面調整はケズリをおこなう。81は，復元底径10.0cmを測る。器壁は厚い。胴部外面に，規格性に乏しいとみられる浅い綾杉状の貝殻条痕を施した後，その下位に横位の貝殻条痕を施す。底部外面端部にキザミを細かく密に施す。底部は上げ底気味となる。内面調整は，ケズリ後ナデをおこなう。82は，復元底径13.0cmを測る。胴部外面の施文は不明だが，下部に横位の貝殻条痕を施す。底部外面端部に米粒状のキザミを密に施す。内面調整はナデをおこなう。83は，底径8.2cmを測る。胴部の残存率が低いものの，一部横位の貝殻条痕が確認できる。底部外面端部にキザミを密に施す。底部はわずかに上げ底状となる。底部内面に，指頭圧痕が残る。84は，復元底径16.0cmを測る。器壁は薄く，底部は均一に厚い。胴部外面の施文は不明だが，下部に明瞭な横位の貝殻条痕を施す。底部外面端部に米粒状のキザミを施す。85は，復元底径10.0cmを測る。胴部外面の施文は不明だが，下部に浅い横位の貝殻条痕を施す。底部外面端部にキザミを均一に施す。内面調整は，ケズリ後ナデをおこなう。

Ⅳ－イ類（第34図86～88）

86～88は，胴部外面下部に横位の貝殻条痕を施し，底部外面端部にキザミを施さないものである。どちらも胴部外面の施文は不明である。86は復元底径12.0cmを測る。胴部外面下部の横位の貝殻条痕は浅い。底部内面に指頭圧痕が残る。内面調整はケズリ後ナデをおこなう。87は底部がわずかに残存する。器壁は薄く，全体的に摩耗している。胴部外面に規格性に乏しい浅い綾杉状の貝殻条



第32図　Ⅳ類土器胴部(2)

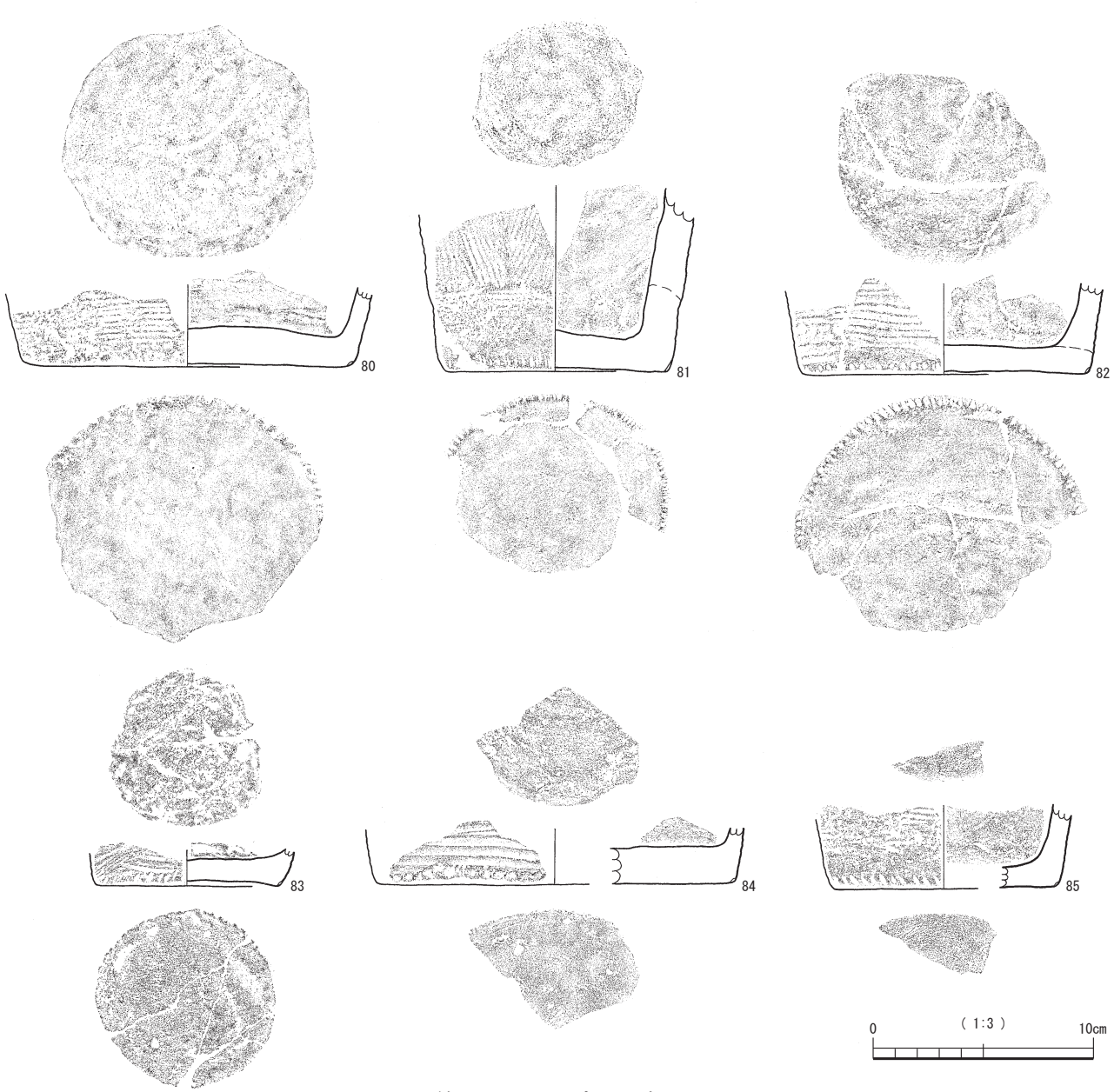
痕を施した後，下部に横位の貝殻条痕を施す。内面調整は粗い。88は復元底径10.0cmを測る。胴部外面下部に，明瞭な横位の貝殻条痕を施す。内面調整は粗い。

Ⅳ－ウ類（第34図89～91）

89～91は，胴部外面下部に横位の貝殻痕文を施さず，底部外面端部にキザミを施すものである。89は，胴部から底部にかけてややすぼまる器形である。復元底径9.9cmを測る。胴部文様帯の上位に，横位の貝殻刺突文を確認できる。胴部外面の上部から下部まで縦位の貝殻条痕を施す。底部外面端部にキザミを均一に施す。内面調整は丁寧なナデをおこなう。90は底径7.2cmを測る。胴部外面に浅い綾杉状の貝殻条痕を施すも，規格性は乏しい。丸みをもった底部外面端部に，小さなキザミを施す。内面調整はナデをおこなう。91は小片で，胴部外面にわずかに縦位・斜位の貝殻条痕が確認できる。

Ⅳ－エ類（第34図92～96）

92～96は，胴部外面下部に横位の貝殻条痕も，底部外面端部のキザミも施さないものである。92は，わずかに底部が残る。胴部外面に斜位の貝殻条痕をまばらに施す。内面調整は上方向のケズリをおこなう。93は，底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。器壁は薄く，復元底径10.4cmを測る。胴部外面に綾杉状の貝殻条痕を施すも，規格性が崩れる。内面調整はケズリをおこなう。94は復元底径9.0cmを測る。底部端部にやや丸みをもつ。胴部外面に，斜位の貝殻条痕を施す。内面調整は粗い。95は底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。器壁は厚く，

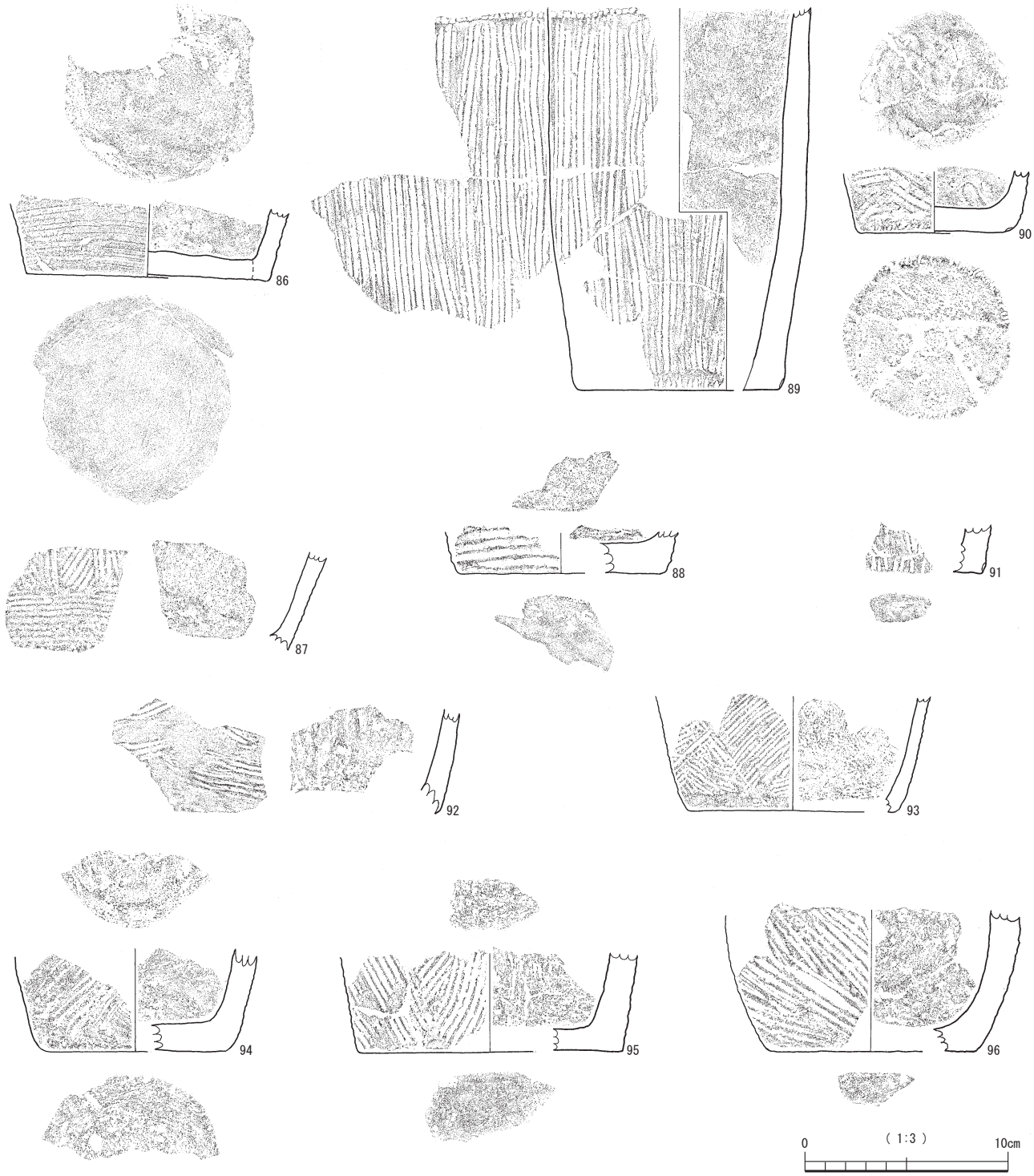


第33図　Ⅳ－底－ア類

復元底径13.0cmを測る。胴部外面に規格性をもった明瞭な綾杉状の貝殻条痕を施す。内面調整はケズリをおこなう。96は底部から胴部にかけてやや膨らみながら立ち上がる。器壁は厚く，復元底径10.0cmを測る。胴部外面に，規格性に乏しい斜位の貝殻条痕を深く施す。内面調整はケズリ後ナデをおこなう。

Ｖ類土器（第35図97～118）

22点を図化した。全体の器形が窺える資料は出土していないが，器形は底部から胴部まで開き気味に立ち上がり，口縁部で内湾する円筒形が想定される。口唇部は平坦で，口縁部外面に突帯や穿孔をもつものがある。口縁部外面に貝殻刺突文を施す。胴部外面に貝殻刺突文・貝殻条痕を施す。内面は丁寧なナデ及びミガキをおこなう。以下，口縁部・胴部・底部ごとに記述する。



第34図　Ⅳ―底―イ・ウ・エ類

Ⅴ類土器口縁部（第35図97～103）

97～100は，口縁部外面に横位の貝殻刺突文を施す。97は，器壁が薄く均一である。口唇部・内面の調整はナデをおこなう。98は口縁部外面に横位の貝殻刺突文を施し，その下位に斜位の貝殻刺突文を施す。内面調整はナデをおこなう。99は，外面に横位・斜位の貝殻刺突文を施す。口唇部・内面の調整はミガキをおこなう。100は，口唇部にゆるやかな平坦面を整形する。口唇部・内面の調整はミガキをおこなう。

101～103は，口縁部外面に羽状の貝殻刺突文を施す。101は，口縁部がやや肥厚する。口唇部・内面の調整はミガキをおこなう。102は，器壁が厚い。口縁部外面に施した貝殻刺突文は浅い。胎土に小礫を含む。口唇部・内面の調整はナデをおこなう。103は，口縁部が肥厚する。口縁部外面に貝殻刺突文を羽状に施し，その上下に横位の貝殻刺突文をめぐらせる。胴部外面にわずかに突帯が確認でき，突帯の上下にも横位の貝殻刺突文を施す。口唇部・内面の調整はナデをおこなう。

Ⅴ類土器胴部（第35図104～117）

104～106は，外面に横位の貝殻刺突文を施す。104・105の内面調整はナデをおこなう。106は，内湾する器形を呈しており，外面に突帯を１条めぐらせる。突帯の上位と直下に横位の貝殻刺突文を施し，その下位には斜位の貝殻刺突文を施す。内面調整はナデをおこなう。

107～113は，胴部外面に斜位の貝殻刺突文を羽状及び鋸歯状に施す。107の内面調整はミガキをおこなう。108は，器壁の厚さが不均一である。胎土に小礫を含む。内面調整は，ケズリ後ナデをおこなう。109は，胴部外面に細かい貝殻刺突文を鋸歯状に施す。胎土に小礫を多く含む。内面調整はナデをおこなう。110は，胴部外面に斜位の貝殻刺突文をまばらに施す。胎土に小礫を含む。内面調整は丁寧なナデをおこなう。111は器壁が薄い。内面調整はナデをおこなう。112は器壁が厚く，胴部外面に貝殻刺突文を密に施す。胎土に小礫を含む。内面調整はナデをおこなう。113は，胎土に小礫を含む。内面調整は粗い。

114～117は，外面に斜位もしくは横位の貝殻刺突文を施す。114は器壁が厚い。胴部外面に浅い貝殻条痕を施した後，横位や斜位の貝殻刺突文を密に施す。内面調整はナデをおこなう。115の内面調整はミガキをおこなう。116は胎土に小礫を含む。内面調整はナデをおこなう。117は，器壁は薄く，胴部外面上位に斜位の貝殻刺突文を鋸歯状に施し，その下位に横位の貝殻刺突文を施す。内面調整はナデをおこなう。

Ⅴ類土器底部（第35図118）

118は，底部から胴部へ直線的に立ち上がる。底部の器壁は厚いが，胴部の器壁はやや薄い。胴部外面に斜位の貝殻刺突文を施す。外面は全体的にミガキをおこない，内面調整はナデをおこなう。

Ⅸ類土器（第36・37図119～138）

20点を図化した。全体の器形を窺える資料は出土していないが，口縁部が外反し，深鉢形になると想定する。外面に押型文を施す。口縁部内面に押型文，柵状文，刺突文を施すものもある。破片資料が多く，計測する位置で傾きや器形に多少の影響を及ぼすため，個々の土器片をその土器の全体的な傾向として判断した。

押型文の種類から，以下のような基準で３タイプに細分した。

ａ：連珠押型文（楕円文とも山形文ともいえないもの）
ｂ：山形押型文
ｃ：楕円押型文

Ⅸ－ａ類（第36図119・120）

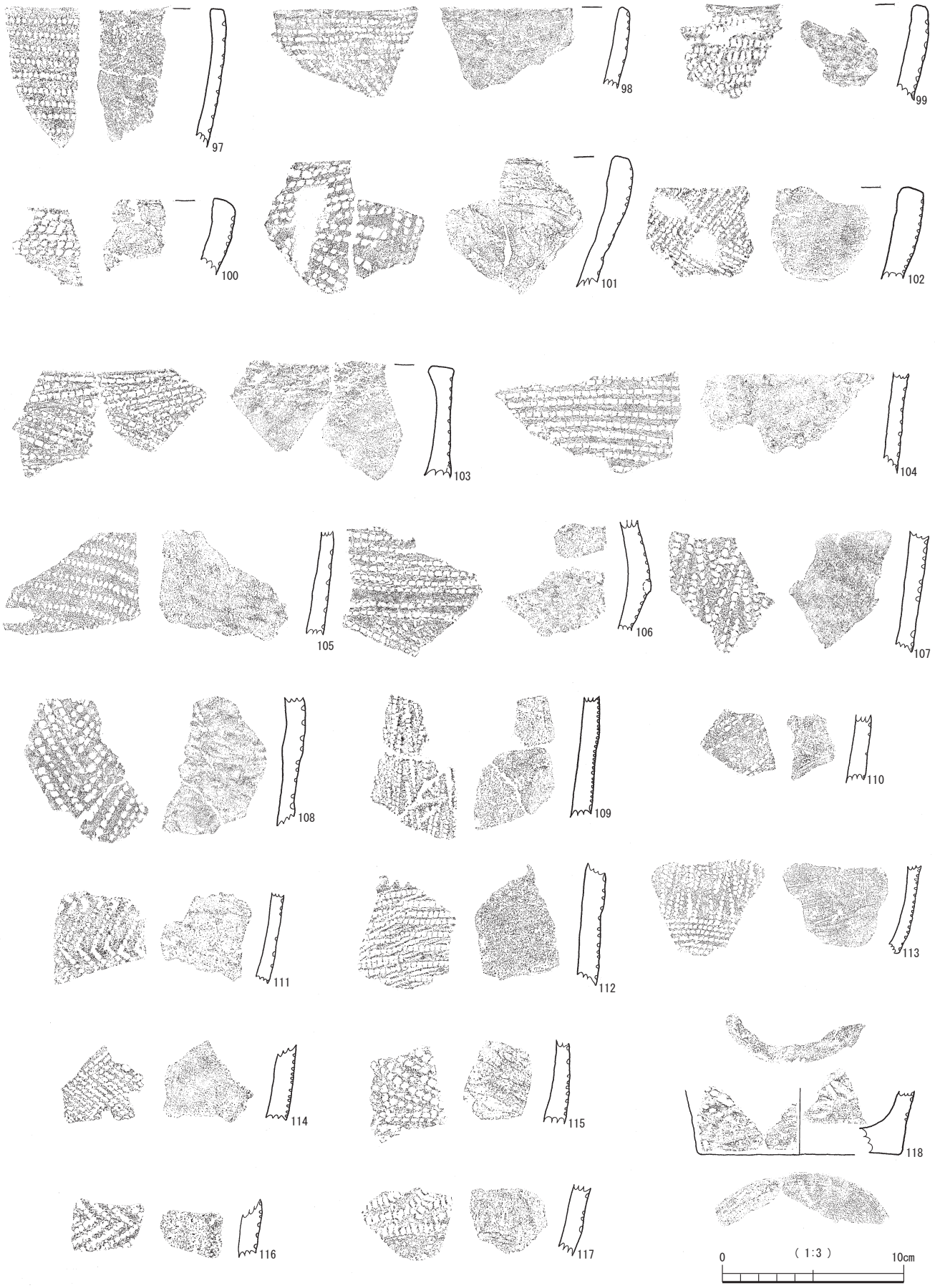
119・120は胴部で，胴部外面上位に縦位の連珠押型文を施し，その下位に横位の連珠押型文を施す。119は器壁が厚く，直線的に立ち上がる。内面調整は，ミガキをおこなう。120は，器壁が厚い。胎土に礫を含む。内面調整は粗い。

Ⅸ－ｂ類（第36図121～131）

121～131は，口縁部～胴部外面に山形押型文を施すものである。121・123～127・129は口縁部，131は底部，それ以外は胴部である。

121は口縁部，122は胴部外面に，縦位の山形押型文を施す。121は口唇部内側を平坦に整形し，内面に稜をもつ。口縁部外面に山形押型文を施す。口唇部や口縁部内面には文様をもたない。内面調整はナデをおこなう。122は器壁が厚い。胴部外面に，明瞭な山形押型文を施す。内面調整はナデをおこなう。

123～127は口縁部外面もしくは口縁部内面に，横位の山形押型文を施す。123・124は，同一個体と考えられる。口唇部は平坦面となる。口縁部外面と口縁部内面上部に，山形押型文を施す。内面調整はナデをおこなう。125は器壁が薄く，口唇部は平坦面となる。口縁部外面に，山形押型文を施す。口縁部内面上部には柵状文を，その直下に外面と同一の山形押型文を横位に施す。内面調整は粗い。126・127は，口縁部外面が無文である。126は器壁が薄い。口縁部内面上部に柵状文を，その直下に横位の山形押型文を施す。胎土に小礫を含む。127は，平坦に整形した口唇部と口縁部内面に山形押型文を施す。胎土に小礫を含む。口縁部外面はナデをおこなう。128は，胴部外面に山形押型文を密に施す。内面調整はナデをおこなう。


97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
0
(1:3)
10cm

第35図　Ｖ類土器

129は口縁部外面に部分的に斜位の山形押型文を施し，内面調整は粗い。口縁部内面上部にゆるやかな稜をもつ。口縁部内面上部に，外面と同一の山形押型文を横位に施す。130は胴部外面に斜位の山形押型文を施す。胎土に小礫を含み，内面調整は粗い。131は底部がわずかに残存する。胎土に小礫を含む。

Ⅸ－ｃ類（第37図132～138）

132～138は，口縁部～胴部外面に楕円押型文を施すものである。132・133は口縁部，138は底部，それ以外は胴部である。

132～136は，楕円押型文の粒が大きいものである。132は，口縁部外面に横位の楕円押型文を施す。内面調整はナデをおこなう。133は平坦に整形した口唇部に，斜位の楕円押型文を施す。口縁部外面に縦位の楕円押型文を，口縁部内面には外面と同一の楕円押型文を横位に施す。胎土に小礫を含み，内面調整は粗い。134・135は，胴部外面に斜位の楕円押型文を施すが，全体的につぶれる。胎土に小礫を含み，内面調整はナデをおこなう。136は，胴部外面に縦位の楕円押型文を施す。胎土に小礫を含み，器面調整は粗い。

137・138は，楕円押型文の粒が小さいものである。137は器壁が厚い。胴部外面に楕円押型文を密に施すが，一部つぶれる。胎土に小礫を多く含み，内面調整はケズリをおこなう。138は，胴部から底部にかけてすぼまる器形を呈す。器壁は厚く，胴部外面に楕円押型文を密に施す。胎土に小礫を含み，内面調整はナデをおこなう。

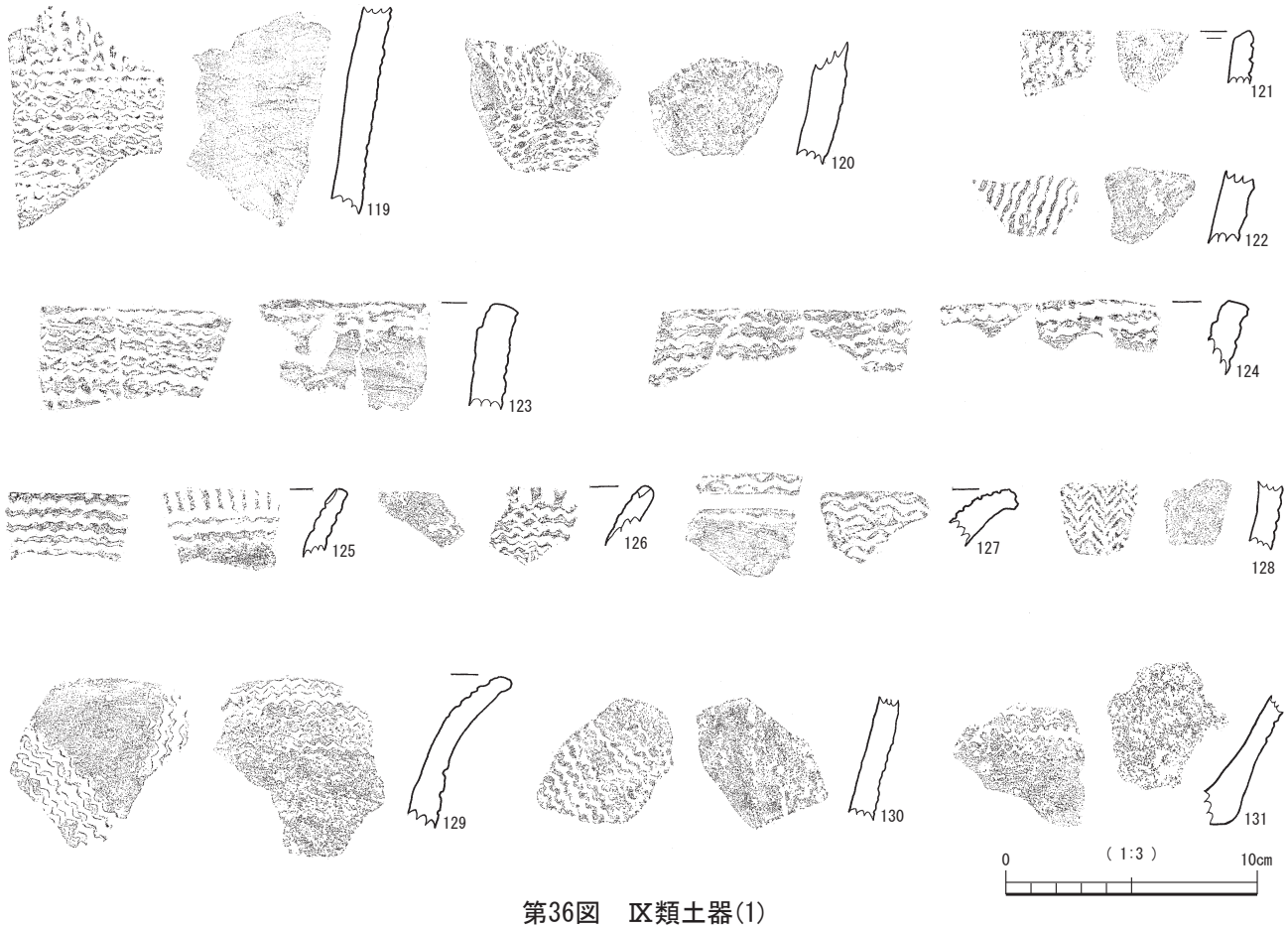
Ⅻ類土器（第38図139～141）

３点を図化した。全体の器形を窺える資料は出土していないが，底部から胴部にかけて膨らみ，胴部上部で「く」の字状に屈曲して頸部ですぼまり，口縁部で大きく外反すると想定される。外面に突帯文や沈線文を施す。

139は器壁が薄い。屈曲部外面の上部に，細い粘土紐を波状に貼り付けて突帯を形成する。胎土に小礫を含み，内面調整はナデをおこなう。140は内面に粘土の接合痕が残る。屈曲部外面の上位に，縦位の沈線を施す。内面調整は粗い。141は胴部外面に縦位の沈線を施し，その上に短い横位の沈線を施す。胎土に小礫を含み，内面調整はミガキをおこなう。

ⅩⅥ類土器（第38図142～157）

16点を図化した。全体の器形を窺える資料は出土していないが，口縁部が大きく外反する器形と想定される。胴部は膨らむものと直線的に開くものがある。沈線や網目撚糸文を施す。



第36図　Ⅸ類土器(1)

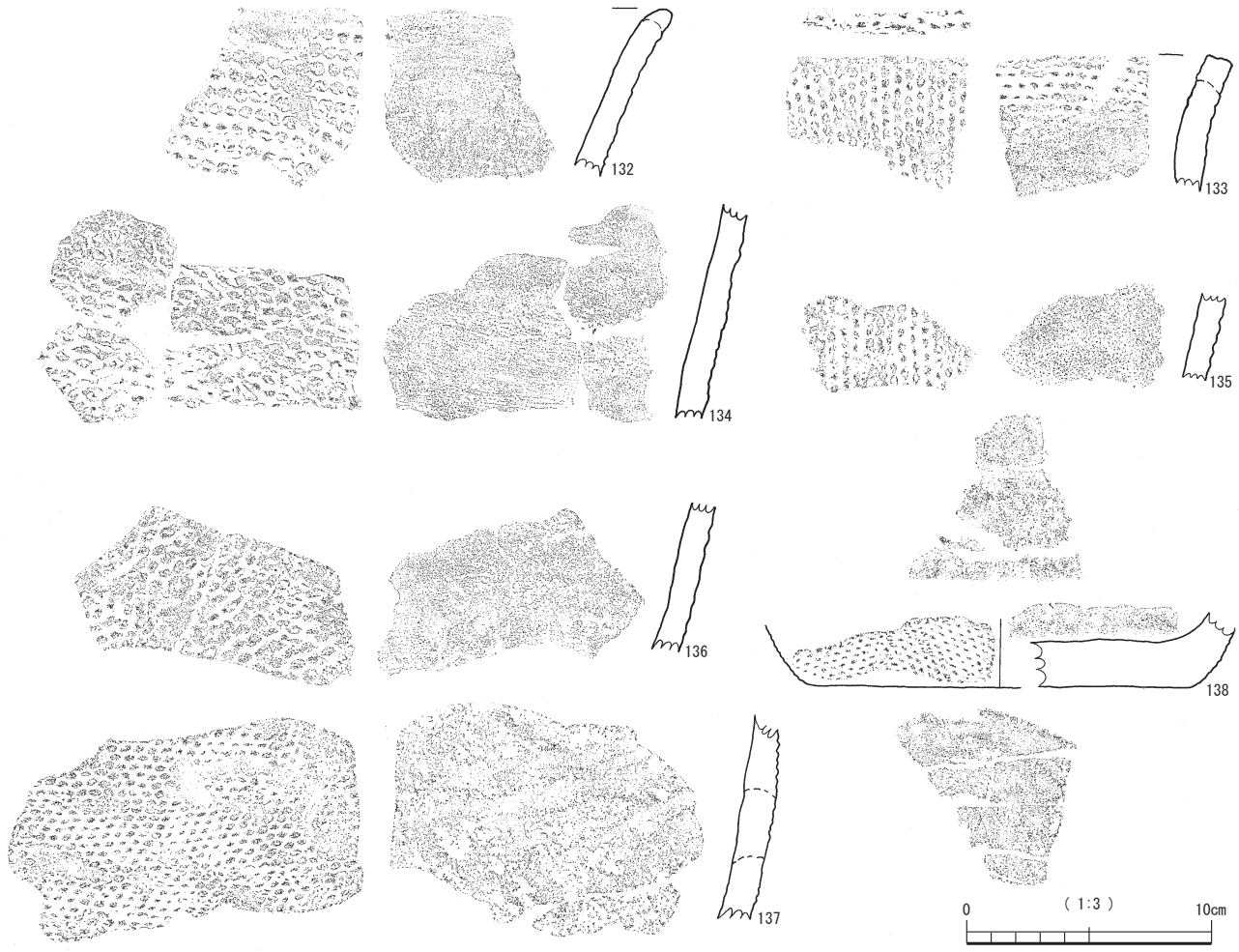
142～154は，沈線と網目撚糸文で文様を構成する。屈曲部から胴部にかけて網目撚糸文を施した後，横位の沈線を施す。142は，胴部外面に網目撚糸文を２条１組として施した後，横位の沈線を５条施す。胎土に小礫を含み，内面調整はナデをおこなう。143は口唇部に浅く小さいキザミを施す。網目撚糸文を横位の沈線より先に施した痕跡がわずかに残る。胎土に小礫を含み，内面調整はナデをおこなう。144は屈曲部がわずかに残存し，胴部に穿孔を施す。胴部外面に４条の網目撚糸文が確認できる。内面調整は丁寧なナデをおこなう。145は胴部がやや膨らむ。胴部外面に４条の網目撚糸文が確認できる。胎土に小礫を含み，内面調整は粗い。146は胴部外面に網目撚糸文を施した後，横位の沈線を施す。沈線は，端部を湾曲させて折り返すように施す。胎土に雲母を含む。内面調整はナデをおこなう。147は胎土に雲母を含み，内面調整はナデをおこなう。148は内面調整が粗い。149は胎土に小礫を含み，器面調整は全体的に粗い。150～154は，胴部外面の網目撚糸文部分のみ残存する。150・152は，内面調整はナデをおこなう。151・154は胎土に小礫を含み，内面調整は粗い。153は，器面調整が全体的に粗い。

155～157は，沈線のみで文様を構成する。155は屈曲部が残存する。胴部外面に横位の沈線を施した後，「C」の字状の沈線を施す。内面調整はナデをおこなう。156は器壁が厚い。胴部外面に浅い沈線を交差させて施す。胎土に小礫を含み，内面調整はケズリをおこなう。157は底部で器壁は薄い。胴部外面に沈線を波状に施す。内面調整はやや粗い。

XVII類土器（第38図158～163）

６点を図化した。Ⅰ～XVI類の各分類に当てはまらない土器である。

158・159は頸部で，胴部外面の湾曲部に粘土紐を貼り付けキザミを施す。胎土に小礫を含み，内面調整は粗い。160は，胴部外面の器面調整は丁寧である。胎土に小礫と雲母を含み，内面調整は粗いナデをおこなう。161は，胴部外面に凹線と思われる起伏がわずかに確認できる。胎土に小礫を多く含み，内面調整はケズリをおこなう。162は底部で，底部外面端部にキザミをもつ。胎土に小礫を含み，内面調整は粗い。163は底部で，胴部にむかって開く。胴部外面は横位に条痕を施し後，指ナデを行う。胎土に小礫を含み，内面調整はナデをおこなう。



第37図　Ⅸ類土器(2)



第38図　Ⅻ・ⅩⅥ・ⅩⅧ類土器

(2)　石器

Ⅸ～Ⅻ層で出土した石器は，石鏃18点，ドリル１点，スクレイパー１点，剥片30点，石核５点，礫器４点，打製石斧１点，磨製石斧４点，磨石・敲石・磨敲石222点，チップ14点，石皿１点，軽石製品１点であった。

石鏃（第40図164～181）

石鏃は18点図化した。形状はすべて二等辺三角形を呈する。

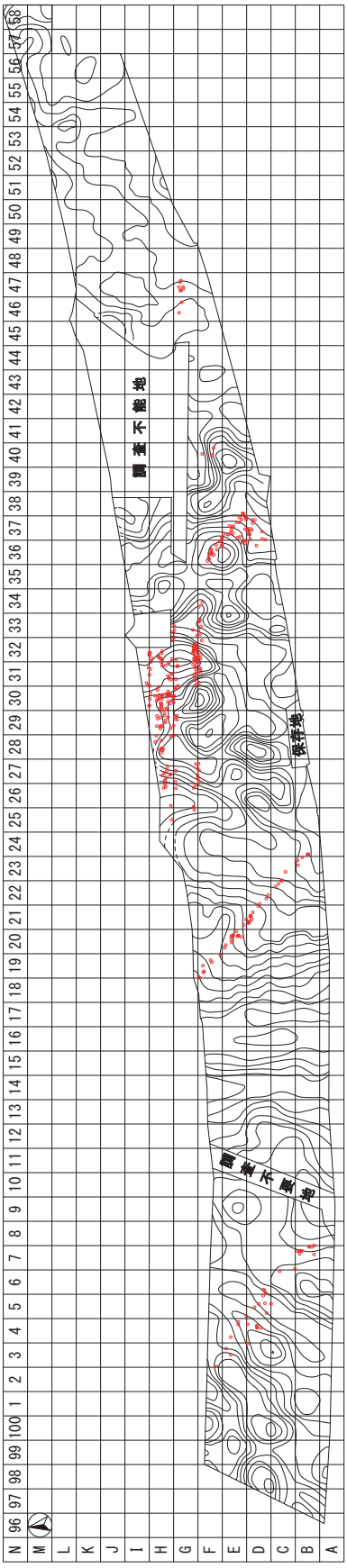
164～172は全長が２cm程度及び２cm以下の石鏃である。164の石材は黒色の良質な安山岩である。浅い抉りをもち，脚部を欠損する。165の石材はチャートである。両側縁部は直線的で，抉りはやや深い。左脚部が欠損している。166の石材はチャートである。先端部が欠損しており，抉りはやや深い。167の石材はチャートである。両側縁部がやや湾曲しており，両脚部先端は尖っている。抉りがやや深い。168の石材は黒色の良質な安山岩で，左脚部が欠損している。両側縁部がやや中央にくびれており，深い抉りがある。169の石材は黒曜石で，紡錘形を呈する。側縁部がやや外湾し，両脚部は欠損している。浅い抉りがある。170の石材はチャートである。両側縁部がやや外湾し，深い抉りをもつ。171の石材はチャートである。側縁部が直線的で抉りが深い。172の石材は頁岩である。先端部が欠損しており，脚部の端部は丸みを帯びる。U字状の深い抉りをもつ。

173～178は全長が2.5cm程の大きさの石鏃である。173の石材はチャートである。側縁部がやや外湾し，片脚部が欠損する。174の石材は黒色の良質な安山岩である。片側縁部は中央にややくびれる。浅い抉りがある。175は風化が著しく，先端と脚部が丸みを帯びている。176は両側縁部が直線的である。両脚部を欠損している。177の石材は黒曜石である。先端部と片脚部先端を欠損する。178の石材はチャートで，両側縁部は直線的で，浅い抉りをもつ。

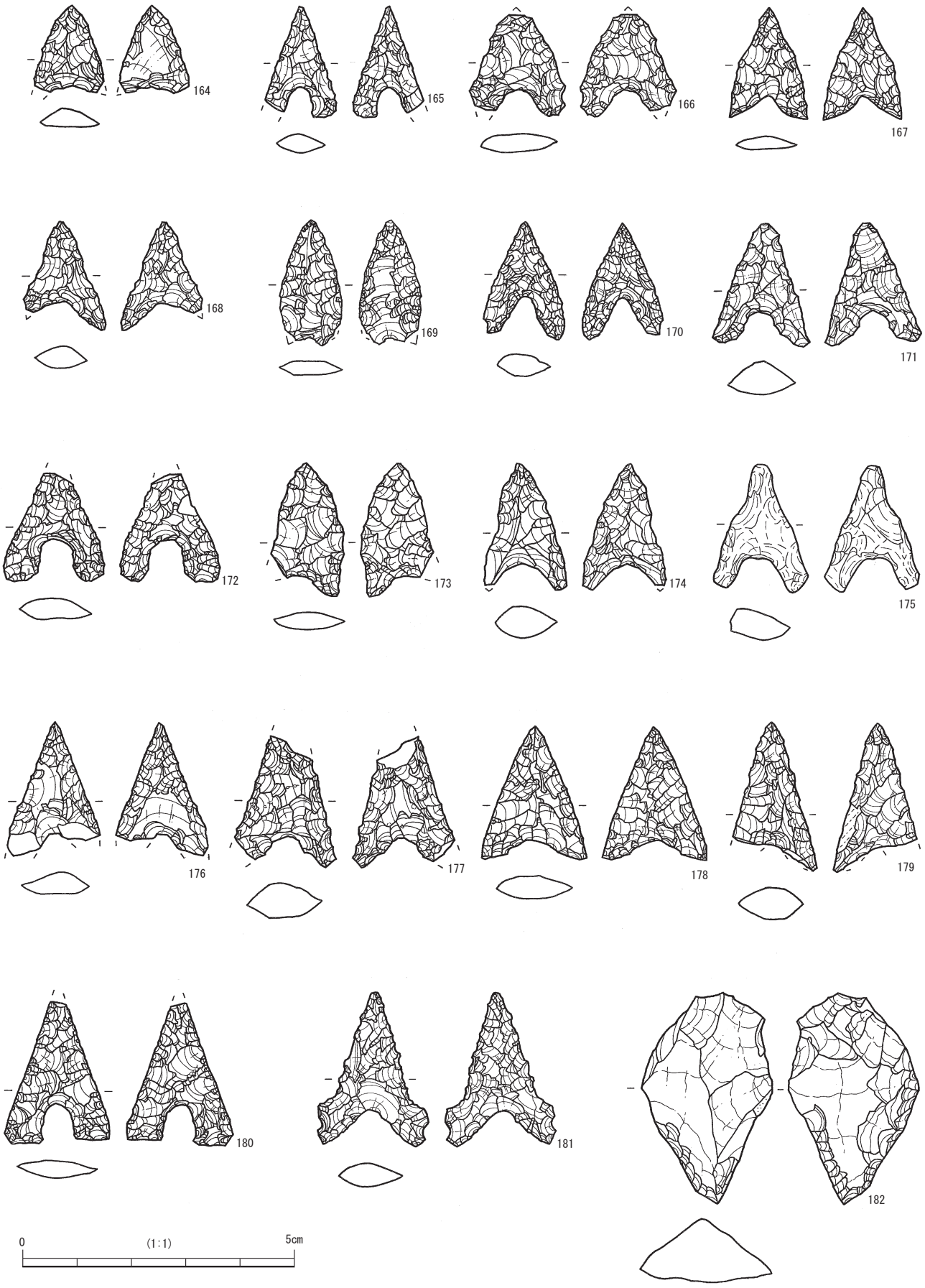
179～181は全長が3.0cm程の大きさの石鏃である。石材はすべてチャートである。179は両側縁部が直線的である。先端部と右脚部は尖っており，左脚部は欠損している。180は両側縁部が直線的である。脚端部は幅広で矩形を呈し，深い抉りをもつ。先端部は欠損している。181は直線的な側縁部から両脚部に向けて外湾し，両脚部が張り出す。やや深い抉りをもち，脚部の外側にも浅く抉りを施す。

ドリル（第40図182）

182は水晶製のドリルである。断面三角形の厚みのある縦長剥片の下淵部に，正面及び背面側から微細な調整を施している。



第39図　縄文時代早期石器分布図


164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
0
(1:1)
5cm

第40図　石鏃，ドリル

スクレイパー（第41図183）

183はスクレイパーである。石材はチャートで，横長剥片を素材とし，一辺に打圧剥離を施して刃部を形成している。側面には形状を整えるため，粗く調整した痕跡が見られる。

二次加工のある剥片（第41図184）

184は二次加工のある剥片である。表面には一部右側辺に腹面側から複数回の剥離が加えられ，腹面にも二次的な剥離が認められる。

石核（第42図185～187）

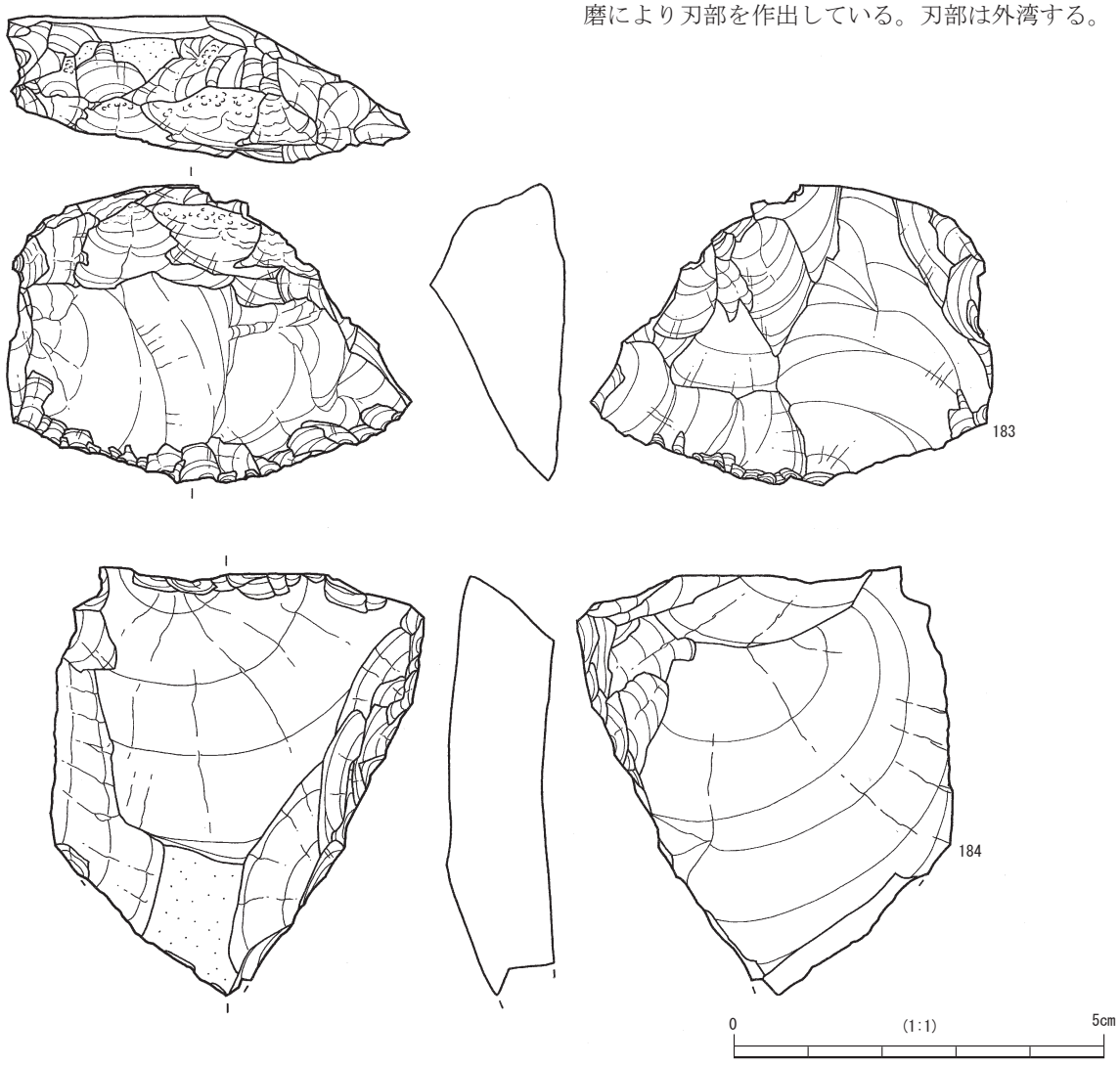
３点図化した。185～187は石核である。185はホルンフェルス製の大きな礫で，主に下辺の自然面を打面として剥片を剥離する。186は扁平なホルンフェルスの円礫で側縁の自然面を打面として求心的に剥片を剥離する。185・186はいずれも自然面を有する。礫器として用いられた可能性もある。187の石材は良質な安山岩である。打面と作業面を入れ替え，打面転移を繰り返しながら剥片を剥離する。

礫器（第42・43図188～191）

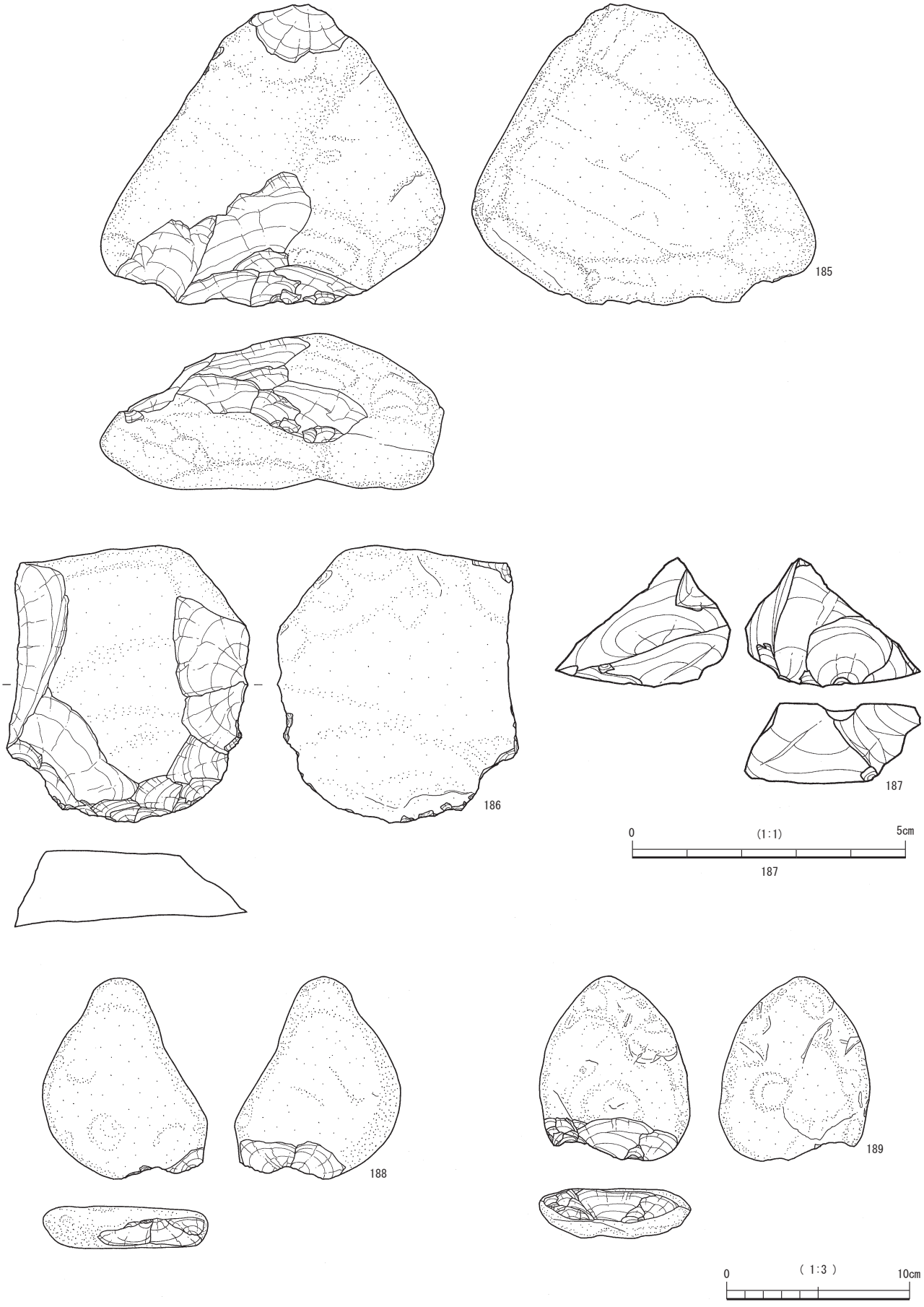
４点図化した。188～191は礫器である。188と189はホルンフェルス製で，円礫の端部に粗い調整を施すことによって刃部を作出したものである。190は粘板岩製の扁平な礫の縁辺部を打ち欠き，粗い調整により刃部を作出している。191はホルンフェルス製の分割礫を素材として縁辺部に調整を加える。刃部先端に使用によると思われる刃こぼれが見られる。

磨製石斧（第43図192～195）

４点図化した。192～195はホルンフェルス製の磨製石斧である。192は表面の一部に剥離による調整の痕が認められる。全面に研磨が施され，刃部は使用によると思われる刃こぼれが見られる。193は刃部を破損する。剥離調整で形状を整えた後，研磨している。194は全面に敲打による調整を加えた後，刃部を中心に研磨が加えられる。195は基部を破損する。側縁部を剥離調整し，研磨により刃部を作出している。刃部は外湾する。



第41図　スクレイパー，二次加工のある剥片



第42図　石核，礫器



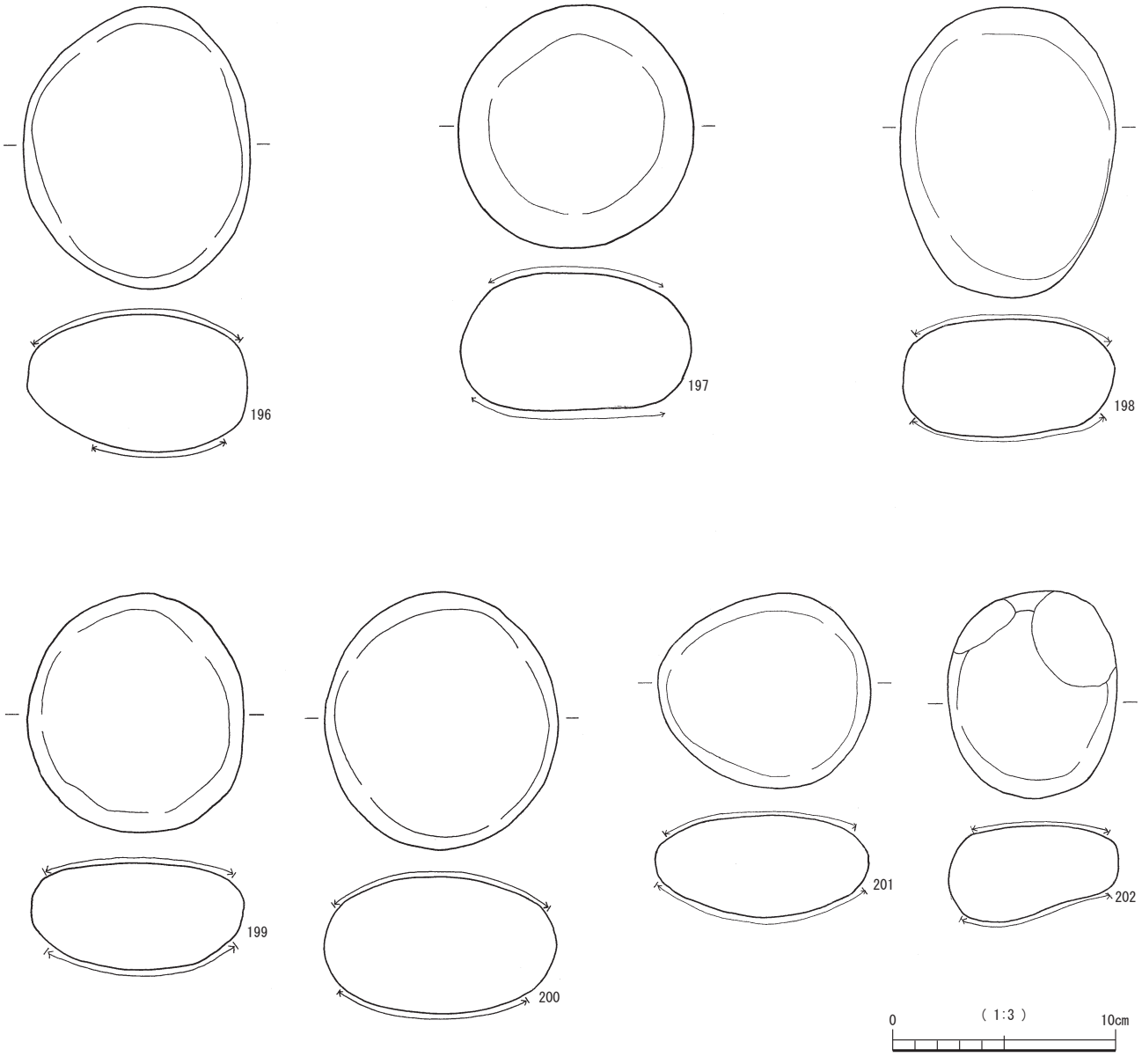
第43図　礫器，磨製石斧

磨石・敲石・磨敲石（第44～46図196～216）

196～216は磨石・敲石・磨敲石である。21点を図化した。

196～202は磨石で，全面的もしくは部分的に磨面を有し，敲打痕が不明瞭な磨石である。196～199・201は安山岩製で，いずれも円礫を磨石として使用している。表裏に磨面を有する。200は凝灰岩製の円礫を活用している。表裏に磨面を有する。202は花崗岩製で，全体的に磨り痕が見られる。形状は楕円形だったと思われるが，割れや磨り痕で一部形状が変化している。

203～209は全面的もしくは部分的に磨面を有し，平坦部に明瞭な敲打痕が見られるものである。203は安山岩製の磨敲石で，表裏に磨面と敲打痕を有する。204は凝灰岩製の磨敲石である。表裏面と側面の一部に磨面が確認できる。また，敲きで使用したと思われる敲打痕が表裏面と側面に見られる。205は安山岩製の敲石で，表面に敲打痕が見られ，凹みが生じている。206は安山岩製の磨敲石である。表裏に磨面と敲打痕を有する。磨面には，凹みが見られる。207は花崗岩製の磨敲石である。表裏面及び側面に磨面が見られるが，風化が激しくはっきり分からない。残存部分の様子から表裏，側面全てに磨面があったと考える。また表面の中心部には敲痕が残り，凹んでいる。208は安山岩製の磨敲石で，表裏に磨り面を有し，被熱痕が見られる。側面の一部と表面に敲打痕が見られ，表面には凹みが確認できる。209は凝灰岩製である。表裏面に敲打痕が見られ，凹んでいる。



第44図　磨石・敲石・磨敲石１

210～215は全面的もしくは部分的に磨面を有し，両側面または側面の一部に敲打痕が見られるものである。210は凝灰岩製で，表裏に磨面を有し，側面に敲打痕が残る。211は安山岩製で，表裏に磨面を有し，周囲を敲打で整形している。側面には敲きで使用した敲打痕が見られる。213は砂岩製で，全体的に敲打して楕円形の形状に整えている。表裏に磨面を有するが，敲打による調整の痕も広く残る。212・214・215は安山岩製で，表裏面に磨面を有する。側面には敲きで使用したと思われる敲打痕が見られる。

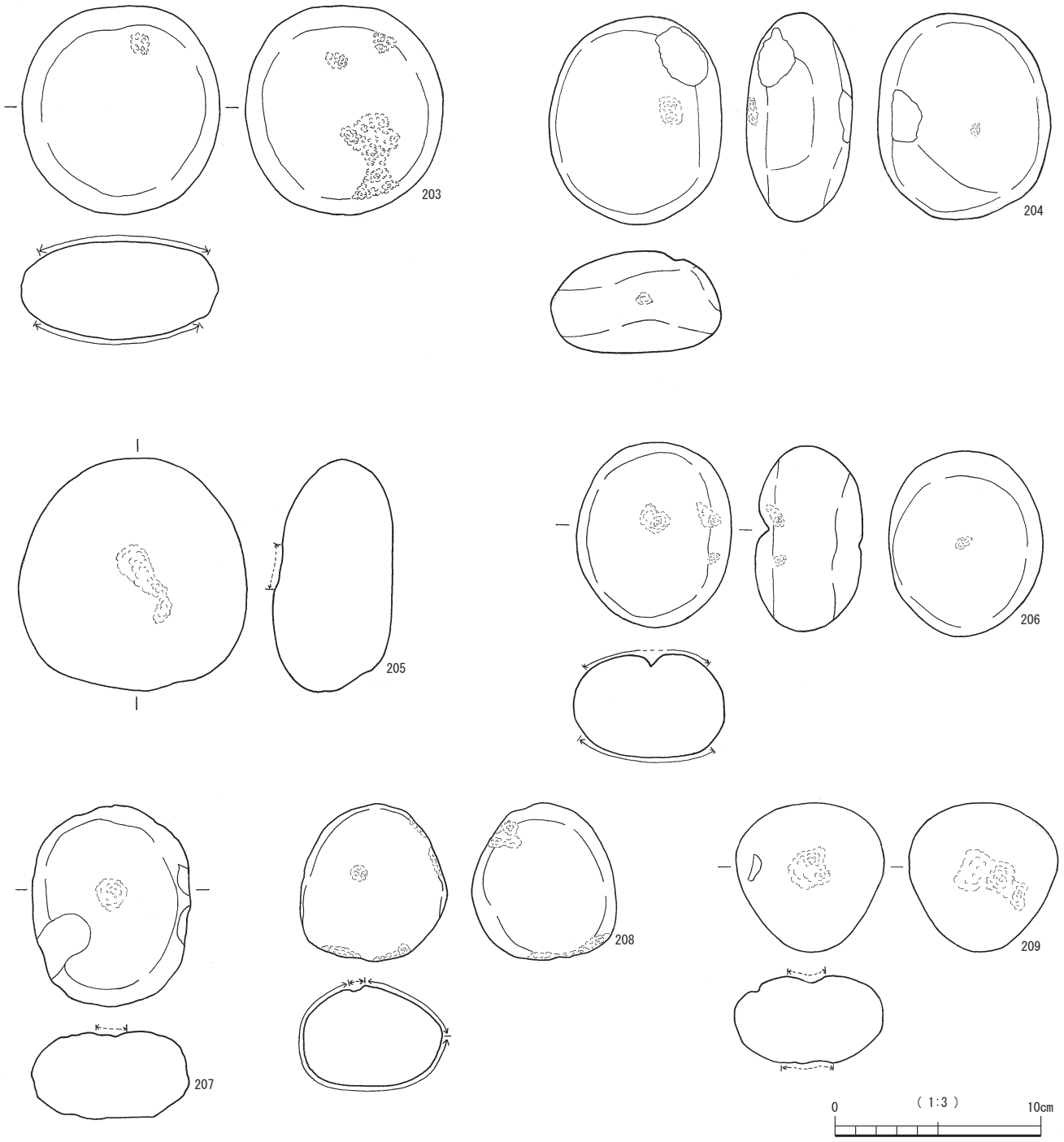
216は欠損が激しく，分類が不可能なものである。安山岩製で半分が欠損している。表裏に磨面を有する。

石皿（第46図217）

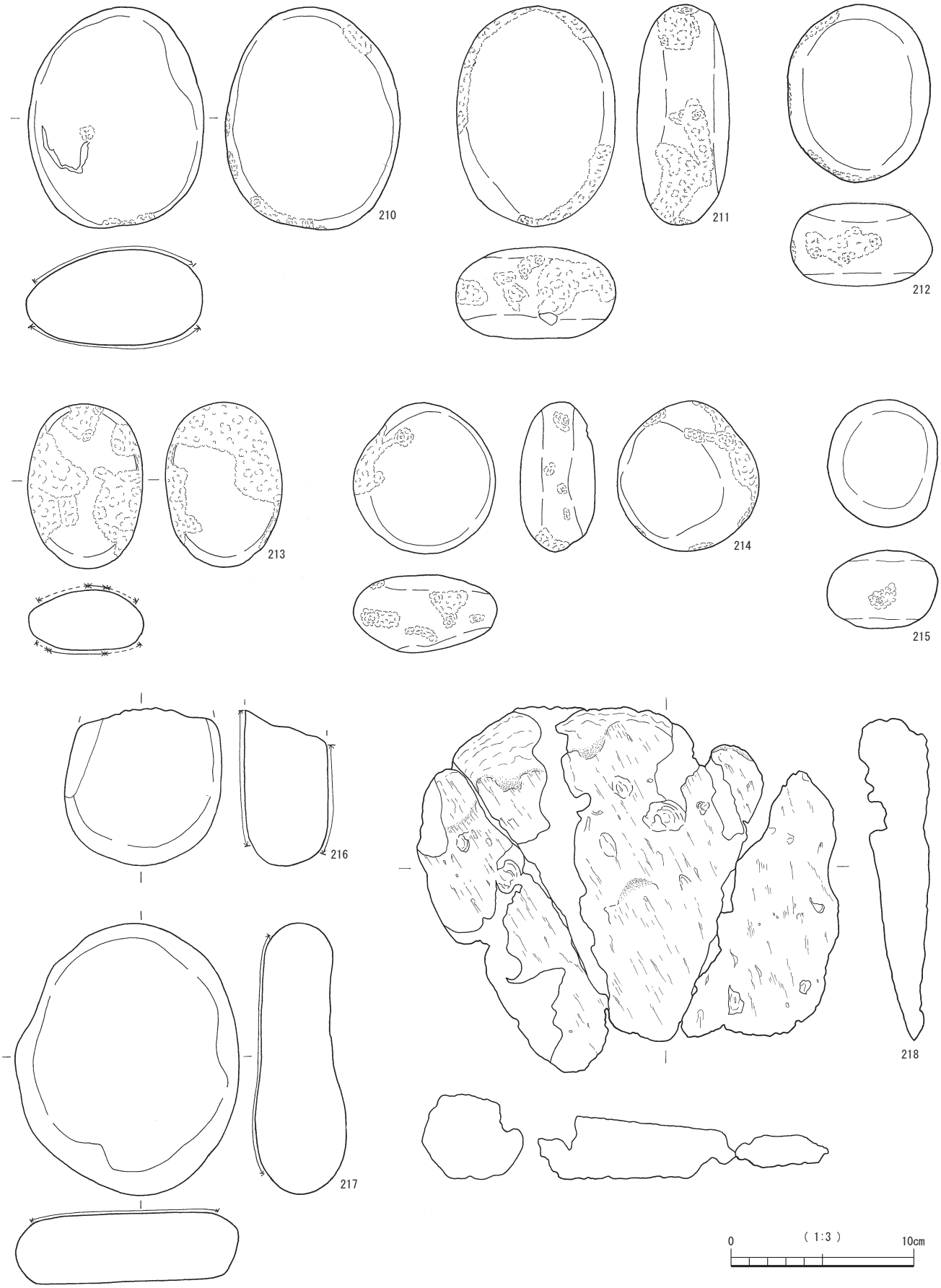
217は凝灰岩製の石皿である。完形で片面のみ使用面を観察できる。

軽石製品（第46図218）

218は軽石製品である。最大幅22.8cm，最大長19.9cmで，表裏に磨り痕が認められる。



第45図　磨石・敲石・磨敲石２



第46図　磨石・敲石・磨敲石３，石皿，軽石製品

第５表　縄文時代早期　竪穴建物跡計測表

遺構名	検出区	検出面	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備　考
竪穴建物跡22号	D-21	Ⅻ層	方形	260	250	50	土坑106号を切る

第６表　縄文時代早期　土坑計測表

遺構名	検出区	検出面	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	備　考
土坑105号	E-4	Ⅹ層	楕円形	70	60	25	
土坑106号	D-21	Ⅻ層	楕円形	(100)	55	22	竪穴建物跡22号に切られる

第７表　縄文時代早期　集石計測表

遺構名	検出区	検出層	総礫数(個)	タイプ	範囲(半径：m)		掘り込み部		出土土器	石材別個数				構成礫　重量（g）別個数													
					集中部	全体	有無	深さ(m)		安山岩	ホルンフェルス	砂岩	凝灰岩	1～100	100～200	200～300	300～400	400～500	500～600	600～700	700～800	800～900	900～1000	1000～1500	1500～2000	2000～2500	2500～3000	3000～
集石193	G-41	Ⅺ	13	Ⅰ	－	0.75	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
集石194	F-41	Ⅺ	10	Ⅰ	－	0.40	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
集石195	F-32	Ⅹ	11	Ⅰ	－	0.45	－	－	○	4			7	7	4												
集石196	F-25	Ⅹ	31	Ⅰ	－	0.65	－	－	－	12	3	4	12	10	10	5	4	1					1					
集石197	G-32	Ⅺ	21	Ⅰ	－	0.85	－	－	○	13	5	1	2	6	2	7	1		2	2				1				
集石198	H-30	Ⅺ	20	Ⅰ	－	0.60	－	－	○	14	2		4	2	3	2	1	2	2	1	1	3			3			
集石199	H-29	Ⅺ	33	Ⅰ	－	1.05	－	－	○	11	1	9	9	16	10	6								1				
集石200	G-29	Ⅺ	22	Ⅰ	－	0.55	－	－	－	13		6	3	1	5	3	6	2	1	1	2	1						
集石201	H-31	Ⅺ	9	Ⅱ	0.10	0.55	－	－	－	9					4	3		2										
集石202	G-33	Ⅹ	27	Ⅲ	0.25	1.03	○	0.07	－	24	1	2		3	4	2	4	3	6	1		2		1		1		
集石203	B-24	Ⅹ	99	Ⅲ	0.50	0.65	○	0.35	－	80	5		14	9	9	4	9	12	6	4	5	5		10	6	4	4	12
集石204	C-23	Ⅺ	224	Ⅲ	0.60	1.05	○	0.54	○	117	64	4	30	70	36	22	24	14	10	11	4	3	4	7	5	5	2	7
集石205	F-20	Ⅺ	72	Ⅲ	0.30	0.85	○	0.09	○	50	3	6	13	1	5	10	14	8	7	5	9	4	3	5	1			
集石206	E-20	Ⅺ	27	Ⅲ	0.25	0.40	○	0.09	－	22	1	1	2		3	5	3	2	6	1	1	3	1	2				
集石207	B-24	Ⅹ	114	Ⅲ	0.40	0.60	○	0.37	－	44	15	6	48	40	10	23	14	8	9	3	2	1	1	1	1			1

第８表　縄文時代早期　遺構内出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	遺構名	取上番号	分類	器種	部位	法量(cm)			文様・調整							色調		胎土							焼成	備　考
									器高	口径	底径	外面				内面			外面	内面	黒色	白色	赤色	雲母	長石	角閃	その他		
												口唇部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部											
17	4	F-32	Ⅹ	集石195	1	Ⅳ類	深鉢	胴部						貝殻条痕文			ナデ		橙	にぶい黄橙	○	○	○		○	○		良	
19	5	H-30	Ⅺ	集石198	17	Ⅳ類	深鉢	口縁部					貝殻刺突文 貝殻条痕			ナデ			黒褐	にぶい褐	○	○	○		○	○	石英	良	
	6	H-30	Ⅺ	集石198	7	Ⅳ類	深鉢	口縁部					貝殻刺突文 貝殻条痕			ナデ			褐灰	灰褐		○	○		○	○	石英	良	
20	11	H-29	Ⅹ	集石199	16	Ⅳ類	深鉢	胴部						貝殻条痕文			ナデ		にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		○	○		良	
24	18	F-20	Ⅺ	集石205	73	Ⅳ類	深鉢	口縁部～胴部		(12.8)		キザミ	貝殻刺突文 貝殻条痕			ナデ			橙	灰赤	○	○			○	○		良	

第９表　縄文時代早期　遺構内出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	遺構名	器種	法量(cm)			重量(g)	石　材	備　考
					最大長	最大幅	最大厚			
16	1	D-21	竪穴建物跡22	磨石	11.7	11.1	9.9	1800	ホルンフェルス	
	2	D-21	竪穴建物跡22	石皿	26.4	25.3	7.2	6250	凝灰岩	
	3	D-21	竪穴建物跡22	台石	11.9	9.7	3.9	720	ホルンフェルス	
19	7	H-30	集石198	磨石	10.5	8.4	3.5	470	安山岩	
	8	H-30	集石198	磨石	11.2	8.9	5.1	820	安山岩	
	9	H-30	集石198	磨石	10.2	9.1	6.4	840	ホルンフェルス	
	10	H-30	集石198	磨敲石	10.9	9.6	5.1	850	安山岩	
20	12	H-29	集石199	石皿	6.5	4.2	4.0	170	凝灰岩	
21	13	G-33	集石202	磨敲石	10.6	6.9	4.4	430	安山岩	
	14	G-33	集石202	礫器	11.0	12.6	3.8	700	ホルンフェルス	
22	15	B-24	集石203	石皿	8.8	7.1	5.3	477	安山岩	
	16	B-24	集石203	石皿	12.6	19.7	10.5	3000	安山岩	
23	17	C-23	集石204	石皿	15.1	16.6	9.2	2250	凝灰岩	
24	19	F-20	集石205	石皿	9.2	6.6	6.6	554	安山岩	
25	20	B-24	集石207	磨石	9.4	7.3	2.9	230	砂岩	

第10表－１　縄文時代早期　遺構外出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	分類	器種	部位	法量(cm)			文様・調整							色調		胎土							焼成	備考
											外面				内面					黒色	白色	赤色	雲母	長石	角閃	その他		
								器高	口径	底径	口唇部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	外面	内面								
	21	D･E－36･37	Ⅺ	50637	I	深鉢	胴部						貝殻刺突文			ナデ		にぶい褐	にぶい褐		○	○	○	○			良	
	22	F-40	Ⅺ	50663	I	深鉢	胴部						貝殻刺突文 貝殻条痕			ナデ		橙	にぶい橙	○	○			○		石英	良	
	23	H-30	Ⅺ	60544	I	深鉢	胴部						貝殻刺突文 貝殻条痕			ナデ		橙	明黄褐	○	○			○			良	
	24	F-40	Ⅺ	50660	I	深鉢	胴部						貝殻刺突文			ナデ		にぶい褐	褐灰		○		○	○	○		良	
	25	H-29	Ⅻ	60553	I	深鉢	胴部						貝殻刺突文 貝殻条痕			ナデ		にぶい黄褐	灰黄褐		○		○	○			良	
	26	G-29	Ⅹb	60483	I	深鉢	胴部						貝殻刺突文					にぶい黄橙	明灰黄	○	○	○					良	
27	27	E･F-35･36	Ⅺ	60679	Ⅳa	深鉢	口縁部 ～胴部	(10.1)	(27.8)			貝殻刺突文 貝殻条痕				ナデ		橙	橙	○	○				○	石英	良	
	28	G-32	Ⅹ	51113	Ⅳa	深鉢	口縁部				キザミ	貝殻刺突文				ナデ		褐灰	明赤褐	○	○		○				良	
	29	E･F-35･36	Ⅺ	60678	Ⅳa	深鉢	口縁部				キザミ	貝殻刺突文				ナデ		橙	橙	○	○				○	石英	良	
	30	G-32	Ⅹ	51084	Ⅳa	深鉢	口縁部				キザミ	貝殻刺突文 貝殻条痕				ナデ		明赤褐	灰黄褐		○		○	○			良	
	31	E-20	Ⅺ	60234	Ⅳa	深鉢	口縁部				キザミ	貝殻刺突文 貝殻条痕				ナデ		灰黄褐	灰黄褐		○			○		石英 輝石	良	
	32	G-28	Ⅺ	61447	Ⅳa	深鉢	口縁部				キザミ	貝殻刺突文				ナデ		明赤褐	明赤褐		○			○		石英 輝石	良	波状口縁
	33	E-20	Ⅹ	60340	Ⅳa	深鉢	口縁部					貝殻刺突文				ナデ		橙	橙		○		○		○	石英	良	
	34	F-40	Ⅺ	50657	Ⅳa	深鉢	口縁部 ～胴部				キザミ	貝殻刺突文 貝殻条痕				ナデ		明褐	明褐	○	○	○	○	○			良	
	35	G-32	Ⅹ	51036	Ⅳa	深鉢	口縁部 ～胴部				キザミ	貝殻刺突文 貝殻条痕				ナデ		橙	明赤褐		○	○	○	○		輝石	良	
28	36	G-30	Ⅺ	61176	Ⅳa	深鉢	口縁部				キザミ	貝殻刺突文 貝殻条痕				ナデ		にぶい褐	灰褐		○		○				良	
	37	F-20	Ⅺ	60329	Ⅳa	深鉢	口縁部					貝殻条痕				ナデ		黒褐	黄褐		○			○	○		良	
	38	G-29	Ⅺ	61264	Ⅳa	深鉢	口縁部					貝殻刺突文 貝殻条痕				ナデ		にぶい黄褐	にぶい褐	○		○	○		○	石英	良	
	39	H-30	Ⅺ	60524	Ⅳa	深鉢	口縁部				貝殻刺突文	貝殻刺突文 貝殻条痕				ナデ ケズリ		にぶい黄	にぶい黄		○	○				輝石	良	
	40	F-34	Ⅹ	51137 51138	Ⅳa	深鉢	口縁部 ～胴部	(18.9)	(14.0)			貝殻刺突文 貝殻条痕				ナデ		にぶい褐	黒		○	○		○			良	
	41	E-21	Ⅹ	60216	Ⅳa	深鉢	口縁部 ～胴部				キザミ	貝殻刺突文 貝殻条痕				ナデ ケズリ		黄褐	にぶい黄橙		○			○	○	石英	良	波状口縁
	42	H-30	Ⅺ	60539	Ⅳa	深鉢	口縁部					貝殻刺突文 貝殻条痕				ナデ ケズリ後ナデ		にぶい黄橙	黒褐		○		○		○	石英	良	
	43	G-31	Ⅹ	51299	Ⅳa	深鉢	口縁部					貝殻刺突文 貝殻条痕				ナデ ケズリ		にぶい黄褐	黒褐		○		○	○			良	
	44	G-32	Ⅹ	51234 51256	Ⅳa	深鉢	口縁部 ～胴部					貝殻刺突文 貝殻条痕				ケズリ,ナデ 指押え		暗灰黄	黒褐		○		○	○			良	外面煤付着
29	45	G-32	Ⅹ	51233 51088	Ⅳa	深鉢	口縁部 ～胴部					貝殻刺突文 貝殻条痕				ナデ 指押え	ケズリ	にぶい黄橙	暗灰黄		○		○	○			良	
	46	G-32	Ⅹ	51094 51239	Ⅳa	深鉢	口縁部 ～胴部					貝殻刺突文 貝殻条痕				ナデ 指押え	ケズリ	にぶい黄	褐灰		○		○	○			良	外面煤付着
	47	G-31	Ⅹ	51314	Ⅳa	深鉢	口縁部 ～胴部				キザミ	貝殻刺突文	貝殻条痕			ナデ		明赤褐	褐灰		○	○				石英 輝石	良	
	48	G-32	Ⅹ	51104	Ⅳa	深鉢	口縁部				貝殻刺突文	貝殻刺突文 貝殻条痕				ナデ ケズリ		黄褐	にぶい黄褐		○		○	○			良	
	49	I-46	ｶｸﾗﾝ	42667	Ⅳb	深鉢	口縁部 ～胴部				貝殻刺突文	貝殻刺突文 貝殻条痕				ナデ ケズリ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		○			良	
	50	H-34	Ⅲb	40394	Ⅳb	深鉢	口縁部					貝殻刺突文 貝殻条痕				ケズリ後 ナデ		灰黄褐	黒褐		○		○				良	
30	51	F-20	Ⅺ	60328 60330 60240	Ⅳb	深鉢	口縁部 ～胴部	(12.3)	(29.0)		キザミ	貝殻刺突文 貝殻条痕				ナデ		灰黄褐	にぶい黄褐	○	○		○		○	石英	良	口縁部瘤状突起
	52	G-46	Ⅹ	60773	Ⅳb	深鉢	口縁部				貝殻刺突文	貝殻刺突文 貝殻条痕				ケズリ		にぶい黄褐	黒褐		○		○			石英	良	
	53	G-31	Ⅹ	51306	Ⅳb	深鉢	口縁部					貝殻刺突文				ナデ		橙	橙	○	○	○			○		良	口縁部瘤状突起 穿孔２ヶ所
	54	G-46	Ⅹ	60728	Ⅳc	深鉢	口縁部 ～胴部				貝殻刺突文	貝殻刺突文 貝殻条痕	貝殻条痕			ナデ		にぶい黄	にぶい黄	○	○			○	○		良	
	55	G-32	Ⅹ	51100	Ⅳ	深鉢	胴部						貝殻条痕			ナデ		明赤褐	黒褐	○	○					石英	良	外面煤付着
	56	G-32	Ⅹ	51227	Ⅳ	深鉢	胴部						貝殻条痕			ナデ		灰黄褐	褐灰	○	○					石英	良	
	57	F-40	Ⅺ	50651	Ⅳ	深鉢	胴部						貝殻条痕			ナデ		橙	橙		○	○	○	○		石英	良	外面煤付着
	58	G-30	Ⅺ	61175	Ⅳ	深鉢	胴部						貝殻条痕			ナデ		にぶい褐	にぶい褐	○	○	○				輝石	良	
	59	G-32	Ⅹ	51106 51098	Ⅳ	深鉢	胴部						貝殻条痕			ナデ		にぶい黄褐	にぶい黄褐		○		○			石英	良	
	60	G-27	Ⅺ	61440 61441 61442	Ⅳ	深鉢	胴部						貝殻条痕			ナデ		にぶい黄褐	黒褐		○		○	○			良	
	61	E-20	Ⅺ	60254	Ⅳ	深鉢	胴部						貝殻条痕			ケズリ後 ナデ		橙	灰黄褐	○	○	○			○		良	
31	62	F-31	Ⅹ	51298	Ⅳ	深鉢	胴部						貝殻条痕			ケズリ後 ナデ		にぶい橙	黒褐				○	○	○	石英	良	外面煤付着
	63	G-32	Ⅹ	51080	Ⅳ	深鉢	胴部						貝殻条痕			ナデ		灰褐	灰黄褐		○	○				石英 輝石	良	
	64	G-31	Ⅹ	51315	Ⅳ	深鉢	胴部						貝殻条痕			ケズリ		にぶい黄橙	にぶい黄橙		○			○		石英	良	
	65	E-20	Ⅸ	60193	Ⅳ	深鉢	胴部						貝殻条痕			ナデ		にぶい黄橙	黒褐	○	○	○				輝石	良	外面煤付着
	66	G-32	Ⅹ	51107	Ⅳ	深鉢	胴部						貝殻条痕			ケズリ		褐灰	－		○		○				良	
	67	G-31	Ⅹ	51321	Ⅳ	深鉢	胴部						貝殻条痕			ナデ		赤褐	にぶい赤褐	○	○	○	○				良	
	68	G-27	Ⅺ	61387	Ⅳ	深鉢	胴部						貝殻条痕			ケズリ		にぶい褐	にぶい褐		○		○	○			良	
	69	G-32	Ⅹ	51110	Ⅳ	深鉢	胴部						貝殻条痕			ケズリ後 ナデ		明黄褐	褐灰		○	○				石英	良	外面煤付着
	70	G-32	Ⅹ	51232	Ⅳ	深鉢	胴部						貝殻条痕			ケズリ後 ナデ		にぶい褐	灰黄褐		○	○				石英	良	

第10表－２　縄文時代早期　遺構外出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	分類	器種	部位	法量(cm)			文様・調整							色調		胎土							焼成	備考
											外面			内面														
								器高	口径	底径	口唇部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部	外面	内面	黒色	白色	赤色	雲母	長石	角閃	その他		
31	71	H-31	XI	60597	IV	深鉢	胴部						貝殻条痕			ナデ		褐灰	灰褐	○		○				石英	良	
32	72	D・E－36・37	X	50617	IV	深鉢	胴部						貝殻刺突文 貝殻条痕			ナデ		明黄褐	にぶい黄褐		○			○		石英	良	
	73	G-29	XI	60484	IV	深鉢	胴部						貝殻刺突文			ナデ		橙	橙		○			○		石英	良	
	74	G-32	X	51096	IV	深鉢	胴部						貝殻条痕			ケズリ		にぶい黄橙	褐灰	○	○		○	○		石英	良	
	75	F-32	X	51030 51099	IV	深鉢	胴部						貝殻条痕			ナデ		にぶい黄橙	褐灰		○	○	○		○		良	
	76	G-32	X	51108 51115	IV	深鉢	胴部						貝殻条痕			ナデ		にぶい黄橙	灰黄褐	○	○					石英	良	
	77	D・E－36・37	X	50632	IV	深鉢	胴部						貝殻刺突文 貝殻条痕			ナデ		明褐	黒褐		○	○		○	○	石英	良	
	78	G-32	X	51092	IV	深鉢	胴部	(3.6)		(14.0)			貝殻条痕			ケズリ		にぶい黄橙	黒褐		○		○	○			良	
	79	H-30	XI	60418	IV	深鉢	胴部						貝殻条痕			ナデ		にぶい橙	にぶい橙	○	○	○				石英	良	
33	80	F-40	XI	50652	IV	深鉢	底部							貝殻条痕 キザミ			ケズリ	明黄褐	明赤褐	○	○	○	○	○	○	石英	良	
	81	F-32	X	51124 51303 51128 51129	IV	深鉢	胴部～底部	(8.3)		(10.0)			貝殻条痕	キザミ 貝殻条痕			ケズリ後ナデ	橙	橙	○	○	○			○	石英	良	
	82	G-32	X	51237 51123 51122	IV	深鉢	底部	(4.1)		(13.0)				キザミ 貝殻条痕			ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○				○	石英	良	
	83	G-32	X	51032	IV	深鉢	底部	(1.7)		8.2				キザミ 貝殻条痕			ナデ 指頭圧痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				○	石英	良	
	84	G-32	XI	61311	IV	深鉢	底部	(2.5)		(16.0)				キザミ 貝殻条痕			ナデ	橙	にぶい橙		○		○	○	○	石英	良	
	85	G-25	XI	51219	IV	深鉢	底部	(3.8)		(10.0)				キザミ 貝殻条痕			ケズリ後ナデ	橙	橙		○			○	○		良	
34	86	E-20	XII	60232 60194	IV	深鉢	底部	(3.5)		(12.0)				貝殻条痕			指頭圧痕 ケズリ後 ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○		○	○			良	
	87	G-32	X	51116	IV	深鉢	底部						貝殻条痕			ナデ		橙	黒褐	○	○			○	○	石英	良	
	88	F-19	X	60123	IV	深鉢	胴部	(2.1)		(10.0)				貝殻条痕			ナデ	にぶい黄橙	灰黄		○			○	○		良	
	89	H-30 G-30	XI XII	60545 60548 60799 60547	IV	深鉢	胴部～底部	(18.8)		(9.9)			貝殻刺突文 貝殻条痕	キザミ		ナデ	ナデ	橙	黒褐	○	○	○		○		石英	良	外面煤付着
	90	H-29・30 G-29	X XI	60537 60512 61273 60563	IV	深鉢	胴部～底部	(3.0)		7.2			貝殻条痕	キザミ			ナデ	にぶい黄橙	橙	○	○		○	○	○		良	
	91	H-29	X	60449	IV	深鉢	底部							キザミ 貝殻条痕			ナデ	にぶい橙	黒	○	○		○	○	○		良	
	92	G-32	X	51242	IV	深鉢	底部付近						貝殻条痕			ケズリ		灰黄	黒		○		○	○			良	
	93	H-30	XII	60546	IV	深鉢	胴部～底部	(5.6)		(10.4)			貝殻条痕			ケズリ		にぶい黄橙	黒		○		○	○			良	
	94	F-32	X	51039	IV	深鉢	胴部～底部	(5.0)		(9.0)			貝殻条痕				ナデ	にぶい橙	にぶい褐		○		○	○	○		良	
	95	G-27・29	XI	60459 60479 61439	IV	深鉢	胴部～底部	(4.8)		(13.0)			貝殻条痕			ケズリ		にぶい黄橙	灰黄		○	○	○	○			良	
	96	G-31	X	51311 51312	IV	深鉢	胴部～底部	(7.0)		(10.0)			貝殻条痕			ケズリ後ナデ		明黄褐	にぶい黄褐	○	○	○		○	○	石英	良	
35	97	C-5	X	50582 50684	V	深鉢	口縁部～胴部				ナデ	貝殻刺突文			ナデ			にぶい黄褐	褐灰	○	○		○	○			良	
	98	D・E-36・37	X	50618	V	深鉢	口縁部					貝殻刺突文			ナデ			橙	褐灰	○	○	○		○	○	石英	良	
	99	G-29	XI	60489	V	深鉢	口縁部				ミガキ	貝殻刺突文			ミガキ			明赤褐	赤褐		○	○	○	○			良	
	100	H-31	XI	60572	V	深鉢	口縁部				ミガキ	貝殻刺突文			ミガキ			褐灰	にぶい赤褐		○	○	○	○			良	
	101	H-31 H-32	X XI	60440 60593	V	深鉢	口縁部～胴部				ミガキ	貝殻刺突文			ミガキ			にぶい赤褐	にぶい赤褐		○	○	○	○			良	
	102	E・F-35・36	XI	60660	V	深鉢	口縁部				ナデ	貝殻刺突文			ナデ			にぶい橙	にぶい黄橙	○	○		○	○	○		良	
	103	C-6	X	50590 50589	V	深鉢	口縁部～胴部				ナデ	貝殻刺突文	突帯文		ナデ			にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○		○	○		良	
	104	C-6	X	50592	V	深鉢	胴部						貝殻刺突文			ナデ		褐灰	灰黄褐	○	○			○	○		良	
	105	C-6	X	50683	V	深鉢	胴部						貝殻刺突文			ナデ		灰黄褐	褐灰	○	○		○	○			良	
	106	C-6	X	50593 50592	V	深鉢	胴部						突帯文 貝殻刺突文			ナデ		にぶい橙	にぶい橙	○	○			○	○		良	
	107	G-26	XI	51078	V	深鉢	胴部						貝殻刺突文			ミガキ		にぶい黄褐	にぶい赤褐		○	○	○	○			良	
	108	H-32	XI	60574 60608	V	深鉢	胴部						貝殻刺突文			ケズリ後ナデ		にぶい赤褐	にぶい褐	○	○		○	○			良	
	109	D-21 E-21	X IX	60217 60214 60215	IV	深鉢	胴部						貝殻刺突文			ナデ		橙	橙		○		○	○	○		良	
	110	H-29	X	60407	V	深鉢	胴部						貝殻刺突文			ナデ		にぶい赤褐	にぶい赤褐		○		○	○	○		良	
	111	D・E-36・37	X	50620	V	深鉢	胴部						貝殻刺突文			ナデ		明赤褐	にぶい赤褐	○	○	○		○	○	石英	良	
	112	E-20	X	60196	V	深鉢	胴部						貝殻刺突文			ナデ		黒褐	にぶい赤褐	○	○	○		○	○		良	
	113	D・E-36・37	X	50626	V	深鉢	胴部～底部						貝殻刺突文			ナデ		にぶい赤褐	にぶい赤褐		○		○	○	○		良	
	114	E・F-35・36	XI	60662	V	深鉢	胴部						貝殻条痕 貝殻刺突文			ナデ		にぶい黄	にぶい黄橙	○	○		○	○	○		良	
	115	H-32	XI	60590	V	深鉢	胴部						貝殻刺突文			ミガキ		褐灰	灰褐	○	○	○	○	○			良	
	116	D-21	X	60228	V	深鉢	胴部						貝殻刺突文			ナデ		にぶい赤褐	灰褐	○	○	○	○	○			良	

第10表－３　縄文時代早期　遺構外出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	分類	器種	部位	法量(cm)			文様・調整							色調		胎土							焼成	備考
								器高	口径	底径	外面				内面			外面	内面	黒色	白色	赤色	雲母	長石	角閃	その他		
											口唇部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部											
35	117	H-31	X	60398	V	深鉢	胴部						貝殻刺突文			ナデ		にぶい赤褐	褐灰		○	○	○	○	○		良	
	118	G-31	X XI	51297 61278	V	深鉢	胴部～底部	(3.5)		(11.0)			貝殻刺突文	ミガキ			ナデ	にぶい赤褐	灰褐		○	○	○	○	○		良	
36	119	C－23	X	60139	V	深鉢	胴部						押型文（連珠）			ミガキ		にぶい橙	黒褐		○			○		石英輝石	良	
	120	C－23	X	60089	IX	深鉢	胴部						押型文（連珠）			ナデ		にぶい橙	褐灰	○	○	○		○	○	石英	良	
	121	B－23	X	60061	IX	深鉢	口縁部					押型文（山形）			ナデ			にぶい橙	褐灰		○			○	○		良	
	122	D－22	X	60064	IX	深鉢	胴部						押型文（山形）			ナデ		にぶい赤褐	にぶい黄橙		○	○	○	○			良	
	123	H－30	X	60420 60422	IX	深鉢	口縁部					押型文（山形）			押型文（山形）			にぶい褐	にぶい橙	○	○			○	○		良	
	124	H－30	X	60413 60421	IX	深鉢	口縁部					押型文（山形）			押型文（山形）			にぶい褐	橙	○	○			○	○		良	
	125	D･E-36･37	X	50605	IX	深鉢	口縁部					押型文（山形）			柵状文 押型文（山形）			明赤褐	褐灰	○	○		○	○		石英	良	
	126	C－23	X	60073	IX	深鉢	口縁部					ナデ			柵状文 押型文（山形）			にぶい赤褐	灰黄褐		○	○	○	○			良	
	127	C－23	X	60092	IX	深鉢	口縁部				押型文（山形）	ナデ			押型文（山形）			灰褐	にぶい褐	○	○			○	○		良	
	128	C－23	X	60142	IX	深鉢	胴部						押型文（山形）			ナデ		にぶい褐	黒	○	○	○	○	○	○		良	
	129	C－22	X	60070	IX	深鉢	口縁部					押型文（山形）ナデ			押型文（山形）ナデ			にぶい赤褐	黒	○	○			○	○	石英	良	
	130	G－25	XI	51075	IX	深鉢	胴部						押型文（山形）ナデ			ナデ		にぶい褐	褐灰	○	○			○	○	石英	良	
	131	C－22	X	60071	IX	深鉢	胴部～底部							ナデ		ナデ		にぶい橙	褐灰	○	○		○	○	○	石英	良	
37	132	C－22	X	60129	IX	深鉢	口縁部					押型文（楕円）			ナデ			橙	にぶい黄橙	○	○	○	○	○	○		良	
	133	D－22	X	60069	IX	深鉢	口縁部				押型文（楕円）	押型文（楕円）			押型文（楕円）ナデ			黒褐	にぶい橙	○	○			○	○	石英	良	
	134	B－23	X	60144 60095 60097	IX	深鉢	胴部						押型文（楕円）			ナデ		にぶい赤褐	灰黄褐	○	○	○	○	○	○		良	
	135	C－22	X	60074	IX	深鉢	胴部						押型文（楕円）			ナデ		にぶい橙	黒褐	○	○			○	○		良	
	136	C－23	X	60136 60088	IX	深鉢	胴部						押型文（楕円）			ナデ		にぶい褐	黒	○	○	○	○	○	○		良	内面煤付着？
	137	D･E-36･37	X	50622	IX	深鉢	胴部						押型文（楕円）			ケズリ		明赤褐	にぶい赤褐	○	○	○	○	○	○		良	
	138	F－32	X	51040	IX	深鉢	胴部～底部	(3.1)		(15.0)			押型文（楕円）	ナデ			ナデ	にぶい橙	灰褐	○	○	○		○	○		良	
38	139	F－19	XII	60185	XIII	壺	胴部						突帯文			ナデ		にぶい黄橙	灰黄	○	○		○	○	○	石英	良	
	140	F－19	XI	60174	XIII	深鉢	胴部						沈線文			ナデ		灰黄褐	にぶい黄橙	○	○			○	○		良	外面煤付着
	141	G－26	XI	60877	XIII	深鉢	胴部						沈線文			ミガキ		にぶい赤褐	灰褐		○	○	○	○			良	
	142	B－6	X	50460	XVI	深鉢	口縁部～胴部	(6.6)	(29.2)			沈線文	網目撚糸文ナデ					にぶい黄褐	橙	○	○			○	○		良	
	143	B－7	X	50560	XVI	深鉢	口縁部				キザミ	網目撚糸文後沈線文			ナデ			灰褐	にぶい赤褐	○	○	○		○	○	石英	良	
	144	F－19	XII	60179	XVI	深鉢	胴部						網目撚糸文沈線文			ナデ		にぶい黄橙	にぶい橙	○	○			○	○	石英輝石	良	穿孔，外面煤付着
	145	B－7	X	50433 50550	XVI	深鉢	胴部						網目撚糸文沈線文			ナデ		にぶい褐	灰褐	○	○		○	○			良	
	146	F－19	X	60112	XVI	深鉢	胴部						網目撚糸文後沈線文			ナデ		にぶい橙	にぶい赤褐	○	○	○	○	○	○		良	
	147	G－19	XI	60178	XVI	深鉢	胴部						網目撚糸文後沈線文			ナデ		にぶい橙	にぶい黄褐	○	○		○	○	○		良	
	148	B－6	X	50569	XVI	深鉢	胴部						網目撚糸文後沈線文			ナデ		にぶい褐	にぶい褐		○		○	○			良	
	149	B－8	X	50422	XVI	深鉢	胴部						網目撚糸文後沈線文			ナデ		にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		○	○		良	
	150	F－19	X	60147	XVI	深鉢	胴部						編目撚糸文			ナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○			○	○		良	
	151	B－6	X	50453 50457	XVI	深鉢	胴部						網目撚糸文			ナデ		にぶい褐	橙	○	○		○	○	○		良	
	152	F－19	XII	60184	XVI	深鉢	胴部						網目撚糸文			ナデ		褐灰	にぶい黄橙	○	○			○	○		良	
	153	B－7	X	50441	XVI	深鉢	胴部						網目撚糸文			ナデ		橙	橙	○	○	○		○	○		良	
	154	B－6	X	50566	XVI	深鉢	胴部						網目撚糸文			ナデ		にぶい褐	にぶい褐	○	○		○	○			良	
	155	B－7	X	50556	XVI	深鉢	胴部						沈線文			ナデ		にぶい赤褐	橙		○			○	○	石英	良	
	156	F－2	X	50704	XVI	深鉢	胴部						沈線文			ケズリ		褐灰	灰黄褐	○	○			○	○	石英	良	
	157	H－31	XI	60585	XVI	深鉢	底部	(1.3)		(10.0)			沈線文	ナデ			ナデ	灰黄褐	黒褐		○	○		○		石英	良	
	158	G－46	X	60733 60735	XVI	壺	頸部						刻目突帯文ナデ			ナデ		にぶい橙	橙	○	○		○	○	○		良	
	159	G－46	X	60698	XVI	壺	頸部						刻目突帯文ナデ			ナデ		橙	にぶい褐	○	○		○	○	○		良	
	160	B－6	X	50456	XVI	深鉢	胴部						ナデ			ナデ		にぶい褐	灰褐	○	○		○	○	○		良	
	161	G－46	X	60748	XVI	深鉢	胴部						ナデ			ケズリ		にぶい赤褐	にぶい赤褐		○	○	○	○		石英輝石	良	
	162	C－23	X	60090	XVI	深鉢	胴部～底部							ナデ キザミ		ナデ		橙	にぶい橙	○	○			○	○		良	
	163	B－24	X	60101	XVI	深鉢	底部	(4.6)		(8.2)			条痕後指ナデ			ナデ		にぶい褐	黒褐	○	○		○	○	○		良	

第11表　縄文時代早期　遺構外出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	法量(cm)			重さ(g)	石　材	分　類	備　考
						最大長	最大幅	最大厚				
40	164	50700	E-4	X	石鏃	(1.6)	(0.8)	0.3	0.6	安山岩	－	
	165	50661	F-40	XI	石鏃	2.0	(1.3)	0.4	0.5	チャート	－	
	166	50692	E-5	X	石鏃	(1.9)	1.8	0.4	1.1	チャート	－	
	167	50714	D-4	XI	石鏃	2.0	1.4	0.3	0.5	チャート	－	
	168	60390	H-29	IX	石鏃	2.0	1.5	0.4	0.6	安山岩	－	
	169	50706	E-4	X	石鏃	(2.3)	1.2	0.3	0.7	黒曜石	OB3	
	170	60246	F･G-19･20	XI	石鏃	2.2	1.5	0.4	0.8	チャート	－	
	171	60609	E･F-35･36	XI	石鏃	2.3	1.8	0.6	1.4	チャート	－	
	172	50694	E-4	X	石鏃	(2.0)	1.9	0.5	1.0	頁岩	－	
	173	50696	D-4	X	石鏃	2.5	(1.3)	0.4	1.0	チャート	－	
	174	50596	C-6	X	石鏃	2.4	1.5	0.6	1.4	安山岩	－	
	175	50467	B-7	X	石鏃	2.4	1.8	0.6	1.3	珪質安山岩	－	
	176	60221	D-21	IX	石鏃	(2.5)	(1.7)	0.4	1.1	頁岩	－	
	177	50702	E-3	X	石鏃	(2.4)	(1.9)	0.7	1.9	黒曜石	OB3	
	178	51323	G-31	X	石鏃	2.5	1.9	0.4	1.3	チャート	－	
	179	50466	B-7	X	石鏃	(2.8)	(1.6)	0.6	1.6	チャート	－	
	180	50681	D-6	X	石鏃	(2.7)	2.0	0.4	1.2	チャート	－	
	181	61283	G-33	X	石鏃	2.9	2.1	0.4	1.3	チャート	－	
	182	60583	H-32	XI	ドリル	3.9	2.4	1.3	9.4	石英	－	
41	183	50662	F-40	XI	スクレイパー	4.1	5.5	2.0	37.0	チャート	－	
	184	60598	H-31	XI	剥片	(5.8)	5.1	2.1	54.5	ホルンフェルス	－	
42	185	60121	F-19	X	石核	16.4	18.8	8.4	2620.0	ホルンフェルス	－	
	186	61061	G-32	XI	石核	15.0	13.2	4.7	1200.0	ホルンフェルス	－	
	187	50571	B-7	X	石核	2.4	3.2	1.5	7.2	安山岩	－	
	188	60230	D-21	X	礫器	10.9	9.0	2.3	297.0	ホルンフェルス	－	
	189	51013	F-34	X	礫器	10.0	8.3	2.7	274.0	ホルンフェルス	－	
43	190	50689	D-4	XI	礫器	13.6	12.5	3.0	591.0	粘板岩	－	
	191	一括	A･B-19･20	X	礫器	10.4	(6.5)	2.8	243.0	ホルンフェルス	－	
	192	60602	H-32	XI	磨製石斧	14.9	5.4	1.8	204.0	ホルンフェルス	－	
	193	60895	A･B-19･20	XI	磨製石斧	(8.1)	5.7	1.5	97.4	ホルンフェルス	－	
	194	60603	H-32	XI	磨製石斧	17.0	8.8	4.5	1070.0	ホルンフェルス	－	
	195	60222	D-21	X	磨製石斧	(4.5)	4.6	0.9	25.3	ホルンフェルス	－	
44	196	50674	C･D-36･37	XI	磨石	12.6	10.2	6.1	1019.0	安山岩	－	
	197	60656	E･F-35･36	XI	磨石	10.9	10.5	6.2	1134.0	安山岩	－	
	198	60527	H-30	XII	磨石	12.8	9.7	5.2	906.0	安山岩	－	
	199	51245	F-32	X	磨石	10.7	9.7	4.9	730.0	安山岩	－	
	200	50709	E-3	X	磨石	11.5	10.4	6.1	1038.0	凝灰岩	－	
	201	60901	G-31	XI	磨石	9.5	8.7	4.6	374.0	安山岩	－	
	202	51034	G-32	X	磨石	9.3	7.5	4.3	418.0	花崗岩	－	
45	203	60801	G-31	X	磨敲石	10.1	9.6	4.8	662.0	安山岩	－	
	204	61276	G-31	XI	磨敲石	10.0	8.3	5.0	636.0	凝灰岩	－	
	205	60248	D-21	X	敲石	11.2	11.2	5.8	1070.0	安山岩	－	
	206	60465	G-29	XI	磨敲石	9.0	7.5	5.0	517.0	安山岩	－	
	207	60533	H-30	XI	磨敲石	9.8	7.7	4.3	486.0	花崗岩	－	
	208	60729	G-46	X	磨敲石	7.6	7.1	4.8	354.0	安山岩	－	被熱痕
	209	61399	G-29	XI	磨敲石	7.2	7.2	4.2	280.0	凝灰岩	－	
46	210	一括	A･B-19･20	X	磨敲石	12.0	9.6	5.2	828.0	凝灰岩	－	
	211	61062	G-32	XI	磨敲石	12.0	8.6	4.9	824.0	安山岩	－	
	212	一括	A･B-19･20	X	磨敲石	9.6	7.8	4.5	472.0	安山岩	－	
	213	60423	H-30	X	磨敲石	9.0	6.3	3.3	277.0	砂岩	－	
	214	60160	F-19	X	磨敲石	8.2	7.8	4.2	383.0	安山岩	－	
	215	60478	G-29	XI	磨敲石	7.0	6.0	4.3	274.0	安山岩	－	
	216	51114	G-32	X	磨石	8.5	(8.6)	4.6	497.0	安山岩	－	
	217	51148	G-27	X	石皿	19.9	16.9	5.2	2620.0	凝灰岩	－	
	218	61451	G-30	XI	軽石製品	19.9	22.8	4.6	32.5	軽石	－	

第２節　縄文時代前～晩期の調査成果

１　調査の概要

『田原迫ノ上遺跡１』より，本遺跡における縄文時代前～晩期の該当層はⅢ～Ⅴ層である。

遺構は，極力上位の層で検出できるよう慎重に調査を進めたが，各層の色調が酷似しているため，全てⅥ（池田降下軽石）層やⅧ（アカホヤ火山灰）層での検出となった。検出した遺構が縄文時代前～晩期であるか，弥生時代であるかを正確に判定することは困難であるため，今回は検出時の認定を生かし，全て「第３節　弥生時代以降の調査成果」に掲載する。

遺物は，大多数がⅢ・Ⅳ層で出土している。また，弥生時代の遺物も同じくⅢ・Ⅳ層で出土している。先述したように各層の色調が酷似しているため，層の比定を混同している可能性が考えられる。土器は，中期32点，後期196点，晩期67点が出土した。縄文時代後期のものを主体とし，中期・晩期のものも出土する。各層でそれぞれの土器が出土することから，時期不明のものも多い。

２　遺物

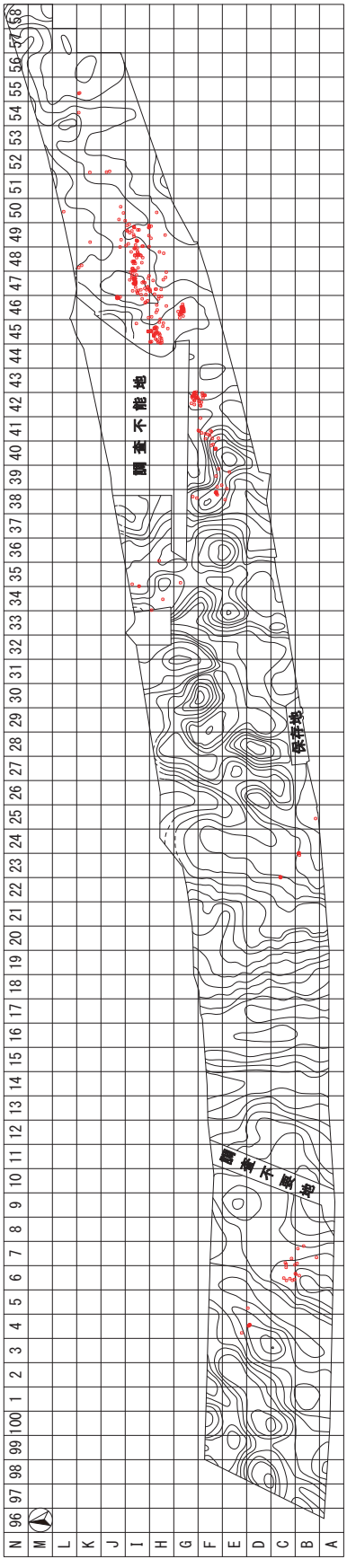
土器

今回の調査範囲では，縄文時代前期の土器と明確に断定できるものは出土しなかった。しかし，胎土や調整の点から，縄文時代前期の可能性のあるものは，「その他土器」の項目に記載する。縄文時代中～晩期の土器は，それぞれの時期ごとに記述する。

縄文時代中期土器（第48図219～227）

９点図化した。219～222は，口縁部外面に粘土紐を４条めぐらせ，粘土紐端部を口唇部へと湾曲させる。219・220は同一個体と考えられる。復元口径43.0cmを測る。口縁部はゆるやかに開き，胴部にくびれをもつ。胴部外面に貝殻条痕を全体的に施した後，等間隔に縦位のナデをおこなう。内面調整は粗いナデをおこなう。221・222は同一個体と考えられるが，貼り付けた粘土紐端部の重なりの上下は，「入」と「人」のように対称となる。内面調整は横位の貝殻条痕とナデをおこない，胎土に雲母を含む。

223～227は，貝殻条痕による調整や，キザミ・刺突を施した粘土紐を貼り付けるものである。223・224は同一個体と考えられる。口縁部は外傾しながら端部は内湾し，波状を呈する。口縁部を内側に巻き込むようにして波頂部を作り，その巻き込んだ部分に孔を穿つ。口唇部外側から巻き込んだ部分に沿って１条の細い粘土紐を貼り付け，キザミを施す。口縁部外面に斜位の貝殻条痕を粗く施す。内面調整はナデをおこない，胎土に雲母を含む。225は口唇部に平坦面をもつ。外面に粘土紐を縦方向に貼り付け，口唇部で折り曲げ，さらに横方向の



第47図　縄文時代前～晩期土器分布図

粘土紐を２本貼り付ける。内面調整は横位の貝殻条痕とナデをおこなう。226は口唇部に平坦面をもつ。口縁部外面に粗いナデをおこなった後，キザミを施した粘土紐を貼り付ける。内面調整は横位の貝殻条痕とナデをおこなう。227は底部で，胴部にむかって開きながら立ち上がる。復元底径7.0cmを測る。胴部外面は無文だが，胴部内面は横位の貝殻条痕を施す。底部は上げ底状になると考えられる。

縄文時代後期土器（第49～54図228～287）

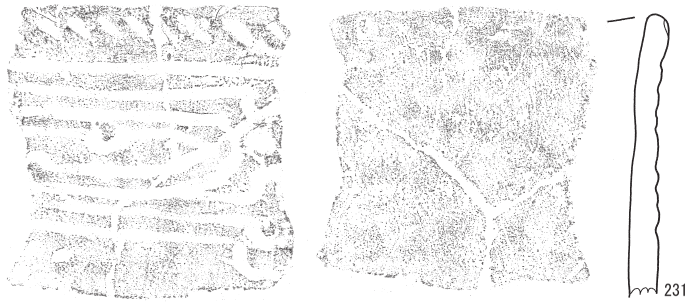
60点を図化した。228～242は，口縁部に凹線や沈線による文様帯を施す。228～230は，直線的に外傾する器形である。復元口径は，228は27.6cm，229・230は25.0cmを測る。平坦に整形した口唇部を指で押さえ，ゆるやかな波状とする。外面全体に貝殻条痕で調整をおこなった後，口縁部外面に短い縦位の凹線を等間隔に施し，その下位に横位の凹線を湾曲させながら施す。口縁部内面に指押えの跡が残る。内面調整は貝殻条痕を施し，胎土に小礫・金雲母を含む。231・232は，直行する器形である。口唇部外側に浅いキザミをもつ。口縁部外面に，横位の凹線を湾曲させながら施し，231には「C」字状の凹線や施文具を押し当てたような丸い凹みがみられる。内面調整は粗いナデをおこない，胎土に小礫・雲母を含む。233～236は，228～232と同様のものの小片である。

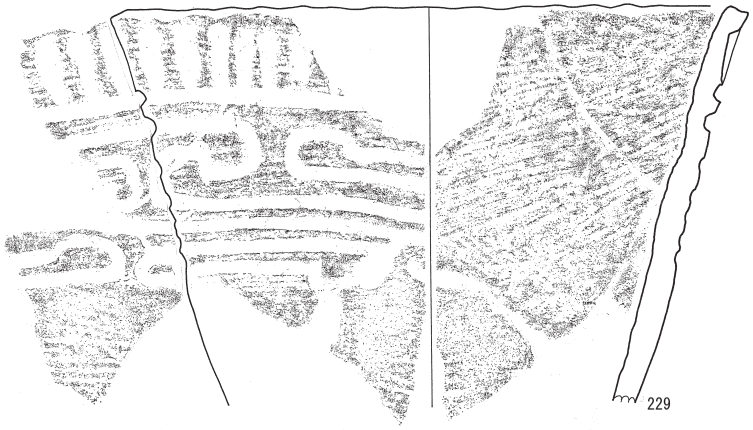


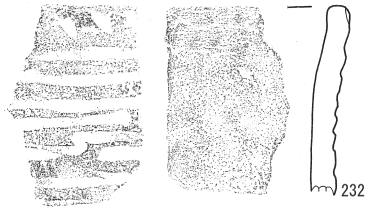
第48図　縄文時代中期土器









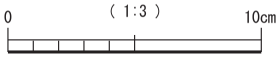












第49図　縄文時代後期土器 1

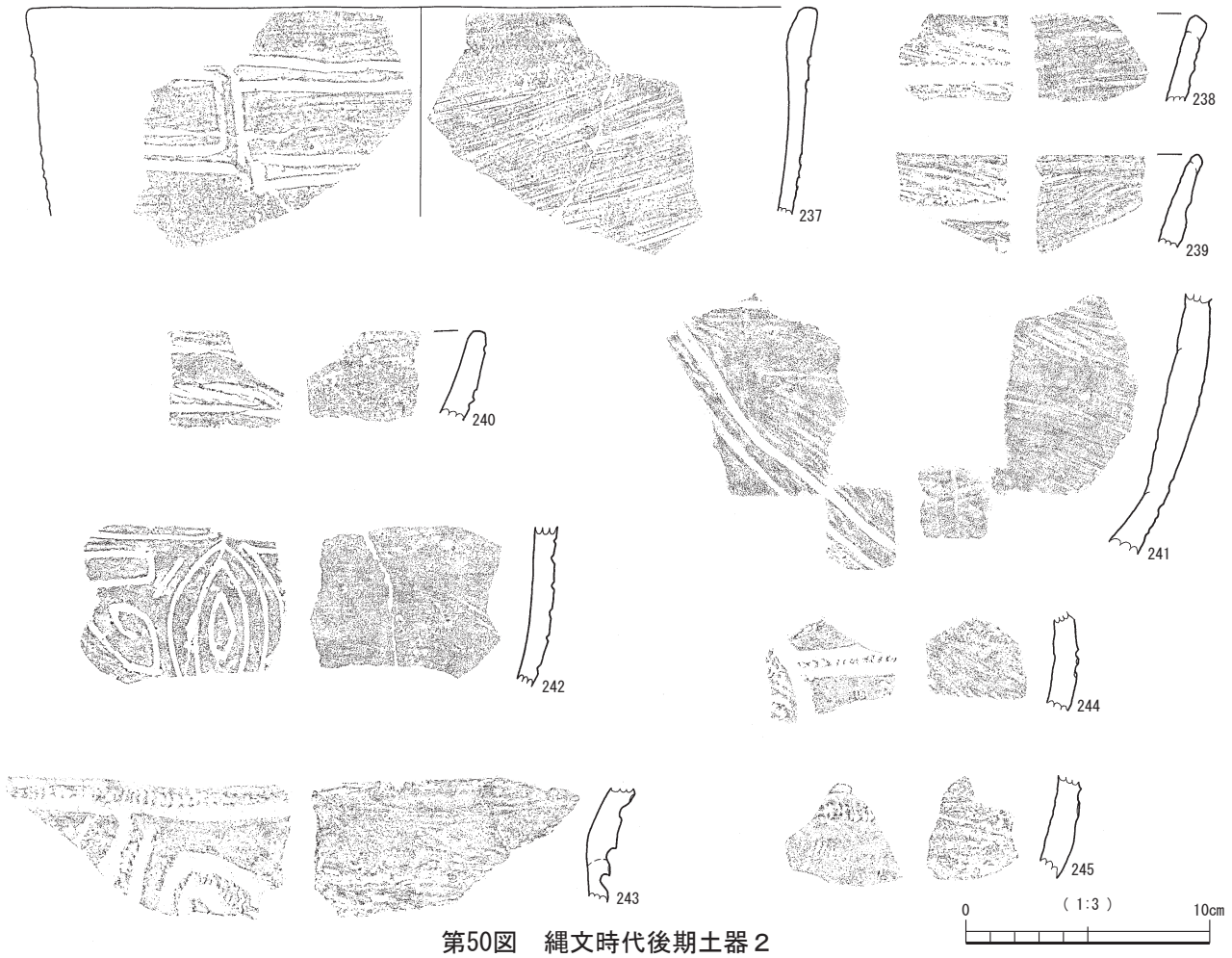
237は，復元口径32.4cmを測る。やや肥厚させた口縁部がわずかに外反し，内面にゆるやかな稜をもつ。口縁部外面に，横位の凹線を直角に折り返すように施す。内面調整は稜の上位はナデをおこない，下位は貝殻条痕を施す。胎土に小礫・雲母を含む。238・239は，口縁部外面に貝殻条痕を施した後，横位の凹線を施す。内面調整は貝殻条痕とナデをおこない，胎土に小礫・金雲母を含む。240は，口縁部外面に横位や斜位の凹線を施す。内面調整はナデをおこない，胎土に小礫・金雲母を含む。241は器壁が厚い。胴部外面に貝殻条痕とナデを施した後，斜位の凹線を平行に２条施す。内面調整はナデをおこない，胎土に小礫を含む。242は，胴部外面に浅い沈線に近い凹線を幾何学模様に施す。内面調整はナデをおこない，胎土に小礫・金雲母を含む。

243～245は，胴部外面に２条の凹線を施し，その間に貝殻刺突を施す。内面調整は貝殻条痕とナデを施し，胎土に小礫を含む。243は外反しながら立ち上がり，胴部内面にゆるやかな稜をもつ。244・245は，243と異なり胴部に丸みをもつ。

246～248は口縁部が波状を呈し，外面に沈線や穿孔を施し，口縁波頂部から胴部にかけて把手をもつ。内面調整はナデをおこない，胎土に金雲母を含む。246は肥厚した口縁部が外反し，胴部が膨らむ。平坦に整形した口唇部に１条，口縁部外面に２条の沈線を施す。口縁波頂部の側面に孔を穿ち，胴部の粘土貼り付け部分にかけて把手を施したと考えられる。胴部外面に，直角に折り曲げたり湾曲させたりした沈線を施す。247は口縁部が波状を呈し，口縁部内側に平坦面をもつ。口縁部外面に沈線を２条施し，胴部外面に縦位の沈線を施す。口縁部の平坦面には，ナデをおこなった後，沈線を１条施す。内面調整はナデをおこない，胎土に小礫・金雲母を含む。248は，平坦に整形した口唇部と口縁部外面に，２条の沈線を施す。また，沈線を湾曲させている部分も確認できる。口縁波頂部の側面に孔を穿ち，その下位には円錐状の深い刺突を施す。胴部にかけて把手を施したと考えられる。

249は，口縁部からのびた把手の胴部接着部である。円錐状の深い刺突を施し，その下位に沈線を施す。

250・251は肥厚した口縁部が大きく外反し，口縁部内面に文様をもつ。250は，復元口径24.0cmを測り，内面に稜をもつ。外反した口縁部の内面に，沈線・刺突連点文・貝殻刺突文を施す。内外面ともに，貝殻条痕による器面調整をおこなう。251は口縁部が外反し，波状を呈する。



第50図　縄文時代後期土器２

口縁部内面に，渦巻き状の沈線と刺突連点文を施す。胴部外面に縦位・横位・斜位の沈線を施すとともに，刺突連点文を縦方向に１列施す。内面調整はナデをおこない，胎土に小礫・金雲母を多く含む。

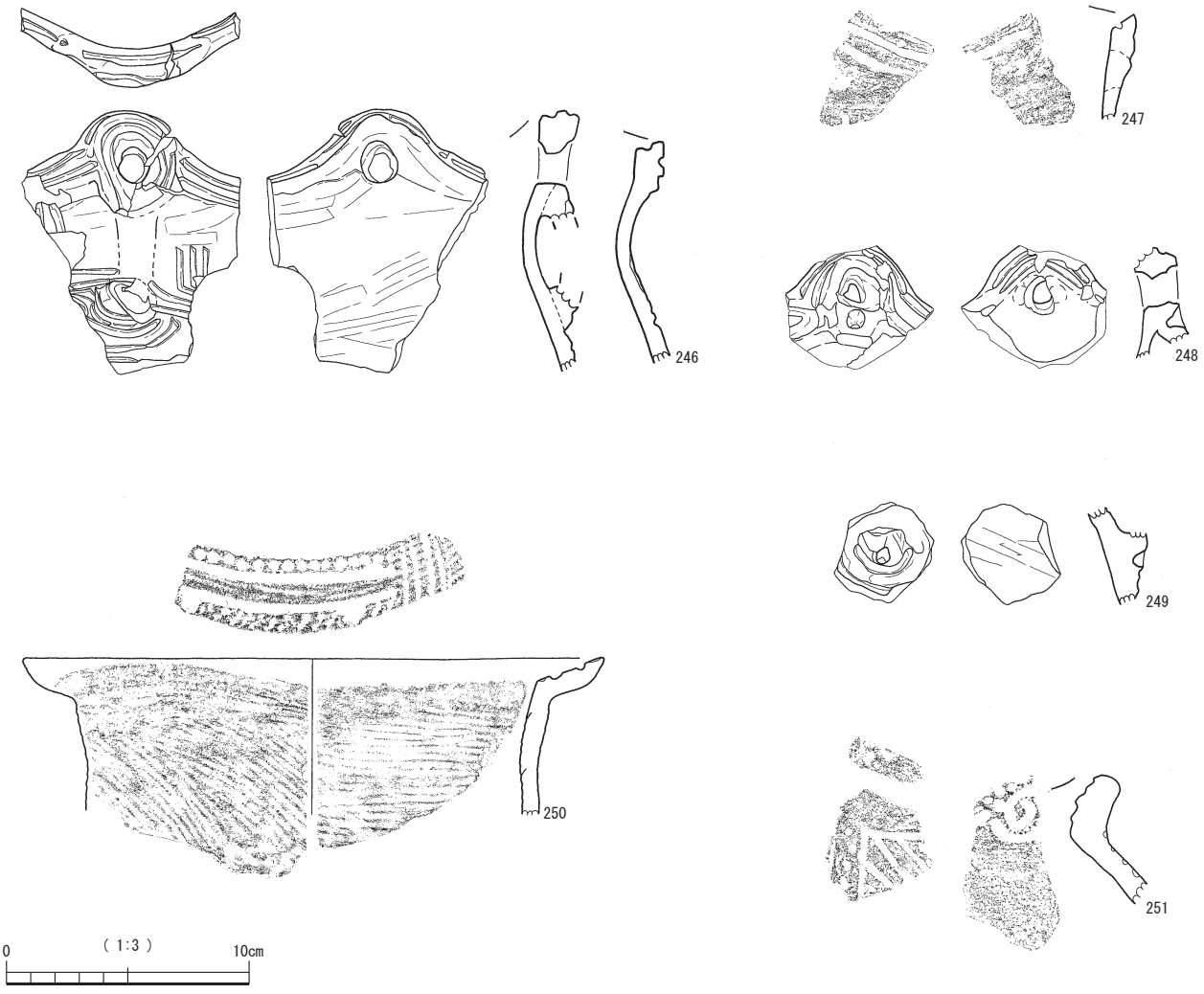
252～259は口縁部断面が三角形を呈し，その外面に連続爪形文や貝殻刺突文で文様を施す。252～254は，口縁部外面に連続爪形文を施す。内面調整は横位の貝殻条痕を施し，胎土に小礫を含む。255は口縁部外面に２列の連続爪形文を施し，その間には爪形文と同様の施文具による凹線と刺突がみられる。内面調整はナデをおこない，胎土に小礫を含む。256は，胴部外面に連続爪形文を施し，その上位に凹線を施す。内面調整はナデをおこない，胎土に小礫を多く含む。257は胴部外面に貝殻条痕を施した後，連続爪形文を施す。内面調整は横位の貝殻条痕を施し，胎土に小礫を含む。258・259は，口縁部断面の三角形は確認できないが，胎土や調整が類似するため，ここに記載する。口縁部外面に貝殻条痕を施した後，斜位の貝殻刺突文を施す。内面調整は横位の貝殻条痕を施す。

260・261は口縁部が外傾し，口縁部外面に横位の沈線を施す。器面調整はナデをおこない，胎土に小礫を含む。内面に輪積み痕が残る。

262・263は口縁部が外反し，口唇部に粘土を貼り付けて平坦に整形し，刺突連点文を施す。内面調整は粗いナデをおこない，胎土に小礫・金雲母を含む。

264・265は，胴部外面に沈線を直線や曲線に施す。内面調整は貝殻条痕を施した後，ナデをおこなう。胎土に金雲母を含む。

266～268は，口縁部外面に貝殻刺突文や連続爪形文を施す。内面調整は貝殻条痕またはナデをおこない，胎土に小礫・金雲母を多く含む。266は，口唇部に平坦面をもつ。口縁部がやや肥厚し，胴部にかけて屈曲する。口縁部外面に連続爪形文を２列施す。267は，口縁部がわずかに波状を呈する。口縁部外面に貝殻刺突文を３列施す。268は胴部外面に連続爪形文を施す。断面が三角形を呈するが，胎土や調整が266・267と類似する。



第51図　縄文時代後期土器３



第52図　縄文時代後期土器４

269は口縁部が大きく外反し，外面のくびれ部分に爪形の刺突文を１列施す。内面調整は粗いナデをおこない，胎土に小礫を多く含む。270～276は，外面に沈線・キザミ・刺突連点文などで文様を構成する。270は口縁部外面に沈線を３条施す。内面調整はナデをおこなう。271は口縁部が波状を呈し，波頂部は「M」字状となる。口縁部が内側に屈曲し，外面に稜をもつ。口縁部外面に２条の沈線を施す。器面調整は丁寧なナデをおこなう。外面に煤が付着する。272・273は胴部が屈曲し，内面に稜をもつ。胴部外面上位にキザミを，その下位に沈線を施す。内面調整は丁寧なナデをおこなう。274は胴部から口縁部へとなだらかに外反してくびれをもち，胴部はやや膨らむ。くびれ部分の外面に横位の刺突連点文を施し，その下位に横位・斜位の沈線と「Ｓ」字状の沈線を施す。内面調整は丁寧なナデをおこなう。275は胴部から口縁部にむかって外反し，内面に稜をもつ。外面上位に横位の沈線を，その下位に刺突連点文を施す。内面調整はナデをおこなう。276は，胴部外面に沈線を湾曲させて施す。内面調整は粗い。

277～280は口縁部が外反し，胴部が張り出す。外面に凹線や刺突連点文を施し，丁寧なナデやミガキをおこなう。胎土に小礫を含む。277は口唇部に平坦面をもつ。口縁部外面と張り出した胴部外面に，凹線と刺突連点文を施す。外面はナデ後，縦位のミガキを施す。278は口縁部内側が一部欠損する。口縁部外面に横位の凹線を施す。外面はナデ後，横位のミガキを施す。胴部に輪積み痕が残る。279は胴部がやや屈曲し，張り出し部分が肥厚し面をもつ。張り出した胴部の外面に，浅い凹線と刺突連点文を施す。280は，文様はみられないが277～279と胎土が似る。胴部外面が張り出して屈曲し，くびれ部分にナデをおこなった痕跡がみられる。

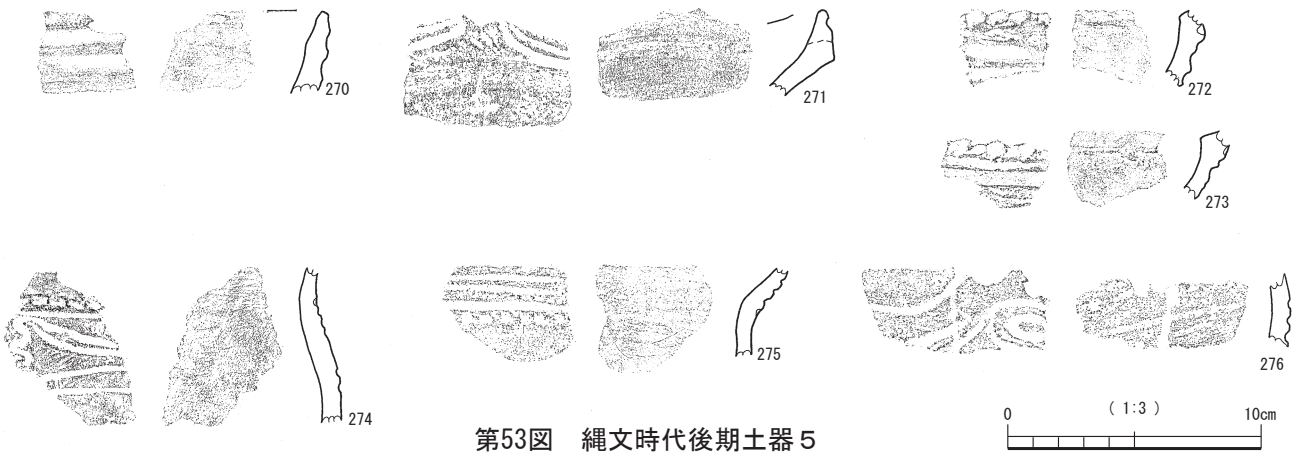
281は口縁部が内側に屈曲し，胴部にかけて湾曲する。口唇部に平坦面をもち，口縁部外面に沈線を２条施す。内外面ともに丁寧なナデやミガキをおこなう。

282～287は底部に編物圧痕が残る。胴部から時期を判断するのは困難だが，編物圧痕のある土器は後期によくみられるため，ここに記載する。282～285は，底部に網代編み（平編み）の圧痕が残る。282は復元底径11.4cmを測り，底部から口縁部にかけて開きながら立ち上がる。胴部内外面ともに，条痕による器面調整をおこなう。283は，復元底径10.8cmを測る。底部が外側へ張り出し，開きながら立ち上がる。底部は網代編み圧痕が残る。284・285は，底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。284は復元底径10.4cmを測る。286は底部に残る圧痕から，網代編み（平編み）ともじり編みを組み合わせていることが分かる。復元底径12.0cmを測り，底部から胴部にかけて直線的に立ち上がる。287は平面な底部片である。底部内面は貝殻条痕後ナデを施す。底部外面は荒い貝殻条痕が残る。

縄文時代晩期土器（第54・55図288～301）

14点を図化した。288～294は口縁部内外面に１条の沈線を施し，外面に丁寧なナデもしくはミガキをおこなう。288は，復元口径27.6cmを測る。口縁部直下に屈曲部をもち，胴部にかけて直線的にすぼまる。内面には稜をもつ。器面調整は内外面ともにミガキをおこなう。289は，復元口径15.4cmを測る。口縁部が外反し，胴部は直線的である。器面調整は内外面ともに丁寧なナデをおこなう。290・291は同一個体の可能性がある。口縁部が緩やかに湾曲し，胴部が強く屈曲する。器面調整は内外面ともにミガキをおこなう。292は口縁部下位で胴部が張り出す。器面調整は内外面ともにミガキをおこなう。293・294は，胴部の屈曲部である。外面はミガキを，内面はナデをおこなう。

295～298は外面にナデをおこない，内面は黒色化する。295～297は胴部に膨らみをもち，鞠のような器形となる。復元口径は12.6～14.4cmであるが，同一個体の可能性がある。口縁部外面に細い粘土紐を貼り付ける。内面調整は丁寧なナデをおこなうも，一部剥落する。298は底部片で，底部が外側へやや張り出していることが確認できる。



第53図　縄文時代後期土器５



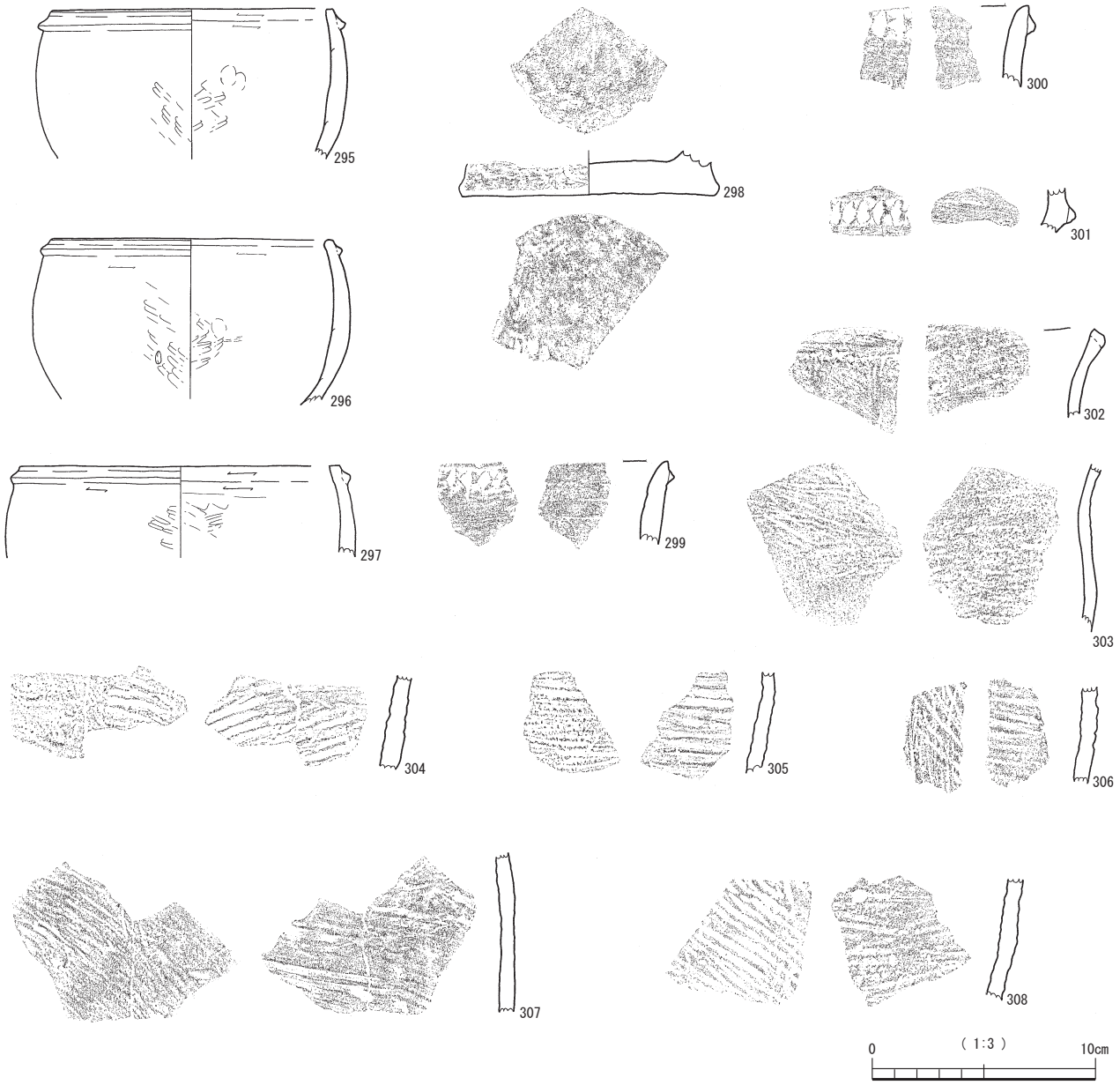
第54図　縄文時代後期土器６，縄文時代晩期土器１

299～301は外面に突帯を１条めぐらせ，そこにキザミを施す。299・300は口縁部がやや外反する。器面調整は丁寧なナデもしくはミガキをおこない，胎土に雲母を含む。301は，胴部に屈曲部をもつ。器面調整は丁寧なナデをおこなう。

その他土器（第55～57図302～332）

302～332は正確な時期が断定できないものや，これまでの分類に当てはまらないものであり，31点を図化した。

302～318は，内外面に貝殻条痕を施す。302・303は同一個体と考えられる。口縁部は外反し，胴部がやや膨らむ。口唇部に粘土をかぶせ，平坦面を整形する。外面は貝殻条痕を施した後，ナデをおこなう。内面調整は口縁部付近ではナデを，胴部ではケズリをおこなう。胎土に小礫・金雲母を含む。304・305は胴部外面に貝殻条痕を施し，内面に幅の広い貝殻条痕を施す。306・307は，胴部内外面ともに幅の広い貝殻条痕を施す。308は内外面ともに貝殻条痕を施した後，ナデをおこなう。309・310は胴部内外面に貝殻条痕を施す。器面調整は粗い。311～313は同一個体と考えられる。胴部内外面ともに貝殻条痕を施す。胎土に赤い小礫を含む。314・315は底部で，胴部外面に浅い貝殻条痕を施す。314は胴部が開きながら立ち上がり，底部端部がやや張る。内面調整は粗く，胎土に小礫を含む。315は，復元底径11.2cmを測る。胴部が開きながら立ち上がり，底部端部が強く張り出す。胴部外面に薄い貝殻条痕を施した後，粗いナデをおこなう。内面調整は粗く，胎土に小礫を含む。316は底部端部が強く張り出し，胴部はくびれて立ち上がる。内面調



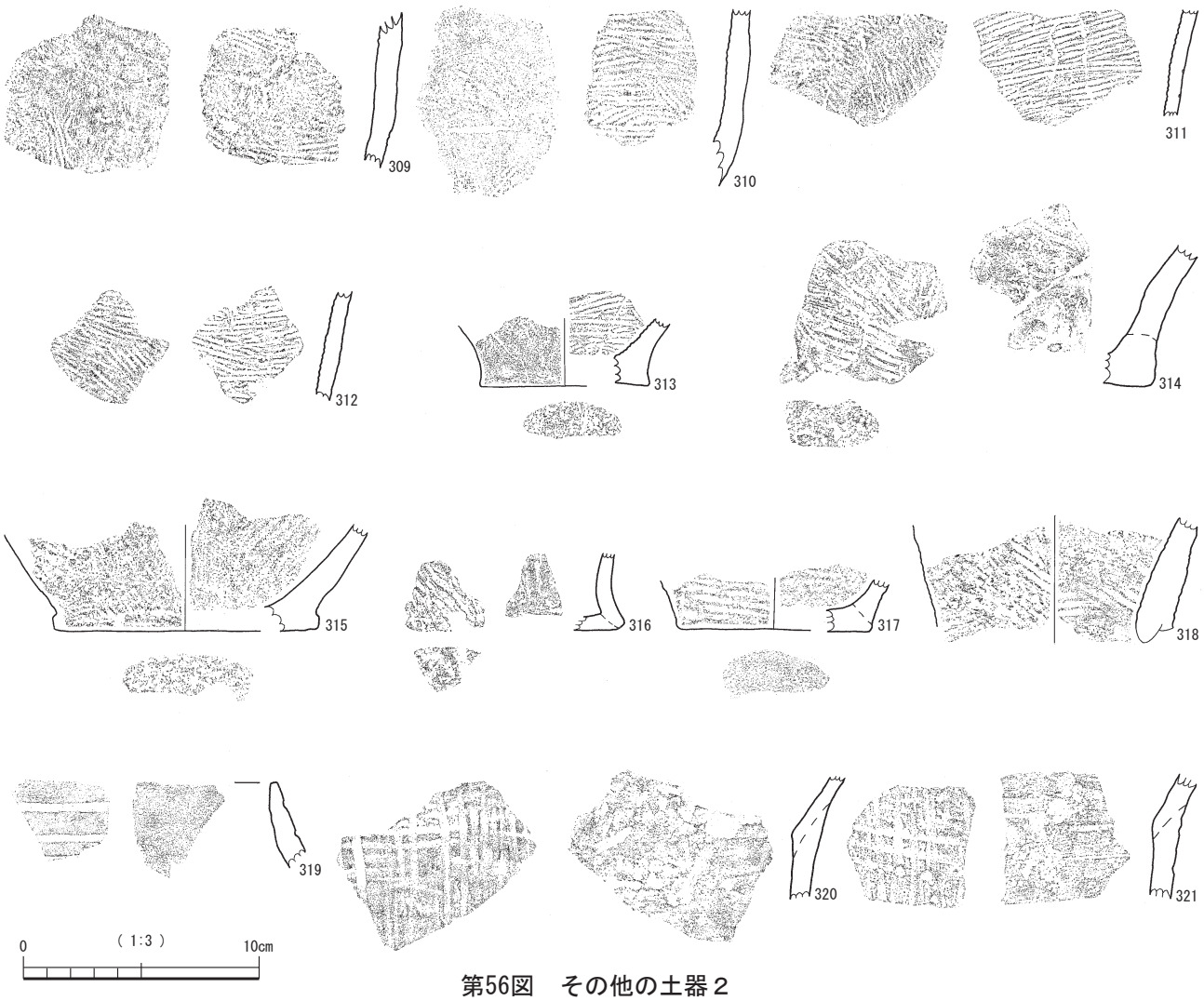
第55図　縄文時代晩期土器２，その他の土器１

整はナデをおこない，胎土に小礫を含む。317は，復元底径8.2cmを測る。底面の器壁は厚いが，胴部の器壁は薄い。内面調整は貝殻条痕を施す。318は底部付近で，胴部が開きながら立ち上がる。胎土に小礫・金雲母を含む。

319～323は，胴部内外面に沈線や条痕，調整痕を施す。319は口縁部が「く」の字状に内側へ屈曲すると思われる。口唇部に幅の狭い平坦面をもつ。口縁部外面に丁寧なナデをおこなった後，沈線を横位に施す。内面調整はナデをおこなう。320・321は胴部から口縁部にかけて外反し，内面に稜をもつ。胴部外面に棒状工具による縦位・横位の調整痕と，工具の先端を押しつけたような丸い跡が残る。内面調整は粗く，胎土に小礫を含む。322・323は，胴部外面に棒状工具による縦位・横位の調整痕が残る。胴部内面に横位の条痕を施し，器面調整は全体的に粗い。

324～327は底部で，文様はみられない。324は復元底径8.8cmを測る。底部端部が外側へ張り出し，胴部にかけて開きながら立ち上がる。器面調整は粗く，胎土に小礫・金雲母を含む。325は復元底径10.0cmを測り，胴部にかけて直線的に開く。底部端部がやや張り出し，胴部外面に横方向のナデをおこなう。胴部内面に輪積み痕がわずかに残る。内面調整はナデをおこなう。326は復元底径7.4cmを測る。底面が非常に厚く，底部端部が外側へ強く張り出す。器面調整はナデをおこない，胎土に小礫を含む。327は底径3.9cmを測り，器壁が厚い。胴部外面に丁寧なナデをおこない，一部ミガキもみられる。内面調整はナデをおこない，胎土に小礫を含む。

328～332はいずれも胴部で，内外面ともにミガキをおこなう。328は胴部が開く。内外面ともにミガキの前にナデをおこなった痕跡が観察できる。329は屈曲部が残る。胴部内外面ともにミガキをおこなう。胴部外面に煤が付着する。330・331は胴部が大きく開く。330は屈曲部がわずかに残る。胴部外面にミガキを，内面にナデをおこなう。胎土に小礫を含む。331は胴部外面に丁寧なナデとミガキを，内面に丁寧なナデをおこなう。332は胴部内面にわずかに稜をもち，稜上部がやや外反する。胴部外面にミガキを，胴部内面にナデをおこなう。胎土に小礫を含む。



第56図　その他の土器２



第57図　その他の土器３

第12表－１　縄文時代前～晩期　出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	分類	器種	部位	法量(cm)			文様・調整							色調		胎土							焼成	備考
								器高	口径	底径	外面				内面			外面	内面	黒色	白色	赤色	雲母	長石	角閃	その他		
											口唇部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部											
48	219	H-44 K-48	Ⅲd	42700 42702 38262 42701		深鉢	口縁部～胴部	(13.0)	(43.0)			4条突帯文 ナデ	貝殻条痕		ナデ			橙	橙	○	○			○	○		良	
	220	H-46	Ⅲd	39052		深鉢	口縁部～胴部					4条突帯文 ナデ	貝殻条痕	貝殻条痕	ナデ			橙	橙	○	○			○	○		良	
	221	F-41	Ⅳ	38290		深鉢	口縁部					4条突帯文 ナデ			貝殻条痕 ナデ			灰褐	橙	○	○		○	○	○		良	
	222	F-39	Ⅳ	38273		深鉢	口縁部					4条突帯文 ナデ			貝殻条痕 ナデ			にぶい褐	橙	○	○		○	○			良	
	223	I-49	Ⅲd	38601		深鉢	口縁部				刻目突帯文	貝殻条痕			ナデ			黒褐	にぶい褐		○	○	○	○			良	波状口縁，穿孔 外面煤付着
	224	I-48	Ⅲd	38947		深鉢	口縁部				刻目突帯文	貝殻条痕			ナデ			黒褐	にぶい褐		○	○	○	○			良	外面煤付着
	225	H-45	Ⅲd	42752		深鉢	口縁部					突帯文 ナデ			貝殻条痕 ナデ			黒褐	黒褐		○	○		○			良	外面煤付着
	226	H-45	Ⅲd	42745		深鉢	口縁部					刻目突帯文 ナデ			貝殻条痕 ナデ			褐	黒褐			○		○			良	外面煤付着
	227	J-48	Ⅳ	38361		深鉢	底部	(3.2)		(7.0)				ナデ			貝殻条痕	橙	にぶい赤褐	○	○		○	○	○		良	
49	228	I-47	Ⅲd	38873 39056 38884 38960 39065		深鉢	口縁部～胴部		(27.6)		指押え	沈線文	貝殻条痕		指押え 貝殻条痕			にぶい赤褐	にぶい赤褐		○		○	○			良	外面煤付着
	229	I-47	Ⅲd	38729 38874 38873 38879 38956		深鉢	口縁部～胴部		(25.0)		指押え	沈線文	貝殻条痕		指押え 貝殻条痕			灰褐	にぶい褐		○		○	○			良	外面煤付着
	230	I-47	Ⅲd	38953 39066 38956 38957		深鉢	口縁部～胴部		(25.0)		指押え	沈線文	貝殻条痕		指押え 貝殻条痕			灰褐	にぶい褐		○		○	○			良	外面煤付着
	231	I-49	Ⅲd	38597 38507 38508 38598		深鉢	口縁部～胴部				キザミ	沈線文 ナデ			ナデ			赤褐	赤褐	○	○	○	○	○	○		良	
	232	J-50	Ⅲd	38063		深鉢	口縁部				キザミ	沈線文			ナデ			赤褐	赤褐	○	○	○	○	○	○		良	外面煤付着
	233	H-45	Ⅲd	38760		深鉢	胴部						貝殻条痕 沈線文			貝殻条痕		にぶい赤褐	にぶい赤褐		○		○	○			良	外面煤付着
	234	J-50	Ⅲd	42698		深鉢	胴部						貝殻条痕 沈線文			ナデ		明赤褐	にぶい赤褐	○	○		○	○	○		良	
	235	I-47	Ⅲd	38878		深鉢	胴部						貝殻条痕			貝殻条痕 ナデ		灰褐	にぶい赤褐		○		○	○			良	外面煤付着
	236	I-48	Ⅲd	38583		深鉢	胴部						沈線文 キザミ					にぶい赤褐	にぶい赤褐		○	○	○	○	○		良	
50	237	E-39	Ⅳ	38244		深鉢	口縁部		(32.4)			沈線文 貝殻条痕			貝殻条痕 ナデ			にぶい褐	にぶい黄橙	○	○	○	○	○	○		良	
	238	I-48	Ⅲd	38585		深鉢	口縁部					沈線文 貝殻条痕			貝殻条痕 ナデ			にぶい赤褐	にぶい褐	○	○		○	○			良	
	239	I-48	Ⅲd	38520		深鉢	口縁部					沈線文 貝殻条痕			貝殻条痕 ナデ			にぶい赤褐	にぶい黄褐	○	○	○	○	○			良	
	240	I-47	Ⅲd	38726		深鉢	口縁部					沈線文			ナデ			にぶい赤褐	明褐	○	○	○	○	○	○		良	
	241	B-7 C-6	Ⅲd Ⅳ	50228 50356		深鉢	口胴部						貝殻条痕 ナデ 沈線文			貝殻条痕 ナデ		にぶい赤褐	明赤褐	○	○			○	○	石英	良	
	242	B-23	ⅢC	一括		深鉢	胴部						沈線文			貝殻条痕 ナデ		褐灰	にぶい褐		○	○	○	○			良	外面煤付着
	243	I-48	Ⅲd	38610		深鉢	胴部						沈線文 貝殻刺突			貝殻条痕 ナデ		明赤褐	にぶい赤褐		○	○	○	○			良	外面煤付着
	244	I-48	Ⅲd	38525		深鉢	胴部						沈線文 貝殻刺突			ナデ		明赤褐	にぶい赤褐		○		○	○		輝石 石英	良	
	245	I-48	Ⅲd	38608		深鉢	胴部						沈線文 貝殻刺突			貝殻条痕 ナデ		灰褐	明赤褐		○		○	○		石英	良	
51	246	I-48	Ⅲd	38738 38894 38762		深鉢	口縁部～胴部				沈線文	沈線文 ナデ			沈線文 ナデ			橙	にぶい褐	○	○			○	○		良	波状口縁 外面煤付着 穿孔
	247	I-48	Ⅲd	38588		深鉢	口縁部				沈線文	ナデ			ナデ 沈線文			にぶい赤褐	明赤褐	○	○			○	○		良	波状口縁 外面煤付着
	248	I-48	Ⅲd	38590		深鉢	口縁部					沈線文 ナデ	刺突文		ナデ			黒	明赤褐		○	○	○	○			良	波状口縁 外面煤付着，穿孔
	249	I-48	Ⅲd	38739		深鉢	胴部						刺突文 沈線文			ナデ		にぶい赤褐	明赤褐		○		○	○			良	外面煤付着
	250	C-6	Ⅳ	50357		深鉢	口縁部		(24.0)			刺突連点文 沈線文 貝殻刺突文			貝殻条痕			赤灰	明赤褐		○			○		石英	良	外面煤付着
	251	I-48	Ⅲd	38581		深鉢	口縁部					刺突連点文 沈線文	沈線文 刺突連点文		刺突連点文 沈線文	ナデ		にぶい赤褐	にぶい褐	○	○		○	○			良	波状口縁 外面煤付着，穿孔
52	252	F-40	Ⅳ	38720 38281		深鉢	口縁部					貝殻条痕 連続爪形文			貝殻条痕 ナデ			にぶい赤褐	灰赤		○			○			良	
	253	F-40	Ⅳ	38300		深鉢	口縁部					連続爪形文			貝殻条痕 ナデ			灰赤	にぶい赤褐	○	○			○		石英	良	
	254	F-40	Ⅳ	38282		深鉢	口縁部					連続爪形文			貝殻条痕 ナデ			灰赤	にぶい赤褐	○	○			○		石英	良	
	255	C-6	Ⅲd	50339		深鉢	口縁部					連続爪形文 ナデ	刺突文		ナデ			灰褐	明赤褐	○	○		○	○			良	
	256	E-4	Ⅲb	50486		深鉢	胴部						連続爪形文 ナデ			ナデ		にぶい赤褐	明赤褐		○	○	○	○			良	
	257	H-45	Ⅲd	42743		深鉢	胴部					貝殻条痕 連続爪形文				貝殻条痕		黒褐	明赤褐	○	○			○	○		良	外面煤付着

第12表-２　縄文時代前～晩期　出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	分類	器種	部位	法量(cm)			文様・調整							色調		胎土							焼成	備考
								器高	口径	底径	外面				内面			外面	内面	黒色	白色	赤色	雲母	長石	角閃	その他		
											口唇部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部											
52	258	H-46	Ⅲd	38757		深鉢	口縁部					貝殻刺突文 貝殻条痕			貝殻条痕			灰褐	にぶい赤褐	○	○			○	○		良	
	259	F-41	Ⅳ	38292		深鉢	口縁部					貝殻刺突文 貝殻条痕			貝殻条痕			にぶい赤褐	赤灰	○	○	○		○			良	
	260	G-42	Ⅲd	38106 38107 38108		深鉢	口縁部 ～胴部					沈線文 ナデ			ナデ			褐灰	褐灰		○	○		○	○		良	
	261	G-42	Ⅲd	38104		深鉢	口縁部					沈線文 ナデ			ナデ			褐灰	にぶい赤褐		○			○	○		良	
	262	F-42	Ⅲd	38134		深鉢	口縁部				刺突連点文	ナデ			ナデ			にぶい赤褐	灰褐	○	○	○	○	○			良	
	263	F-42	Ⅲd	38133		深鉢	口縁部				刺突連点文	ナデ			ナデ			にぶい赤褐	灰褐	○	○		○	○			良	
	264	I-48	Ⅲd	38516		深鉢	胴部						沈線文			貝殻条痕 ナデ		灰褐	明赤褐	○	○	○	○	○		石英	良	外面煤付着
	265	I-48	Ⅲd	38893		深鉢	胴部						沈線文			貝殻条痕 ナデ		灰褐	にぶい赤褐	○	○		○	○			良	
	266	F-41	Ⅲd	38029		深鉢	口縁部					連続爪形文 ナデ			貝殻条痕			にぶい赤褐	にぶい赤褐		○		○	○			良	外面煤付着
	267	K-54	Ⅲd	38077		深鉢	口縁部					貝殻刺突文			貝殻条痕			灰赤	にぶい赤褐	○	○	○	○	○			良	波状口縁，外面煤付着，植物痕
	268	G-43	Ⅲd	38092		深鉢	胴部						連続爪形文 ナデ			ナデ		赤灰	にぶい赤褐		○		○	○			良	外面煤付着
	269	I-49	Ⅲd	38595		深鉢	口縁部					爪形刺突文			ナデ			明赤褐	灰褐	○	○		○	○			良	
53	270	H-47	Ⅲd	38547		深鉢	口縁部					沈線文			ナデ			にぶい褐	にぶい褐		○	○	○	○		石英	良	外面煤付着
	271	G-42	Ⅲd	38110		浅鉢	口縁部					沈線文			ナデ			灰褐	灰褐		○	○		○	○		良	波状口縁 外面煤付着
	272	G-42	Ⅲd	38044		深鉢	胴部						沈線文 キザミ			ナデ		黒褐	灰褐		○	○		○			良	外面煤付着
	273	G-42	Ⅲd	38096		深鉢	胴部						沈線文 キザミ			ナデ		黒褐	灰褐		○			○	○		良	外面煤付着
	274	H-44	Ⅲd	42705		深鉢	胴部						刺突連点文 沈線文			ナデ		にぶい褐	黒褐	○	○			○			良	内面煤付着
	275	E-39	Ⅲd	38223		深鉢	胴部						刺突連点文 沈線文			ナデ		灰褐	にぶい褐		○			○	○		良	
	276	I-49	Ⅲd	38460 38579		深鉢	胴部						沈線文			ナデ		にぶい赤褐	にぶい黄橙		○		○	○			良	外面煤付着
54	277	I-47	Ⅲd	38654		深鉢	口縁部					刺突連点文 沈線文	ナデ後 ミガキ		ナデ			灰褐	灰褐		○	○		○	○		良	外面煤付着
	278	K-55	Ⅲd	38078 38079		深鉢	口縁部 ～胴部					沈線文	ナデ後 ミガキ		ナデ			赤褐	にぶい赤褐		○	○		○	○		良	外面煤付着
	279	H-45	Ⅲd	38759 42751		深鉢	胴部						沈線文 刺突連点文 ミガキ			ナデ		灰褐	灰褐	○	○	○		○		石英	良	外面煤付着
	280	I-46	Ⅲd	38534		深鉢	胴部						ミガキ ナデ			ナデ		にぶい黄橙	褐灰	○	○			○	○		良	
	281	F-42	Ⅲd	38042		浅鉢	口縁部 ～胴部					沈線文	ミガキ ナデ			ミガキ ナデ		にぶい赤褐	橙	○	○	○		○		石英	良	沈線文２条 外面煤付着
	282	I-47	Ⅲd	38873 38900 39066 38948 38882		深鉢	胴部～ 底部	(5.7)		(11.4)			貝殻条痕	網代痕		貝殻条痕		明赤褐	にぶい橙		○		○	○	○		良	
	283	I-49 H-49	Ⅲd Ⅳ	38632 38455 38634 39062		深鉢	胴部～ 底部	(4.8)		(10.8)			貝殻条痕	網代痕		貝殻条痕		にぶい赤褐	黒褐		○			○	○	輝石	良	
	284	I-48	Ⅲd	38584		深鉢	胴部～ 底部	(2.6)		(10.4)			ナデ	もじり痕 網代痕		ナデ		明赤褐	にぶい赤褐		○	○	○	○			良	
	285	I-48	Ⅲd	38610		深鉢	底部						ナデ	網代痕		ナデ		にぶい赤褐	にぶい赤褐		○	○	○	○			良	
	286	I-48	Ⅲd	38521		深鉢	底部	(2.1)		(12.0)			ナデ	もじり痕 網代痕		ナデ		にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○			○	○	石英	良	
	287	H-45	Ⅲd	42736		深鉢	底部							貝殻条痕		貝殻条痕 後ナデ		灰黄褐	灰褐		○			○		石英	良	
	288	G-42	Ⅲd	38049		浅鉢	口縁部	(5.4)	(27.6)		沈線文 ミガキ				ミガキ 沈線文			にぶい赤褐	褐灰	○	○	○		○		石英	良	
	289	H-45	Ⅲd	42710 42712		鞠	口縁部	(3.2)	(15.4)			沈線文 ナデ			沈線文 ナデ			灰褐	にぶい赤褐		○	○		○	○		良	
	290	H-45	Ⅲd	42739 42740		浅鉢	口縁部 ～胴部					沈線文	ミガキ		沈線文 ミガキ			にぶい橙	褐灰		○			○	○		良	
	291	H-45	Ⅲd	42738		浅鉢	口縁部					沈線文 ミガキ			沈線文 ミガキ			にぶい橙	褐灰		○			○	○		良	
	292	H-45	Ⅲd	38541		深鉢	口縁部					沈線文 ミガキ			沈線文 ミガキ			にぶい黄橙	にぶい黄橙			○		○		石英	良	
	293	C-6	Ⅲd	50292		浅鉢	胴部						ミガキ			ナデ		にぶい黄褐	褐灰		○	○	○	○			良	
	294	H-45	Ⅲd	38540		浅鉢	胴部						ミガキ			ナデ		にぶい黄橙	にぶい黄橙		○	○	○	○	○		良	
55	295	D-4	Ⅲb	50404		鞠	口縁部 ～胴部	(6.7)	(12.6)			突帯文	ナデ			ナデ		にぶい橙	黒		○	○	○	○	○		良	外面煤付着 内面黒色化
	296	D-4	Ⅲb	50405		鞠	口縁部 ～胴部	(7.4)	(12.6)			突帯文	ナデ			ナデ		にぶい橙	黒		○	○	○	○	○		良	種子痕有 内面黒色化
	297	D-4	Ⅲb	50408		鞠	口縁部	(4.1)	(14.4)			突帯文	ナデ			ナデ		にぶい橙	黒		○	○	○	○	○		良	内面黒色化
	298	I-50	Ⅲd	42697		深鉢	底部	(2.1)		(11.2)				ナデ			ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○	○	○		○	○		良	
	299	B-7	Ⅲb	50062		深鉢	口縁部					刻目突帯文	ミガキ ナデ		ナデ			にぶい赤褐	にぶい黄褐		○		○	○	○	石英	良	

第12表-３　縄文時代前～晩期　出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	分類	器種	部位	法量(cm)			文様・調整							色調		胎土							焼成	備考
								器高	口径	底径	外面				内面			外面	内面	黒色	白色	赤色	雲母	長石	角閃	その他		
											口唇部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部											
55	300	C-7	Ⅲb	50247		深鉢	口縁部					刻目突帯文	ミガキ ナデ		ナデ			にぶい赤褐	にぶい黄褐	○	○		○	○	○		良	
	301	C-7	Ⅲb	50151		深鉢	胴部						刻目突帯文 ナデ			ナデ		にぶい褐	にぶい褐	○	○			○	○		良	
	302	I-49	Ⅲd	38602		深鉢	口縁部					貝殻条痕 後ナデ			ナデ			褐	黒		○		○	○		石英	良	
	303	I-49	Ⅲd	38600		深鉢	胴部						貝殻条痕 後ナデ			ケズリ		明褐	黒		○		○	○			良	
	304	I-47	Ⅲd	38724 38949		深鉢	胴部						貝殻条痕			貝殻条痕		灰褐	にぶい橙		○	○		○	○		良	外面煤付着
	305	I-47	Ⅲd	38449		深鉢	胴部						貝殻条痕			貝殻条痕		にぶい橙	にぶい橙		○	○		○	○	石英	良	
	306	H-45	Ⅲd	42755		深鉢	胴部						貝殻条痕			貝殻条痕		黒	にぶい橙	○	○			○	○		良	外面煤付着
	307	H-45 I-45	Ⅲd	38535 42747		深鉢	胴部						貝殻条痕			貝殻条痕		灰褐	灰褐		○	○		○	○	石英	良	
	308	H-45	Ⅲd	42758		深鉢	胴部						貝殻条痕 後ナデ			貝殻条痕 後ナデ		橙	橙	○	○	○		○	○	石英	良	
56	309	F-38	Ⅳ	38269		深鉢	胴部						貝殻条痕 後ナデ			貝殻条痕 後ナデ		橙	にぶい褐		○	○		○	○	石英	良	
	310	F-38	Ⅳ	38271		深鉢	胴部						貝殻条痕			貝殻条痕		橙	にぶい褐		○	○		○	○	石英	良	
	311	C-6	Ⅲd	50295 50284		深鉢	胴部						貝殻条痕			貝殻条痕		橙	黒褐	○	○	○		○	○		良	
	312	C-6	Ⅲd	50284		深鉢	胴部						貝殻条痕			貝殻条痕		橙	黒褐	○	○	○		○	○		良	
	313	C-6	Ⅳ	50296		深鉢	底部	(2.8)		(7.0)				ナデ		貝殻条痕		にぶい赤褐	黒褐	○	○	○		○	○		良	
	314	I-48	Ⅲd	38648 38647		深鉢	底部						貝殻条痕	ナデ		貝殻条痕 後ナデ		明赤褐	明赤褐	○	○		○	○		石英	良	
	315	B-24	Ⅲd	60006		深鉢	底部	(4.6)		(11.2)			貝殻条痕 後ナデ	ナデ		貝殻条痕		にぶい褐	にぶい橙	○	○		○	○			良	
	316	I-49	Ⅲd	38638		深鉢	底部						貝殻条痕	ナデ		ナデ		赤褐	にぶい赤褐	○	○		○	○			良	
	317	H-45	Ⅲd	42733		深鉢	底部	(2.2)		(8.2)			貝殻条痕	ナデ		貝殻条痕		にぶい褐	にぶい褐		○			○	○		良	
	318	I-48	Ⅲd	38589		深鉢	底部 付近						貝殻条痕			貝殻条痕		明赤褐	明赤褐	○	○		○	○	○		良	
	319	H-46	Ⅲd	38754		深鉢	口縁部					沈線文 ナデ			ナデ			にぶい赤褐	にぶい赤褐		○	○		○	○		良	
	320	L-50	Ⅲd	38356		深鉢	胴部						刺突文 工具ナデ			ナデ		にぶい橙	橙	○	○	○		○	○	石英	良	
	321	K-48	Ⅳ	38359		深鉢	胴部						刺突文 工具ナデ			ナデ		にぶい橙	橙	○	○			○	○	石英	良	
57	322	I-45	Ⅲd	42761 42762 42763 42759		深鉢	胴部						工具ナデ			貝殻条痕		明赤褐	にぶい褐		○			○	○	石英	良	
	323	J-46	Ⅴ	38390 38391 38392 38393 38395 38396 38397		深鉢	胴部						工具ナデ			貝殻条痕		橙	橙	○	○			○	○	石英	良	
	324	C-23	Ⅲd	60039 60040 60041		深鉢	底部	(3.2)		(8.8)				ナデ			ナデ	にぶい赤褐	灰黄褐	○	○		○	○			良	
	325	H-45	Ⅲd	42737		深鉢	底部	(2.2)		(10.0)				ナデ			ナデ	橙	黒		○			○	○		良	
	326	I-49	Ⅲd	38510		深鉢	底部	(3.1)		(7.4)				ナデ			ナデ	にぶい橙	褐灰	○	○			○	○		良	
	327	H-48	Ⅲd	38627 38574		浅鉢	底部	(2.6)		3.9				ミガキ ナデ			ナデ	黒褐	黄褐		○	○		○	○		良	
	328	H-45	Ⅲd	42722 42724 42725 42726 42727 42729 42731 42765		深鉢	胴部						ナデ後 ミガキ			ナデ後 ミガキ		黒褐	黄褐	○	○			○	○	石英		外面煤付着
	329	F-42 H-46	Ⅲd	38041 38536		浅鉢	胴部						ミガキ			ミガキ		黒褐	黒褐	○	○			○	○	石英	良	外面煤付着
	330	H-46	Ⅲd	38539 38622		浅鉢	胴部						ミガキ			ナデ		黒褐	灰黄褐	○	○			○	○	石英	良	外面煤付着
	331	H-47 I-47	Ⅲd	38548 38662		浅鉢	胴部						ミガキ ナデ			ナデ		にぶい黄橙	褐灰		○	○		○	○		良	外面煤付着
	332	F-41	Ⅲd	38160		深鉢	胴部						ミガキ			ナデ		黒褐	灰褐	○	○	○		○	○	石英	良	

第３節　弥生時代以降の調査成果

１　調査の概要

遺跡における弥生時代以降の調査は，Ⅲ・Ⅳ層を対象に行った。検出した遺構は，過年度の調査から継続しているものを含めて，竪穴建物跡３軒，掘立柱建物跡１棟，円形周溝１基，土坑２基，集石３基，帯状硬化面13条である。土器は，甕形土器，壺形土器，鉢形土器などが出土した。石器については，明確な時期の判定が困難であったため，「Ⅲ～Ⅴ層出土の石器」として掲載する。

２　遺構

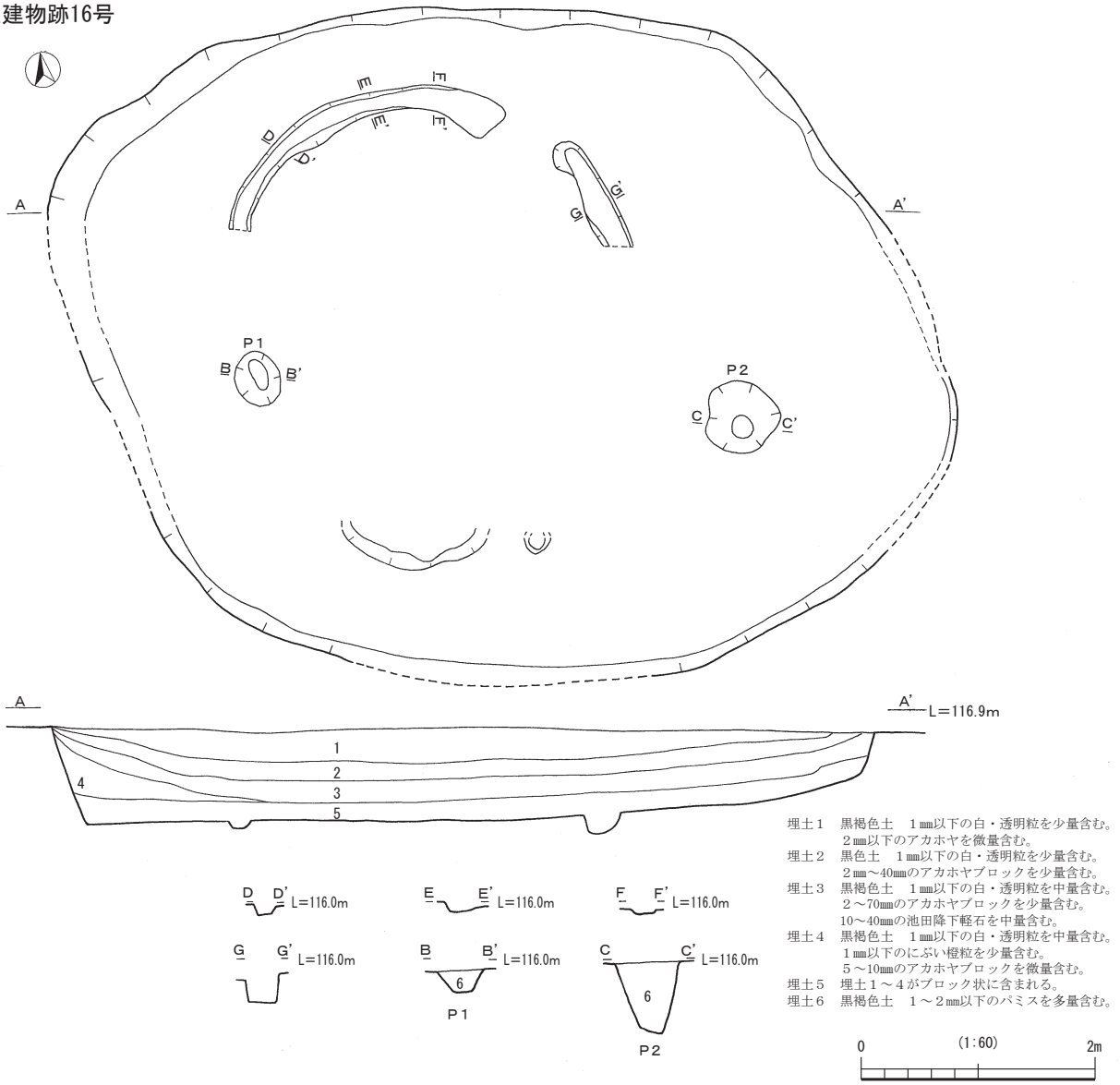
(1)　竪穴建物跡

過年度調査から引き継いで検出した３軒を掲載する。『田原迫ノ上遺跡１』では，遺構名を「竪穴住居跡」としていたが，住居と判断するには明確な根拠が十分に得られないため，「竪穴建物跡」とする。

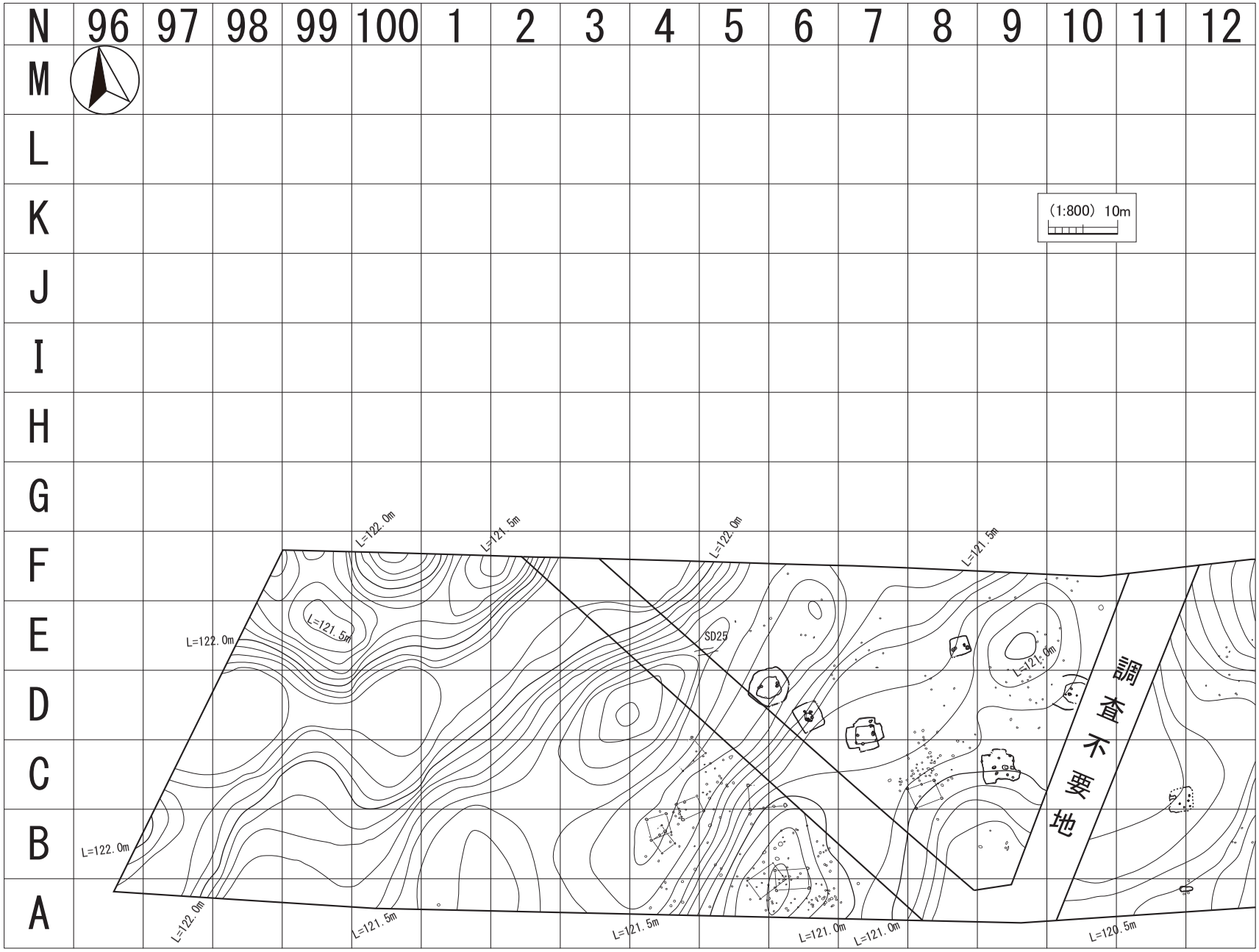
竪穴建物跡16号（第58図）

Ｇ－30区で検出された。検出面はⅢd層である。直径７ｍ強の円形を呈している。北側に弧状の溝が見られるが，中央部が畑管の埋設のためカクランを受けており，全形は不明である。検出面から床面までは深く，80cm程ある。全体に貼り床がされている。柱穴と考えられるピットが２基検出された。特にＰ２は深く，検出面から60cm程ある。遺構内に堆積している土は５つに分層できる。埋土１は黒褐色土で白・透明粒とアカホヤを少量含む。埋土２は黒色土で白・透明粒とアカホヤブロックを含む。埋土３は黒褐色土で白・透明粒とアカホヤブロック，池田降下軽石を含む。埋土４は黒褐色土で白・透明粒とにぶい橙粒，アカホヤブロックを含む。埋土５は貼り床の土で埋土１から埋土４の土がブロック状に含まれる。出土遺物は少なく，２点の土器を『田原迫ノ上遺跡１』で掲載している。

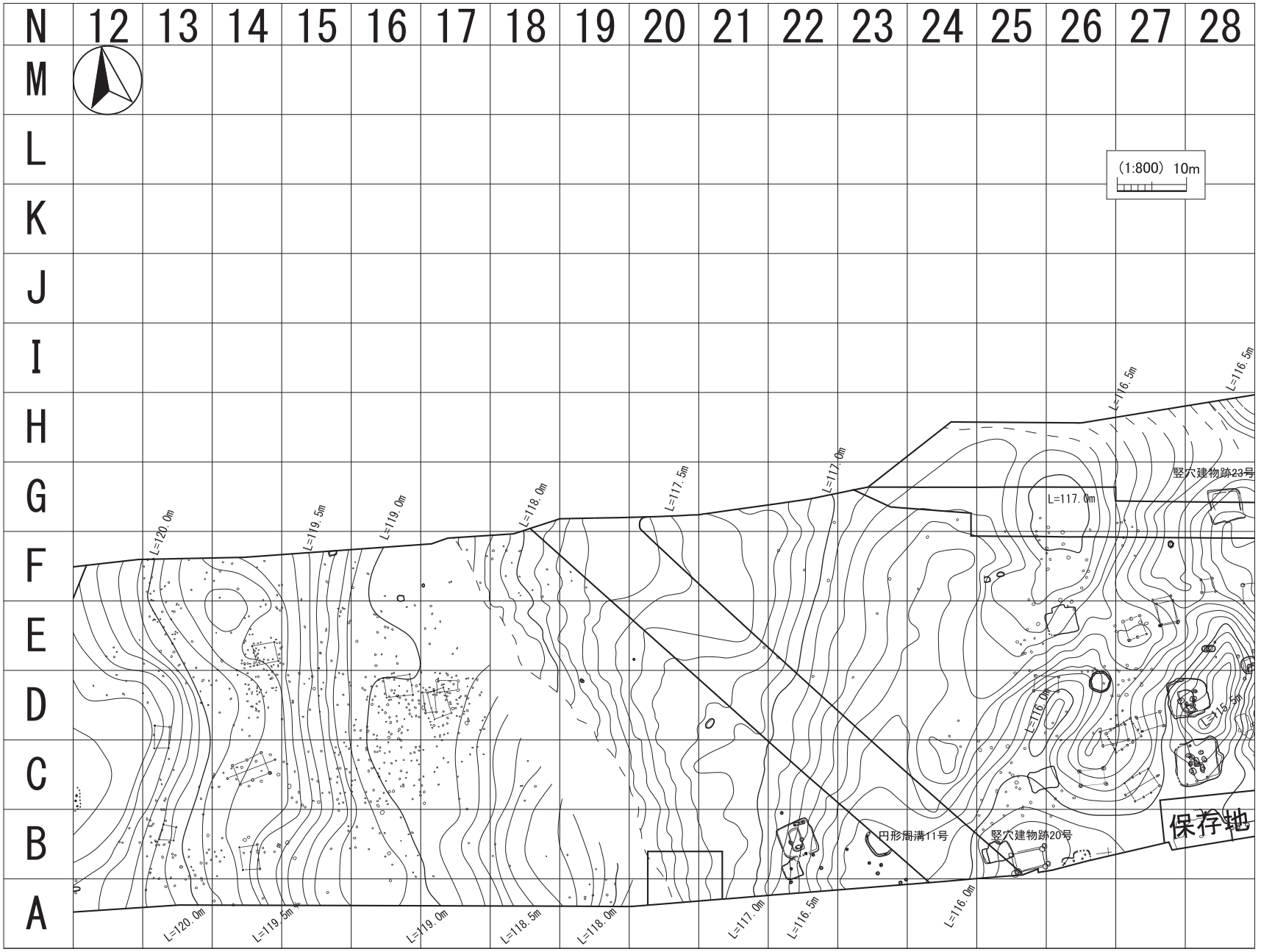
竪穴建物跡16号



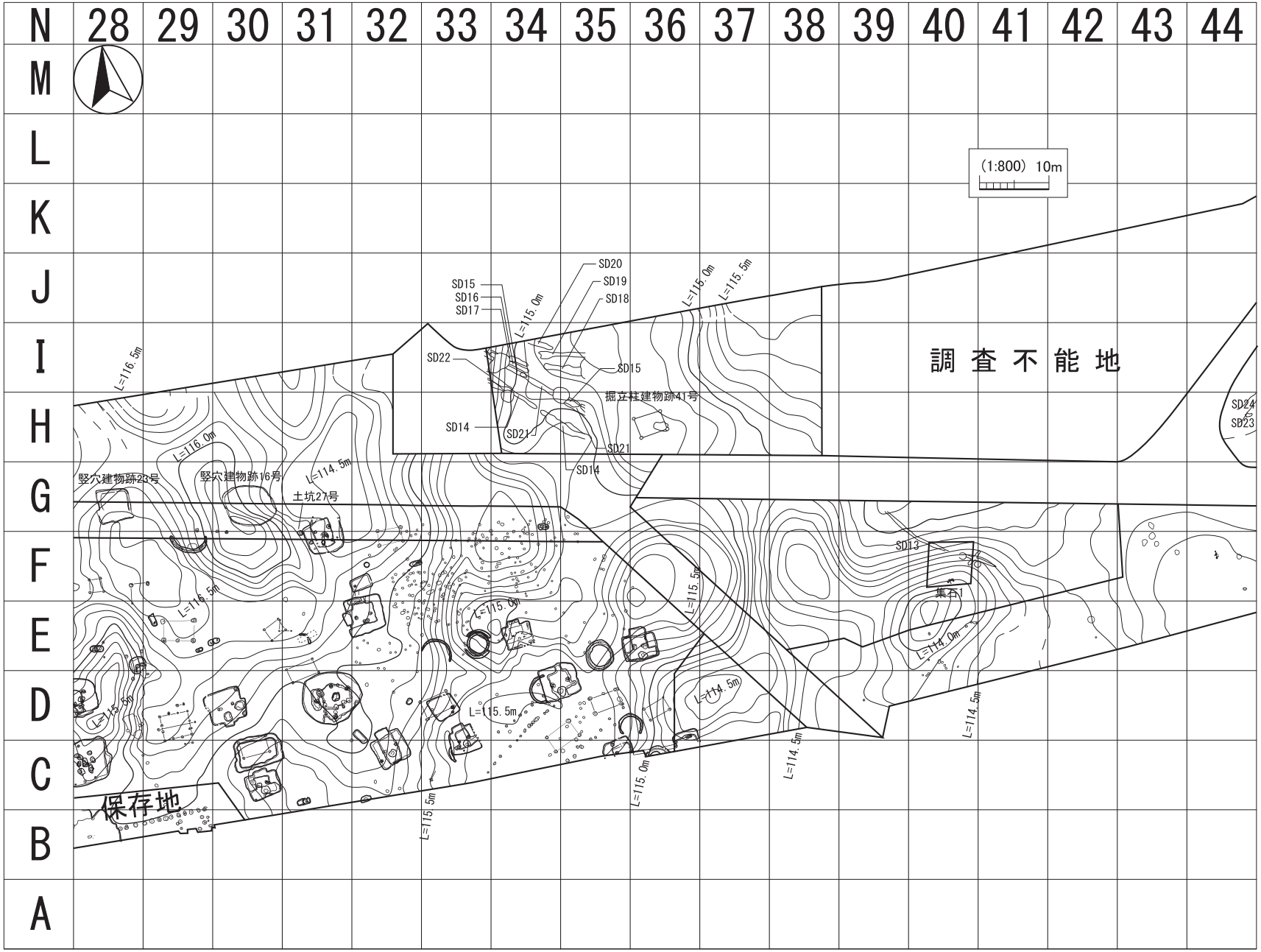
第58図　竪穴建物跡16号



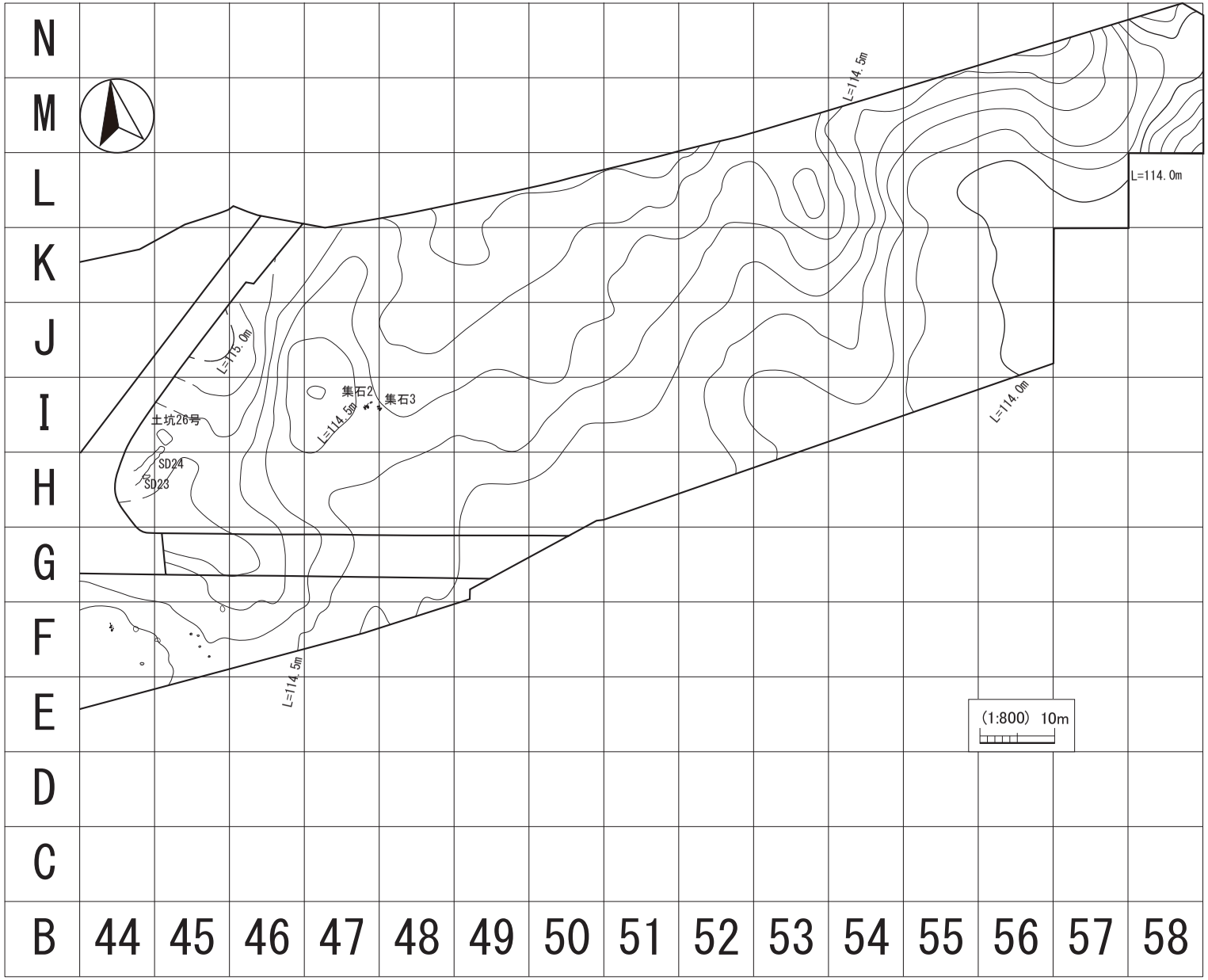
第59図　弥生時代遺構配置図１



第60図　弥生時代遺構配置図２



第61図　弥生時代遺構配置図３



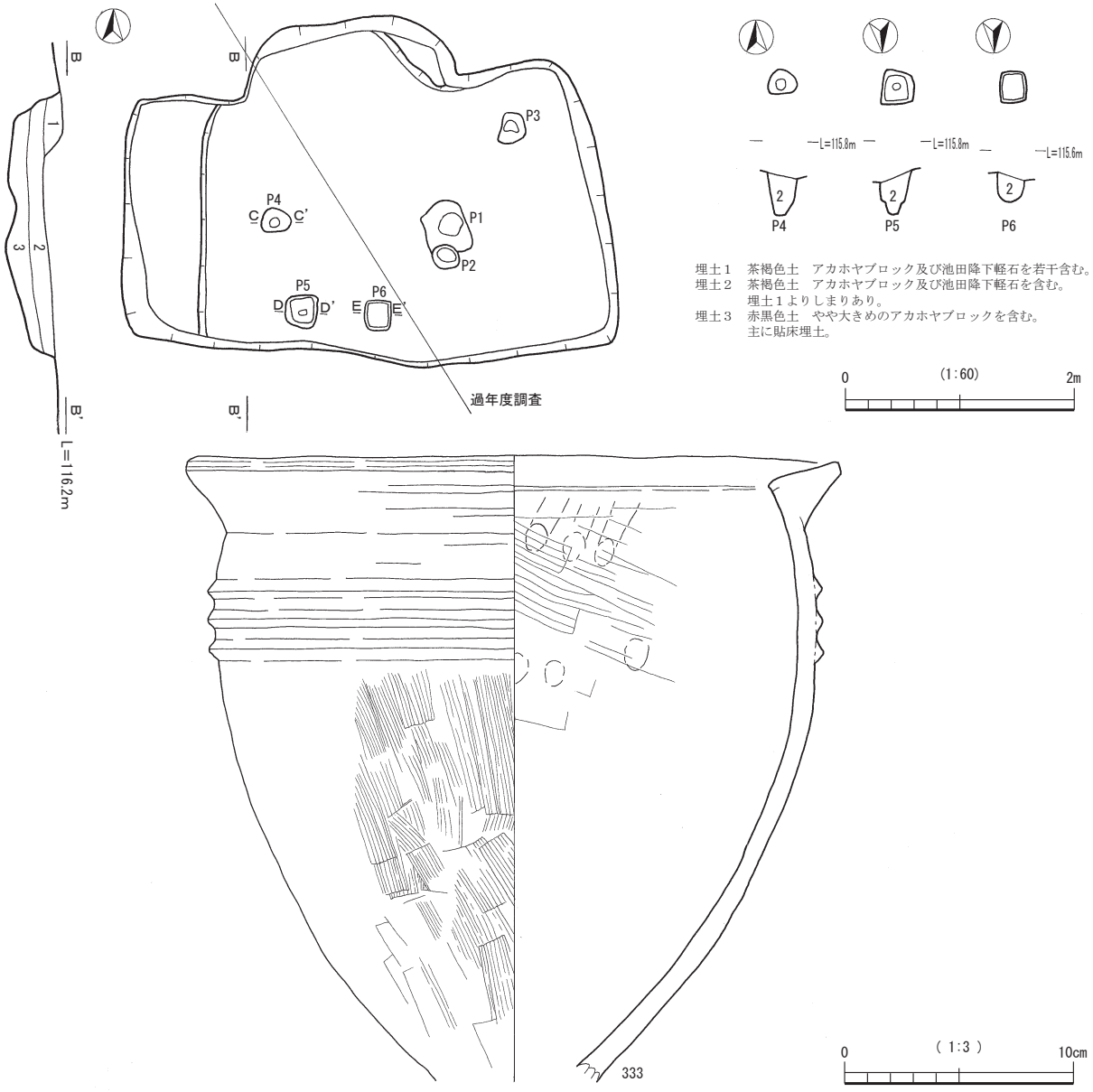
第62図　弥生時代遺構配置図４

竪穴建物跡20号（第63図）

Ｂ－25区で検出された。検出面はⅣ層である。平面形状は北側の１辺が張り出した方形を呈する。大きさは長軸430cm，短軸300cmで，検出面から床面までの深さは深いところで45cmである。本遺跡の弥生時代竪穴建物の中では標準的な大きさと言える。北側の張り出し部分の床面の深さは同一であり，西側の張り出し部分はベッド状になっている。中央部に掘り込みは見られない。北側の張り出し部，東側の壁には，小さく不整形の段があるが，出入り口であるかどうかは不明である。ピットは６基検出されたが，Ｐ１，Ｐ４が２主柱穴であると考えられる。Ｐ２，Ｐ３，Ｐ５，Ｐ６については判断できない。遺構内に堆積している土は３層に分層できる。埋土１は茶褐色土で若干のアカホヤブロック及び池田降下軽石を含んでおり，やや締まりがある。埋土２も茶褐色土で，埋土１より締まりがある。埋土１・２はいずれもⅢ～Ⅳ層の混土と考えられる。埋土３は赤黒色土で，アカホヤブロックを含み，締まりがある。

出土した土器は小片も含めて99点である。過年度調査で出土した東側の遺物は，『田原迫ノ上遺跡１』に掲載している。西側で出土した１点を図化した。333は甕の口縁部から胴部までの部分で，１個体がつぶれた状態で検出した。底部は欠く。形状は口縁部から胴部にかけて柔らかく膨らみ，底部へかけてすぼまっている。口径は28.6cmで，３条の整った三角突帯が巡っている。胴部外面には煤が付着している。器面調整は外面がハケ目調整，内面は指押えの後，ナデ調整を施している。

竪穴建物跡20号



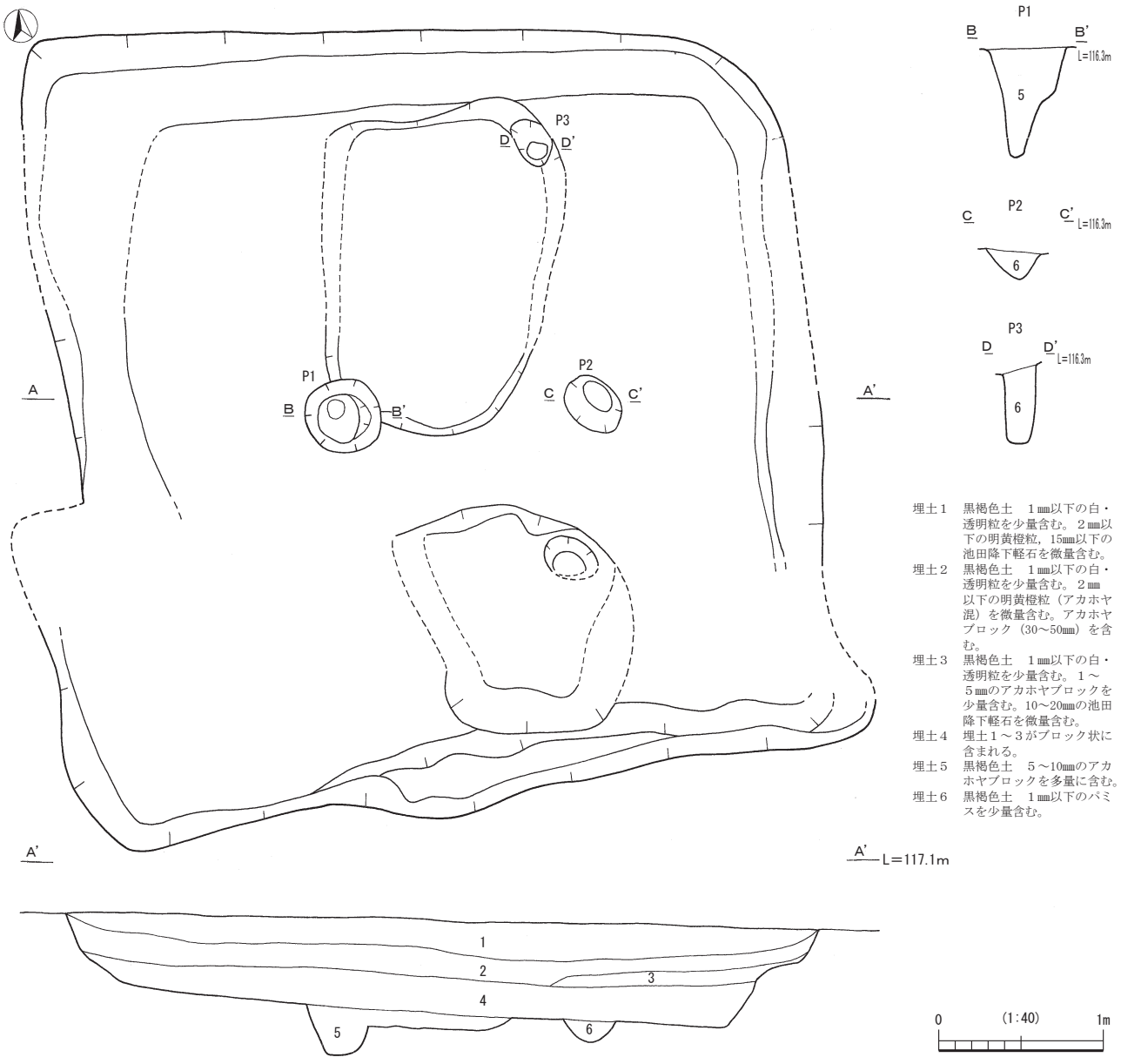
第63図　竪穴建物跡20号，出土遺物

竪穴建物跡23号（第64～66図）

Ｇ－28区で検出された。検出面はⅢｄ層である。形状は長軸480cm，短軸460cmの方形を呈している。検出面から床面までの深さは深いところで60cm程である。遺構内に堆積している土は４つに分層できる。埋土１は黒褐色土で池田降下軽石を微量含む。埋土２は黒褐色土でアカホヤブロックを含む。埋土３は黒褐色土で池田降下軽石とアカホヤブロックを含む。埋土４は貼床土で埋土１～３の土がブロック状に含まれる。南側の土坑から少量の炭化物が出土した。

147点の土器が出土した。『田原迫ノ上遺跡１』で掲載した遺物の他に，埋土中から山ノ口式土器が出土しており，南側の土坑のあたりからは床面直上から大甕が集中して出土した。そのうち５点を図化した。334は大型甕形土器の口縁部から胴部にかけての部分である。復元口径は52.2cmで，鍔部分の復元径は54.7cmである。器面調整は内外面ともミガキ調整を施している。335は甕形土器の口縁部から胴部にかけての部分である。復元口径は30.4cmで頸部の下に３条の三角突帯を巡らしている。外面に煤の付着が見られる。器面調整は外面が工具ナデ，内面は指押えの後工具ナデを施している。336は壺形土器の口縁部である。復元口径は27.2cmで口縁部が垂れ下がっている。器面調整は内外面ともミガキ調整を施している。胎土に金雲母を含む。337は壺形土器の胴部である。肩部に４条の三角突帯を巡らす。器面調整は内外面とも工具ナデを施している。外面に煤の付着が見られ，胎土に金雲母を含む。338は壺形土器の底部である。底径は3.5cmで内外面ともナデ調整を施している。

竪穴建物跡23号



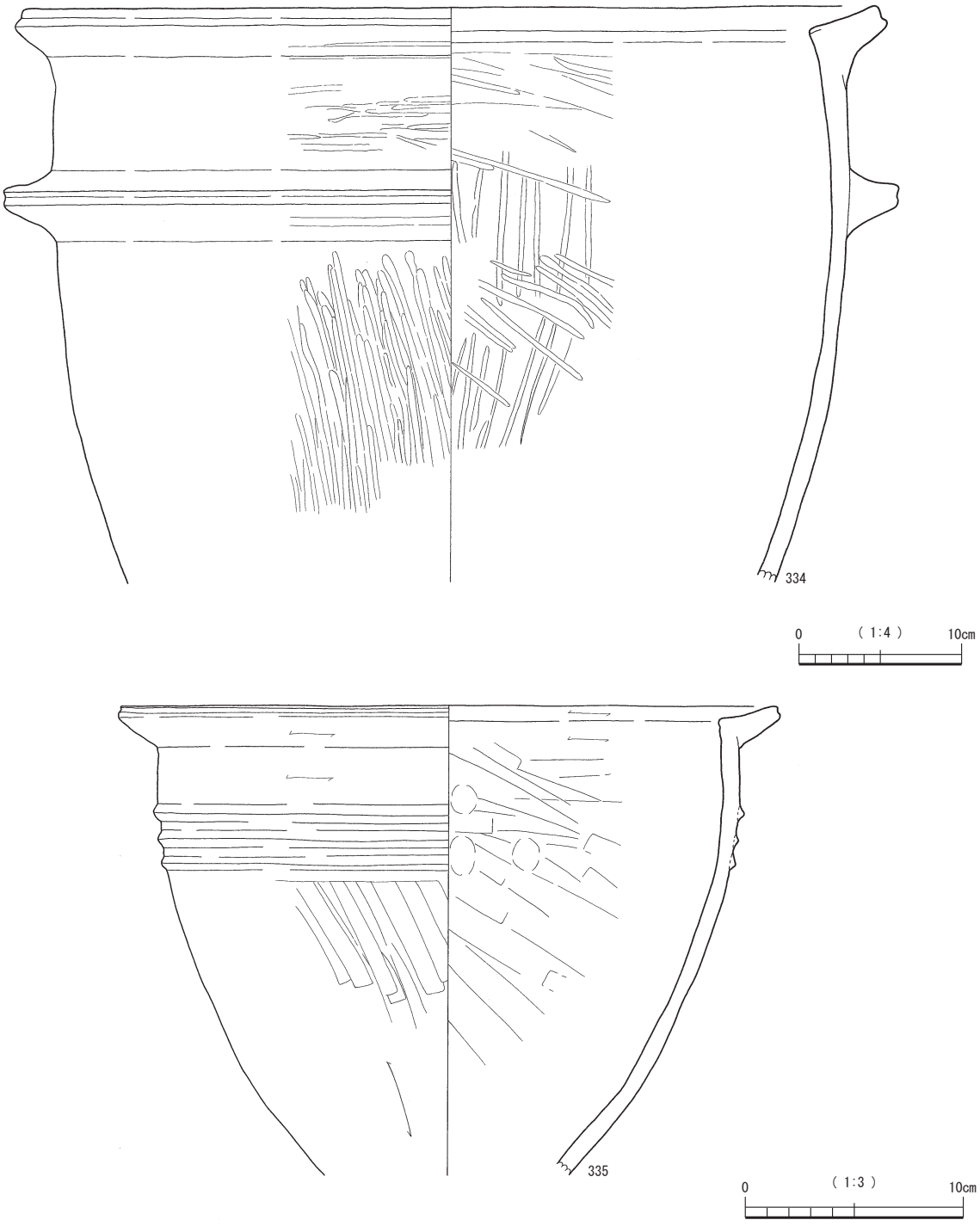
第64図　竪穴建物跡23号

(2)　掘立柱建物跡

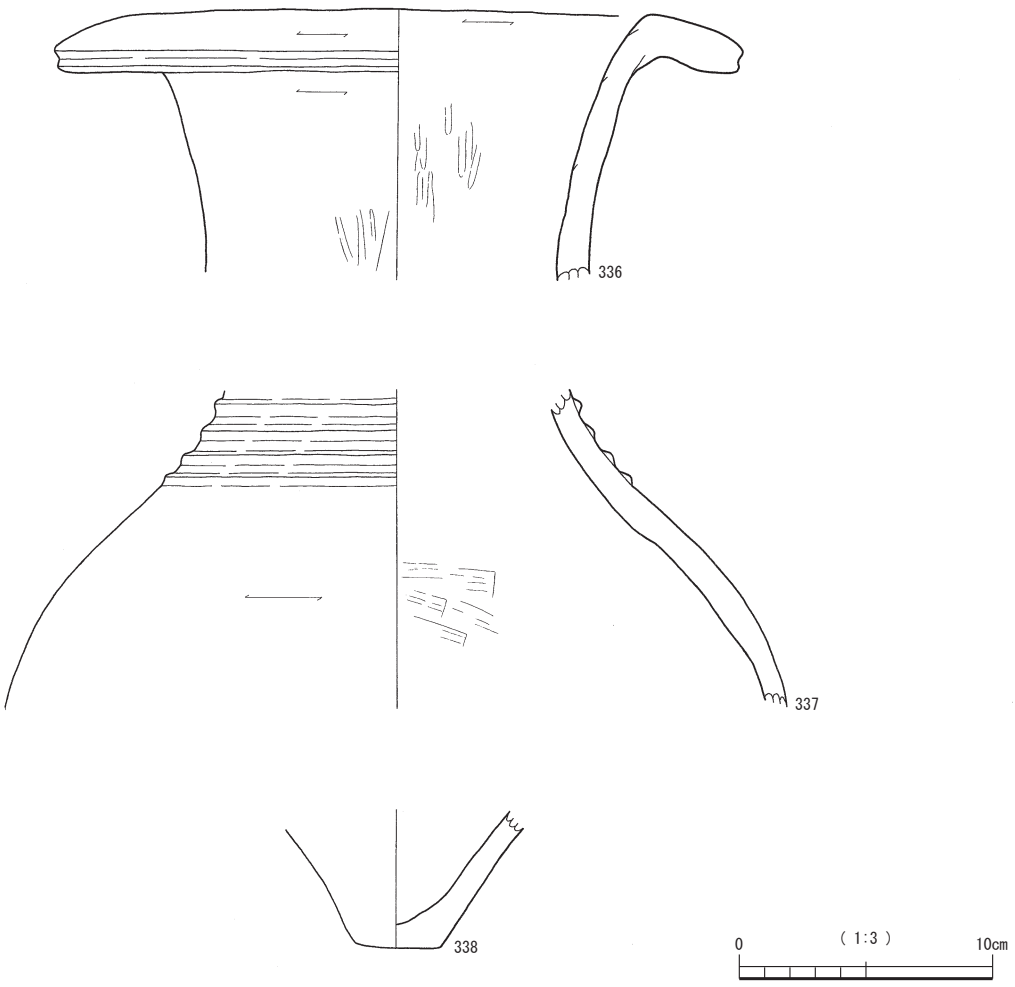
平成28年度に１棟検出した。平成30年度にはピットを４基検出し，位置関係から掘立柱建物跡の可能性があると考え調査した。しかし，畑管埋設地により遺構全体の調査が不可能だったため，詳細については不明となった。

掘立柱建物跡41号（第66図）

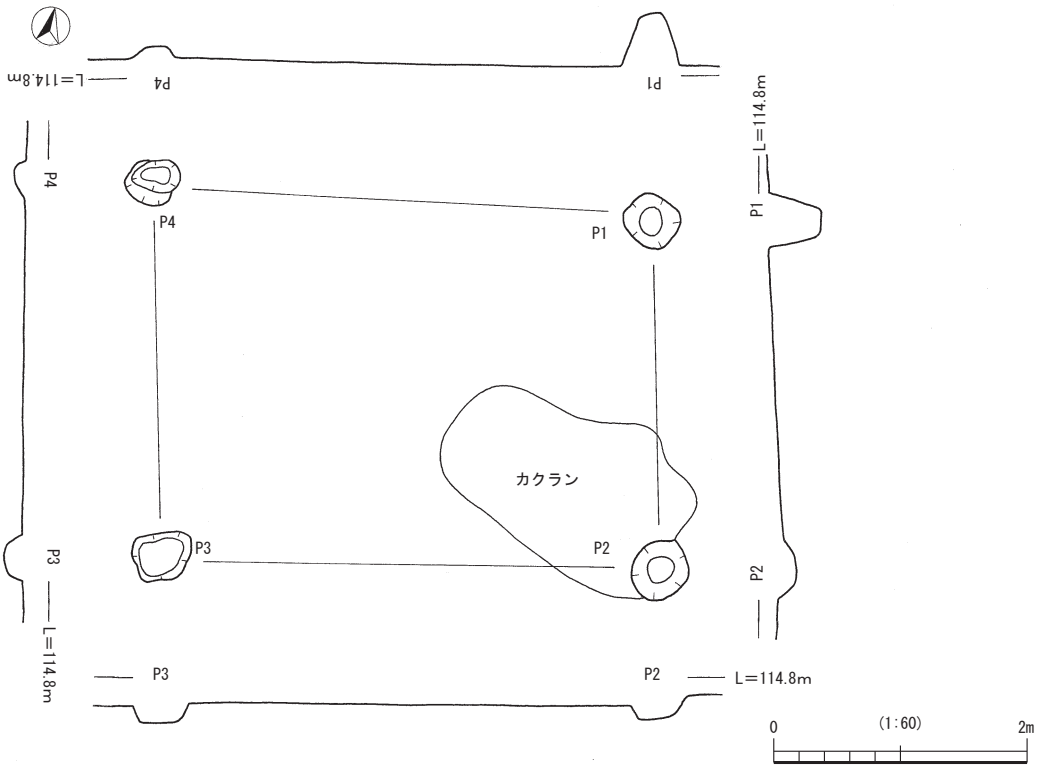
掘立柱建物跡41号はＨ－36区で検出された。検出面はⅣ層である。１間×１間の建物規模である。平面形は長方形を呈しており，梁行Ｐ１－Ｐ２＝280cm，Ｐ１－Ｐ４＝390cmを測る。内角は∠Ｐ１・∠Ｐ２・∠Ｐ３が88°，∠Ｐ２・∠Ｐ３・∠Ｐ４が92°，∠Ｐ３・∠Ｐ４・∠Ｐ１が86°，∠Ｐ４・∠Ｐ１・∠Ｐ２が94°である。ピットの形状はほぼ円形を呈しており，平均して半径47cm×38cm，深さ17cmである。遺物は確認されなかった。



第65図　竪穴建物跡23号出土遺物１



堀立柱建物跡41号



第66図　竪穴建物跡23号出土遺物２，掘立柱建物跡41号

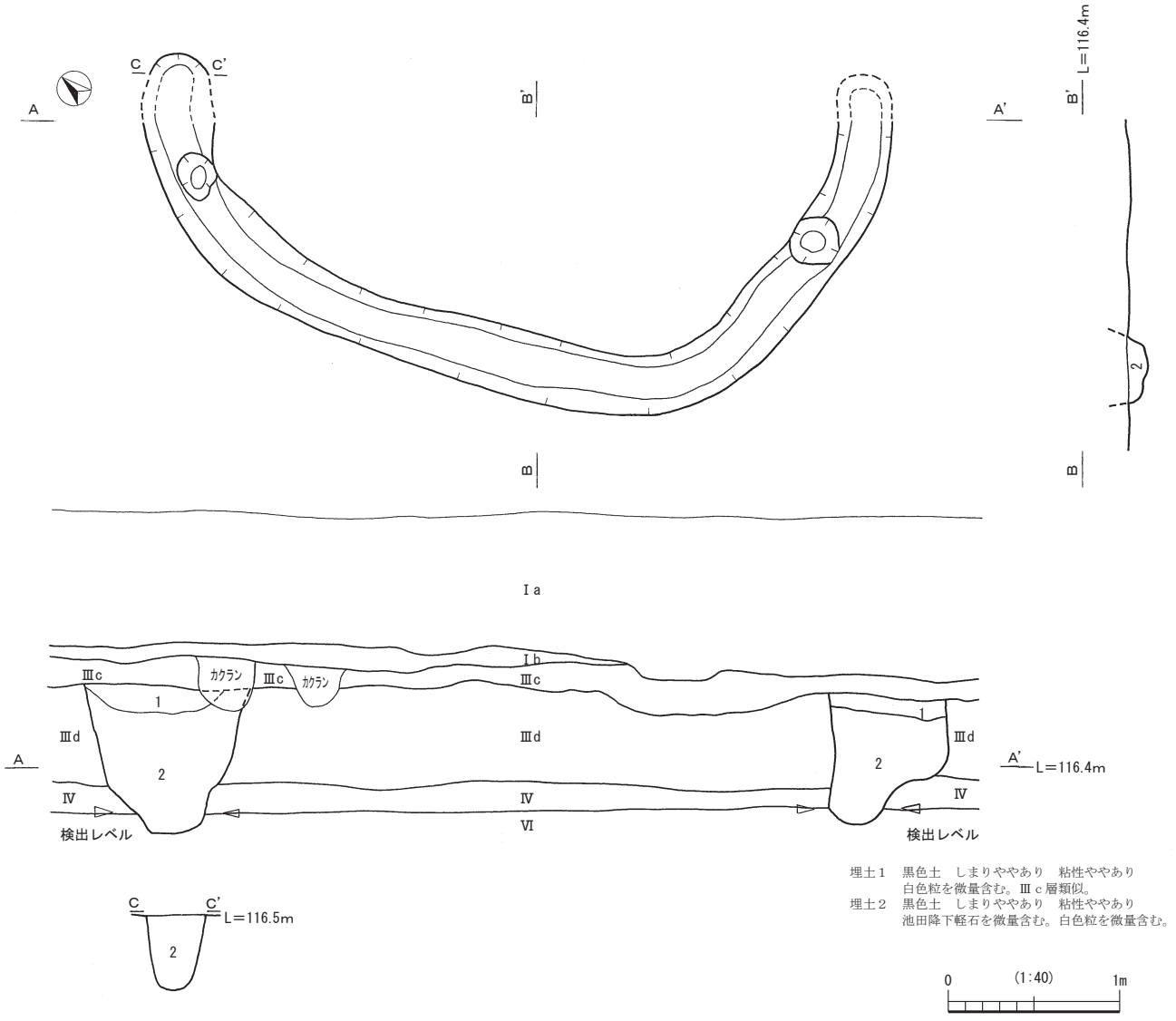
(3)　円形周溝

平成25年度の調査で遺構の約半分ほどが検出し，調査区外へ続く様子が確認できていた。平成30年度に引き続き調査を行い，残存部の検出に努めた。

円形周溝11号（第67図）

平成25年度の調査区境の断面を精査したところ，Ｂ－23区で断面の１つを検出し，円形周溝11号の北側の続きであることが判明した。10cmほど掘り進めたところで完掘となった。南側の続きは精査を行ったが，検出されなかった。

円形周溝11号



第67図　円形周溝11号

(4)　土坑

平成28年度の調査で２基検出された。

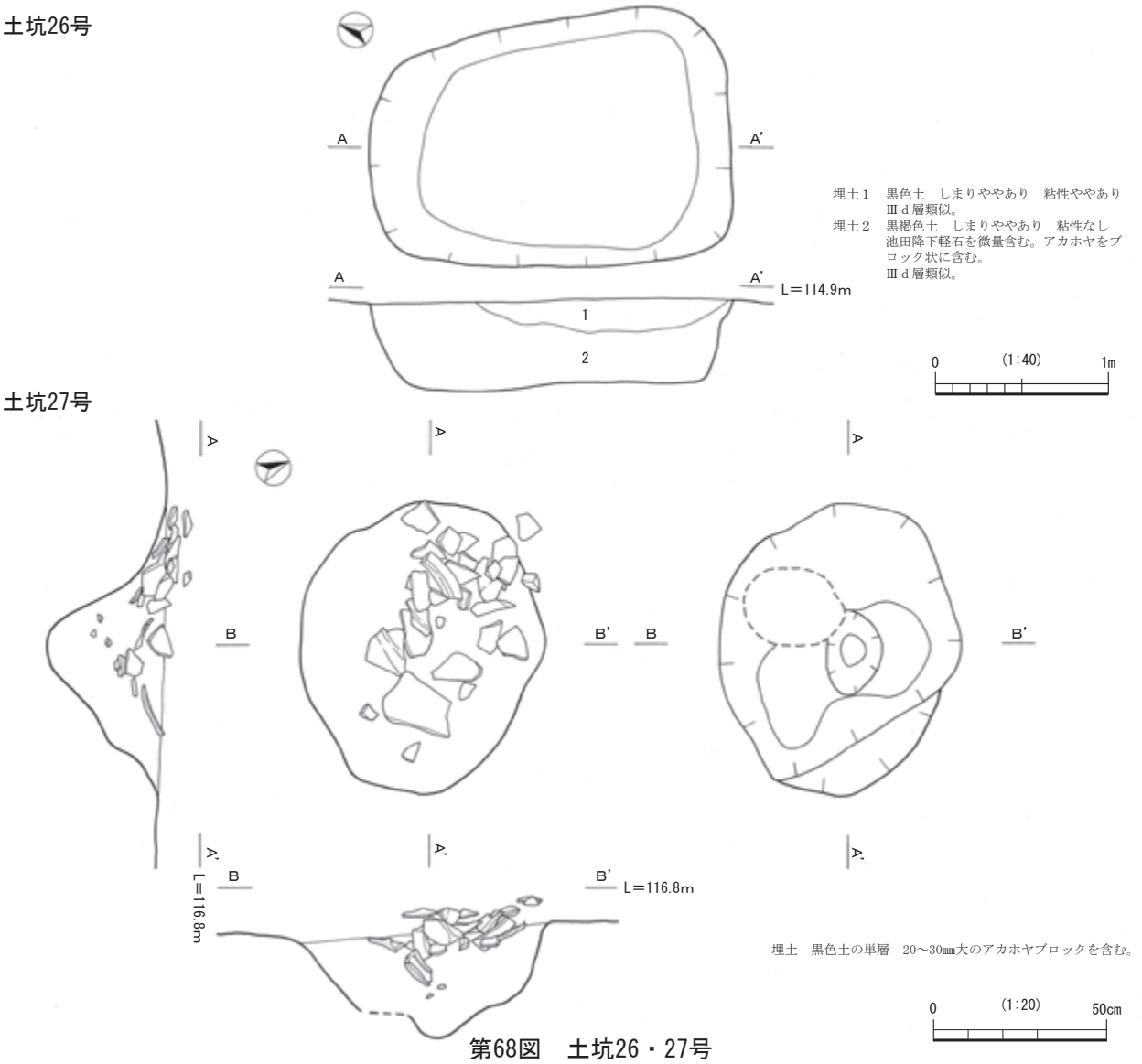
土坑26号（第68図）

Ｉ－45区，Ⅵ層上面で検出された。長軸210cm，短軸150cm程の隅丸方形状のプランで大きな土坑である。周辺には横転が見られる。ピットや遺物は検出されなかった。

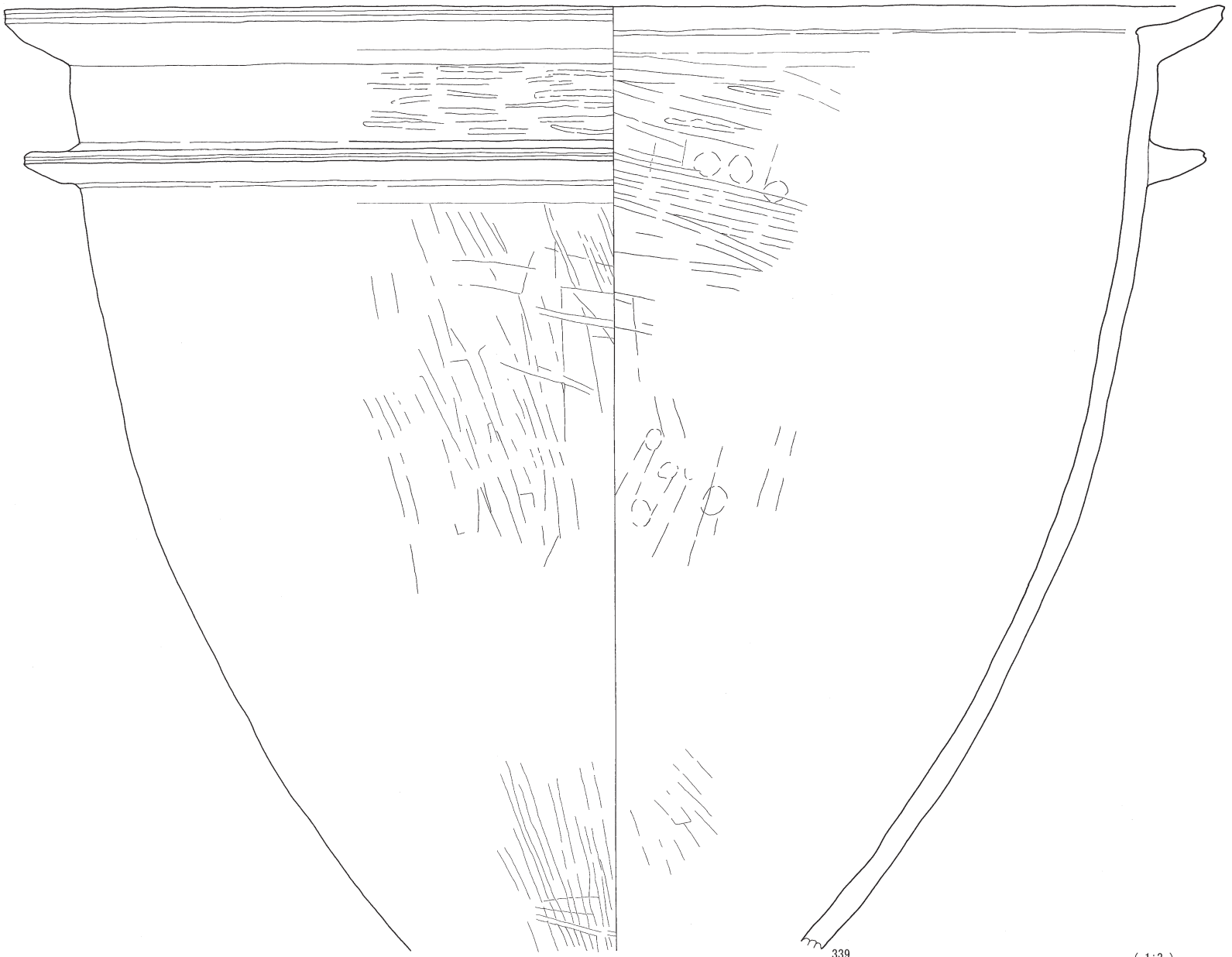
土坑27号（第68～71図）

Ｆ・Ｇ－31区，Ⅷ層で検出された。土坑からは大甕の破片が多く出土した。底部片がなく，完形にするには破片が足りないことから，穴を掘って甕をはめていたのではなく，廃棄したのではないかと考えられる。

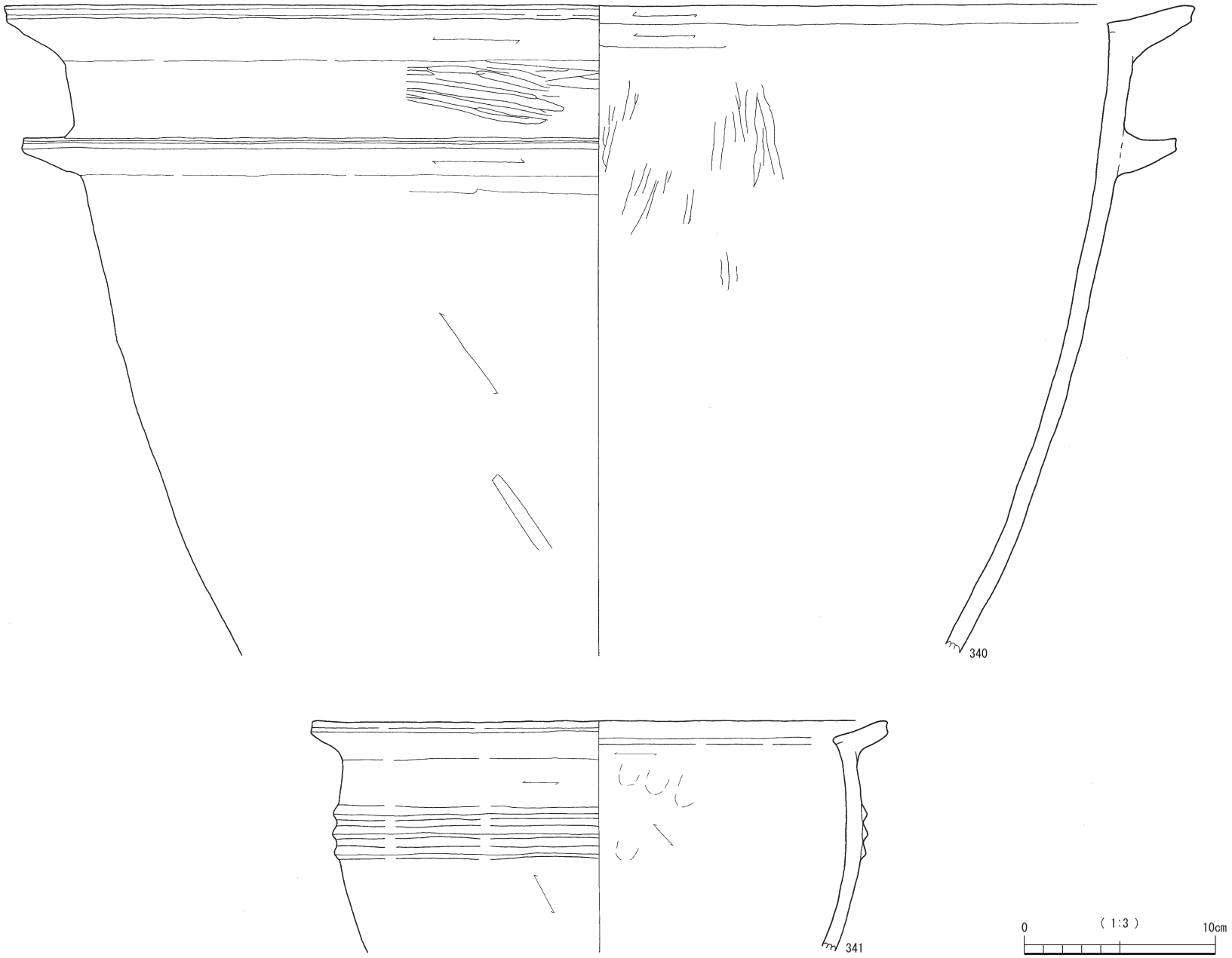
出土した34点の土器のうち７点を図化した。339は大型甕形土器の口縁部から胴部にかけての部分である。復元口径は62cmで鍔部分の復元径は60cmである。口縁部から底部にかけて緩やかにカーブを描く。器面調整は外面が工具ナデとヘラミガキ，内面はハケ目後ナデ，ミガキを施している。340は大型甕形土器の口縁部から胴部にかけての部分である。復元口径は62cm，鍔部分の径は60cmである。口縁部から胴部にかけて緩やかにカーブを描く。器面調整は内外面ともミガキ調整を施している。341は甕形土器の口縁部から胴部である。復元口径は30.0cmで頸部の下に３条の三角突帯を巡らす。器面調整は内外面ともナデ調整を施している。342は甕形土器の底部である。底径は9.4cmで胴部へかけて直線的に広がる。器面調整は外面がヘラミガキ，内面はナデ調整を施している。343は甕形土器の底部である。底径は3.8cmで，器面調整は外面がナデ，内面が指押え後ナデ調整を施している。344は壺形土器の底部で底径は9.2cmである。器面調整は外部の下の部分に工具ナデを施しているのが確認できるが，内面は摩耗のため不明である。345は小型鉢形土器の胴部で底部に近い部分である。外面には細い沈線が施されている。内面はハケ目後工具ナデの調整を行っている。



第68図　土坑26・27号



第69図　土坑27号出土遺物１



第70図　土坑27号出土遺物２

(5)　集石

平成26年度に，小規模な集石が３基検出された。

集石１号（SQ1：第71図）

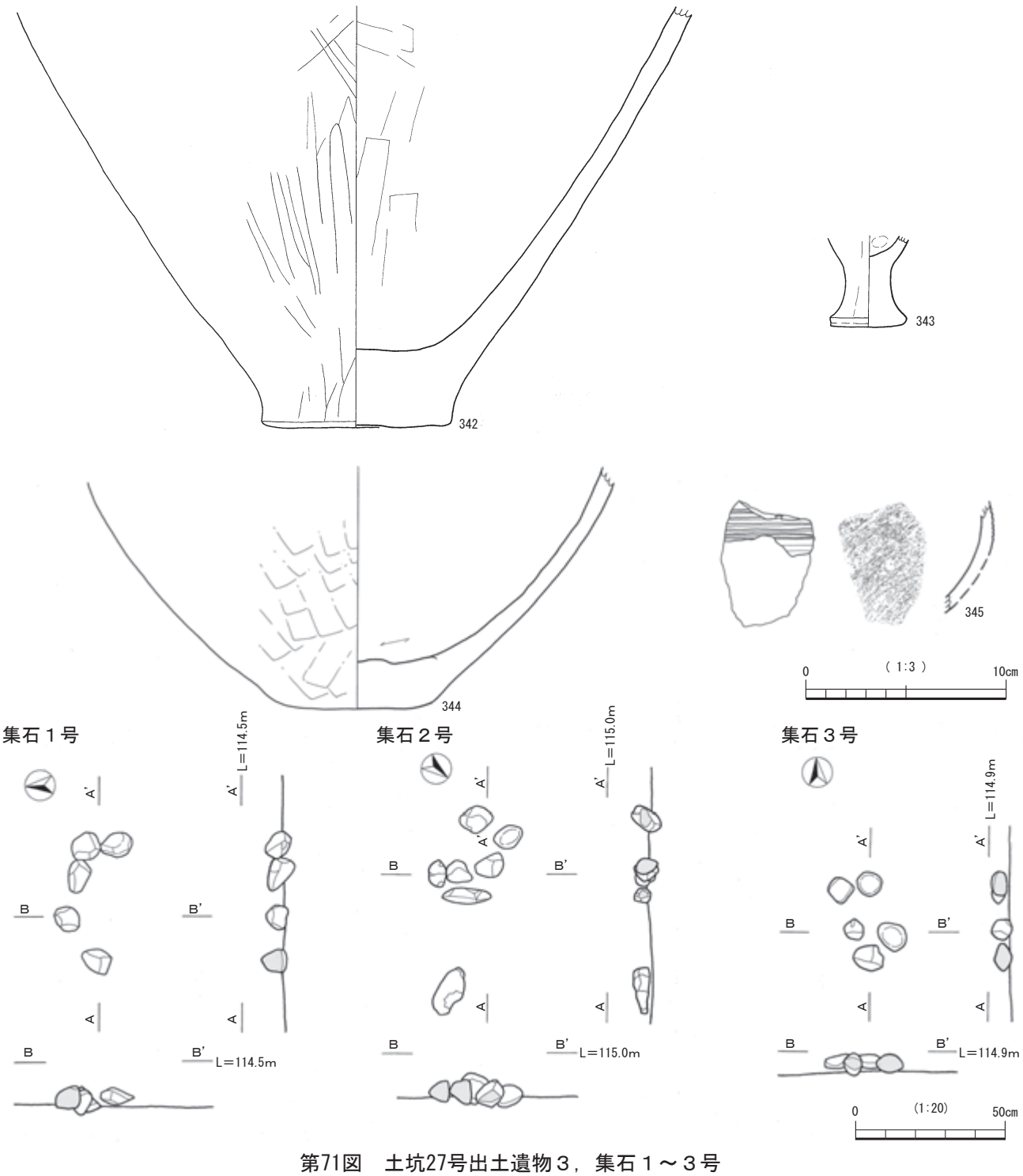
Ｆ－40区，Ⅳ層で検出された。構成礫総数は５個で，全て長径10cmほどの大きさである。礫は中心から半径0.3mの範囲にまとまっている。掘り込み，遺物は確認されなかった。

集石２号（SQ２：第71図）

Ⅰ－47区，Ⅲ層で検出された。構成礫総数は７個である。礫は中心から半径0.5mに広がる。掘り込み，遺物は確認されなかった。

集石３号（SQ３：第71図）

Ⅰ－47･48区，Ⅲ層で検出された。構成総礫数は５個である。礫は中心から半径0.2mの範囲に広がる。掘り込み，遺物は確認されなかった。



第71図　土坑27号出土遺物３，集石１～３号

(6)　帯状硬化面（第59図・第61図・第62図）

平成26年度に12条，平成28年度に１条を検出した。表土直下であったり、Ⅲ層が切られたりしていたため、時期を明確に判断することはできなかった。

帯状硬化面13号（SD13：第61図）

Ｇ－39～Ｆ－41区，Ⅲd層で検出した。Ⅲd層を踏み固めたものであるが，表土直下であり，時期的には新しいものと思われる。最大幅は0.5m，検出した総延長は17.5mである。SD13に直行するように短い硬化面が検出された。SD13の土がⅢd層の混ざりなしであるのに対して，直行する硬化面は乳褐色土がブロック状に入っている。レベルも高いので別時期のものと思われる。

帯状硬化面14号（SD14：第61図）

Ｉ－33～Ｈ－35区，Ⅲa層で検出した。南東から北西方向へ延びている。幅は0.5～1.5m程で，断続的であるが総延長は16m以上ある。粘性がなく，締まりが非常に強い。時期は不明である。

帯状硬化面15・16・17号（SD15・16・17：第61図）

SD15，16，17はＩ－33～Ｈ－35区，Ⅲa層で横並びに検出された。南東から北西方向へ延びている。硬化面を除去すると，浅い掘り込みが見られる。Ⅲa層より上層のものであり，周辺で薩摩焼の出土も見られたことから，近現代のものである可能性もある。

帯状硬化面18号（SD18：第61図）

Ｉ－34～Ｉ－35区，Ⅲa層で検出した。SD19と並行し，ほぼ東西に延びている。幅は0.78～2.25m，掘り込みの深さは深いところで40cmある。長さは10mほどあるが，東側が撹乱を受けている。時期は不明である。

帯状硬化面19号（SD19：第61図）

Ｉ－34・35区，Ⅲa層で検出した。ほぼ東西に延びており，検出した長さは６mである。掘り込みが深いところでは0.4mある。Ⅱ層が硬化面を覆っており，中世より以前の遺構であると考えられる。

帯状硬化面20号（SD20：第61図）

Ｉ－34区，Ⅲa層で検出した。南東から北西方向に延び，長さは3.5m以上ある。北西側は調査区外のため，全体は不明である。0.1m程の浅い掘り込みが見られる。時期は不明である。

帯状硬化面21号（SD21：第61図）

Ｈ－34・35～Ｉ－34区，Ⅲa層で検出した。北西から南東方向へ延びており，長さは11m以上ある。掘り込みは深く0.6m程ある。時期は不明である。

帯状硬化面22号（SD22：第61図）

Ｉ－33・34区，Ⅲa層で検出した。南東から北西へ延びており，長さは6.5m以上である。掘り込みは0.3m程ある。表土直下の検出であり，比較的新しい時期の遺構であると考えられる。

帯状硬化面23号（SD23：第62図）

Ｈ－44区で検出した。硬化面自体はⅢ層を踏み固めたような感じで，長さ約１m，幅約0.5mである。上層が削平を受けており，時期は不明である。

帯状硬化面24号（SD24：第62図）

Ｈ－44・45～Ｉ－45区，Ⅳ層で検出した。北東から西へ延びている。検出面はⅣ層だが，断面でⅢ層が切られているため時期は不明である。

帯状硬化面25号（SD25：第59図）

Ｅ－4・5区，Ⅲa層検出。ほぼ東西に延びる。検出した総延長は３m，幅は0.8m程度である。比較的新しい時代のものと思われる。

3　遺物

(1)　土器

ここでは遺構に伴わない，包含層から出土した土器について述べる。

弥生時代は甕形土器や壺形土器を中心に，蓋形土器，埦形土器などがみられる。古墳時代以降の土器や陶磁器も，わずかながら出土した。

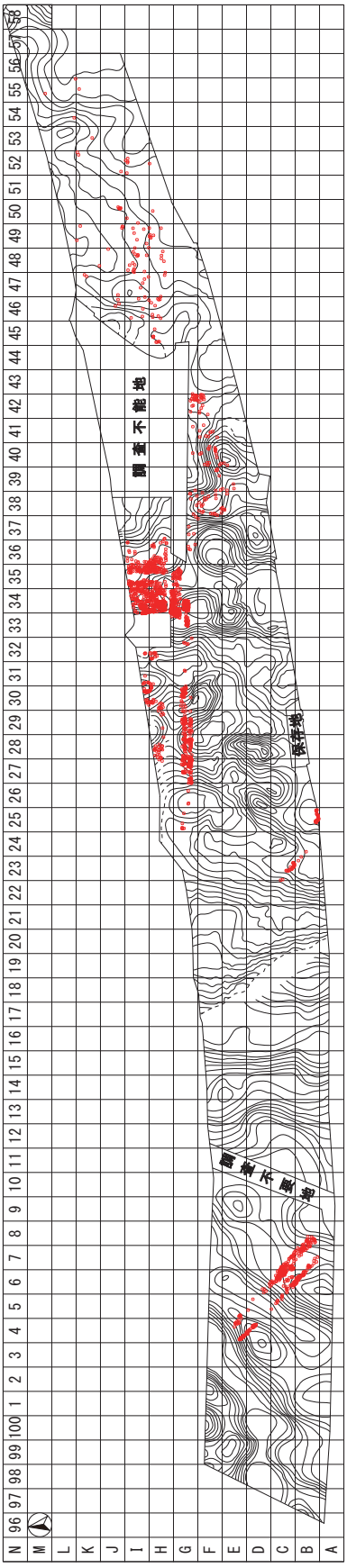
甕形土器（第73～75図346～369）

346～349は，復元口径が30cm以上の大型甕形土器の口縁部である。胎土に金雲母を含み，調整は内外面ともにナデをおこなう。346は復元口径35.0cmを測る。口縁部が上向きで薄く，胴部に丸みをもつ。外面に３条の三角突帯をめぐらせる。胴部に指押えの跡が残る。347は復元口径49.0cmを測る。口縁部がやや厚く，一部黒斑がみられる。348は復元口径47.0cmを測る。口縁部がやや厚い。胴部外面に突帯の一部がわずかに残存する。349は復元口径58.0cmを測る。口縁部が非常に厚く，断面形が三角形を呈する。

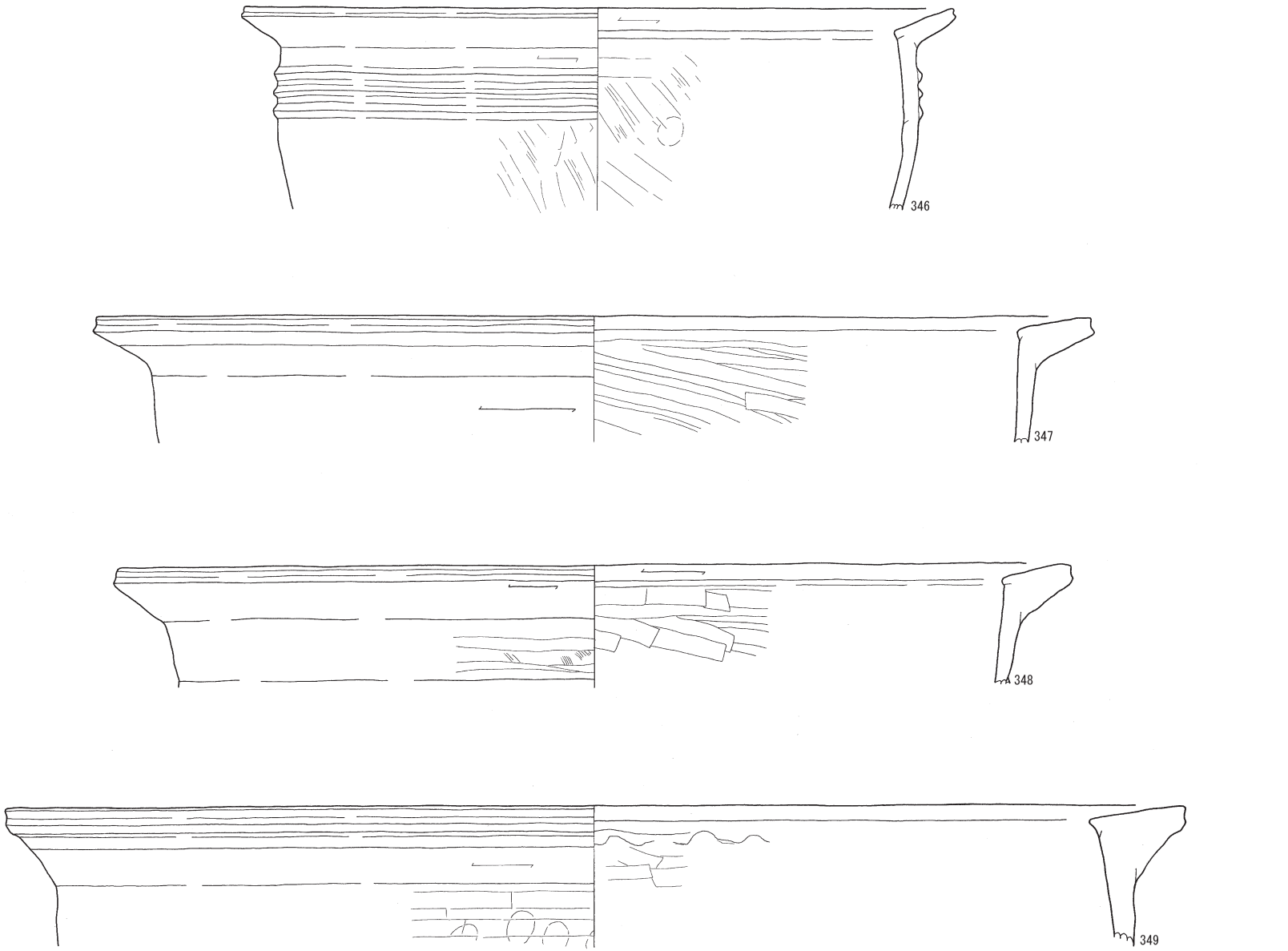
350～356は，復元口径が20cm以上の甕形土器の口縁部～胴部で，350～354の胴部外面には３条の三角突帯がめぐる。胎土に金雲母を含み，調整は内外面ともにナデをおこなう。350は復元口径28.4cmを測る。口縁部が上向きで，胴部の器壁はやや厚い。351は復元口径28.0cm，352は復元口径21.0cmを測る。口縁部は上向きで，胴部に丸みを持つ。352は外面に煤が付着する。三角突帯の間隔がややあき，内面にハケ目が残る。353は復元口径23.8cmを測る。口縁部がやや厚く，口縁部の断面形は内側がほぼ直角になる。354は復元口径28.2cmを測る。口縁部を胴部に被せるように成形している。胴部は直線的に底部方向へとすぼまり，三角突帯の間隔はややあく。口縁部と三角突帯の間に穿孔を施し，胴部には煤が付着する。口縁部上面に明瞭なナデが確認できる。355は復元口径25.0cmを測る。口唇部に丸みをもち，胴部から底部にかけてなだらかにすぼまる。胎土に長石や石英を多く含む。356は復元口径23.0cmを測る。胴部から底部へと湾曲するため，浅い甕形土器と想定される。

357～362は，復元口径が15cm以下の小型甕形土器や，口径を復元できない甕形土器の口縁部である。胎土に金雲母を含み，調整は内外面ともにナデをおこなう。357は復元口径13.4cmを測り，355と同様の器形を呈する。胴部の器壁は薄い。358は口縁部が上向きで，胴部に三角突帯をもつ。内外面ともに指押え痕が多く残る。359～361は，口縁部に厚みのある土器である。口縁部と胴部の接着部分に指押え痕が多く残り，口縁部がいびつに波打つ。362は，口縁部内側が胴部に大きく被さっている。

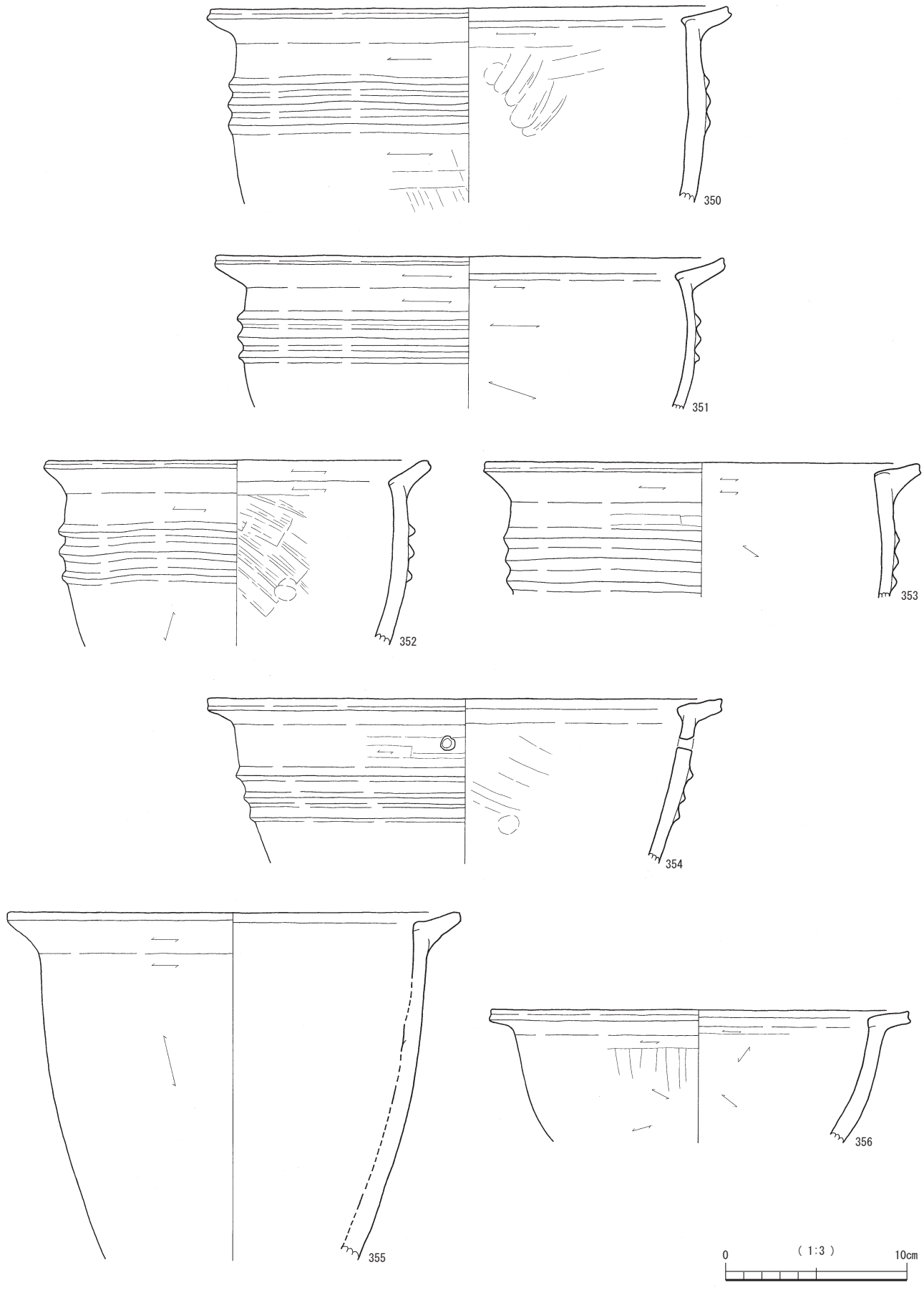
363は胴部である。外面に３条の三角突帯をめぐらせ，



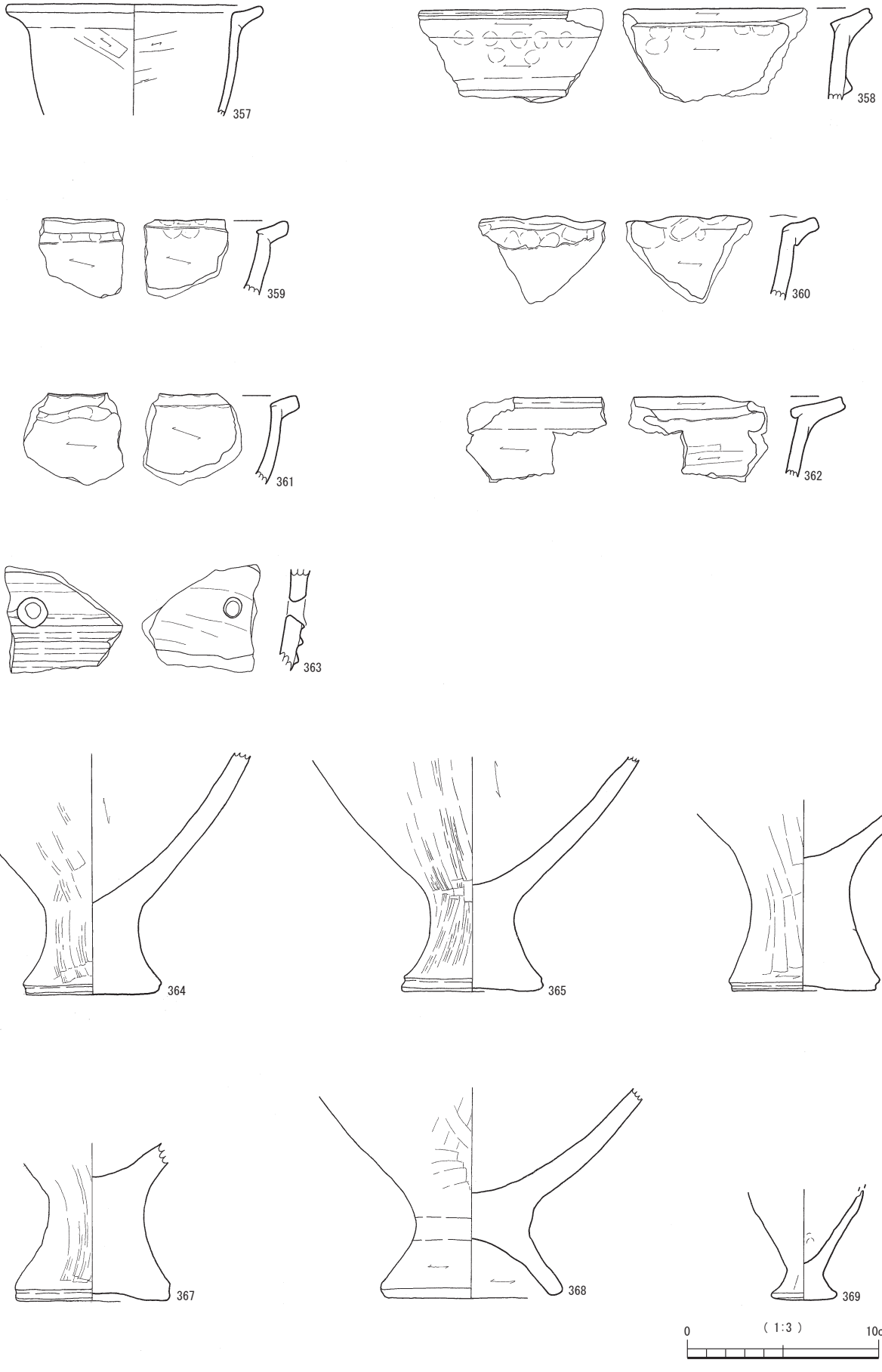
第72図　弥生時代以降土器分布図



第73図　甕形土器１



第74図　甕形土器２



第75図　甕形土器３

１条目に重なるように穿孔を施す。外面に煤が付着する。

364～369は脚部である。調整は内外面ともにナデをおこなうが，一部ハケ目が残る。364は底面が平底を呈する。365～367は底面中心部がくぼみ，やや上げ底となる。368は底面中心部に向かって大きくくぼませ，上げ底とする。369は小型甕形土器である。脚部が強くくびれ，胴部は開きながら直線的に立ち上がる。

壺形土器（第76・77図370～395）

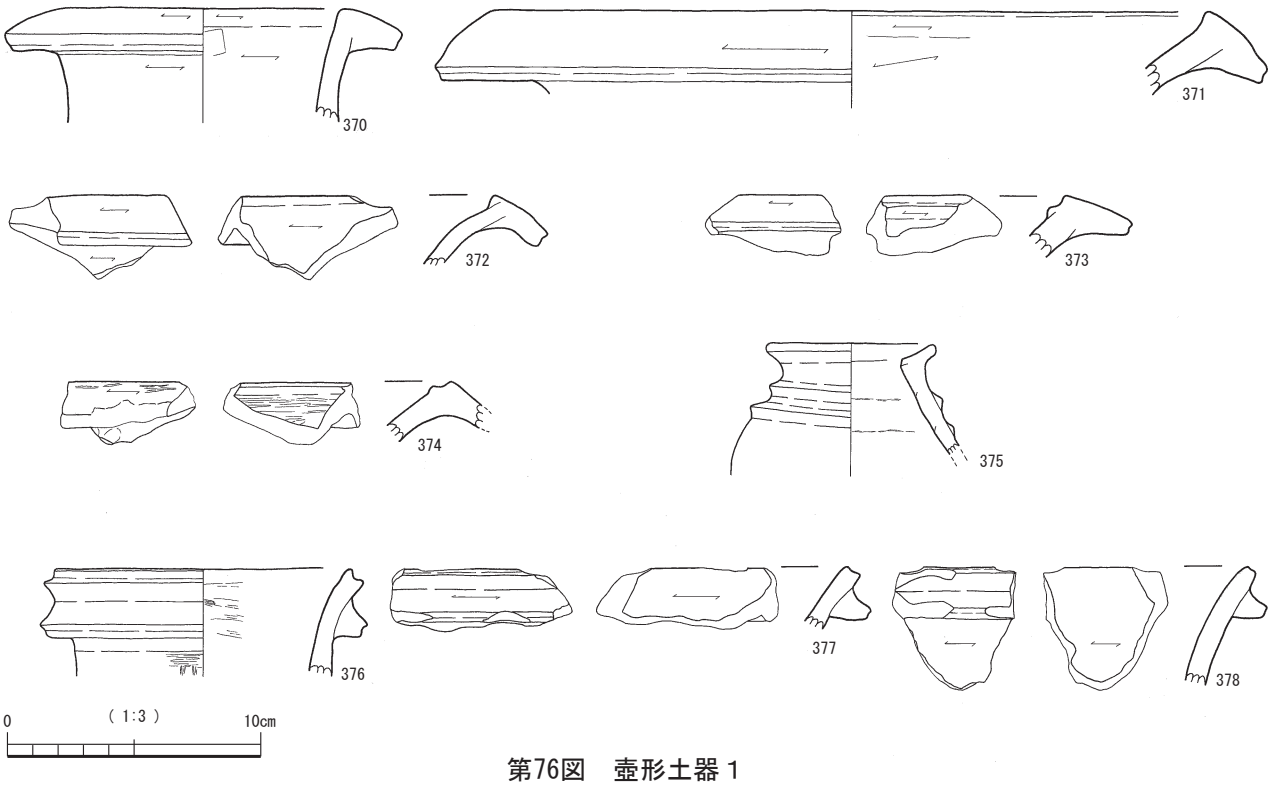
370～374は口縁部で，口縁部の器形は口唇部が垂れ下がる。胎土に金雲母を含み，調整は内外面ともにナデまたはミガキをおこなう。370は復元口径15.8cmを測る。頸部が直線的に肩部へと向かう。371～374は，頸部が強く湾曲するような器形であると想定される。371は復元口径33.0cmを測る。口縁部が胴部へ被さり，内面に段をもつ。372も371と同様の器形で，器壁がやや薄い。373・374は，口縁部内側に細く粘土を貼り付け，三角形の突起をめぐらせる。

375は復元口径6.5cmを測る。口唇部が上向きで，やや小ぶりである。胴部は左右非対称で，直線的な部分と丸みをもつ部分がみられる。頸部直下に２条の三角突帯をめぐらせるが，いびつである。外面に黒斑がみられ，内面に粘土輪積み痕が明瞭に残る。胎土に金雲母を含み，調整はナデをおこなう。

376～381は口縁部外面直下に突帯をめぐらせる，二叉口縁壺形土器である。胎土に金雲母を含み，調整はナデまたはミガキをおこなう。376～378は，口唇部と突帯端部を浅くくぼませる。376は復元口径11.8cmを測り，調整は丁寧なナデとミガキをおこなう。379～381は，口唇部と突帯端部にキザミを施す。379は復元口径19.0cmを測る。

382～389は頸部～胴部である。胎土に金雲母を含み，調整はナデまたはミガキ，ハケ目をおこなう。382は器壁が薄く，頸部外面に５条の突帯をめぐらせる。383は頸部外面に４条の突帯をめぐらせ，その下部に円形浮文を施す。384は胴部外面上部に突帯をめぐらせ，浅いキザミを施す。突帯下部に円形浮文を施す。385は，土器表面を削って形を浮き出させ，円形浮文のようにみせている。386～389は，胴部外面に断面形がM字状の突帯を複数施す。調整は，外面はミガキを，内面はナデをおこない，一部ハケ目が残る。

390～395は底部である。胎土に金雲母を含み，調整はナデやミガキをおこなう。390は底径8.5cm，391は底径3.6cmを測る。胴部から底部へ向かってゆるやかにすぼまり，底部付近でごくわずかにくびれる。底部の厚みは，胴部の約２倍である。391は，内面にナデやハケ目が明瞭に残る。392は底径4.0cm，393は底径6.0cmを測る。底部から胴部に向かって丸みをもって立ち上がり，底部はやや上げ底状となる。392は頸部に向かって強く湾曲する。394は底径8.8cmを測る。底端部が外側へやや張り出し，胴部に向かって開きながら立ち上がる。胴部の器壁が厚く，底部はさらに厚い。395は底径11.2cmを測る。表面の一部と内面が，粘土貼り付けをおこなった部分で剥落している。指押えで形を整え，外面に粘土を貼り付けて成形したと考えられる。



第76図　壺形土器１


379
380
381
382
383
384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
0
(1:3)
10cm

第77図　壺形土器２

小型鉢形土器（第78図396・397）

396は復元口径13.2cmを測る。口唇部にわずかに平坦面をもち，口縁部はややゆがむ。内外面ともに指押えが多く残り，厚みが不均一である。397は，345と器形や施文が類似する。器壁は薄く，外面の上部に縦位のキザミを，その下位に横位の細い沈線を複数施す。調整は，内外面ともに丁寧なナデをおこなう。

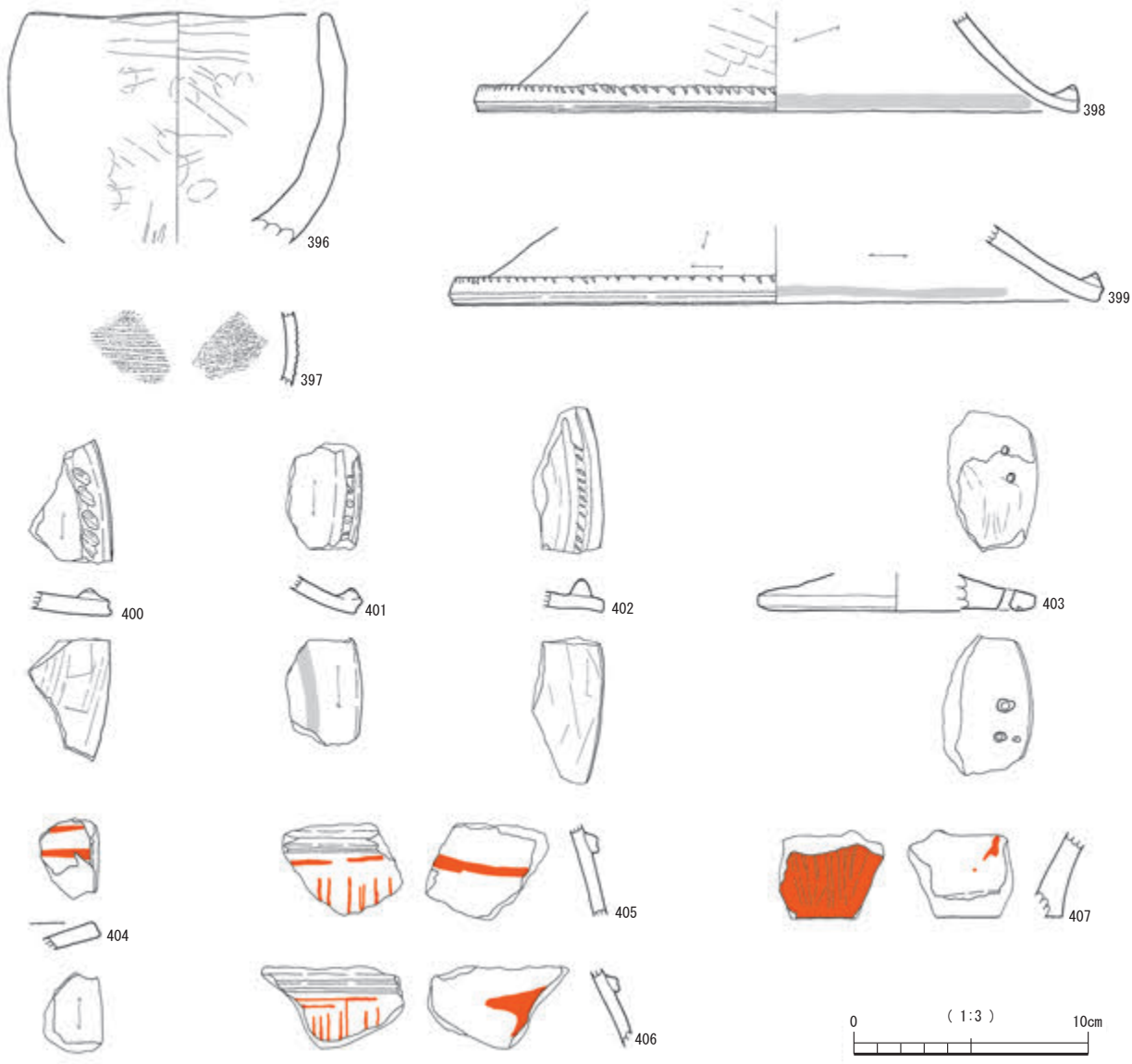
蓋形土器（第78図398～403）

398～402は，裾部外面に突帯をめぐらせ，端部にキザミを施す。胎土に金雲母を含み，調整は内外面ともにナデをおこなう。398は復元口径25.5cm，399は復元口径27.5cmを測る。内面に煤が付着する。400～402は小片である。キザミの大きさや間隔に差がみられる。400・401の内面には，煤が付着する。

403は残存率が低いが，特徴的な形状をしていたため径の復元を行った。復元口径は11.6cmで，内面が湾曲せずに平坦である。穿孔が径に沿って２つ施され，内面には刺突の痕跡がさらに１か所確認できる。穿孔は，焼成前に内面から施したと考えられる。胎土に金雲母を含み，調整はナデをおこなうがやや粗い。

丹塗り壺形土器（第78図404～407）

404～407は器面を丹塗りし，ミガキをおこなって文様を施す。404は口縁部で，口唇部を平坦に成形する。内外面ともに丹塗りされており，口縁部上面にはミガキで放射状の文様を施す。405・406は胴部で，外面に断面形がM字状の突帯をめぐらせる。外面と内面の一部を丹塗りし，突帯の下位に横位と縦位のミガキをおこない文様とする。407は底部である。外面と内面の一部が丹塗りされているが，底面は土器本来の色が残る。



第78図　小形鉢形土器，蓋形土器，丹塗り壺形土器

植物圧痕をもつ土器（第79図408～411）

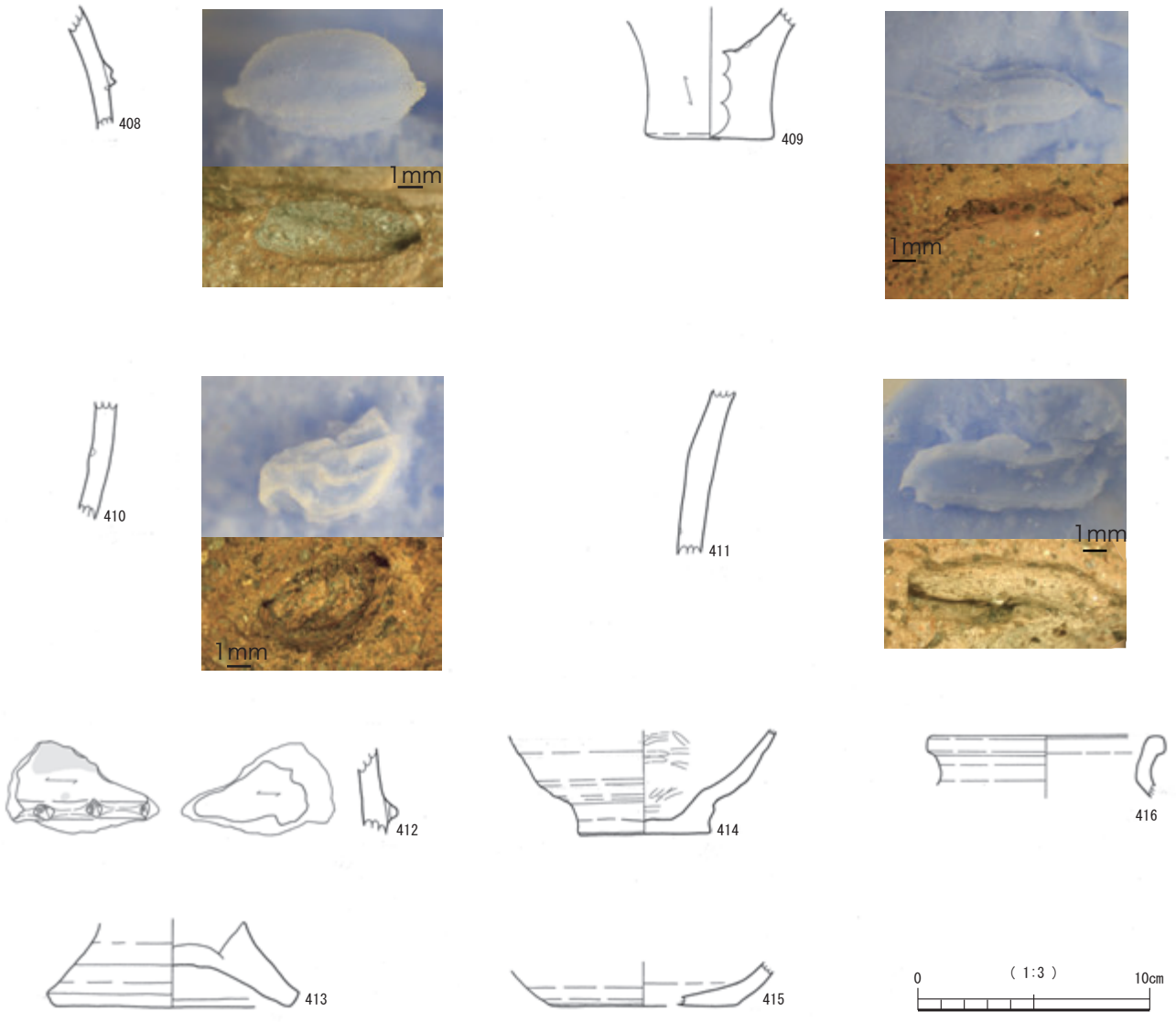
408～411は，土器の外面もしくは内面に植物圧痕がみられる土器である。408・409にみられる圧痕は，イネの穎果である。408は，M字状突帯をもつ壺形土器の胴部である。突帯下部が破裂し，土器中に練り込まれたイネの穎果が確認できる。長さ約７㎜，幅約４㎜，厚さ約２㎜である。409は脚部である。内面の表面にイネの穎果が付着する。長さ約８㎜，幅約３㎜で，芒の長さは約８㎜である。410は胴部片で，内面の表面に植物の種子が付着する。長さ約７㎜，幅約４㎜である。411は胴部片で，内面の表面に茎状のものが付着する。長さ約10㎜，幅約４㎜であるが，詳細は不明である。

古墳時代以降の土器・陶磁器（第79図412～416）

412・413は古墳時代の甕形土器である。調整は内外面ともにナデをおこなう。412は胴部で，外面に１条の突帯をめぐらせ，等間隔にキザミを施す。キザミには布目の痕跡が残る。413は脚部だが，甕と脚の継ぎ目の部分で剥落している。復元底径9.8cmを測る。底面の中央が大きくくぼんで上げ底となり，下端から１cmの幅のみナデをおこなう。胎土に金雲母を含む。

414・415は古代の土師器の埦である。414は底径5.8cmを測る。底部端部から約0.8cm立ち上がり，ふくらみをもちながら開く。内面は外面と比較してやや黒く，ミガキをおこなう。底面に黒斑がみられる。415は復元底径8.0cmを測る。平底の器形で，中央の厚みは薄い。内外面ともに摩耗しており，詳細は不明である。

416は近世の薩摩焼で，復元口径10.0cmを測る。口縁が肥厚し，首は短い。灰色の土に，暗緑褐色の釉薬をかける。口上部に釉薬の剥がれがみられることから，重ね焼きを行ったと思われる。



第79図　植物圧痕をもつ土器，古墳時代以降の土器・陶磁器

(2)　石器

石器は，石鏃９点，チップ１点，剥片15点，二次加工剥片１点，石核３点，礫器６点，石斧８点，磨石・敲石53点，砥石１点，石皿１点が出土した。しかし，Ⅲa～Ⅲd層は土の色調が酷似しており，出土した石器がどの時期に該当するものであるか明確でない。よって，本書ではⅢ～Ⅴ層出土石器としてここに記述する。

石鏃（第81図417～425）

９点図化した。417・418は正三角形状を呈し，石材は頁岩である。417は先端部が欠損する。表裏面に研磨痕が残ることから，磨製石鏃からの転用と考えられる。基部に浅い抉りをもつ。418は脚部が欠損する。基部に浅い抉りをもつ。419は二等辺三角形状を呈する。石材は流紋岩で，基部に浅い抉りをもつ。先端部が欠損する。420は側縁部が膨らみ，ハート型を呈する。石材は頁岩で，自然面が残存する。基部に深い抉りをもつ。421～423は二等辺三角形状を呈する。421は脚部と側縁部が欠損する。石材は黒曜石である。基部に抉りをもつ。422の石材は頁岩で，側縁部が内湾する。基部に深い抉りをもつ。423の石材はチャートで，側縁部は直線的である。脚は四角く角張る。基部に深い抉りをもつ。424は側縁部が直線的で，脚部の端部は剥離して角張っている。基部に抉りをもつ。石材は頁岩である。425は先端部付近と脚部付近が角張り，五角形状を呈する。基部に抉りをもつ。石材はチャートで，先端部が欠損する。

剥片（第81図426～428）

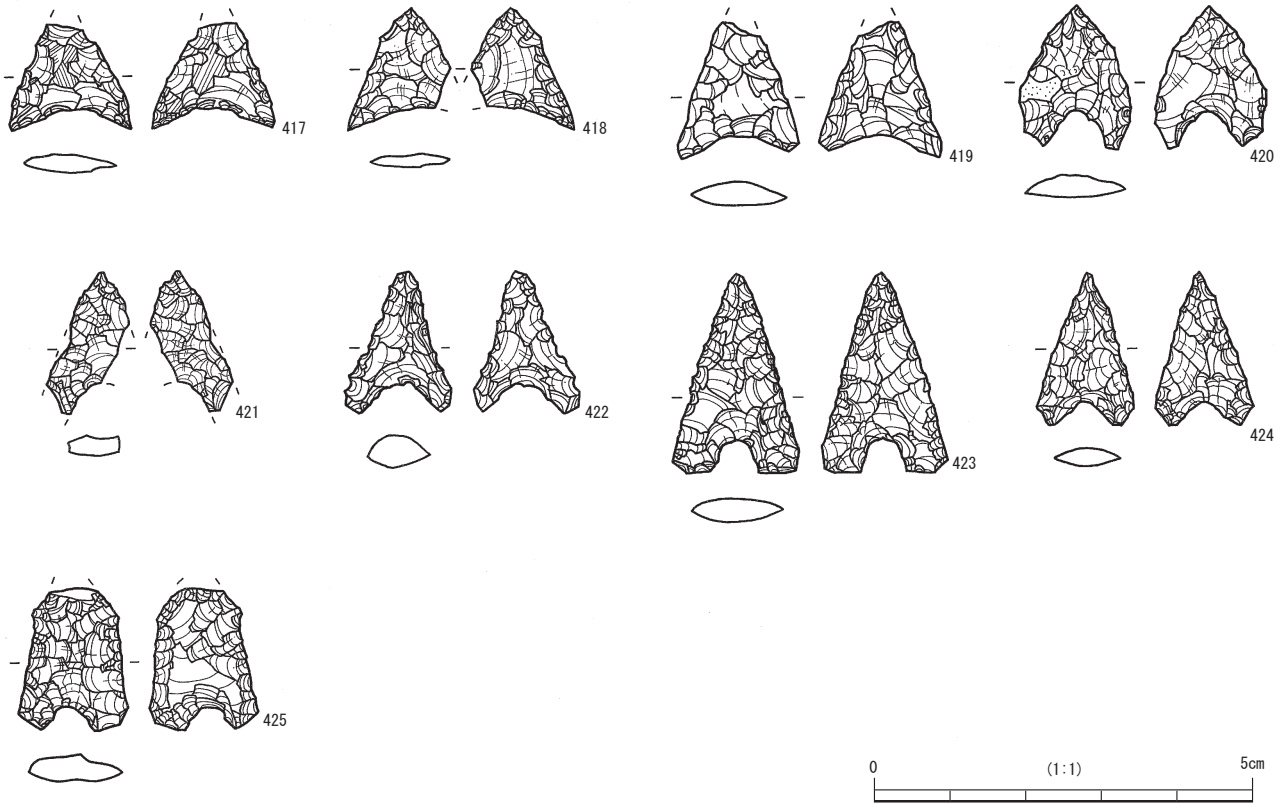
３点を図化した。426・427の石材はホルンフェルスである。426は，側面には形状の調整のためと思われる細かい二次加工を施している。427は，素材剥片の縁辺部に二次加工が加えられているが，側面が折れている。428の石材は頁岩である。縁辺部には形状を整えたと思われる調整剥離が見られる。いずれも本遺跡で出土している打製石斧によく使われる石材で，打製石斧製作段階での剥片ではないかと考えられる。

石核（第82図429・430）

２点を図化した。429の石材は不純物を多く含む黒曜石である。一部に自然面を有する。剥離方向には規則性が見いだせない。あらゆる方向から不定形の小型剥片を剥ぎ取ったことが想定される。430の石材はホルンフェルスである。礫の側縁部を打面転移しながら，複数の剥片を剥ぎ取ったと考えられる。



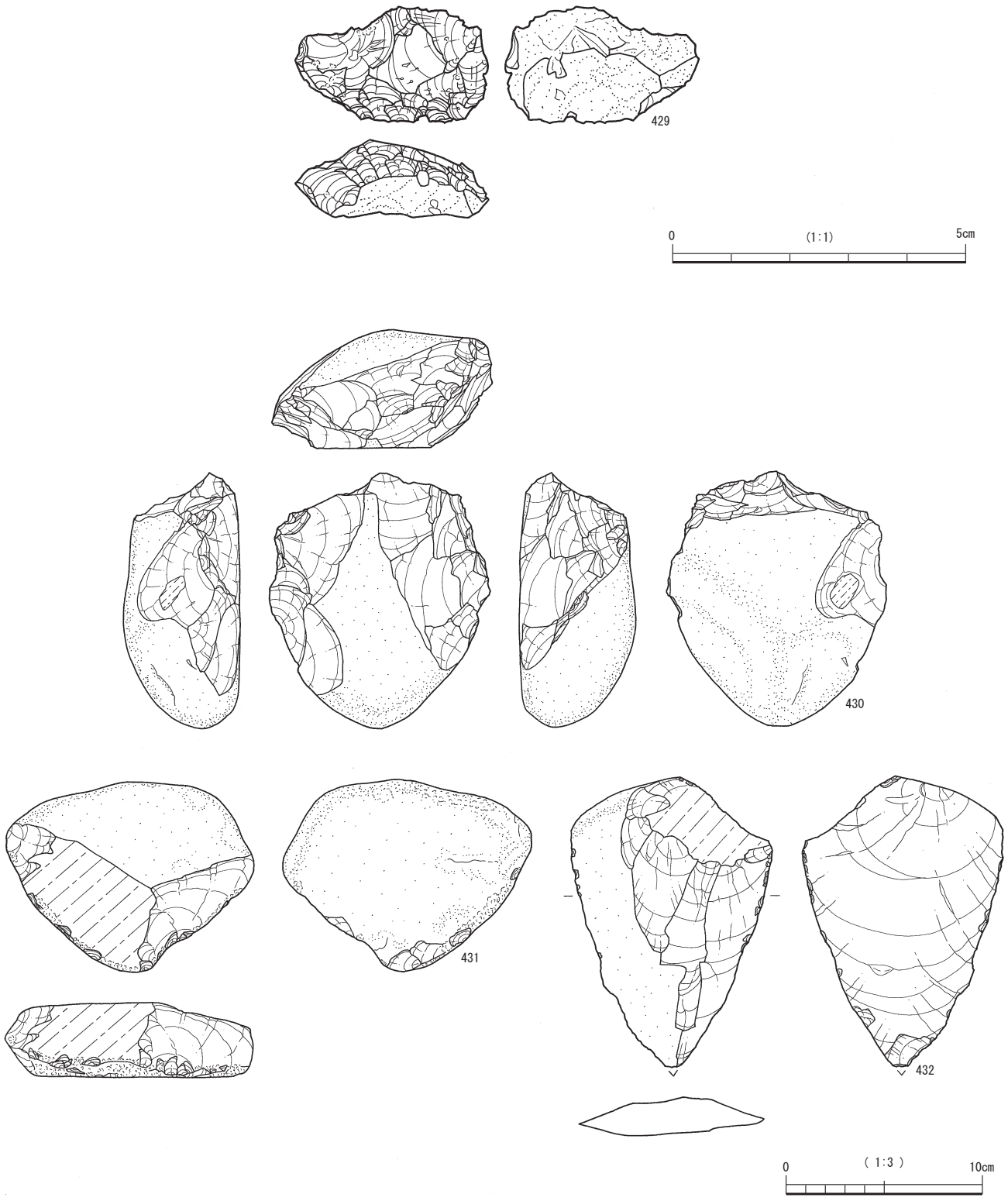
第80図　Ⅲ～Ⅴ層石器分布図



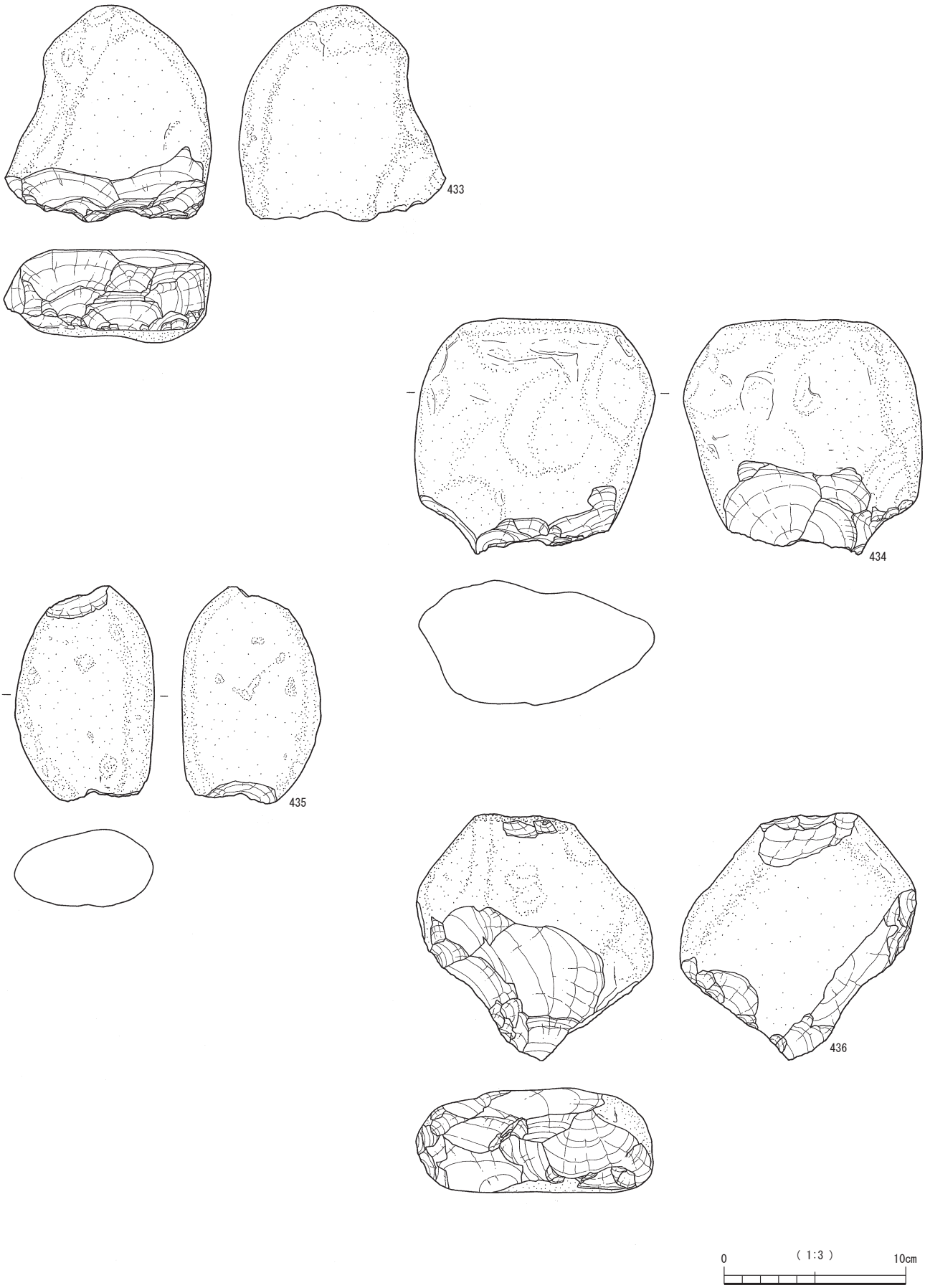
第81図　石鏃，剥片

礫器（第82・83図431～436）

6点を図化した。431の石材は砂岩である。大型の礫を打ち割り，程よい大きさになったものをほぼ調整せずに使用している。刃部に敲打痕が確認できる。432～434の石材はホルンフェルスである。432は大型剥片の表面をさらに薄くなるように加工を加えている。刃部の調整はほぼ見られない。433は礫の下辺を裏面側から打ち欠いて刃部を作っている。434は礫の端部に粗い剥離調整を表裏から加えて刃部を作り出している。435の石材は安山岩で，楕円形の円礫の両端を打ち欠いている。刃部調整はほぼ見られない。436はホルンフェルス製で，下縁部分に表裏から剥離を加えて刃部を作っている。



第82図　石核，礫器１



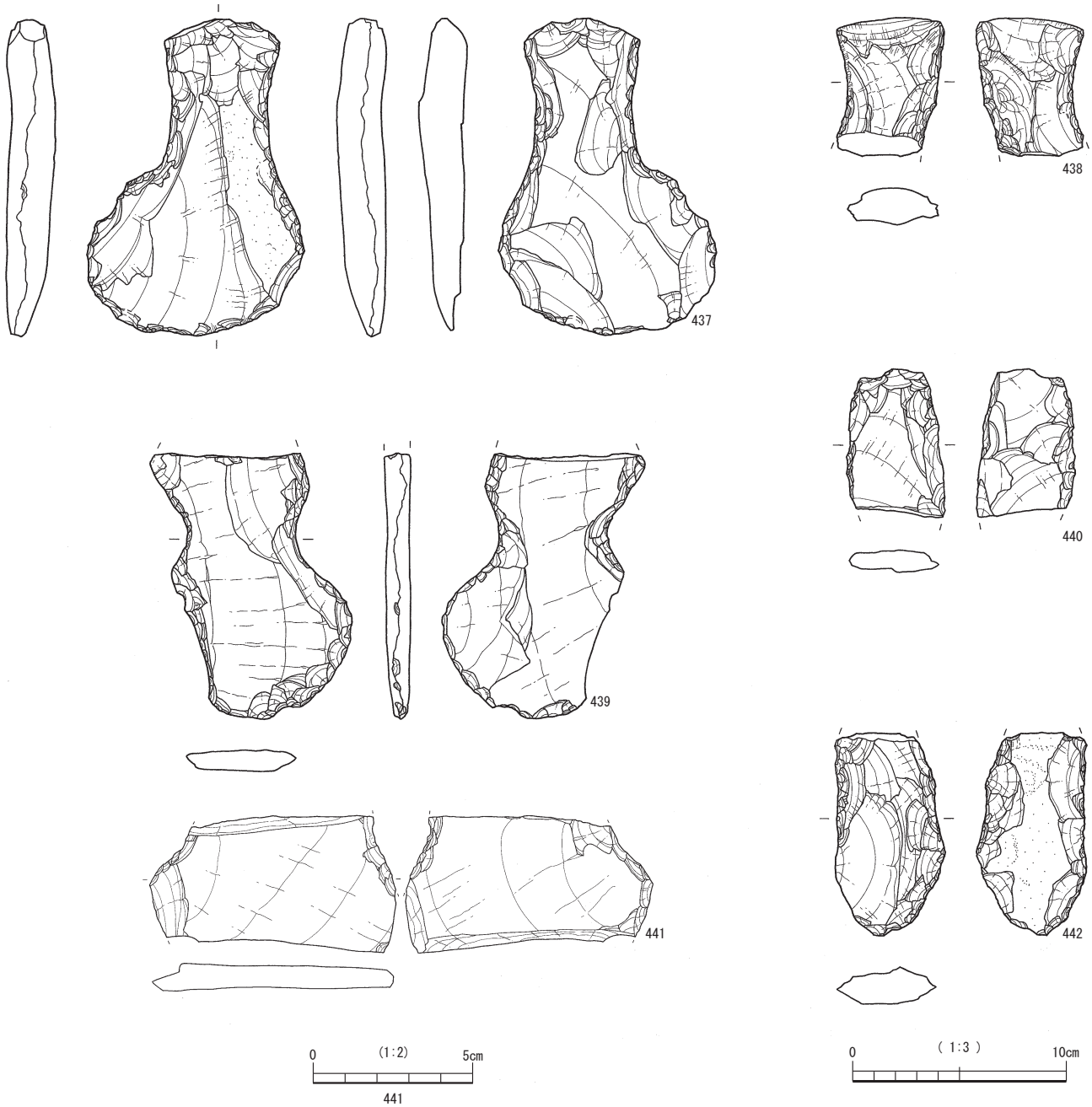
第83図　礫器２

打製石斧（第84図437～442）

６点を図化した。437～441の石材はホルンフェルスである。437は基部よりも刃部が開くタイプで，一般的には石鍬と呼ばれているものである。抉りから基部へほぼ直線に伸びており，刃部は広く大きい楕円形を呈する。縁辺部は形状を整えるための細やかな剥離が両側縁を巡る。438は基部で，刃部は欠損する。側縁部は形状を整えるため剥離整形を加え，端部が摩耗している。439は基部と刃部の一部を欠損する。基部と刃部の間に大きな抉りがある。440は基部で，刃部を欠損する。形状を整えるための剥離が周囲に施される。441は基部と刃部が欠損する。縁辺部には基部にかけて抉りを作り出したと思われる剥離が見られる。442は刃部で，石材は頁岩である。基部は欠損する。自然面を有し，縁辺部には粗い剥離整形を施す。

磨製石器・磨製石斧（第85図443～445）

３点を図化した。443は磨製石器で，先端部は敲打による剥離が見られる。石材は頁岩で，全面を研磨する。444・445は磨製石斧で，基部を欠損する。石材はホルンフェルスである。444は敲打により整形した後，研磨を施している。裏面は大きく剥離する。剥離の方向から，使用中に割れた可能性もある。445は表裏両面から研磨を施して刃部を作っている。



第84図　打製石斧

磨敲石類（第85図446～451）

6点を図化した。446は安山岩製の磨石である。側面を磨って円形に形状を整えている。表裏両面に明瞭な磨面を有する。裏面は敲打による形状の調整を施した後，磨面として使用しており，敲打痕が広く残る。447は凝灰岩製の磨石である。扁平な円礫を活用して使用している。表裏両面に平坦な磨面を有する。448は，扁平な円礫を活用した砂岩製の磨石である。表裏両面に明瞭な磨面を有する。449の石材は凝灰岩で，表裏両面に磨面を有する。円礫を活用して使用しており，敲きに使用したと考えられる敲打痕が残る。450の石材は安山岩である。側面には敲打による整形を施している。表面に明瞭な磨面を有する。451の石材は凝灰岩である。半分が欠損するが，残存部分は非常に丁寧な作りをしている。側面は敲打で形を整えた後，磨って調整しており，楕円形を呈していたと思われる。表裏両面に平坦な磨面を有し，一部被熱をして赤化している。



第85図　磨製石器・磨製石斧，磨敲石類

第13表　弥生時代以降　竪穴建物跡計測表

遺構名	検出区	検出面	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	貼り床	備　考
竪穴建物跡16号	G-30	Ⅲd層	円形	－	－	80	○	主柱穴2基
竪穴建物跡20号	B-25	Ⅳ層	方形ベッド	430	300	85	－	主柱穴2基
竪穴建物跡23号	G-28	Ⅲd層	方形	480	460	60	○	

第14表　弥生時代以降　堀立柱建物跡計測表

遺構名	検出区	検出面	形状	柱穴間の距離		柱穴の平均値		備　考
				P1-P4(cm)	P1-P2(cm)	径(cm)	深さ(cm)	
掘立柱建物跡41号	H-36	Ⅳ	1間×1間	390	280	47×38	17	

第15表　弥生時代以降　円形周溝計測表

遺構名	検出区	検出面	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	残存形状	備　考
円形周溝11号	B-23	－	円形	430	120	86	半円形	

第16表　弥生時代以降　土坑計測表

遺構名	検出区	検出面	形状	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	出土遺物	備　考
土坑26号	I-45	Ⅵ	隅丸方形	210	150	52	－	
土坑27号	F・G-31	Ⅷ	円形	85	70	35	○	

第17表　弥生時代以降　集石計測表

遺構名	検出区	検出層	総礫数(個)	タイプ	範囲(半径：m)		掘り込み部		出土土器	石材別個数				構成礫　重量（g）別個数												
					集中部	全体	有無	深さ(m)		安山岩	ホルンフェルス	砂岩	凝灰岩	1～100	100～200	200～300	300～400	400～500	500～600	600～700	700～800	800～900	900～1000	1000～1500	1500～2000	2000～2500	2500～3000	3000～
集石1	F-40	Ⅳ	5	I	－	0.30	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
集石2	I-47	Ⅲ	7	I	－	0.50	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－
集石3	I-47･48	Ⅲ	5	I	－	0.20	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

第18表　弥生時代以降　遺構内出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	遺構名	取上番号	器種	部位	法量(cm)			文様・調整							色　調		胎土							焼成	備　考
								器高	口径	底径	外面			内面				外面	内面	黒色	白色	赤色	雲母	長石	角閃	その他		
											口唇部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部											
63	333	B-25	Ⅳ	竪穴建物跡20号	8	甕	口縁部～胴部	(27.4)	28.6				三角突帯文(3条)ハケ目			ナデ		明赤褐	灰褐	○	○		○	○			良	外面煤付着
65	334	G-28	Ⅲd	竪穴建物跡23号	76 78 80 81 83 84 85 86 87	大甕	口縁部～胴部	(35.4)	(52.2)				ミガキ ナデ 突帯文			ミガキ ナデ		橙	橙		○	○	○	○	○		良	
	335				5 42 50 74	甕	口縁部～胴部	(21.5)	(30.4)				三角突帯文(3条) ナデ			指押え後ナデ		橙	橙	○	○	○	○	○	○		良	外面煤付着
66	336				40	壺	口縁部～胴部	(10.7)	(27.2)			ミガキ				ミガキ		明赤褐	灰褐		○	○	○	○			良	内外面煤付着
	337				49	壺	肩部～底部						三角突帯文(4条) ナデ			ナデ		明赤褐	明赤褐	○	○	○	○	○			良	外面煤付着
	338				59	壺	底部	(5.4)		3.5				ナデ			ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○	○	○	○			良	
69	339	G-31	Ⅷ	土坑27号	44 47 74 82 85 88 108 118 124 125 126 127 130 132 136 141 145 148 151 131 80 137	大甕	口縁部～胴部	(48.2)	(62.0)				突帯文 ヘラミガキ ナデ			ハケ目後ナデ ミガキ		にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○	○	○	○			良	外面煤付着
70	340				7 81 147	大甕	口縁部～胴部	(34.1)	(62.0)				突帯文 ミガキ			ミガキ		明赤褐	明赤褐	○	○	○	○	○			良	
	341				14 15 101 102	甕	口縁部～胴部	(12.1)	(30.0)				三角突帯文(3条) ナデ			ナデ		にぶい赤褐	にぶい赤褐		○		○	○			良	外面煤付着
71	342				43 48 49 51 117 123 133 138 142 143 150	大甕？	胴部～底部	(21.0)		9.4			ヘラミガキ				ナデ	橙	橙	○	○	○	○	○			良	外面煤付着
	343				63	甕	底部	(4.6)		3.8				ナデ			指頭圧痕ナデ	明赤褐	明赤褐		○	○	○	○			良	
	344				8 12 16	壺	底部	(12.1)		9.2				ナデ			不明	にぶい赤褐	明赤褐		○		○	○			良	外面煤付着
	345				87	小型鉢	胴部						沈線文 ナデ			ハケ目後ナデ		褐灰	褐灰		○	○	○	○	○		良	

第19表-１　弥生時代以降　遺構外出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器種	部位	法量(cm)			文様・調整						色調		胎土							焼成	備考
							器高	口径	底径	外面			内面			外面	内面	黒色	白色	赤色	雲母	長石	角閃	その他		
										口唇部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部										
73	346	E-5	Ⅲb	50375	甕	口縁部	(10.0)	(35.0)			ナデ	三角突帯文(3条)		指押えナデ			にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○		○	○	○		良	
	347	H-34	Ⅲc	40347 40548	大甕	口縁部	(6.3)	(49.0)			ナデ			ナデ			明赤褐	明赤褐		○	○	○	○	○	石英	良	黒斑
	348	H-34	Ⅲb	40189 40378	大甕	口縁部	(6.0)	(47.0)			ナデ			ナデ			明赤褐	明赤褐				○	○			良	
	349	G-34	Ⅲ	61157 61220	大甕	口縁部	(7.0)	(58.0)			指押えナデ			ナデ			明赤褐	明赤褐		○	○	○	○			良	内外面煤付着
74	350	G-28	Ⅲb	50908 51163 51164	甕	口縁部～胴部	(10.8)	(28.4)			ナデ	ハケ目後ナデ 三角突帯文(3条)		ナデ			褐	褐	○	○		○	○			良	外面煤付着
	351	G-33	Ⅲ	61096 61189 61037 61088 61032	甕	口縁部～胴部	(8.4)	(28.0)			ナデ	三角突帯文（３条）		ナデ			橙	橙	○	○		○	○	○		良	外面煤付着
	352	I-30	Ⅲd	60352 60369 60380	甕	口縁部～胴部	(10.3)	(21.0)			ナデ	三角突帯文（３条）		ハケ目ナデ			にぶい橙	にぶい橙		○	○	○	○			良	外面煤付着
	353	G-27	Ⅲb	51004 51011	甕	口縁部～胴部	(7.4)	(23.8)			ナデ	三角突帯文（３条）		ナデ			にぶい赤褐	黒褐		○	○	○	○			良	
	354	G-33	Ⅲ	61382 61370	甕	口縁部～胴部	(9.0)	(28.2)			ナデ	三角突帯文（３条）		ナデ			明赤褐	暗赤灰		○	○	○	○			良	穿孔，外面煤付着
	355	G-33	Ⅲ	61289	甕	口縁部～胴部	(19.2)	(25.0)			ナデ			ナデ			明赤褐	明赤褐	○	○		○	○		石英	良	外面煤付着
	356	H-34	Ⅲb	40318	甕	口縁部～胴部	(7.3)	(23.0)				ナデ			ナデ		にぶい褐	にぶい褐	○	○		○	○			良	外面煤付着
75	357	G-28	Ⅲb	51052 51055	小型甕	口縁部～胴部	(5.8)	(13.4)			ナデ			ナデ			褐灰	にぶい褐	○	○	○	○	○			良	外面煤付着
	358	I-33	Ⅲb	39914	甕	口縁部					三角突帯文ナデ			ナデ 指押え			黒褐	褐灰		○	○	○	○		輝石	良	
	359	B-7	Ⅲb	50146	甕	口縁部					指押えナデ			ナデ 指押え			褐灰	灰赤		○	○	○	○			良	外面煤付着
	360	G-34	Ⅲb	50758	甕	口縁部					指押えナデ			ナデ 指押え			褐	褐		○	○	○	○			良	外面煤付着
	361	B-7	Ⅲb	50145	甕	口縁部					指押えナデ			ナデ			にぶい褐	にぶい褐		○		○	○			良	外面煤付着
	362	H-34	Ⅲb	39603 39608	甕	口縁部					ナデ			ナデ			明赤褐	にぶい橙	○	○		○	○			良	
	363	F-39	Ⅲd	38059	甕	胴部						三角突帯文ナデ			ナデ		にぶい褐	にぶい褐		○	○	○	○		石英	良	穿孔，外面煤付着
	364	I-30	Ⅲd	60350 60351	甕	胴部～底部	(12.5)		7.0			ハケ目後ナデ			ナデ		にぶい橙	褐灰		○		○	○			良	
	365	G-33	Ⅲ	60861 61087 61095 61041 61029 61033 61413	甕	胴部～底部	(12.1)		7.5			ハケ目					明赤褐	明赤褐		○		○	○		石英	良	外面煤付着
	366	I-34	Ⅲb	39582	甕	胴部～底部	(9.9)		7.4			ナデ			ナデ		にぶい橙	にぶい橙	○	○	○	○	○		石英	良	
	367	G-34	Ⅲ	60978	甕	胴部～底部	(8.2)		8.0			ナデ			摩滅		にぶい橙	明黄褐	○	○		○	○			良	
	368	H-34	Ⅲb	39862 40408	甕	胴部～底部	(11.0)		9.5			ナデ			ナデ		にぶい橙	灰黄		○	○	○	○			良	
	369	G-28 G-29	Ⅲb	51057	小型甕	胴部～底部	(5.8)		3.3			ナデ	ナデ			ナデ	灰褐	灰褐	○	○		○	○			良	
76	370	G-33	Ⅲ	61369	壺	口縁部	(4.5)	(15.8)			ナデ			ナデ			明赤褐	明赤褐	○	○		○	○			良	
	371	I-35	Ⅲb	42083	大壺	口縁部	(3.3)	(33.0)			ナデ			ナデ			明赤褐	明赤褐	○	○	○	○	○		輝石	良	
	372	G-28	Ⅲb	51061	壺	口縁部				ミガキ	ナデ			ナデ			褐灰	明赤褐		○		○	○			良	外面煤付着
	373	C-6	Ⅲb	50314	壺	口縁部					ナデ			ナデ			にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○	○	○			良	
	374	B-7	Ⅲb	50068	壺	口縁部					ミガキ			ミガキ			にぶい赤褐	にぶい赤褐	○	○		○	○			良	
	375	B-7	Ⅲb	50223	壺	口縁部～胴部	(5.2)	(6.5)			ナデ	三角突帯文（２条）		ナデ			明赤褐	明赤褐	○	○	○	○	○			良	外面黒斑
	376	G-33	Ⅲ	61017 61045	壺	口縁部	(4.3)	(11.8)			ミガキ			ミガキ後ナデ			褐灰	黒褐		○		○	○			良	二叉口縁 外面煤付着
	377	H-28	Ⅲd	60268	壺	口縁部					ナデ			ナデ			明赤褐	明赤褐		○		○	○			良	二叉口縁
	378	H-30	Ⅲc	60294	壺	口縁部					ナデ			ナデ			にぶい赤褐	にぶい赤褐		○		○	○			良	二叉口縁
77	379	G-33	Ⅲ	61415	壺	口縁部	(3.9)	(19.0)		刻目	刻目突帯文			ナデ			暗赤褐	にぶい赤褐		○	○	○	○			良	二叉口縁 外面煤付着
	380	H-34	Ⅲb	39883	壺	口縁部				刻目	刻目突帯文			ナデ			にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○		○	○			良	二叉口縁
	381	G-33	Ⅲ	61411	壺	口縁部				刻目	刻目突帯文			ナデ			褐灰	褐灰		○		○	○			良	二叉口縁
	382	G-27	Ⅲb	50966 50967 50969	壺	頸部						５条突帯文ナデ			ナデ		橙	橙	○	○	○	○	○	○		良	
	383	H-34	Ⅲb	40429	壺	頸部						突帯文ナデ			ナデ		灰褐	橙		○	○	○	○			良	円形浮文
	384	H-34	Ⅲb	39622	壺	胴部						刻目突帯文ナデ			ナデ		橙	橙		○		○	○			良	円形浮文
	385	H-34	Ⅲb	40319	壺	胴部						ナデ			ナデ		灰黄	にぶい橙		○	○	○	○			良	外面煤付着
	386	E-4	Ⅲb	50511	壺	胴部						突帯文ミガキ			ハケ目		にぶい褐	にぶい黄橙		○		○	○			良	M字状突帯文
	387	E-4	Ⅲb	50510 50534	壺	胴部						突帯文ミガキ			ハケ目指押え		にぶい褐	明赤褐		○		○	○			良	M字状突帯文
	388	E-4	Ⅲb	50508	壺	胴部						突帯文ミガキ			ハケ目		にぶい褐	にぶい褐		○	○	○	○			良	M字状突帯文
	389	C-6	Ⅲb	50308	壺	胴部						突帯文ミガキ			ナデ		黒褐	にぶい黄橙		○	○	○	○			良	M字状突帯文
	390	G-27	Ⅲb	51050 51203	壺	底部	(11.0)		8.5				ナデ			摩耗	明赤褐	橙		○	○	○	○			良	
	391	H-34	Ⅲb	40430 40351 40348	壺	底部	(7.8)		3.6				ミガキ			ハケ目ナデ	明褐	明褐		○		○	○			良	黒斑
	392	G-27	Ⅲb	51049	小壺	胴部～底部	(7.7)		4.0			ミガキ			指押えナデ		にぶい褐	黒		○		○	○			良	内面黒色化

第19表-２　弥生時代以降　遺構外出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器種	部位	法量(cm)			文様・調整							色調		胎土							焼成	備考
							器高	口径	底径	外面				内面			外面	内面	黒色	白色	赤色	雲母	長石	角閃	その他		
										口唇部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部											
77	393	G-29	Ⅲb	51166 50883	甕	底部	(8.3)		6.0				指押えミガキ			ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐		○		○	○			良	
	394	I-34	Ⅲb	40204 40192 39575	甕	底部	(6.7)		8.8				ナデ			ナデ	明赤褐	橙		○		○	○	○		良	
	395	G-33	Ⅲ	61290	壺	底部	(6.2)		11.2				ナデ			ナデ	明褐	明褐		○		○	○			良	
78	396	H-50	Ⅲd	38001	小型鉢	口縁部～胴部		(13.2)				指頭圧痕ナデ			指頭圧痕ナデ		橙	橙		○			○	○	石英	良	
	397	G-27	Ⅲb	一括	小型鉢	胴部						沈線文ナデキザミ			ナデ		黒褐	褐灰				○	○			良	
	398	G-33	Ⅲ	61007 60850 61030	壺	裾部	(4.3)	(25.5)			刻目突帯文ナデ			ナデ			にぶい赤褐	にぶい赤褐		○		○	○			良	内面煤付着
	399	H-34 I-34	Ⅲb	40316 40236	蓋	裾部	(3.3)	(27.5)			刻目突帯文ナデ			ナデ			黒褐	褐		○		○	○			良	内面煤付着
	400	H-34	Ⅲb	40327	蓋	裾部					刻目突帯文ナデ			ナデ			にぶい赤褐	黒褐		○	○	○	○			良	内面煤付着
	401	G-33	Ⅲ	61375	蓋	裾部					刻目突帯文ナデ			ナデ			にぶい褐	褐灰		○		○	○			良	内面煤付着
	402	G-34	Ⅲb	50822	蓋	裾部					刻目突帯文ナデ			ナデ			にぶい褐	灰褐		○		○	○			良	
	403	G-28	Ⅲb	51053	蓋	裾部	(1.6)	(11.6)			ナデ			ナデ			褐	灰褐		○		○	○			良	穿孔あり
	404	F-38	Ⅲd	38181	甕	口縁部					ミガキ			ナデ			にぶい赤褐	にぶい赤褐		○			○			良	丹塗り，暗文
	405	G-33	Ⅲb	50787	壺	胴部						突帯文ミガキ			ナデ		赤褐	橙		○		○	○			良	丹塗り，暗文 M字状突帯文
	406	H-34	Ⅲb	40253	壺	胴部						突帯文ミガキ			ナデ		赤褐	橙		○		○	○			良	丹塗り，暗文 M字状突帯文
	407	I-35	Ⅲb	40148	壺	底部							ミガキ			ナデ	赤褐	橙		○		○	○			良	丹塗り，暗文
79	408	E-4	Ⅲb	50503	壺	胴部						突帯文ミガキ			ハケ目		にぶい赤褐	明赤褐		○		○	○			良	イネの穎果あり M字状突帯文
	409	I-34	Ⅲc	40539	甕	底部	(5.5)		(5.5)				ナデ			ナデ	明赤褐	明赤褐	○	○		○	○			良	イネの穎果あり
	410	I-34	Ⅲb	40169	—	胴部						ナデ			ナデ		明赤褐	明赤褐		○	○	○	○			良	種子痕あり
	411	C-23	Ⅲd	60013	—	胴部						ミガキ後ナデ			ナデ		明赤褐	明赤褐		○	○	○	○			良	種子痕あり 植物痕あり

第20表　古墳時代以降　遺構外出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器種	部位	法量(cm)			文様・調整							色調		胎土							焼成	備考
							器高	口径	底径	外面				内面			外面	内面	黒色	白色	赤色	雲母	長石	角閃	その他		
										口唇部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部											
79	412	I-34	Ⅲb	39627	甕	胴部						刻目突帯文ナデ			ナデ		明赤褐	にぶい黄褐		○				○		良	刻目突帯 （布目痕）
	413	J-49	Ⅲd	38259	甕	底部	(3.6)		(9.8)				ナデ			ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐		○	○	○	○			良	
	414	I-35	Ⅲb	39948 39949 40168 40163 39937	埦	胴部～底部	(4.5)		5.8				回転ナデ			回転ナデ ミガキ	にぶい黄橙	褐灰	○	○		○	○			良	底部黒斑 土師器
	415	H-34	Ⅲb	39623	埦	底部	(1.9)		(8.0)				回転ナデ			ナデ	橙	橙		○	○			○	石英	良	土師器

第21表　古墳時代以降　遺構外出土土器観察表（陶器）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	取上番号	器種	部位	法量(cm)			色調	釉薬	施軸	産地	備考
							器高	口径	底径					
79	416	H-3	Ⅲb	60333	壺	口縁部	(2.7)	(10.0)		オリーブ灰	灰釉・・・オリーブ	口唇・・・目痕	苗代川	薩摩焼

第22表　Ⅲ～Ⅴ層出土石器観察表

挿図番号	掲載番号	取上番号	出土区	層位	器種	法量(cm)			重さ(g)	石　材	分　類	備　考
						最大長	最大幅	最大厚				
81	417	一括	B-24	Ⅲd	石鏃	(1.9)	1.6	0.2	0.4	頁岩	－	
	418	61222	G-34	Ⅲ	石鏃	(1.6)	(1.4)	0.2	0.3	頁岩	－	
	419	38229	E-40	Ⅲd	石鏃	(1.8)	1.6	0.4	0.5	流紋岩	－	
	420	38117	G-42	Ⅲd	石鏃	1.9	1.5	0.3	0.6	頁岩	－	
	421	38604	I-49	Ⅲd	石鏃	(1.9)	(1.1)	0.3	0.3	黒曜石	ＯＢ４	
	422	40128	I-35	Ⅲb	石鏃	(1.9)	1.4	0.4	0.6	頁岩	－	
	423	39054	H-46	Ⅲd	石鏃	2.6	1.7	0.3	1.0	チャート	－	
	424	38721	I-46	Ⅲd	石鏃	2.0	1.3	0.2	0.5	頁岩	－	
	425	38644	I-49	Ⅲd	石鏃	(1.9)	1.4	0.4	0.9	チャート	－	
	426	40091	H-35	Ⅲd	剥片	6.2	5.7	0.9	39.8	ホルンフェルス	－	
	427	42721	H-45	Ⅲd	剥片	7.5	(8.3)	1.1	53.3	ホルンフェルス	－	
	428	50138	B-7	Ⅲb	剥片	5.0	7.0	1.1	33.2	頁岩	－	
82	429	50335	C-6	Ⅲd	石核	2.0	3.3	1.3	6.9	黒曜石	ＯＢ２	
	430	38605	I-49	Ⅲd	石核	12.9	11.2	6.0	904.0	ホルンフェルス	－	
	431	51048	G-27	Ⅲb	礫器	9.7	12.6	3.8	490.0	砂岩	－	
	432	38295	E-40	Ⅳ	礫器	(14.7)	10.3	2.2	269.0	ホルンフェルス	－	
83	433	38575	H-49	Ⅲd	礫器	11.9	11.4	5.1	917.0	ホルンフェルス	－	
	434	42769	I-44	カクラン	礫器	12.9	13.1	6.9	1570.0	ホルンフェルス	－	
	435	38088	K-51	Ⅲd	礫器	11.8	7.7	4.4	549.0	安山岩	－	
	436	38946	H-38	Ⅲd	礫器	13.5	13.0	5.7	1175.0	ホルンフェルス	－	
84	437	60288	H-30	Ⅲd	打製石斧	14.7	10.2	2.3	299.0	ホルンフェルス	－	
	438	一括	B-23	Ⅲd	打製石斧	(6.4)	(5.0)	(1.8)	64.7	ホルンフェルス	－	
	439	38261	K-48	Ⅲd	打製石斧	(12.3)	(9.5)	(1.2)	153.0	ホルンフェルス	－	
	440	42706	H-44	Ⅲd	打製石斧	(6.9)	4.6	1.1	43.3	ホルンフェルス	－	
	441	42224	H-37	Ⅲb	打製石斧	(7.7)	(4.3)	(1.0)	45.3	ホルンフェルス	－	
	442	38660	I-46	Ⅲd	打製石斧	(9.4)	5.2	(1.8)	990.0	頁岩	－	
85	443	38643	I-49	Ⅲd	磨製石器	(6.8)	5.1	2.3	129.0	頁岩	－	
	444	38513	I-49	Ⅲd	磨製石斧	(9.9)	7.0	2.1	183.0	ホルンフェルス	－	
	445	38017	F-40	Ⅲd	磨製石斧	(5.2)	5.1	2.3	89.7	ホルンフェルス	－	
	446	38748	H-46	Ⅲd	磨石	10.0	9.7	5.1	793.0	安山岩	－	
	447	39106	I-47	Ⅳ	磨石	13.1	10.5	4.0	781.0	凝灰岩	－	
	448	38761	H-45	Ⅲd	磨石	12.9	10.2	4.6	845.0	砂岩	－	
	449	42435	H-35	Ⅲd	磨敲石	10.0	8.6	5.8	736.0	凝灰岩	－	
	450	38734	I-47	Ⅲd	磨敲石	9.6	8.8	5.5	668.0	安山岩	－	
	451	42764	I-45	Ⅲd	磨敲石	10.9	(8.4)	5.0	749.0	凝灰岩	－	

第４節　過年度調査の遺物

『田原迫ノ上遺跡１』で掲載されなかったが，重要であると判断した遺物をここに記述する。遺構の詳細は既刊を参照されたい。

１　土器（第86図452）

452は，竪穴住居跡15号より出土した小型壺形土器である。頸部は直線的で，胴部が膨らむ。底部は丸底である。壺形にした粘土の口縁部付近に穴をあけたのではなく，内面も通常の土器同様に作成したと思われる。胎土に金雲母を含み，調整は丁寧なナデをおこなう。

２　石器（第86・87図453～458）

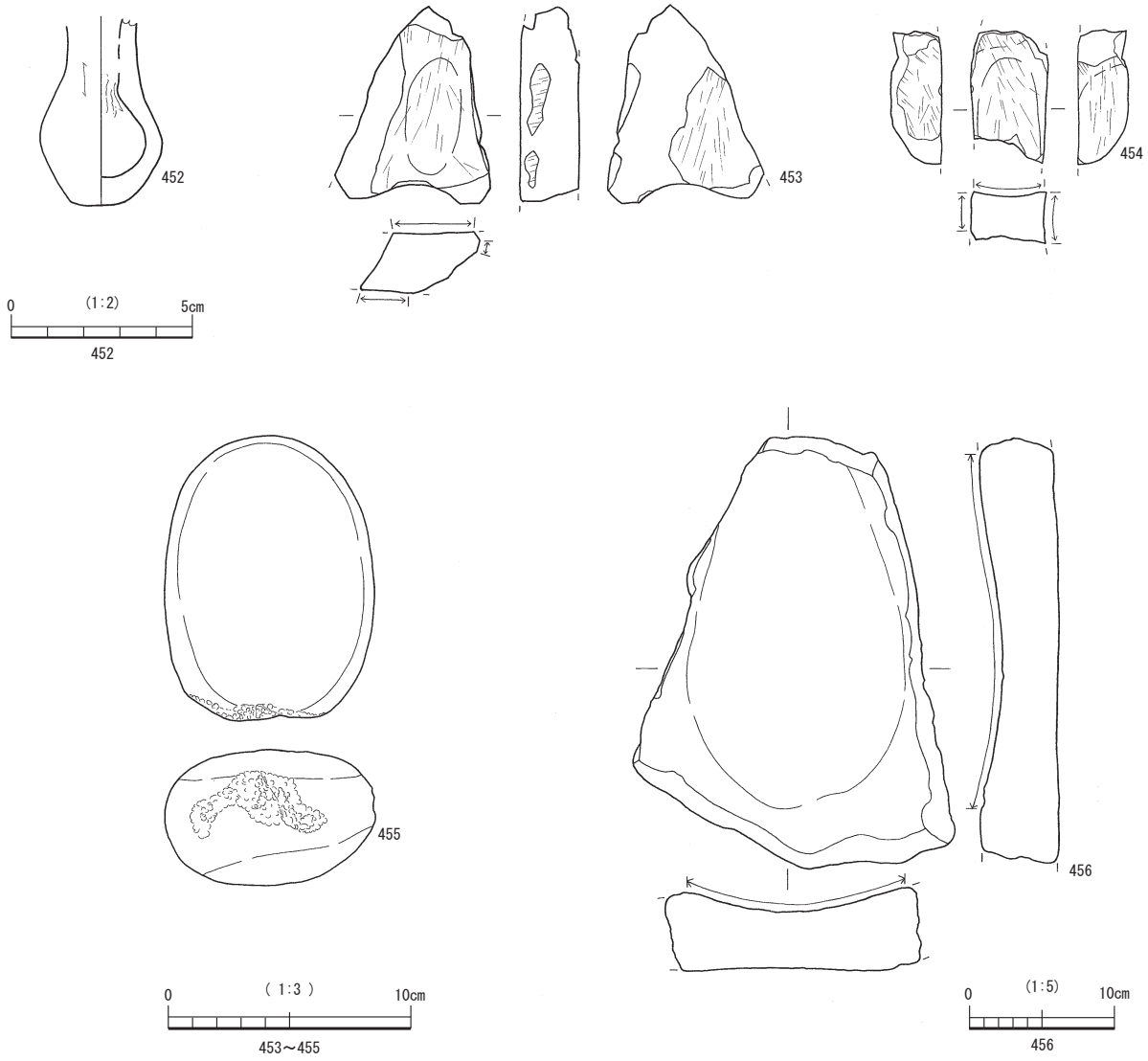
453は竪穴住居跡23号から出土した砥石である。石材は頁岩で，表面は凹面の砥面で裏面には擦痕が見られる。側面は破損していて全形は不明だが，残存部分に擦痕が確認でき，全面使用の可能性が残る。

454は竪穴住居跡31号から出土した砥石である。石材は泥岩で，表面，側面に凹面の砥面が見られる。裏面は欠損しているため，全形は不明である。

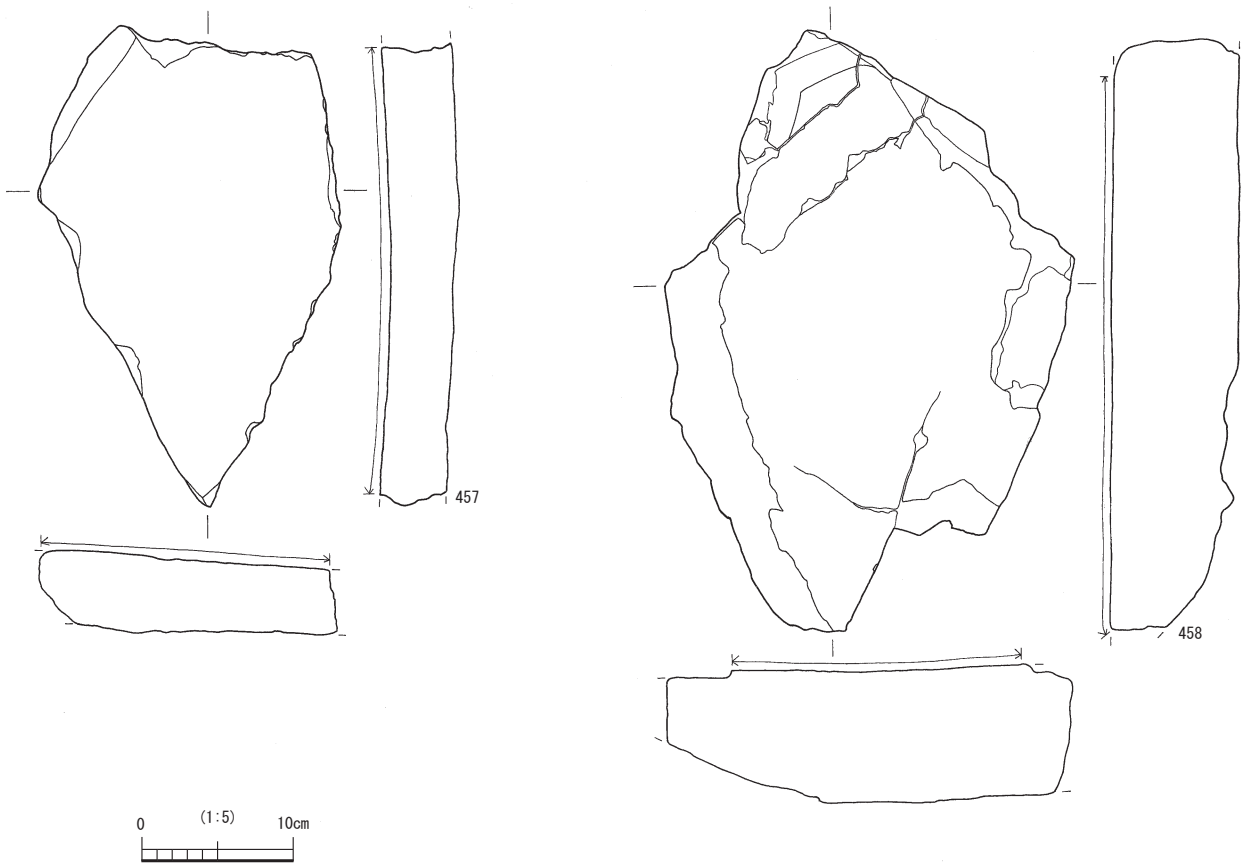
455・456は集石遺構46号から出土した石器である。455は安山岩製の磨敲石である。表裏両面に磨り面を有し，下部側面には敲打痕が見られる。456は偏平な安山岩を石材とした石皿である。作業面は楕円形に深く窪み，下部には掻き出し口を有する。

457は連穴土坑18号から出土した偏平な石皿の欠損品である。石材は安山岩で，表裏面に磨面を有する。側面を欠損しており，全形は不明である。

458は集石遺構158号から出土した石皿の欠損品である。石材は砂岩で，表面に磨り面を有する。全体的に赤く比熱痕が残り，熱によるひび割れが生じている。



第86図　過年度調査の遺物１



第87図　過年度調査の遺物２

第23表　過年度調査の土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	層位	器種	部位	法量(cm)			器面調整		色調		胎土							焼成	備考
							器高	口径	底径	外面	内面	外面	内面	黒色	白色	赤色	雲母	長石	角閃	その他		
86	452	竪穴住居跡15号	F･G-31	Ⅳ	小型壺	頸部～底部	(5.1)		1.4	ナデ	ナデ	褐灰	褐灰		○	○	○	○			良	

第24表　過年度調査の石器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	遺構検出面	器種	法量			重さ(g)	石材	備考
						長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)			
86	453	竪穴住居跡23号	G-28	Ⅲd	砥石	8.1	6.4	2.4	125.0	頁岩	
	454	竪穴住居跡31号	B-22	Ⅳ	砥石	5.3	3.0	2.1	49.5	泥岩	
	455	集石遺構46号	E-22	Ⅺ	磨敲石	11.7	8.6	5.6	938.5	安山岩	
	456	集石遺構46号	E-22	Ⅺ	石皿	29.8	22.2	5.7	5600.0	安山岩	
87	457	連穴土坑18号	F-22	Ⅻ	石皿	31.8	20.0	5.4	4200.0	安山岩	
	458	集石遺構158号	D-23	Ⅺ	石皿	39.6	27.2	9.1	11400.0	砂岩	

立小野堀遺跡２
（たちおのぼりいせき）

第Ⅴ章　立小野堀遺跡の発掘調査の成果

第１節　発掘調査の方法と層序

１　発掘調査の方法

本遺跡の調査区割り（グリッド）は，高速道路建設予定地の工事用センター杭STA185とSTA186の延長線を中心に，１グリッド10ｍ×10ｍで北西側から南東側に向かって１，２，３…，北東側から南西側に向かってＡ，Ｂ，Ｃ…，と設定している。

調査は，用地境界等では安全上の措置として平均１ｍ程度内側に控えて調査区を設定し，重機による表土除去を行った後，人力による掘り下げを実施した。遺構は検出の都度，写真撮影，掘り下げ，実測を行った。

調査に先立ち国交省と県文化財課が協議を行い，以前危険箇所として調査を除外した範囲の隣接地385㎡についても，崩落の恐れのあることから危険箇所として調査を行わないこととなった。また，国営管及び団体営管が埋設されている箇所についても調査を行わないこととなった。さらに国交省，県文化財課，埋文調査センターで協議を行い，排水対策及び流末処理のための側溝を残して調査を行い，遺構が広がる場合のみ側溝を撤去して調査を行うこととなった。

これらの結果，本書に係る最終的な調査実施面積は，表面積595㎡，延べ面積1,190㎡である。

２　層序

本遺跡の層序は，以下のとおりである。なお，各層の詳細については2017年３月刊行の公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（16）『立小野堀遺跡』を参照されたい。

第２節　発掘調査の成果

１　調査の概要

発掘調査は，工事予定地内の市道をはじめとする生活道路下が対象となった。遺跡の残存状況は道路敷設時の掘削造成工事のためⅢ層以上は失われており，遺構はⅣ層面以下で検出された。遺構は前回報告された遺構番号の継続番号とし，遺物は本報告書の通し番号で記述することとする。

２　遺構

平成30年度の調査では，地下式横穴墓３基・土坑墓１基が検出された。遺構の分類，数値計測規則等については既刊報告書に準じることとする。また，遺構内出土遺物についても分類，部位名称など同様とする。

地下式横穴墓（SK253～SK255：第91図～第93図）

地下式横穴墓は，既刊報告書の掲載方法にのっとり所見を表形式で掲載する。

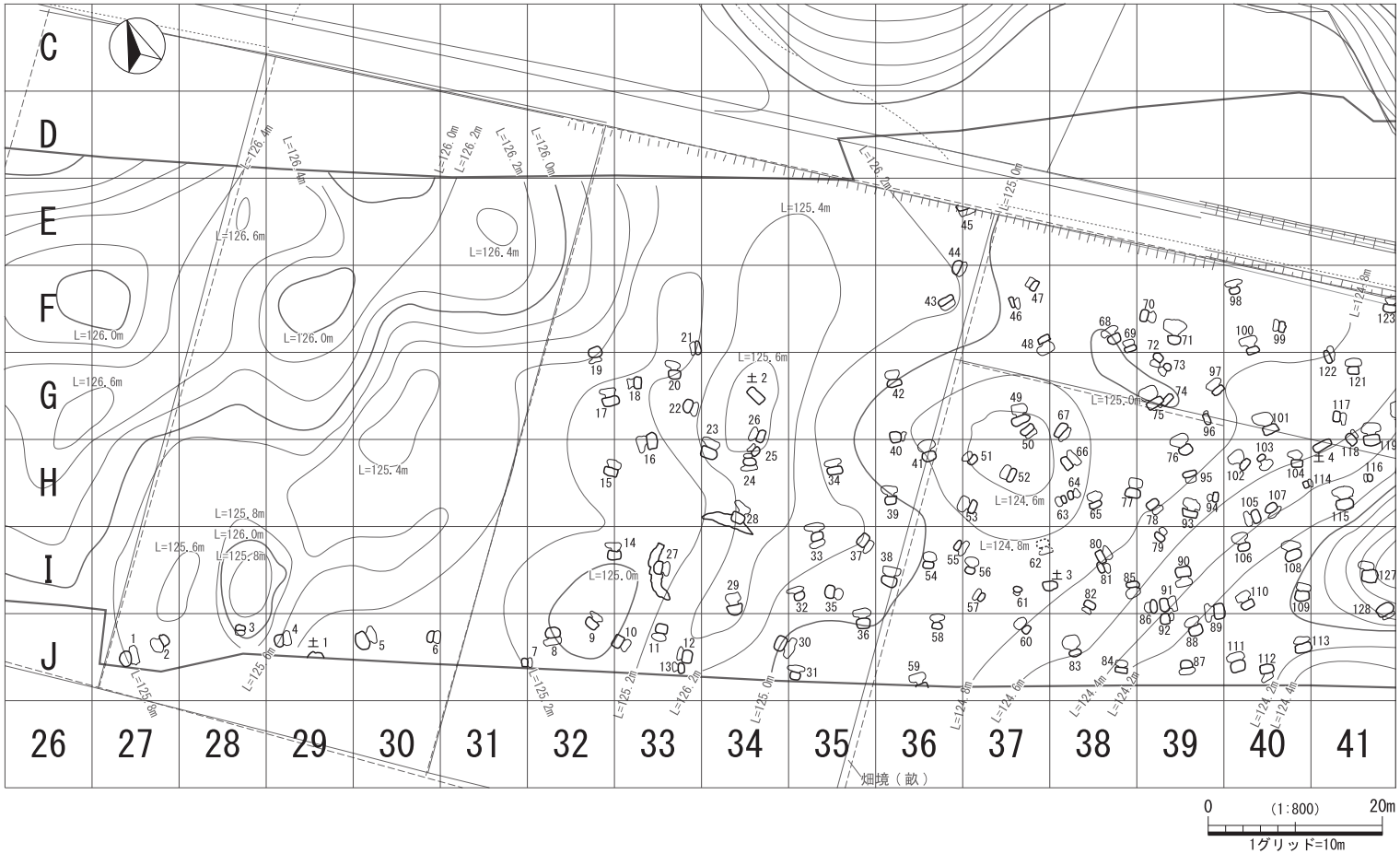
191号地下式横穴墓内出土遺物（SK253：第91図）

遺物は鉄器の刀子が１点出土した。459は刀子である。切先に向かって細くなる形状で関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先と思われるが，やや直線的な形状，断面

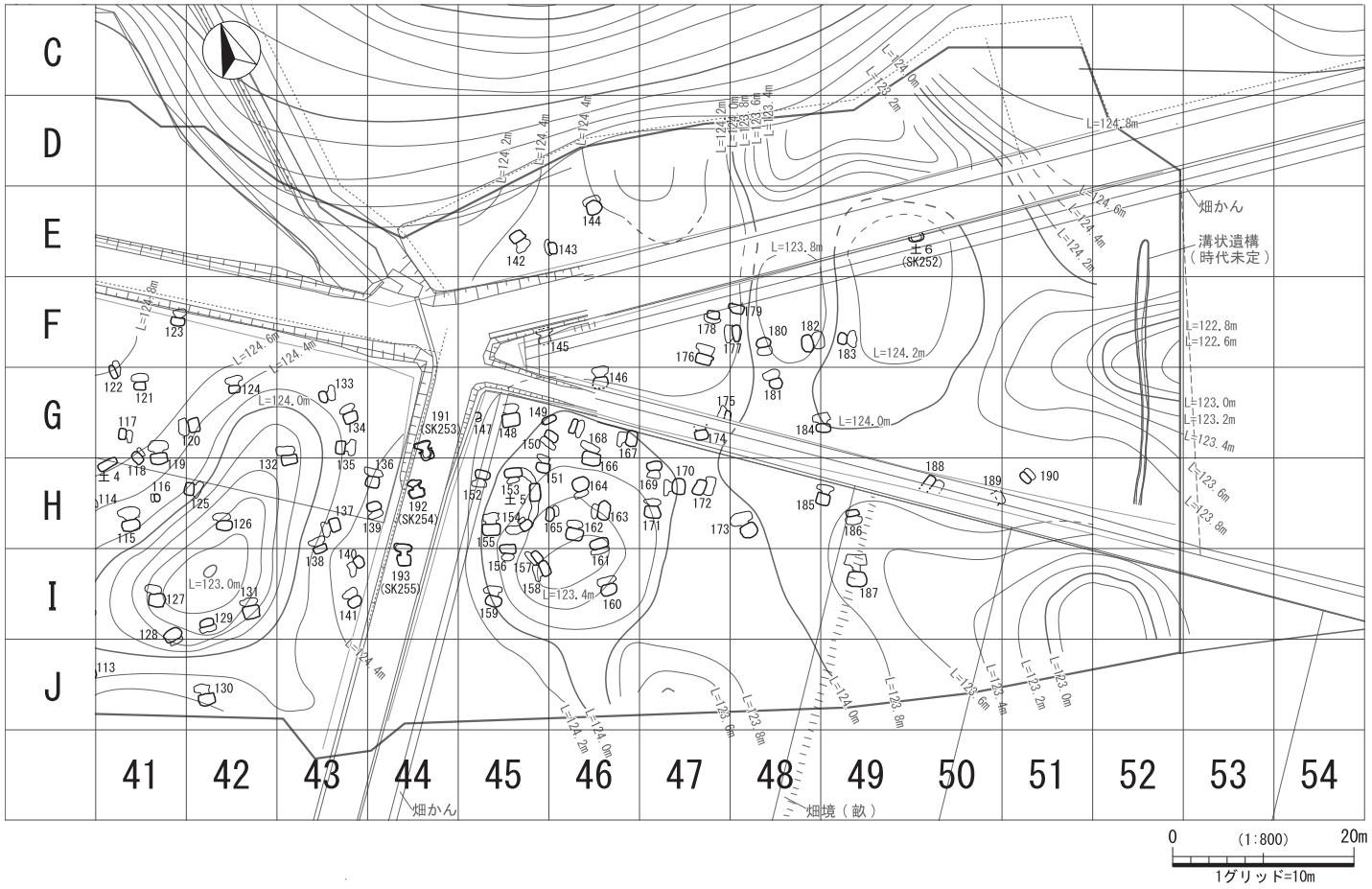
第25表　立小野堀遺跡　基本層序

層	土層名	火山灰名及び包含層	平均層厚（cm）
Ⅰ	表土（新・旧耕作土）		30～40
Ⅱ	暗黒褐色土層	古墳	0～10
Ⅲ	黒茶褐色土層	弥生～古墳	20～40
Ⅳ	黒褐色土層	縄文後晩期	20～30
Ⅴ	黒茶褐色土層(黄色パミス多)		0～5
Ⅵ	黒褐色黄橙パミス混土層	池田降下軽石	5～10
Ⅶ	暗茶褐色土層	縄文早期	10～15
Ⅷa	暗橙褐色土層	アカホヤ火山灰層	20～30
Ⅷb	暗橙褐色土層	アカホヤ軽石	10～15
Ⅸ	黒褐色弱粘質土層		10～15
Ⅹ	黒褐色黄橙パミス混土層		15～20
Ⅺ	暗茶褐色黄橙パミス混土層		15～20
Ⅻ	暗黄褐色黄橙パミス混土層		20～30
ⅩⅢ	黄白色火山灰層	薩摩火山灰	30～40

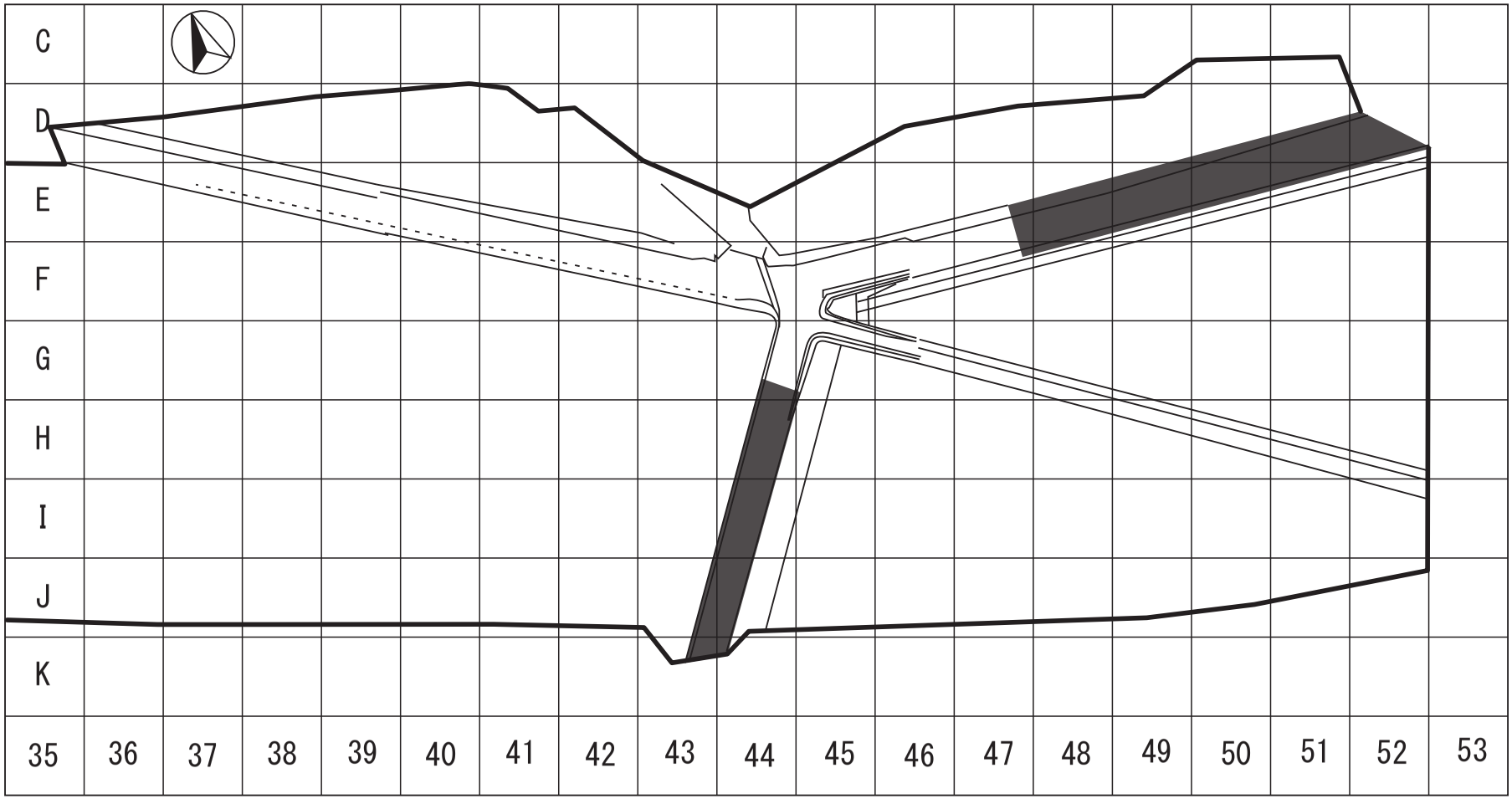




第88図　立小野堀遺跡　遺構配置図（１）



第89図　立小野堀遺跡　遺構配置図（２）



第90図　立小野堀遺跡　平成30年度調査範囲図

は平造りを呈する。関部は刃部側からの片関でわずかに斜めに落ち，深さ約３㎜である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎部には柄木の木質と思われる有機物が残存する。また刃部には革鞘と思われる有機質が残存し，鞘を留めるための綴孔も確認できる。

192号地下式横穴墓内出土遺物（SK254：第92図）

遺物は鉄器が１点出土した。460は短剣である。刃部はふくら切先である。断面はレンズ状を呈する。切先に向かってわずかに細くなる形状で，関部に最大幅をもつ。関部は深さ約１cmの直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。茎断面は長方形を呈し，中央付近に１孔の目釘孔が確認出来る。

193号地下式横穴墓内出土遺物（SK255：第94図～第96図）

遺物は鉄器の鉄剣１点，鉄鏃17点（長頸鏃15点，腸抉柳葉鏃１点，圭頭鏃１点）が出土している。461は，鉄剣である。切先に向かってわずかに細くなる形状で，関部に最大幅をもつ。刃部はふくら切先であり，断面はレンズ状を呈する。刃部には鞘の痕跡である木質が確認でき，刃部を挟み込む二枚合わせ式であることが鞘先端部の観察から確認できる。鞘は幅４㎜程度の紐状の繊維で巻かれていることが確認出来た。鞘口は骨角製と思われる。関部は深さ約３㎜の直角に落ちる形態である。茎部は茎尻に向かって幅が狭くなる。振袖形の形状を呈する。茎断面は長方形を呈する。２孔の目釘孔が確認できる。柄縁は骨角製と思われる。わずかに柄巻きが残存する。

462～464は長頸鏃で461の茎部に切先を逆位にして錆着している。いずれも逆刺を有する長三角形の刃部，断面形は両丸造りである。頸部に別造り片逆刺をもつ。

462は刃部逆刺が欠損し，別造り片逆刺の先端部も欠損する。頸部15.5cmで折損している。463は刃部一方の逆刺を欠損する。頸部12.4cmで折損している。464は頸部片逆刺の先端が欠損する。頸部12.8cmで折損している。

465～471は錆着していたのでそのまま図化した。長頸鏃でいずれも刃部は逆刺を有する長三角形で，断面形は両丸造りである。頸部に別造り片逆刺をもつ。頸部断面は長方形を呈し，茎部断面は方形を呈する。茎部には，状態は良好ではないが矢柄と思われる木質も残存する。465には桜皮と思われる口巻きも確認出来る。468は茎部に下地巻きの痕跡が観察される。

472・473は長頸鏃で，いずれも刃部は逆刺を有する長三角形で，断面形は両丸造りである。頸部に別造り片逆刺をもつ。472は頸部，茎部断面が方形を呈する。茎部に矢柄が残存する。473は頸部，茎部断面が長方形を呈する。

474は長頸鏃で，刃部は逆刺を有する長三角形で，断面形は両丸造りである。頸部に別造り片逆刺をもつ。錆化により頸部がわずかに湾曲している。茎部がわずかに残存する。また，わずかに残る茎部に矢柄が残存している。

475・476は長頸鏃で475は先端の刃部を欠損し，茎部も付け根あたりで折損する。頸部には別造り片逆刺が残存する。頸部断面は方形を呈する。476は刃部を欠損し，頸部途中から折損している。頸部には別造り片逆刺が残存する。

477と478は錆着していたのでそのまま図化した。477は腸抉柳葉鏃である。刃部断面が両丸造りで，頸部は平造りである。頸部関は斜めに落ちる形状を呈する。茎部は途中で折損している。478は圭頭鏃である。刃部断面は平造りで，鏃身部，茎部は長方形を呈している。

６号土坑墓（SK252・第97図）

Ｅ－49・50区，Ⅵ層上面で検出された。プランはⅣ層上面でぼんやりと認識できていたが判然とせずⅥ層上面にて確定することができた。平面は長軸167cm，短軸推定95cmの楕円形を呈している。断面形状は碗形を呈し底面に平坦面をもち，深さ約56cmを測る。埋土は掘削された土がそのまま埋め戻されたような状況である。遺構内からの遺物の出土は見られなかった。地下式横穴墓が散見される範囲での検出であること，底部が平坦面をもち，埋め戻されたような埋土状況から土坑墓と判断した。

３　遺物

遺物は市道敷設工事に伴う削平により遺物包含層がほとんど除去されていたため，わずか17点の出土であった。うち図化できた２点を掲載する。いずれもⅢ層出土である。

479は甕の口縁～胴部にかけての破片である。逆Ｌ字の口縁で，復元口径32.8cmを測る。口唇部断面は平坦であるがわずかにくぼむ。胴部はわずかに膨らみ，断面三角形の小さな突帯が一条めぐる。480は壺の肩部に施された幅広の突帯である。竹管による丸い模様と鋸歯状の沈線が施されている。壺H類に比定される。

191号地下式横穴墓（SK253）

検出区	G・H－44	玄室開口方向	北北東
分　類	Ｂ１		

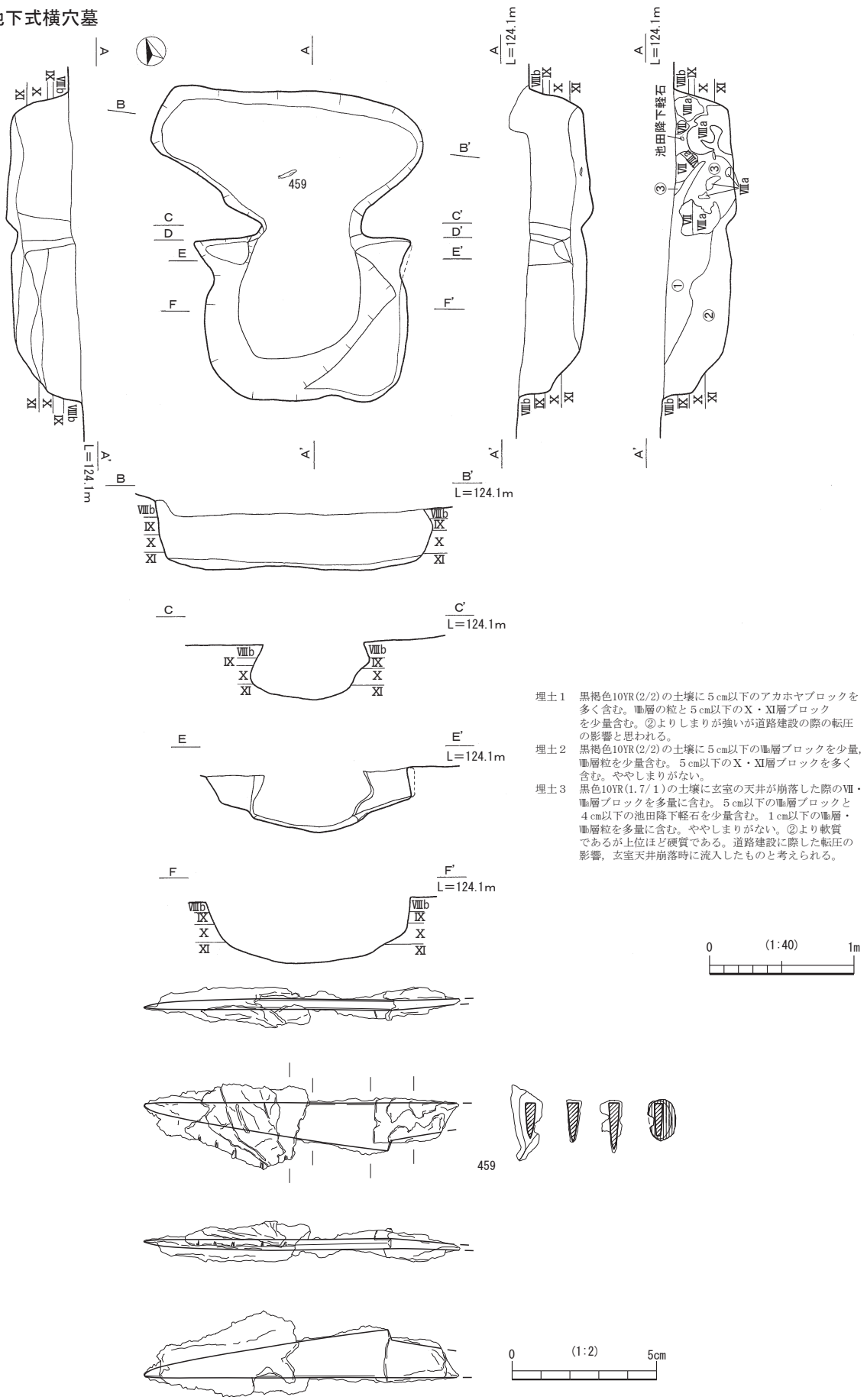
検出状態	農道敷設の際の攪乱土を除去し，Ⅷb層にて検出した。竪坑，羨道，玄室ともに上部を削平されていた。一部玄室天井部が残存していた。

	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	112	140	40	57	35	18	82	187	100	53
推　定	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

竪坑最下層	Ⅺ	竪坑平面形	隅丸方形	羨門正面形	略長方形
玄室天井層	不明	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅺ	玄室断面形	不明		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	あり	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 　竪坑の平面形は隅丸方形と推測され，羨道側左右に平面が三角形を呈する抉りが施される。竪坑南東部に用途不明の段を有する。 【玄室】 　玄室の平面形は楕円形を呈し，僅かに竪坑側に傾斜し下る。床面はほぼ平坦に作られ，羨道寄りの床面直上から刀子が出土した。埋土にはブロック状のⅧa層土が多く観察された。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	刀子１点
備　考	

191号地下式横穴墓



第91図　191号地下式横穴墓，出土遺物

192号地下式横穴墓（SK254）	検出区	Ｈ－44	玄室開口方向	北北東
	分　類	Ｂ２		

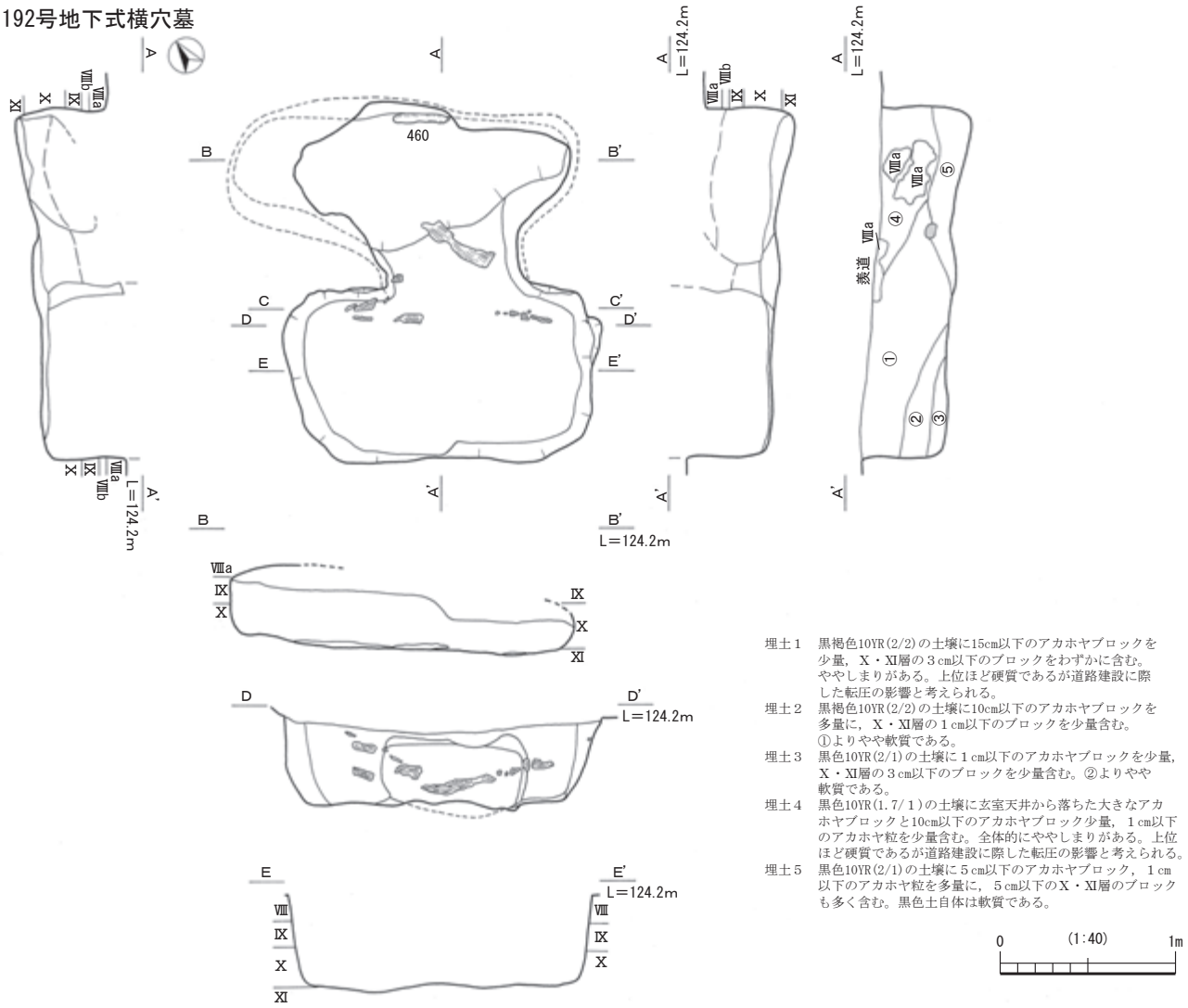
検出状態	農道敷設の際の攪乱土を除去し，Ⅷb層にて検出した。竪坑，羨道，玄室ともに上部を削平されていた。一部玄室天井部が残存していた。

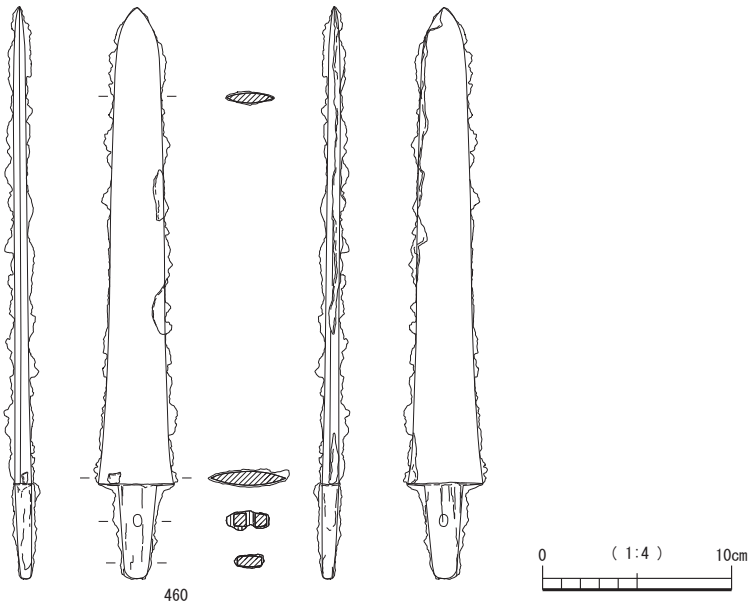
	竪　坑（cm）			羨　道（cm）			玄　室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現　状	97	173	45	80	35	40	83	200	110	28
推　定	－	－	－	－	40	－	－	－	－	35

竪坑最下層	X	竪坑平面形	隅丸長方形	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	XI	玄室断面形	不明		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

概　要	【竪坑】 　平面形は隅丸長方形を呈し，ほぼ垂直に掘り込まれている。羨道開口部付近の竪坑埋土内及び羨道部埋土内に繊維方向がそろった一連のものと判断できる炭化物が出土した。また炭化物を多く含む埋土も観察された。 【玄室】 　玄室は羨道部分から僅かに傾斜しながら奥にむかって下る。玄室高は羨道から奥にむかって左側が高く，右側が低くなっていることが玄室中間端の変換点の位置から想定できる。玄室内奥壁近くから長軸方向に沿って短剣が出土した。
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	竪坑埋土及び羨道部埋土内から出土した。
人　骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	短剣１点
備　考	

192号地下式横穴墓





第92図　192号地下式横穴墓，出土遺物

193号地下式横穴墓（SK255）

検出区	H・Ⅰ－44	玄室開口方向	北北東
分　類	A		

検出状態	農道敷設の際の攪乱土を除去し，Ⅷa層にて検出した。竪坑，羨道，玄室ともに上部を削平されていた。

	竪坑（cm）			羨道（cm）			玄室（cm）			
	縦軸	横軸	深さ	羨門 横軸	羨門 高さ	奥行	縦軸	横軸	奥行	高さ
現状	10	148	55	70	－	40	80	178	120	76
推定	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－

竪坑最下層	Ⅺ	竪坑平面形	隅丸方形	羨門正面形	隅丸長方形
玄室天井層	Ⅷa	玄室平面形	楕円形		
玄室床面層	Ⅺ	玄室断面形	不明		
閉塞推定	木材	竪坑抉り	なし	竪坑掘り返し痕	なし

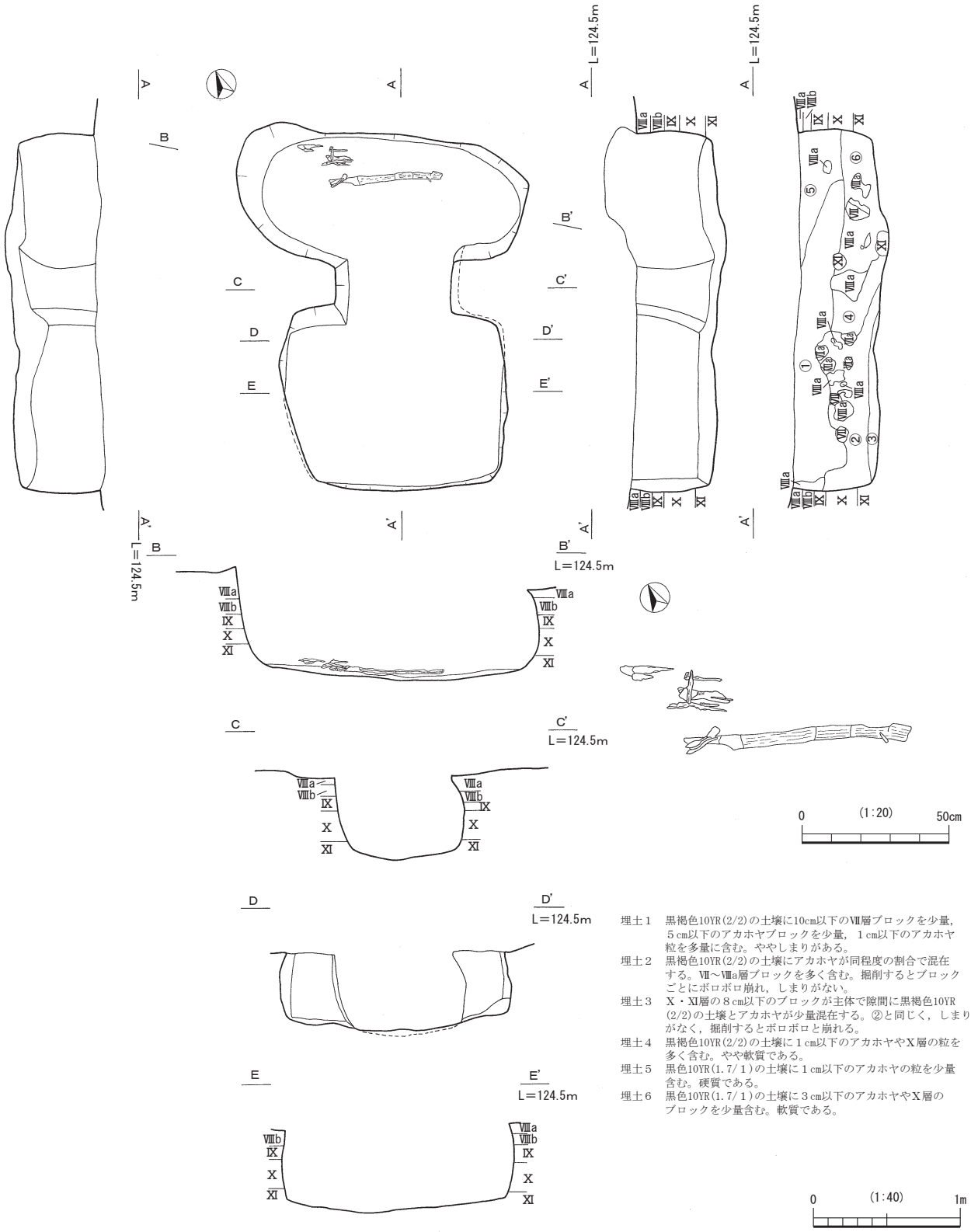
概要

【竪坑】
　竪坑は平面形状がほぼ正方形を呈し，垂直に掘り込まれており，こぶし大のアカホヤブロックを大量に含む埋土で充填されていた。羨道を閉塞する埋土塊等は検出されなかった。

【玄室】
　玄室は埋土で埋もれており，早期に天井が崩落していたものと考えられる。玄室内北奥に鉄鏃がまとまり，やや中央よりに鉄刀が出土した。

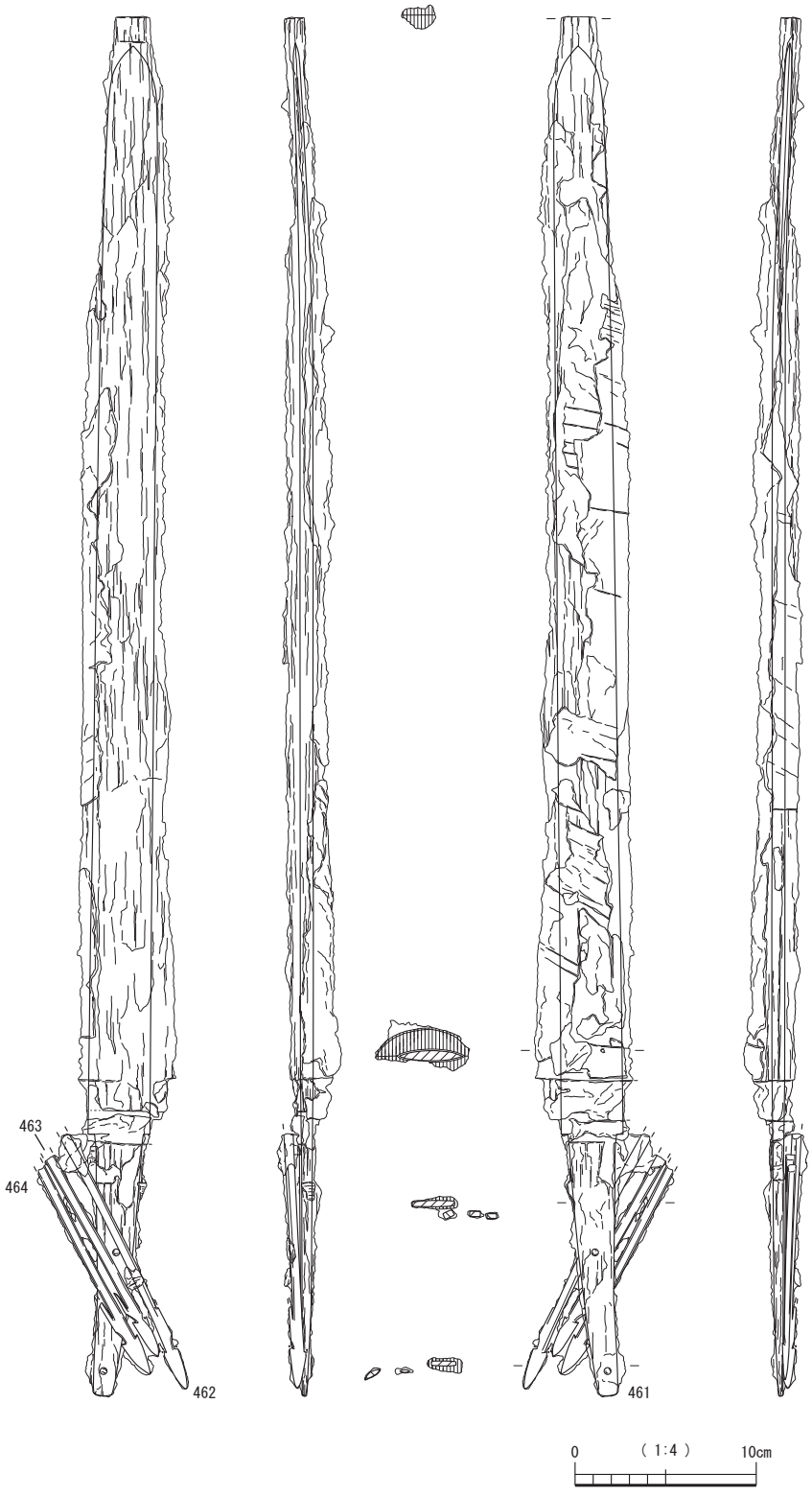
工具痕	未検出
赤色顔料	未検出
炭化物	未検出
人骨	未検出
出土遺物　竪坑上面	なし
出土遺物　竪坑埋土内	なし
出土遺物　玄室内	鉄剣１点，鉄鏃17点（長頸鏃15点，圭頭鏃１点，腸抉柳葉鏃１点）
備考	

193号地下式横穴墓

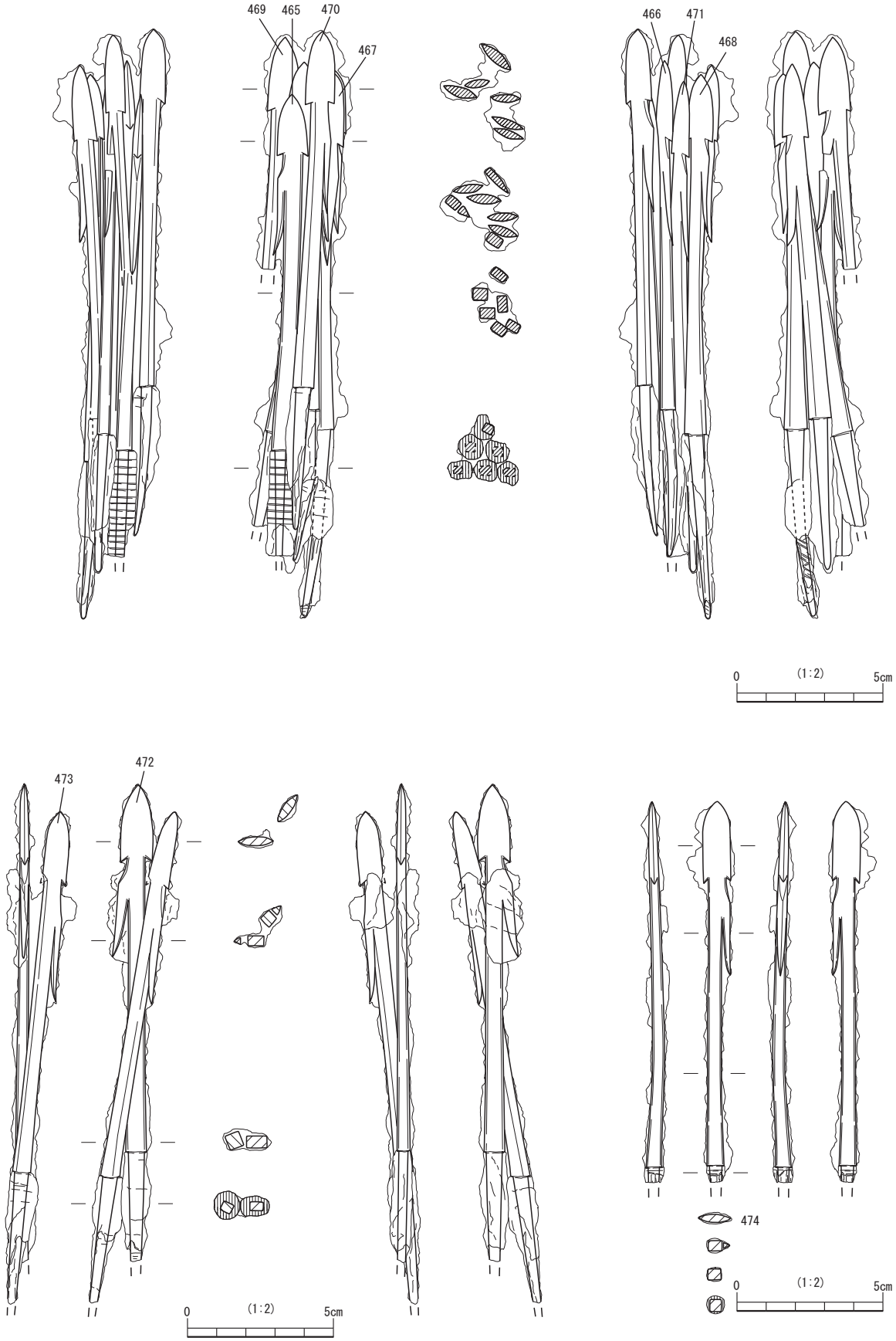


埋土１　黒褐色10YR(2/2)の土壌に10cm以下のⅦ層ブロックを少量，５cm以下のアカホヤブロックを少量，１cm以下のアカホヤ粒を多量に含む。ややしまりがある。
埋土２　黒褐色10YR(2/2)の土壌にアカホヤが同程度の割合で混在する。Ⅶ～Ⅷa層ブロックを多く含む。掘削するとブロックごとにボロボロ崩れ，しまりがない。
埋土３　Ⅹ・Ⅺ層の８cm以下のブロックが主体で隙間に黒褐色10YR(2/2)の土壌とアカホヤが少量混在する。②と同じく，しまりがなく，掘削するとボロボロと崩れる。
埋土４　黒褐色10YR(2/2)の土壌に１cm以下のアカホヤやⅩ層の粒を多く含む。やや軟質である。
埋土５　黒色10YR(1.7/１)の土壌に１cm以下のアカホヤの粒を少量含む。硬質である。
埋土６　黒色10YR(1.7/１)の土壌に３cm以下のアカホヤやⅩ層のブロックを少量含む。軟質である。

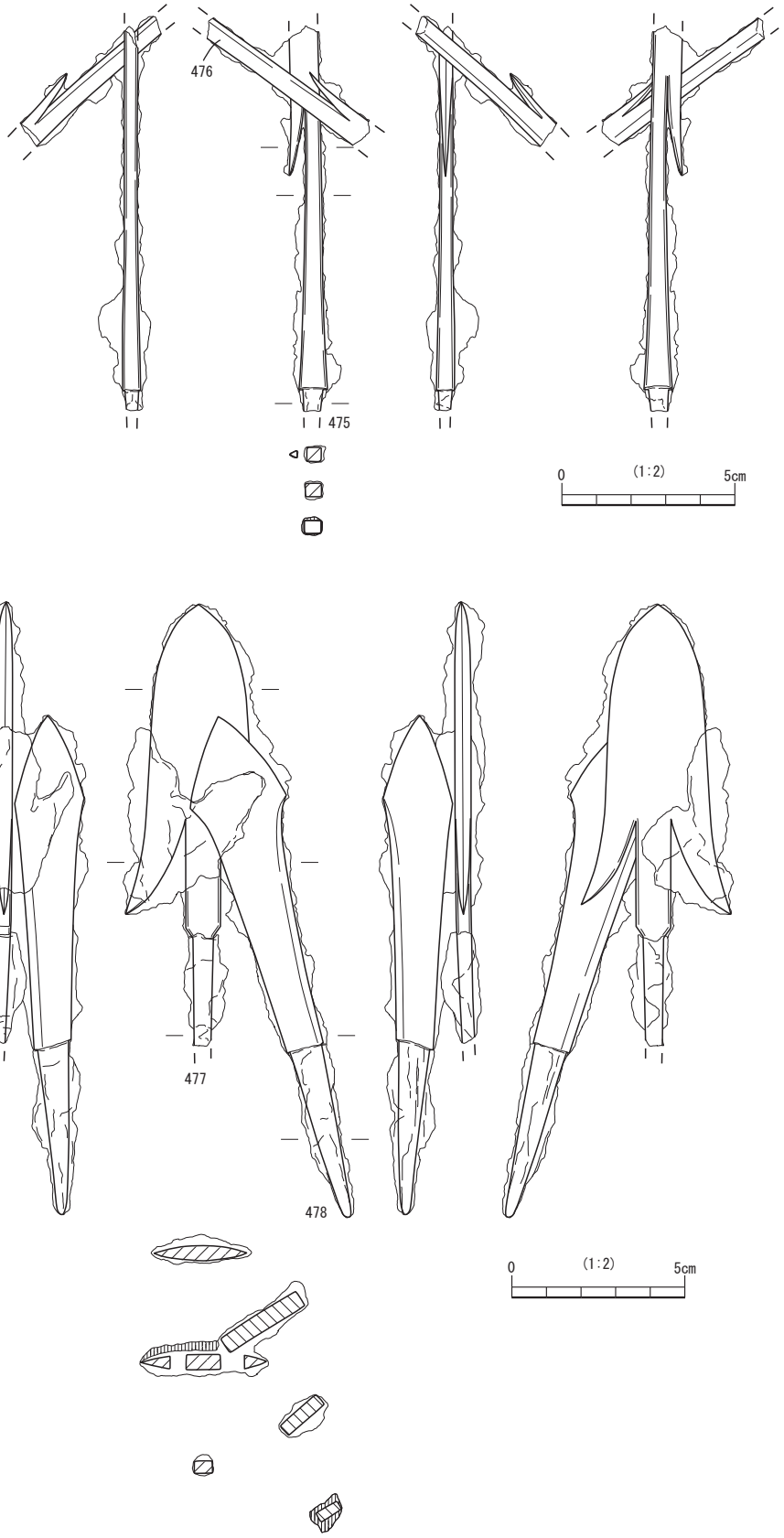
第93図　193号地下式横穴墓



第94図　193号地下式横穴墓出土遺物（1）

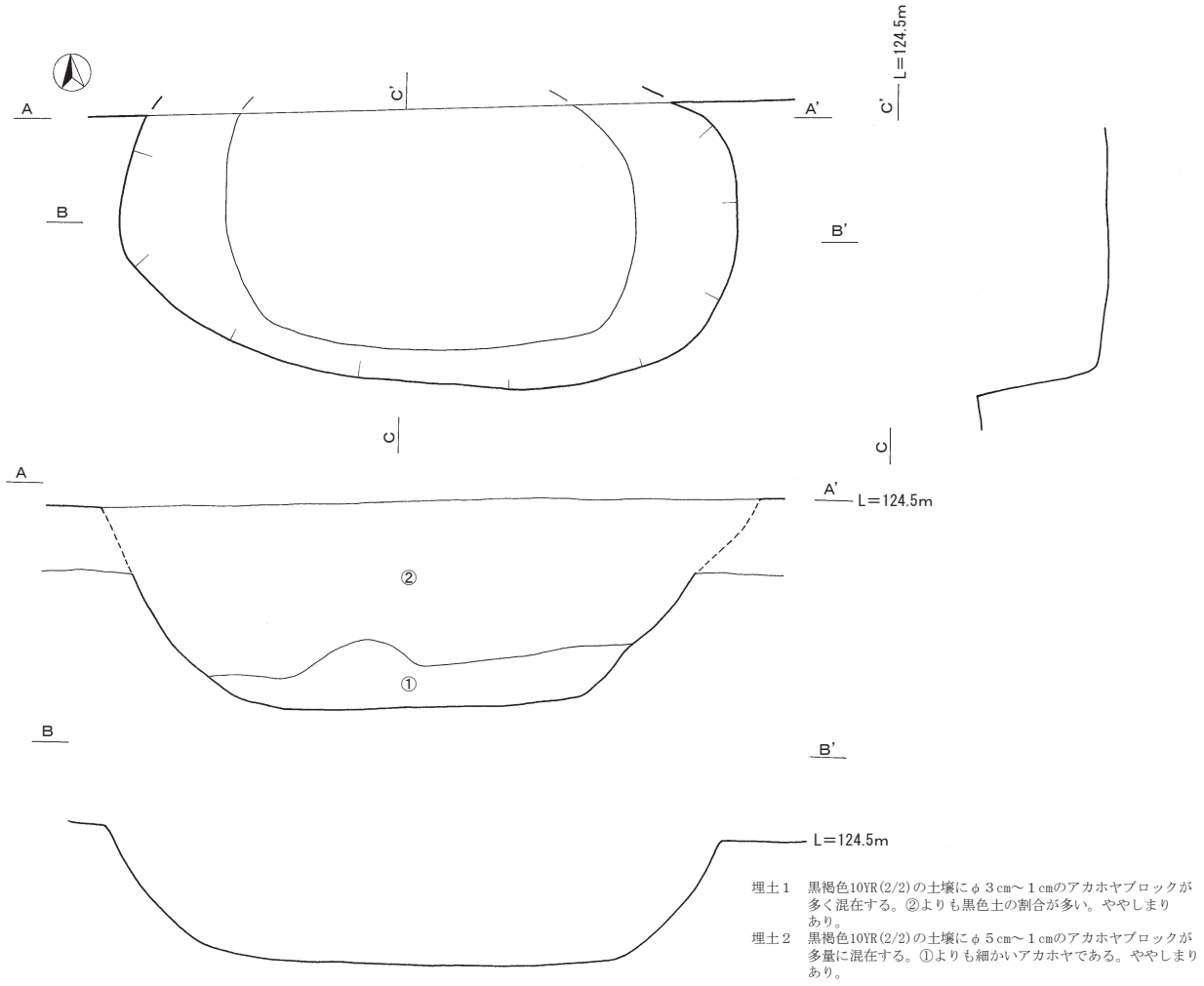


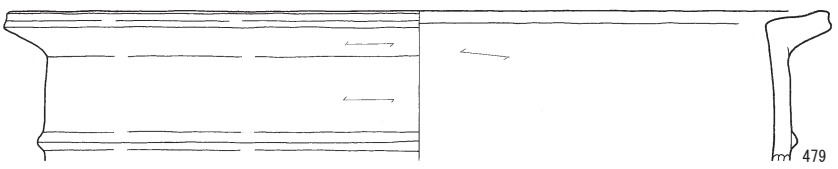
第95図　193号地下式横穴墓出土遺物（２）



第96図　193号地下式横穴墓出土遺物（３）

６号土坑墓







第97図　６号土坑墓，出土遺物

第26表　金属製品観察表（１）刀剣類・刀子

挿図	掲載	取上番号	エリア	出土区	出土遺構	器種	部位	計測値(cm)			関部	茎尻	目釘数	重量(g)	科学分析	備　考
								最大長	最大幅	最大厚						
91	459	20072-1	13	G-44	191号地下式横穴墓	刀子	刃部～茎部	+10.8	1.6	0.3	角	不明	0	22.7	○	有機質（皮革？）付着
92	460	20072-2	14	H-44	192号地下式横穴墓	短剣	完形	30.2	3.9	0.7	直角	栗丸	1	188.8	○	
94	461	460-1	14	H-44	193号地下式横穴墓	鉄剣	完形	74.7	3.4	0.6	直角	栗丸	2	(818.0)	○	462,463,464と錆着

第27表　金属製品観察表（２）鉄鏃

挿図	掲載	取上番号	エリア	出土区	出土遺構	層	型式	部位	計測値(cm)				関部		重量(g)	科学分析	備　考
									残存長	鏃全長	最大幅	最大厚	刃部	頸部			
94	462	460-2	14	H-44	193号地下式横穴墓	－	長頸鏃	刃部～頸部	15.5	+15.5	0.8	0.4	腸抉	不明	(818.0)		461と錆着
	463	460-3	14	H-44	193号地下式横穴墓	－	長頸鏃	刃部～頸部	12.4	+12.4	0.8	0.3	腸抉	不明			
	464	460-4	14	H-44	193号地下式横穴墓	－	長頸鏃	刃部～頸部	12.8	+12.8	1.0	0.3	腸抉	不明			
95	465	466-1	14	H-44	193号地下式横穴墓	－	長頸鏃	ほぼ完形	15.8	+15.8	1.0	0.3	腸抉	角	135.0		
	466	466-2	14	H-44	193号地下式横穴墓	－	長頸鏃	完形	16.9	16.9	1.2	0.3	腸抉	角			
	467	466-3	14	H-44	193号地下式横穴墓	－	長頸鏃	ほぼ完形	15.9	+15.9	1.1	0.3	腸抉	角			
	468	466-4	14	H-44	193号地下式横穴墓	－	長頸鏃	完形	18.6	18.6	1.1	0.3	腸抉	角			
	469	466-5	14	H-44	193号地下式横穴墓	－	長頸鏃	刃部～頸部	7.9	+7.9	1.2	0.4	腸抉	不明			
	470	466-6	14	H-44	193号地下式横穴墓	－	長頸鏃	完形	17.3	+17.3	1.3	0.4	腸抉	角			
	471	466-7	14	H-44	193号地下式横穴墓	－	長頸鏃	完形	17.3	17.3	1.1	0.3	腸抉	角			
	472	462-1	14	H-44	193号地下式横穴墓	－	長頸鏃	ほぼ完形	16.4	+16.4	1.2	0.4	腸抉	角	34.7		
	473	462-2	14	H-44	193号地下式横穴墓	－	長頸鏃	ほぼ完形	17.0	+17.0	1.1	0.5	腸抉	角			
	474	465	14	H-44	193号地下式横穴墓	－	長頸鏃	刃部～頸部	13.0	+13.0	1.1	0.4	腸抉	角	13.0		
96	475	463	14	H-44	193号地下式横穴墓	－	長頸鏃	頸部～茎部	11.1	+11.1	0.9	0.4	不明	角	17.6		
	476	464	14	H-44	193号地下式横穴墓	－	長頸鏃	頸部	5.6	+5.6	計測不能	計測不能	不明	不明			
	477	461-1	14	H-44	193号地下式横穴墓	－	腸抉柳葉鏃	刃部～頸部	12.8	+12.8	3.6	0.5	腸抉	斜	87.1		
	478	461-2	14	H-44	193号地下式横穴墓	－	圭頭鏃	完形	14.9	14.9	2.6	0.5	－	角？			

第28表　Ⅲ層出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	遺構名	取上番号	分類	器種	部位	法量(cm)			文様・調整							色調		胎土							焼成	備　考
									器高	口径	底径	外面				内面			外面	内面	黒色	白色	赤色	雲母	長石	角閃	その他		
												口唇部	口縁部	胴部	底部	口縁部	胴部	底部											
97	479	市道①－３	Ⅲ		一括		甕	口縁部		(32.8)			ナデ			ナデ			にぶい橙	にぶい橙	○	○		○	○	○		良	
	480	市道①－３	Ⅲ		一括		壺	肩部						ナデ			ナデ		にぶい橙	橙	○	○	○		○	○	石英	良	

第Ⅵ章　自然科学分析

第１節　自然科学分析の概要

本遺跡において「土器圧痕調査」「放射性炭素年代測定」「樹種・種実同定」の各種自然科学分析を行った。

「土器圧痕調査」は平成29年度に行った。対象とした弥生時代の遺構・遺物は『田原迫ノ上遺跡１』に既に掲載されているので，そちらを参照されたい。「放射性炭素年代測定」「樹種・種実同定」は令和元年度に行った。なお，「放射性炭素年代測定」「樹種・種実同定」は田原迫ノ上遺跡と立小野堀遺跡を同時に委託したため，ここにまとめて報告する。

第２節　土器圧痕調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

１　試料

試料は，竪穴建物跡１～31号より出土した弥生時代中期後半の土器（山ノロⅡ式）948点である。

土器は報告書掲載済であり，図番号毎に収納ケース（パンケース）にまとめられ，個別に袋に入った状態である。石膏で隙間を充填した土器や復元された土器も多数含まれている。表１で示す重量および考察での圧痕検出率は，上記の石膏や試料袋，試料札，緩衝材等を含む点を留意されたい。

土器圧痕調査は，特に栽培種や栽培の可能性が指摘される種実，堅果類等の可食種実の有無に着目して実施する。

２　分析方法

(1)　圧痕検出作業

圧痕検出作業は，平成29(2017)年12月に当社社員２名が３日間実施し，埋文調査センター真邉彩氏の指導を受けた。計測記録は，埋文調査センターの協力を得た。

①　重量記録

土器の計量は，１点毎と，複数点をパンケース毎の，２方法で実施する。パンケース毎計量は，パンケースの重量を差し引いて記録する。１点毎に計量した土器は，表の個数の欄に１と記している。報告書掲載済土器は，報告書の図番号と遺物番号を記す。

②　圧痕概査

ルーペを用いて，土器の表裏および断面の全面を観察し，圧痕を探す。圧痕は，穴の形状に着目し，内部で広がる（袋状，フラスコ状を呈す）凹みは種実圧痕の可能性が高いため，シール等を貼り目印とする。

③　土器圧痕精査･クリーニング

概査で検出した圧痕を双眼実体顕微鏡下で確認する。圧痕を充填する砂泥は，水と面相筆，ブロワーを用いて，土器を壊さないように慎重に除去する。圧痕が確認されなかった土器や種実以外の圧痕と判断した土器はパンケースに戻す。種実等の圧痕の可能性がある土器は，レプリカ採取対象とする。

(2)　圧痕レプリカ採取・電子顕微鏡観察

圧痕検出作業で確認された９点10箇所を対象に実施する。

①　写真記録・レプリカ採取

埋文調査センターが実施する。第137図856の１点は，圧痕表面点に炭化種実(イネ炭化穎)が残存するため，実施対象外とする。

②　電子顕微鏡観察・同定

土器圧痕シリコンレプリカを双眼実体顕微鏡やマイクロスコープで観察する。表面のゴミやホコリを可能な限り除去し，電子顕微鏡観察用に整形する。シリコンレプリカは，カーボンコーターを使用したカーボン蒸着処理を施す。蒸着後のレプリカを走査型電子顕微鏡（SEM）（日本電子株式会社製；JCM5700）で観察・写真撮影，同定を実施する。

３　結果

(1)　種実圧痕検出状況

土器圧痕検出作業結果を表１，圧痕レプリカ採取・電子顕微鏡観察結果を表２，圧痕写真を図１に示す。

圧痕検出作業の結果，土器948点204.78kg（石膏等含む）より，９点10箇所5.27kgの圧痕レプリカ採取候補が得られた。

レプリカ採取･観察の結果，６点（第46図216，第65図320，第68図342，第90図531，第137図856，第142図939）がイネの穎（籾）に同定された。また，１点（第141図926）に種実圧痕の可能性があり，アワの胚乳に似る。

種実の可能性が低い圧痕は，１点（第119図757）は，イネに似る長楕円形の形状を呈すが，同定根拠がないため不明とした（図１(3)-5,6)。残りの２点（第106図704，第142図939）は，木材であった(（図１(3)-3,4，図１(4)-4,5)。

(2)　種実圧痕の記載

以下，イネ，アワ？の圧痕レプリカの形態的特徴等を述べる。

・イネ（*Oryza sativa* L.） イネ科イネ属

穎（籾）の圧痕レプリカは，長さ5.8～7.1㎜，幅2.2～3.9㎜，厚さ1.3～2.2㎜を測る。第65図320（図１(1)-4～6），第90図531（図１(2)-4～6），第137図856(図１(4)-1,2)，第142図939（図１(5)-1～3)は，果皮表面の顆粒状突起の縦列が明瞭に残る。特に第65図320は，ふ毛が残存する極めて良好な状態であった（図１(1)-6)。なお，第137図856は，圧痕部に炭化穎の一部が残存していたため（図１(4)-1,2)，レプリカ採取を中止している。

・アワ（*Setaria italica*（L.）P.Beauv.）？イネ科エノコログサ属

胚乳？の腹面側と考えられる圧痕は，長さ･幅1.9㎜，厚さ1.3㎜，胚の窪み0.6㎜半広倒卵状楕円体を呈す。アワよりも大型でキビの可能性もあるため，アワに疑問符を付している（図１(4)-4,5)。

４　考察

田原迫ノ上遺跡の土器圧痕調査の結果，弥生時代中期の土器(山ノロⅡ式)948点204.78kgからは，６点2.55kgに種実圧痕が確認され，栽培種のイネの穎に同定された。種実圧痕検出率は，数量が0.63%，重量が1.25%である。

また，１点0.06kgに種実圧痕の可能性が確認され，アワの胚乳に似る。圧痕検出率は，数量が0.11%，重量が0.03%である。

イネ，アワ？は，当時利用された植物質食料と示唆される。これらの穀粒が土器製作時に偶発的または意図的に混入した可能性が考えられる。

田原迫ノ上遺跡では，竪穴建物跡２号からイネの炭化穎・胚乳（2090±30BP）とコムギの炭化胚乳，竪穴建物跡６号からイネの炭化胚乳（90±20BP)，竪穴建物跡18号からイネの炭化胚乳とイチイガシの炭化子葉（2090±20BP),Ｂ－23区Ⅲｄ層炭化物集中部分からクリの炭化子葉（2140±20BP）が同定されている。また，竪穴建物跡群は，出土炭化種実や炭化材，土器付着炭化物の年代測定より，竪穴建物跡６号のイネを除いて，全て弥生時代中期に比定されている（鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター，2016)。

５　まとめ

分析結果から，田原迫ノ上遺跡の弥生時代中期の土器では，栽培種（イネ・アワ）や栽培の可能性（アズキ亜属）がある種実圧痕検出率が上昇する。イネ･アワ･アズキ亜属は，当時利用された植物質食料と示唆され，穀粒や豆粒が土器製作時に偶発的または意図的に混入した可能性が考えられる。

引用文献

鹿児島県教育委員会･公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター,2016,田原迫ノ上遺跡１（縄文時代前期以降編）東九州自動車道（志布志IC～鹿屋串良JCT間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－.公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書5,447p.

丑野　毅・田川裕美,1991,レプリカ法による土器圧痕の観察.考古学と自然科学,24,13-36.

表１　土器圧痕調査結果（１）

時代	収納容器No.	報告済（報告書掲載番号）		重量		数	備　考
仕様書，口頭，ラベル記載など		図番号	遺物番号	パンケース含む	パンケース含まない		
弥生中期後半	1	第22，24～29，33図	1～6 10～162	9.98	7.98	144	
弥生中期後半	2	第38図	165		3.44	1	
弥生中期後半	2	第39図	168		2.22	1	
弥生中期後半	2	第39図	166		7.04	1	
弥生中期後半	2	第39図	167		0.60	1	
弥生中期後半	2	第38図	164		3.52	1	
弥生中期後半	2	第37図	163		1.54	1	
弥生中期後半	3	第40図	169		1.58	1	
弥生中期後半	3	第40図	170		0.18	1	
弥生中期後半	3	第40図	171		0.54	1	
弥生中期後半	3	第41図	172		2.68	1	
弥生中期後半	3	第41図	173		0.04	1	
弥生中期後半	3	第41図	174		0.30	1	
弥生中期後半	3	第41図	175		0.10	1	
弥生中期後半	3	第41図	176		0.18	1	
弥生中期後半	3	第41図	177		0.28	1	
弥生中期後半	3	第41図	178		1.18	1	
弥生中期後半	3	第41図	179		0.58	1	
弥生中期後半	3	第41図	180		0.10	1	

表１　土器圧痕調査結果（２）

時代	収納容器No.	報告済（報告書掲載番号）		重量		数	備　　考
仕様書，口頭，ラベル記載など		図番号	遺物番号	パンケース含む	パンケース含まない		
弥生中期後半	4	第42図	189		3.98	1	
弥生中期後半	4	第42図	181		0.76	1	
弥生中期後半	4	第42図	182		0.24	1	
弥生中期後半	4	第42図	183		0.06	1	
弥生中期後半	4	第42図	185		0.06	1	
弥生中期後半	4	第42図	186		0.08	1	
弥生中期後半	4	第42図	187		0.12	1	
弥生中期後半	4	第42図	188		0.10	1	
弥生中期後半	4	第42図	190		0.04	1	
弥生中期後半	4	第42図	191		0.10	1	
弥生中期後半	4	第43図	192		0.66	1	
弥生中期後半	4	第43図	193		0.58	1	
弥生中期後半	4	第43図	194		0.28	1	
弥生中期後半	4	第43図	195		0.20	1	
弥生中期後半	4	第43図	196		0.46	1	
弥生中期後半	4	第43図	197		0.10	1	
弥生中期後半	4	第43図	198		0.24	1	
弥生中期後半	4	第43図	199		0.34	1	
弥生中期後半	4	第43図	200		1.02	1	
弥生中期後半	4	第43図	201		0.02	1	
弥生中期後半	5	第45～47，50，51，第54図	202～263		8.38	62	216：イネ 穎表面模様確認されず
弥生中期後半	6	第55，56図	264～282	9.42	6.22	19	
弥生中期後半	7	第59図	283，284	10.86	5.66	2	
弥生中期後半	8	第60，61図	285～300	7.08	3.88	16	
弥生中期後半	9	第62図	301，302	11.44	5.44	2	
弥生中期後半	10	第63，64図	303～317	14.98	7.78	14	
弥生中期後半	11	第65図	318，319	8.44	3.24	2	
弥生中期後半	12	第65，66図	320～325	9.64	6.44	6	320：イネ 完形，状態極めて良好
弥生中期後半	13	第66図	326～331	8.14	4.14	6	
弥生中期後半	14	第67図	332～340	9.88	4.68	9	
弥生中期後半	15	第68，69図	341～343	12.50	6.50	2	342：イネ 状態不良，穎表面模様確認されず
弥生中期後半	16	第69，72図	344～358	8.84	5.64	15	
弥生中期後半	17	第73，75，78，79図	359～408	9.60	7.60	50	
弥生中期後半	18	第79，82，83図	409～475	8.56	6.56	68	
弥生中期後半	19	第87図	476～479	6.50	3.30	4	
弥生中期後半	20	第87，88～90図	480～550	8.64	5.44	71	531：イネ 完形，状態良好，細身(長粒)の形状
弥生中期後半	21	第91，92，95，96図	551～621	9.44	6.24	71	
弥生中期後半	22	第99，100図	622～656	8.90	5.70	35	
弥生中期後半	23	第103～105図	657～696	8.32	6.32	41	
弥生中期後半	24	第106，108図	697～711	8.16	4.96	15	
弥生中期後半	25	第111，112図	712～738	7.78	4.58	27	
弥生中期後半	26	第116～118図	739～756	15.36	8.16	18	
弥生中期後半	27	第119，120，122，124，125図	757～802	10.26	7.06	47	757：長楕円形，イネ穎に似るが根拠なし
弥生中期後半	28	第128，130，133，134図	803～852	15.80	12.60	49	
弥生中期後半	29	第134，137～140図	853～917	10.58	7.38	61	856：イネ 完形，状態極めて良好，圧痕に炭化物残存するため，レプリカ採取せず
弥生中期後半	30	第140～142，145，148図	918～972	9.36	7.36	54	926：アワ？ 完形，腹面基部：0.6㎜程度の胚の窪み？確認，キビの可能性もある。 939-1：イネ 完形，状態極めて良好 939-2：木材の可能性

表２　土器圧痕同定結果

時期	『田原迫ノ上遺跡１』掲載番号		重量	検出面	分類群	部位	図版番号	長さ	幅	厚さ	備　　考
	挿図番号	遺物番号	(kg)					(mm)	(mm)	(mm)	
弥生中期後半	第46図	216	0.12	外面	イネ	穎	57	5.8	3.0	1.7	穎表面模様確認されず
弥生中期後半	第65図	320	1.58	内面	イネ	穎	57	6.6	3.9	2.0	完形，状態極めて良好
弥生中期後半	第68図	342	0.77	断面	イネ	穎	58	5.3+	3.2	1.4	状態不良，穎表面模様確認されず
弥生中期後半	第90図	531	0.06	内面	イネ	穎	58	7.1	2.3	1.5	完形，状態良好，細身（長粒）の形状
弥生中期後半	第106図	704	0.34	内面	木本類	木材	59	8.4	3.8	2.2	
弥生中期後半	第119図	757	2.33	内面	不明	不明	59	8.2	4.0	2.0	長楕円形，イネ穎に似るが根拠なし
弥生中期後半	第137図	856	0.10	外面	イネ	穎	60	6.4	2.2	—	完形，状態極めて良好，圧痕に炭化物残存するためレプリカ採取せず
弥生中期後半	第141図	926	0.06	内面	アワ?	胚乳?	60	1.9	1.9	1.3	完形，腹面，基部：0.6mm程度の胚の窪み？確認，キビの可能性もある
弥生中期後半	第142図	939	1.50	外面	イネ	穎	61	5.8	3.1	2.2	完形，状態極めて良好
				外面	木本類	木材	61	8.8	2.5	1.7	木材の可能性

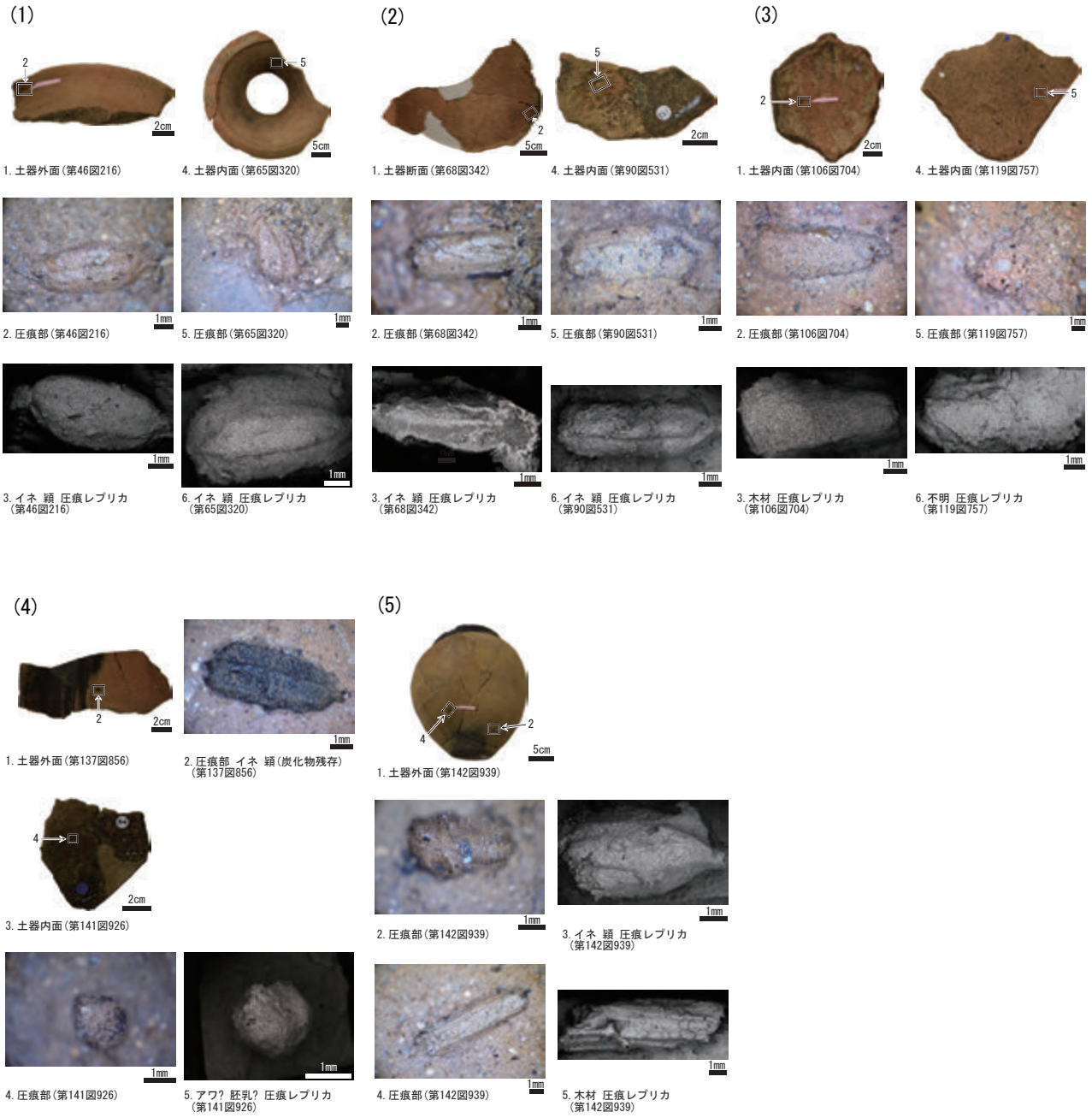


図１．田原迫ノ上遺跡の土器圧痕

第３節　田原迫ノ上遺跡・立小野堀遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

鹿児島県に所在する田原迫ノ上遺跡の測定対象試料は，集石204号埋土中から出土した炭化植物片（芽）１点と炭化物２点，竪穴建物跡23号埋土中から出土した炭化材１点の合計４点である（表３）。遺構の年代は，集石204号が縄文時代早期，竪穴建物跡23号が弥生時代とされている。

立小野堀遺跡の測定対象試料は192号地下式横穴墓埋土中から出土した炭化材５点である（表３）。遺構の年代は古墳時代とされている。

なお，田原迫ノ上遺跡の試料１（１式）を対象に種実同定，同遺跡の試料４と立小野堀遺跡の試料５～９の同一試料を対象に樹種同定が実施されている（本章第４節，樹種・種実同定報告を参照）。年代測定の試料１は，１式（複数個）の中から一部選定したものである。

２　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い，根・土等の混入物を取り除く。

（２）酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA処理における酸処理では，通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」，1M未満の場合は「AaA」と表３に記載する。

（３）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

３　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（$^{13}C/^{12}C$），^{14}C濃度（$^{14}C/^{12}C$）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

４　算出方法

（１）δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}C/^{12}C$）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表３）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

（２）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977)。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表３に，補正していない値を参考値として表４に示した。^{14}C年代と誤差は，下１桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（±1σ）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（３）pMC（percent Modern Carbon)は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}によって補正する必要があるため，補正した値を表３に，補正していない値を参考値として表４に示した。

（４）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，１標準偏差（1σ＝68.2%）あるいは２標準偏差（2σ＝95.4%）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal13データベース（Reimer et al. 2013)を用い，OxCalv4.３較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表４に示した。なお，暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BP」または「cal BC/AD」という単位で表される。

５　測定結果

測定結果を表３，４に示す。

田原迫ノ上遺跡の集石204号から出土した試料１～３の^{14}C年代は，試料１，３が8400±30yrBP，試料２が8410±30yrBPである。暦年較正年代（1σ）は，試料１が7529～7470cal BCの範囲，試料２が7532～7477cal BCの範囲，試料３が7527～7463cal BCの範囲でそれぞれ示される。縄文時代早期中葉頃に相当し（小林編 2008，小林2017），推定年代に含まれる結果となった。竪穴建物跡23号から出土した試料４の^{14}C年代は2110±20yrBP，暦年較正年代（1σ）は176～96cal BCの範囲で示される。弥生時代中期頃に相当し（藤尾 2009），推定年代を含む結果となった。

立小野堀遺跡の192号地下式横穴墓から出土した試料５点（試料5～9）の^{14}C年代は，1970±20yrBP（試料７）から1810±20yrBP（試料８）の間にまとまる。暦年較正年代（1σ）は，５点のうち最も古い試料７が16～65cal ADの範囲，最も新しい試料８が140～238cal ADの間に３つの範囲でそれぞれ示される。弥生時代後期頃に相当し（藤尾 2009），推定年代よりもやや古い結果となった。

なお，これらの試料５～９が含まれる１～３世紀頃の暦年較正に関しては，北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある（尾嵜2009，坂本2010など）。その日本産樹木のデータを用いてこれらの試料の測定結果を暦年較正した場合，ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて60％を超える十分な値で，化学処理，測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360

藤尾慎一郎 2009 弥生時代の実年代，西本豊弘編，新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代，雄山閣，9-54

小林謙一 2017 縄文時代の実年代 ―土器型式編年と炭素14年代―，同成社

小林達雄編 2008 総覧縄文土器，総覧縄文土器刊行委員会，アム・プロモーション

尾嵜大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代，設楽博己，藤尾慎一郎，松木武彦編弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭，同成社，225-235

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 55(4), 1869-1887

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木－弥生から古墳へ－，第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集，（株）加速器分析研究所，85-90

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, Radiocarbon 19(3), 355-363

表３

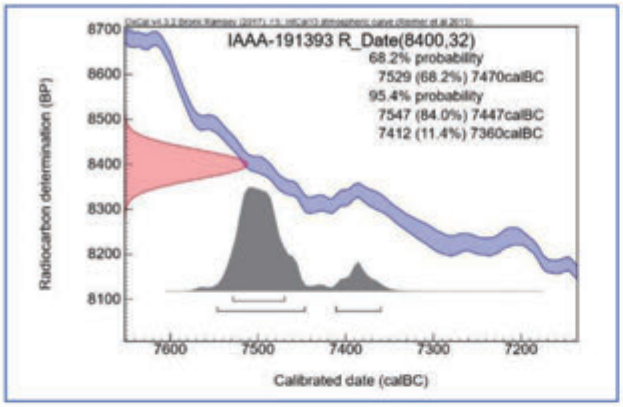
測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C (‰) (AMS)	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age(yrBP)	pMC(%)
IAAA-191393	1	田原迫ノ上遺跡 集石204号埋土 X層	炭化植物片（芽）	AAA	-26.28 ± 0.23	8,400 ± 30	35.14 ± 0.14
IAAA-191394	2	田原迫ノ上遺跡 集石204号埋土 X層	炭化物	AAA	-29.30 ± 0.24	8,410 ± 30	35.11 ± 0.15
IAAA-191395	3	田原迫ノ上遺跡 集石204号埋土 X層	炭化物	AaA	-26.28 ± 0.23	8,400 ± 30	35.16 ± 0.15
IAAA-191396	4	田原迫ノ上遺跡 竪穴建物跡23号埋土 Ⅲd層	炭化材	AAA	-27.31 ± 0.23	2,110 ± 20	76.90 ± 0.23
IAAA-191397	5	立小野堀遺跡 地下式横穴墓254号埋土 炭化物③ Ⅷa層	炭化材	AAA	-24.85 ± 0.45	1,920 ± 20	78.78 ± 0.22
IAAA-191398	6	立小野堀遺跡 地下式横穴墓254号埋土 炭化物⑫ Ⅷa層	炭化材	AaA	-27.07 ± 0.32	1,890 ± 20	79.00 ± 0.22
IAAA-191399	7	立小野堀遺跡 地下式横穴墓254号埋土 炭化物⑯ Ⅷa層	炭化材	AAA	-25.34 ± 0.39	1,970 ± 20	78.28 ± 0.22
IAAA-191400	8	立小野堀遺跡 地下式横穴墓254号埋土 炭化物⑲ Ⅷa層	炭化材	AaA	-26.62 ± 0.45	1,810 ± 20	79.78 ± 0.23
IAAA-191401	9	立小野堀遺跡 地下式横穴墓254号埋土 炭化物㉑ Ⅷa層	炭化材	AAA	-25.44 ± 0.42	1,920 ± 20	78.76 ± 0.22

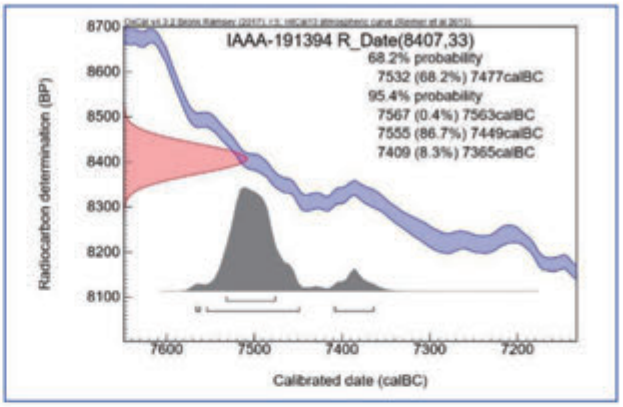
［IAA登録番号：#9913, 9914］

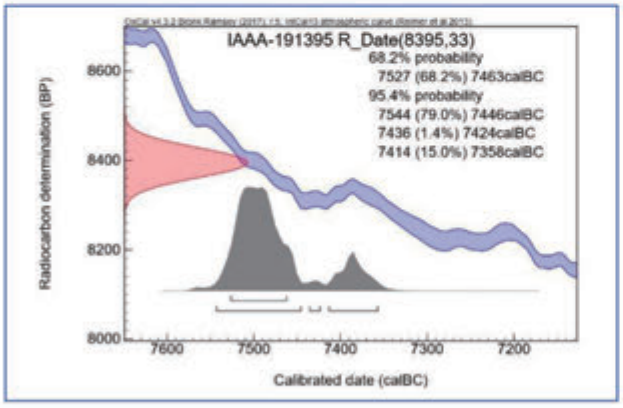
表４

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ暦年代範囲	2σ暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-191393	8,420 ± 30	35.05 ± 0.14	8,400 ± 32	7529calBC – 7470calBC (68.2%)	7547calBC – 7447calBC (84.0%) 7412calBC – 7360calBC (11.4%)
IAAA-191394	8,480 ± 30	34.80 ± 0.14	8,407 ± 33	7532calBC – 7477calBC (68.2%)	7567calBC – 7563calBC (0.4%) 7555calBC – 7449calBC (86.7%) 7409calBC – 7365calBC (8.3%)
IAAA-191395	8,420 ± 30	35.07 ± 0.14	8,395 ± 33	7527calBC – 7463calBC (68.2%)	7544calBC – 7446calBC (79.0%) 7436calBC – 7424calBC (1.4%) 7414calBC – 7358calBC (15.0%)
IAAA-191396	2,150 ± 20	76.54 ± 0.22	2,110 ± 23	176calBC – 96calBC (68.2%)	197calBC – 85calBC (84.5%) 80calBC – 55calBC (10.9%)
IAAA-191397	1,910 ± 20	78.80 ± 0.21	1,916 ± 22	65calAD – 90calAD (37.4%) 100calAD – 123calAD (30.8%)	29calAD – 39calAD (2.9%) 50calAD – 130calAD (92.5%)
IAAA-191398	1,930 ± 20	78.66 ± 0.21	1,893 ± 22	82calAD – 127calAD (68.2%)	58calAD – 170calAD (92.9%) 194calAD – 209calAD (2.5%)
IAAA-191399	1,970 ± 20	78.22 ± 0.21	1,967 ± 22	16calAD – 65calAD (68.2%)	37calBC – 10calBC (7.3%) 3calBC – 78calAD (88.1%)
IAAA-191400	1,840 ± 20	79.52 ± 0.21	1,814 ± 22	140calAD – 159calAD (14.3%) 166calAD – 196calAD (25.4%) 208calAD – 238calAD (28.6%)	130calAD – 252calAD (95.4%)
IAAA-191401	1,930 ± 20	78.69 ± 0.21	1,918 ± 22	61calAD – 90calAD (40.0%) 100calAD – 123calAD (28.2%)	28calAD – 40calAD (3.9%) 49calAD – 130calAD (91.5%)

［参考値］







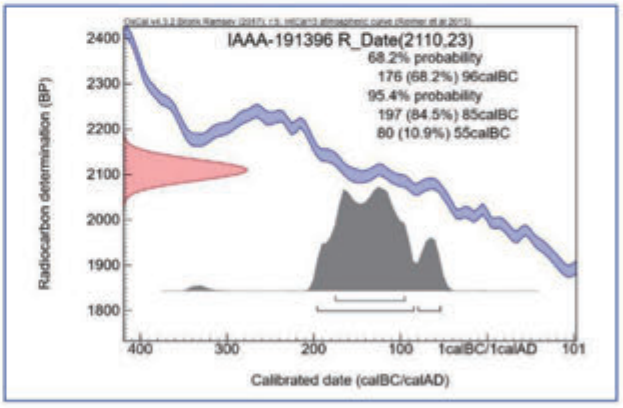
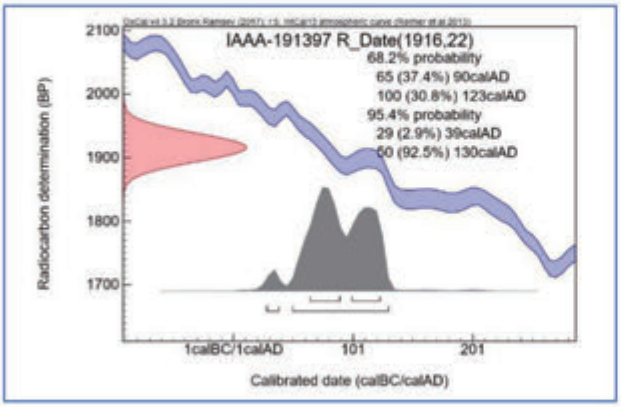
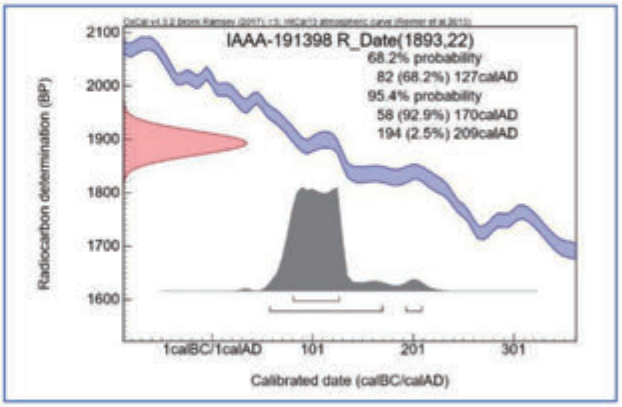
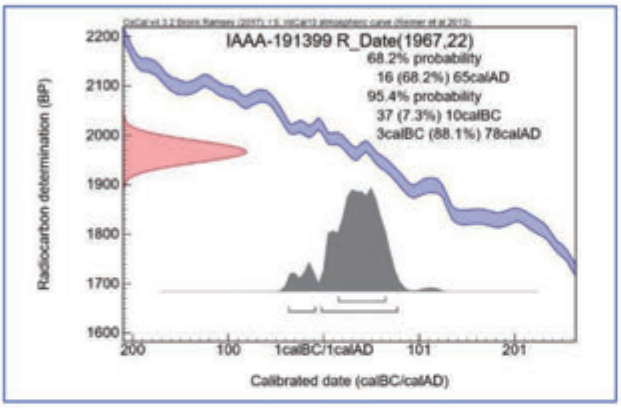
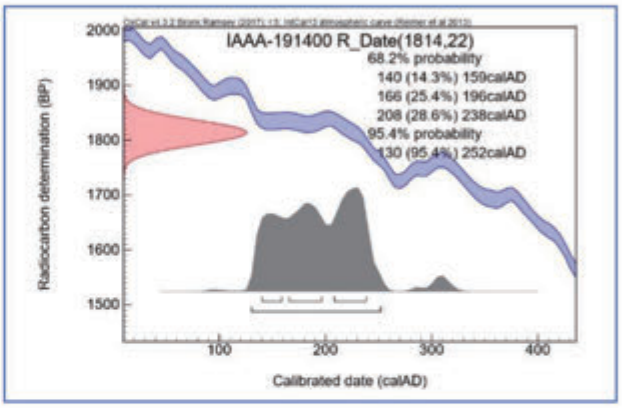


図２．暦年較正年代グラフ（参考）









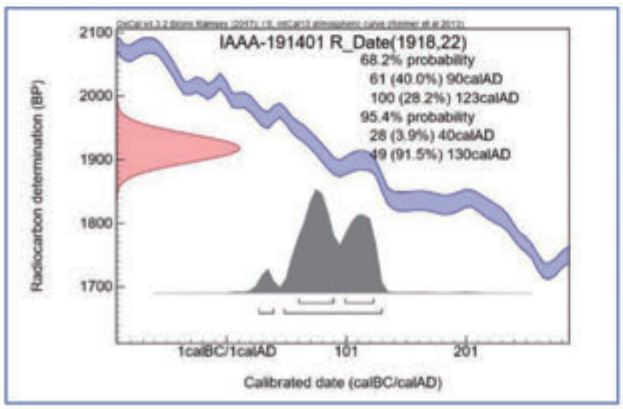


図２．暦年較正年代グラフ（参考）

第４節　田原迫ノ上遺跡・立小野堀遺跡から出土した炭化物の樹種・種実同定

（株）加速器分析研究所

１　樹種同定

（１）試料

試料は，鹿児島県に所在する田原迫ノ上遺跡の竪穴建物跡23号から出土した炭化材１点（試料４）と，立小野堀遺跡の192号地下式横穴墓から出土した炭化材５点の合計６点である（表５）。

なお，これらの試料については，同一試料の放射性炭素年代測定が実施されている（本章第３節，年代測定報告を参照）。

（２）分析方法

試料を割り折りして新鮮な横断面（木口），放射断面（柾目），接線断面（板目）の基本三断面の断面を作製し，落射顕微鏡（OPTIPHOTO-2：Nikon）によって50～1000倍で観察した。同定は，木材構造の特徴および現生標本との対比によって行った。

（３）結果

同定結果を表５に示した。出土した炭化材は，シイ属，ウルシ属の２分類である。以下，分類群ごとに形態を記載する。

・シイ属　Castanopsis　ブナ科

年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で，放射組織は平伏細胞からなる単列の同性放射組織型のものが存在する。

なおシイ属には，スダジイとツブラジイがあり，集合放射組織の有無などで同定できるが，本試料は小片で，広範囲の観察が困難であったため，シイ属の同定にとどめる。

・ウルシ属　Rhus　ウルシ科

年輪のはじめに大型の道管が単独あるいは２～３個複合して配列する環孔材である。晩材部で小道管が単独あるいは主に放射方向に２～３個複合して散在する。早材から晩材にかけて道管の径は徐々に減少していく。道管の穿孔は単穿孔で，放射組織は異性放射組織型で，１～３細胞幅ぐらいである。

（４）考察

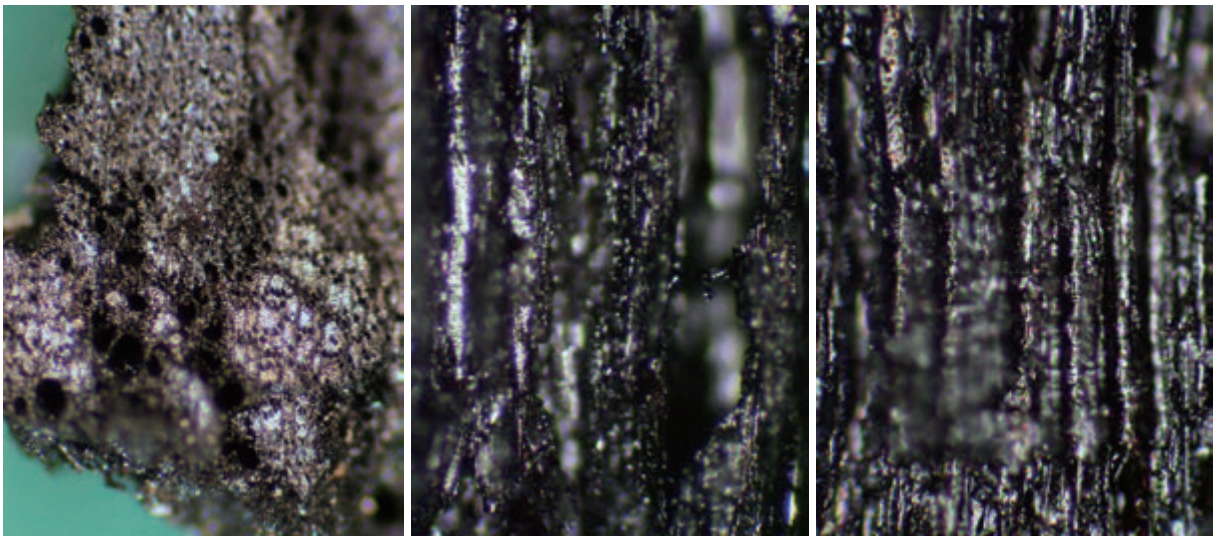
田原迫ノ上遺跡の竪穴建物跡23号床面より検出された炭化材はシイ属であった。シイ属にはスダジイ，ツブラジイがあり，いずれも重硬であるが耐朽・保存性のやや低い材である。細工物にはあまり見られないが，建築部材や杭などに利用される。他の樹木と比べると利用率は低い。しかし地域的に，九州では古くからシイ属の利用が多い傾向があり，建築部材など広く利用されている。これにはシイ属が照葉樹林要素でかつ二次林要素でもあり，温暖な気候下では成長が早く近隣に多く生育していることから，採取が容易であったことが考えられる。またそれに加え，タンニンが多く防腐・防虫の効果を持つため，湿度の高い九州では重宝された可能性がある。

立小野堀遺跡の地下式横穴墓254号から検出された炭化材５点はいずれもウルシ属であった。ウルシ属にはヤマハゼ，ウルシ，ヌルデ，ツタウルシなどがあり，北海道（渡島半島），本州，四国，九州，沖縄に分布する。常緑または落葉の低木～高木，または藤本である。ウルシ属は山野や乾燥した台地に生育するものもあり，また二次林要素でもある。ウルシは，やや弱く脆いが建築から木工細工に広く用いられる。また，『木材ノ工藝的利用』では，色が黄色いことから寄木や木象嵌などの工芸品に利用されるウルシの例があげられている。なお，本遺跡の炭化材は羨門付近で出土しており，同様な炭化物検出の報告例は少ない。立小野堀遺跡の地下式横穴墓の９号，75号，78号，86号，90号などで採取された炭化物から多くの樹種同定が行われたが，玄室，羨道，竪坑のいずれからもクスノキおよびクスノキ科が同定されている。クスノキ科は九州でよく見られる樹種であるが，ウルシ属は比較的同定数が少ない。ウルシ属は燃焼の際に有害な燻煙が生じるが殺菌・殺虫効果があることから燃焼させた可能性も考えられる。また，周辺に二次植生として生育した樹木を燃焼させた可能性もある。

同定された樹種はいずれも温帯から温帯下部の暖温帯に分布する樹木である。これらの樹木は当時遺跡周辺でも生育しており，周辺に生育していたか近隣地域よりもたらされたと考えられる。

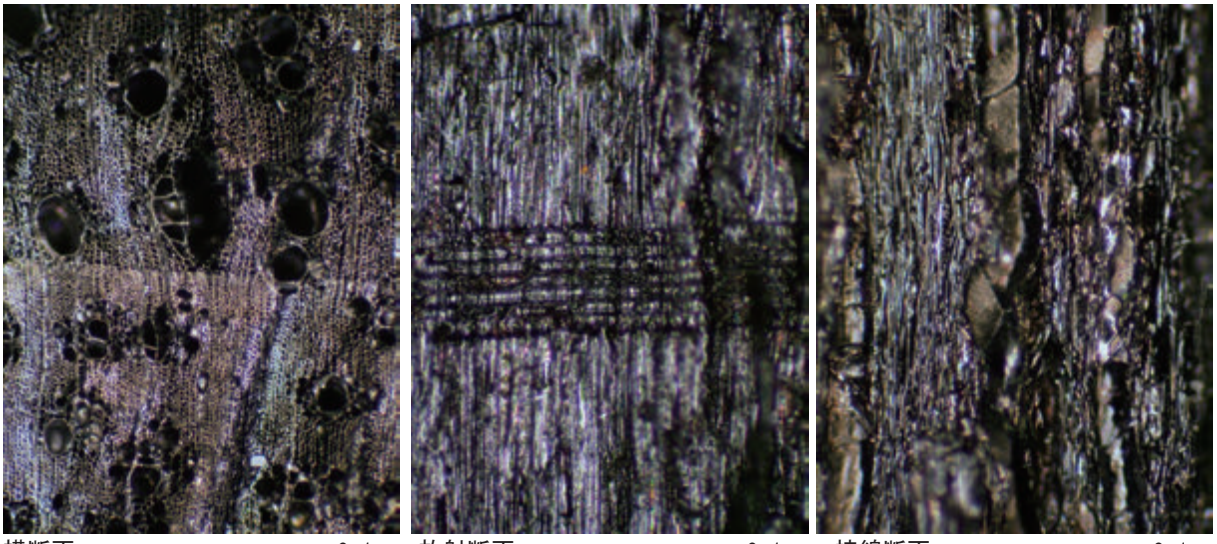
表５　田原迫ノ上遺跡・立小野堀遺跡における樹種同定結果

番号	採取場所	結果
4	田原迫ノ上遺跡　竪穴建物跡23号埋土　Ⅲd層	シイ属
5	立小野堀遺跡　地下式横穴墓254号埋土　炭化物③　Ⅷa層	ウルシ属
6	立小野堀遺跡　地下式横穴墓254号埋土　炭化物⑫　Ⅷa層	ウルシ属
7	立小野堀遺跡　地下式横穴墓254号埋土　炭化物⑯　Ⅷa層	ウルシ属
8	立小野堀遺跡　地下式横穴墓254号埋土　炭化物⑲　Ⅷa層	ウルシ属
9	立小野堀遺跡　地下式横穴墓254号埋土　炭化物㉑　Ⅷa層	ウルシ属



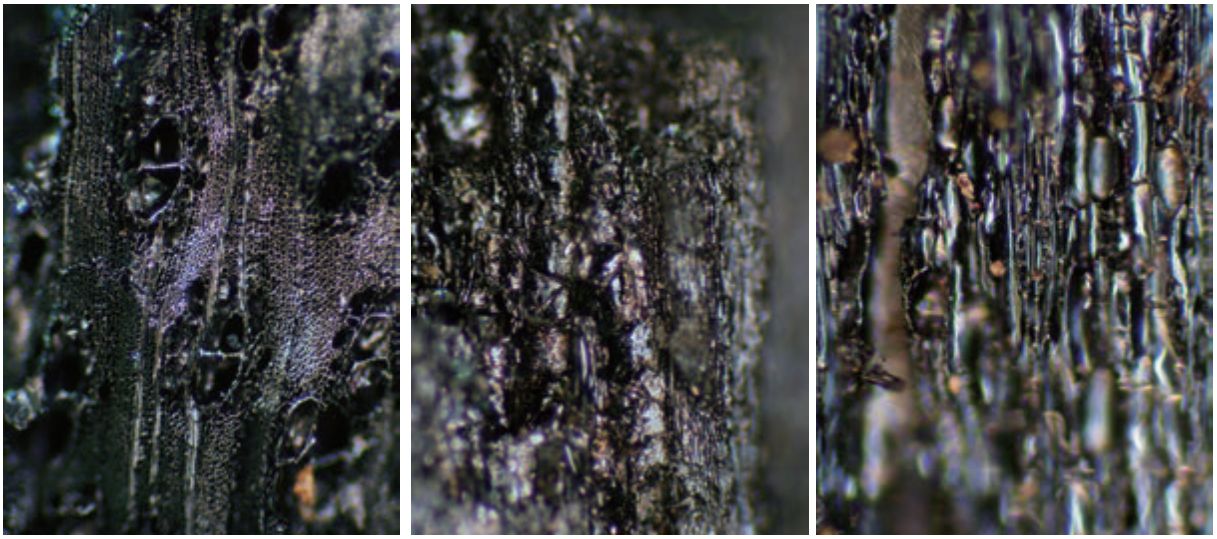
横断面 ― 0.1㎜ 放射断面 ― 0.1㎜ 接線断面 ― 0.1㎜

シイ属 試料4 田原迫ノ上遺跡 竪穴建物跡23号埋土 Ⅲd層



横断面 ― 0.1㎜ 放射断面 ― 0.1㎜ 接線断面 ― 0.1㎜

ウルシ属 試料7 立小野堀遺跡 地下式横穴墓254号埋土 炭化物⑯ Ⅷa層



横断面 ― 0.1㎜ 放射断面 ― 0.1㎜ 接線断面 ― 0.1㎜

ウルシ属 試料9 立小野堀遺跡 地下式横穴墓254号埋土 炭化物㉑ Ⅷa層

図３．田原迫ノ上遺跡・立小野堀遺跡の炭化材

２　種実同定

（１）試料

試料は，鹿児島県に所在する田原迫ノ上遺跡の集石204号から出土し，１㎜と２㎜のウォーターセパレーションにて検出された炭化物試料1式である。なお，これらの一部を対象に放射性炭素年代測定が実施されている（別稿年代測定報告参照）。

（２）分析方法

試料を肉眼及び双眼実体顕微鏡で観察し，形態的特徴および現生標本との対比によって同定を行う。結果は同定レベルによって科，属，種の階級で示す。

（３）結果

集石204号からは種実は検出されなかった。

ただし，１㎜の試料からは芽13点，２㎜の試料からは芽118点，炭化材片２点が検出された。

（４）考察

試料はすべて炭化しており，炭化の具合から熱を強く受けたと思われる。ほとんどが芽であったことから周辺に生育していたと考えられる。

文献

伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学，雄山閣，p. 449.

(株)加速器分析研究所（2017）出土炭化物の樹種同定，公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書16　東九州自動車道建設（志布志IC～鹿屋串良JCT間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　立小野堀遺跡１（第２分冊），公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター，p. 193-194.

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞．木材の構造，文永堂出版，p. 49-100.

島地謙・伊東隆夫（1982）図説木材組織，地球社，p. 176.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧，雄山閣，p. 296.

農商務省山林局編（1912）木材ノ工藝的利用，大日本山林会，p. 1307.

山田昌久（1993）日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成，植生史研究特別第１号，植生史研究会，p. 242.

笠原安夫（1985）日本雑草図説，養賢堂，494p.

南木睦彦（1993）葉・果実・種子．日本第四紀学会編，第四紀試料分析法，東京大学出版会，p. 276-283.



試料1 芽　田原迫ノ上遺跡　集石198号埋土　X層　　― 1.0㎜

図４．田原迫ノ上遺跡の種実

第５節　立小野堀遺跡出土鉄製品の科学分析

公益財団法人 元興寺文化財研究所

１　分析対象

鹿児島県鹿屋市串良町 立小野堀遺跡出土鉄製品
（預番号2020-0720 No.１刀子，２短剣，４鉄剣）
（表６，図５～７）

２　分析項目と結果概要

表６に分析項目と結果概要を示した。

３　微小部観察

（１）使用機器と分析方法

実体顕微鏡【ライカM205 C，ライカFLEXACAM C1】

（２）結果と考察

①　No.1刀子

刀身部分を覆っていた革鞘の痕跡が確認され，微小部観察では図８，図９，図10のそれぞれに鞘にするための穴の痕跡が確認できた（観察箇所：図５a，図５b，図５c）。しかし，穴の存在のみで，綴じていたものの材質や形状は不明であった。その反対面はさらに劣化が進行し，残りが悪く同様の痕跡は認められなかった。

②　No.4鉄剣

剣身および柄には鞘木と柄木が認められた。鞘木の樹種については電子顕微鏡による同定を行った。さらに，繊維の付着が認められた箇所（図７d）において，Ｚ撚りの糸の痕跡が確認されたが，劣化が激しく織物や紐などであるかまでは判断できなかった（図11）。一方図７e，図７fにみられる繊維は約4㎜の幅の紐が巻かれていることが確認できた（図12，図13）。同様に図7ｇにおいてもほぼ同じ幅の紐であると推測されるが遺存状態がさらに悪いため同じ種類の紐であるかまでは判断できなかった（図14）。これらの繊維も表面に見える部分は全てＺ撚りの糸で構成されていた。さらに，図７hには目釘穴が観察された（図15）。

４　樹種同定（錆化木材）

（１）使用機器と分析方法

走査電子顕微鏡（SEM）【日本電子 JSM-IT200LA】

収束させた細い電子線で試料表面を走査し，電子線を照射された部位から発生する二次電子を検出し，増幅拡大させて観察する。加速電圧15kV，真空度30Paで観察した。

図７に示したNo.4鉄剣に付着した木質部分から微量の破片を採取し，実体顕微鏡で同定に必要な木口面，柾目面，板目面の３方向の観察面の確認を行った後，走査電子顕微鏡で観察し，樹種を同定した。樹木分類は『原色日本植物図鑑木本編』（Ⅱ）に従った。

（２）結果と考察

試料の木材組織を電子顕微鏡画像（図16）で示した。試料はその根拠となる木材組織の特徴から，仮道管および放射柔細胞からなる針葉樹材であることが分かる。早材から晩材への移行は緩やかで，晩材幅は狭い。放射組織は２～６細胞高が見える。分野壁孔はヒノキ型で，１分野に１～２個確認できる。なお，樹脂細胞については，資料を樹脂含浸による強化後に採取し，観察を行ったため，含浸された樹脂と樹脂細胞の識別が困難な状況となった。樹脂細胞が不明瞭であることからヒノキ科 Cupressaceae とした。ヒノキ科にはヒノキ亜科（ヒノキ属・アスナロ属）とスギ亜科（スギ属）が含まれる。なお，木材組織の特徴からはヒノキの可能性が高い。

【参考文献】

北村四郎・村田源1979『原色日本植物図鑑木本編』（Ⅱ），保育社
島地謙・伊東隆夫1982『図説木材組織』地球社
佐伯浩1982『走査型電子顕微鏡図説　木材の構造』日本林業技術協会

５　蛍光Ｘ線分析

（１）使用機器と分析方法

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置（XRF）【日立ハイテクサイエンス EA6000VX】

試料の微小領域にＸ線を照射し，その際に試料から放出される各元素に固有の蛍光Ｘ線を検出することにより元素を同定する。

大気圧下，□0.2×0.2mmのコリメータを用い，管電圧50kV，管電流1mAで，300秒間測定した。なお，管球ターゲットはロジウム（Rh）である。

（２）結果と考察

No.4鉄剣の図７に示した箇所（白色部分）を蛍光Ｘ線分析法により測定したところ，遺物の母材である鉄（Fe）の他，カルシウム（Ca），リン（P）を強く検出したことから（図17），白色部分は骨や角であると考えられた。

６　鉄分析

（１）使用機器と分析方法

鉄製品から試料を採取し，金属学的調査により組織分布や鉱物組成，非金属介在物を分析することによって，始発原料の性状や熱履歴などを明らかにする。

メタルチェッカーでNo.2短剣各部の金属鉄残存検査をし，比較的強い反応があった箇所から試料を採取した。

①マクロ組織

試料（供試材）は剣身部の中程（やや茎部寄り）の位置から，刃部片側断面（刃先～鎬付近まで）が観察可能な状態で採取されている。この試料を樹脂に埋め込み，断面をエメリー研磨紙の#150，#320，#600，#1000，およびダイヤモンド粒子の3μmと1μmで研磨した後，全体像を撮影した。

②顕微鏡組織

金属反射顕微鏡を用いて代表的・特徴的な視野を撮影した。また金属組織の観察には，腐食液に3%ナイタル（硝酸アルコール液）を用いた。

③ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬度を測定した。ビッカース硬さは測定箇所に圧子（136° の頂角をもったダイヤモンド）を押し込んだ時の荷重と，それにより残された窪み（圧痕）の対角線長さから求めた表面積から算出される。試料は顕微鏡用を併用し，200gfで測定した。

④EPMA調査

EPMA（日本電子㈱製JXA-8230）を用いて，鉄中非金属介在物の組成を調査した。測定条件は以下の通りである。加速電圧：15kV，照射電流（分析電流）：2.00E-8A。

（２）結果

①マクロ組織：図18①に示す。表層は錆びている（暗灰色部）が，内部に金属鉄（明灰～明白色部）が残存する。金属鉄中には細長く展伸した非金属介在物（黒色部）が多数層状に分布する。これは折り返し鍛錬された鍛造製品の特徴である。

②顕微鏡組織：図18②～⑥に示す。②は鎬寄りの金属鉄部である。中央（芯部）は低炭素域であった。③はその拡大である。素地は白色のフェライト（Ferrite：α鉄）で，黒色のパーライトがごく少量析出する。これに対して，上下面（表層側）はやや炭素量が高い。④は下面表層側部分の拡大である。素地はベイナイト（Bainite）とパーライト（Pearlite）が混在する。さらに旧オーステナイト（Austenite：γ鉄）粒界に沿って，白色のフェライトが析出する。以上の組織の特徴から芯部の炭素含有量は0.1%未満，高炭素域では最大0.6%程度と推測される。

また刃先寄りでも，芯部の炭素量が低く，表層の炭素量がやや高いことが確認された。⑤は刃先寄り中央（芯部）の金属鉄部，⑥は刃先側下面（表層側）の拡大である。

③ビッカース断面硬度：図18②に示す。金属鉄部の硬度は113～188Hvであった。中央（芯部）の硬度値が低く，上下面（表層側）の硬度値が高めである。

④EPMA調査結果：表層寄り（図18②上側）の非金属介在物の顕微鏡写真を図19①，反射電子像（COMP）を②に示す。介在物中の微細な淡灰色柱状結晶の定量分析値は33.4%FeO－20.0%CaO－4.5%MgO－34.2%SiO_2（分析点 1），37.5%FeO－18.3%CaO－7.2%MgO－33.4%SiO_2（分析点 3）であった。鉄（FeO），ライム（CaO）の割合が高い，オリビン〔Olivine：2（Fe, Ca, Mg）O・SiO_2〕と推定される。また素地の暗灰色部の定量分析値は38.5%SiO_2－10.2%$A1_2O_3$－19.2%CaO－1.5%MgO－2.9%K_2O－2.3%P_2O_5－21.4%FeO（分析点 2），41.5%SiO_2－11.2%Al_2O_3－17.5%CaO－1.5%MgO－3.0%K_2O－20.9%FeO（分析点 4）であった。非晶質珪酸塩である。

さらにもう一箇所，芯部の非金属介在物の組成を調査した。顕微鏡写真を図19③，反射電子像を④に示す。介在物中の白色粒状結晶の定量分析値は91.9%FeO（分析点 5）であった。ウスタイト（Wustite：FeO）と推定される。また微細な淡灰色柱状結晶の定量分析値は41.2%FeO－16.2%CaO－3.6%MgO－30.6%SiO_2（分析点 6）であった。鉄（FeO），ライム（CaO）の割合が高い，オリビン〔Olivine：2（Fe, Ca, Mg）O・SiO_2〕と推定される。素地の定量分析値は34.7%SiO_2－15.4%Al_2O_3－10.9%CaO－5.4%K_2O－1.1%P_2O_5－24.6%FeO（分析点 7）であった。非晶質珪酸塩である。

（３）まとめ

①金属組織からみた No.2 短剣の製作技術

残存金属鉄部の組織から，芯部の炭素量が低く（軟鉄），表層の炭素量がやや高い（鋼）ことが確認された。この構造から，現在は錆化（腐食）して金属組織の痕跡が不明瞭な刃部先端も，本来は炭素量がやや高めであったと推測される。

残存金属鉄部の低炭素域と高炭素域の境界は漸進的であり，その境界に鍛接剤に起因すると考えられるような大形の鉄中非金属介在物はみられなかった。この特徴から，この No.2 短剣は炭素量の異なる異材を鍛接して製作したというよりも，低炭素材を熱間で鍛打加工して剣身を成形した後に，浸炭処理をして表層部を硬化した可能性が考えられる。さらに高炭素域の組織（図18④）から，鍛打成形後に急冷（焼入れ）されたと推測される。ただし高炭素域でもビッカース硬さが200未満とやや軟質であった。焼き戻しをして，硬さよりも粘り（靭性）を持たせる材質にした可能性が考えられる。〔ただし，現在は錆化（腐食）している表層や刃部先端は，残存金属鉄部よりも硬質であった可能性はある。〕

②鉄中非金属介在物の特徴

剣身内部には、細長く展伸した形状の非金属介在物が多数層状に確認された。これは折り返し鍛錬された鍛造品の特徴である。

介在物の素地部分は非晶質珪酸塩で，微細なウスタイト（Wustite：FeO）や，鉄（FeO），ライム（CaO）の割合が高い，オリビン〔Olivine：2（Fe, Ca, Mg）O・SiO_2〕が晶出する。これは鍛冶滓とほぼ同じ組成で，熱間での鍛冶加工に伴う鉄素材の酸化や折返し鍛錬時の鍛接剤（粘土汁・藁灰など）によるものと推測される。ただし，全体にライム（CaO）の割合が高い。この特徴が製鉄原料の脈石鉱物を反映したものであれば，始発原料はスカルン鉱床（注1）から採取された鉄鉱石の可能性が考えられる。

（注1）スカルン（skarn）とは，石灰岩や苦灰岩などの炭酸塩岩中に，花崗岩などのマグマが貫入した際，その接触部付近にできる鉱物の集合体（接触変成岩の一種）である。マグマから珪酸や鉄などが，石灰岩や苦灰岩の方に移動しカルシウムやマグネシウムと反応して，カルシウム，鉄，マグネシウムなどに富む珪酸塩鉱物（スカルン鉱物）ができる。

（日鉄テクノロジー株式会社　八幡事業所　鈴木瑞穂）

7．図表データ

［表］

表６．立小野堀遺跡出土鉄製品の分析一覧

分析項目	点数	対象遺物	結果概要	担当者
微小部観察	2	No.1 刀子 No.4 鉄剣	革鞘の痕跡、鞘にするための穴の痕跡 繊維の付着(Z撚りの糸)、紐の痕跡	植田直見
樹種同定	1	No.4 鉄剣	ヒノキ科　Cupressaceae	SEM:植田直見、同定:木沢直子
蛍光X線分析	1	No.4 鉄剣	白色付着物は骨や角	川本耕三
鉄分析	1	No.2 短剣	芯部の炭素量が低く(軟鉄)、表層の炭素量がやや高い(鋼)鍛造品で、始発原料はスカルン鉱床から採取された鉄鉱石の可能性	日鉄テクノロジー(株) 鈴木瑞穂

［分析箇所］

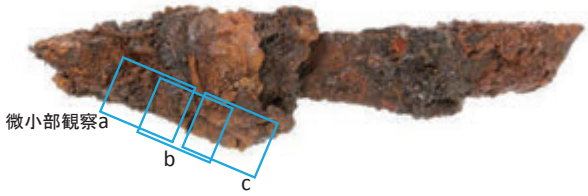


図５．No.1 刀子の分析箇所





図６．No.2 短剣の分析箇所



図７，No. 4鉄剣の分析箇所

[拡大観察像]

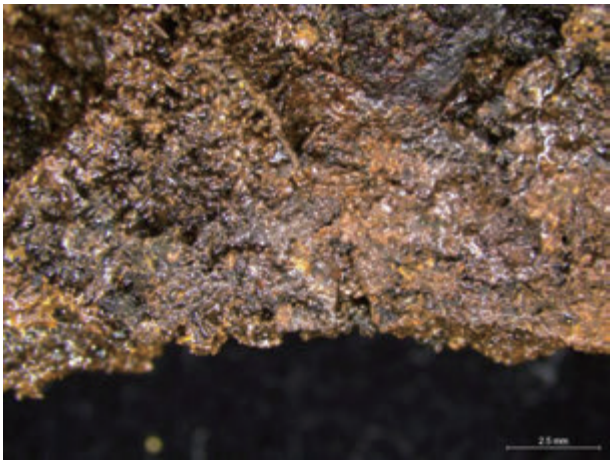


図８．微小部観察箇所aの拡大観察像

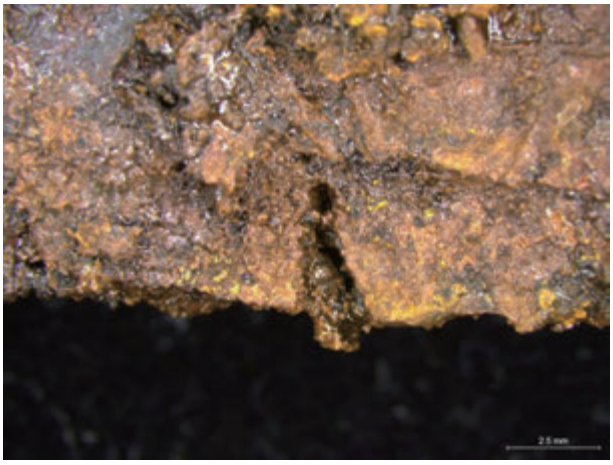


図９．微小部観察箇所bの拡大観察像

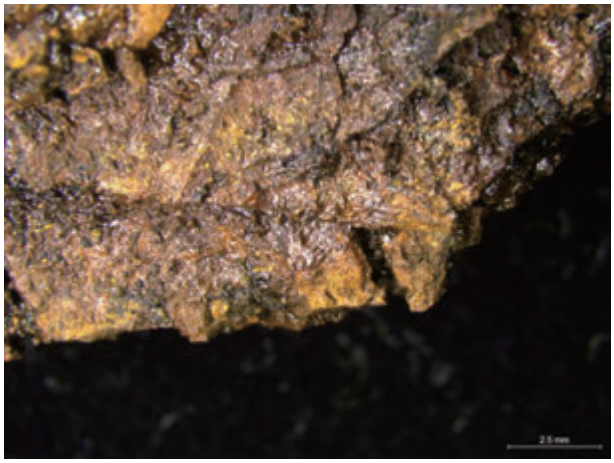


図10．微小部観察箇所cの拡大観察像



図11．微小部観察箇所dの拡大観察像

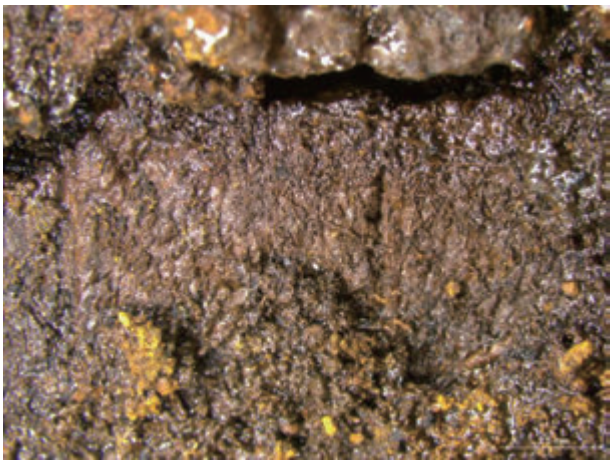


図12．微小部観察箇所eの拡大観察像

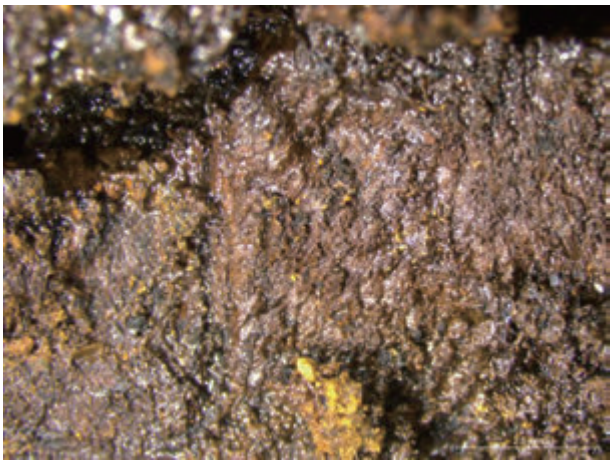


図13．図８を更に拡大して観察した像（f）

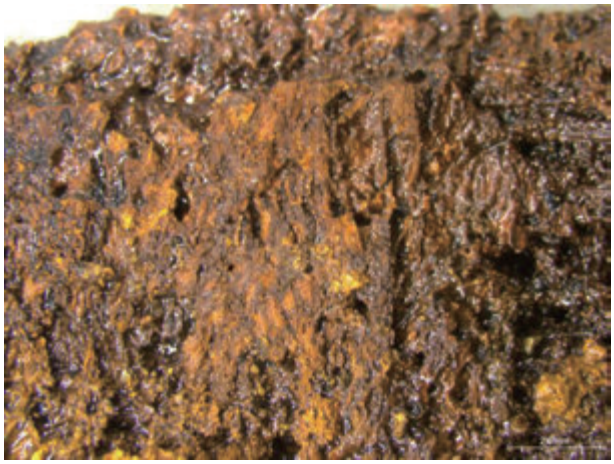


図14. 微小部観察箇所gの拡大観察像

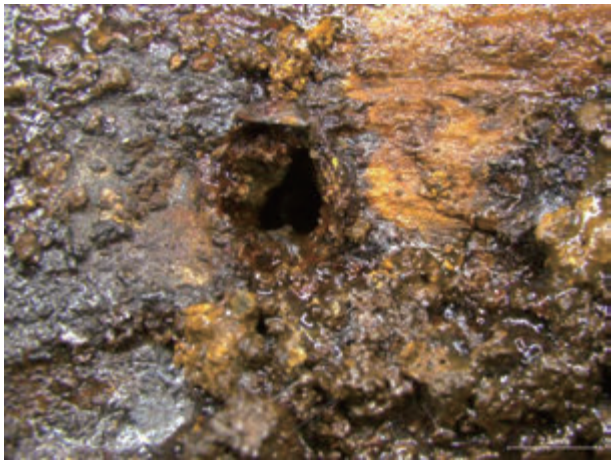
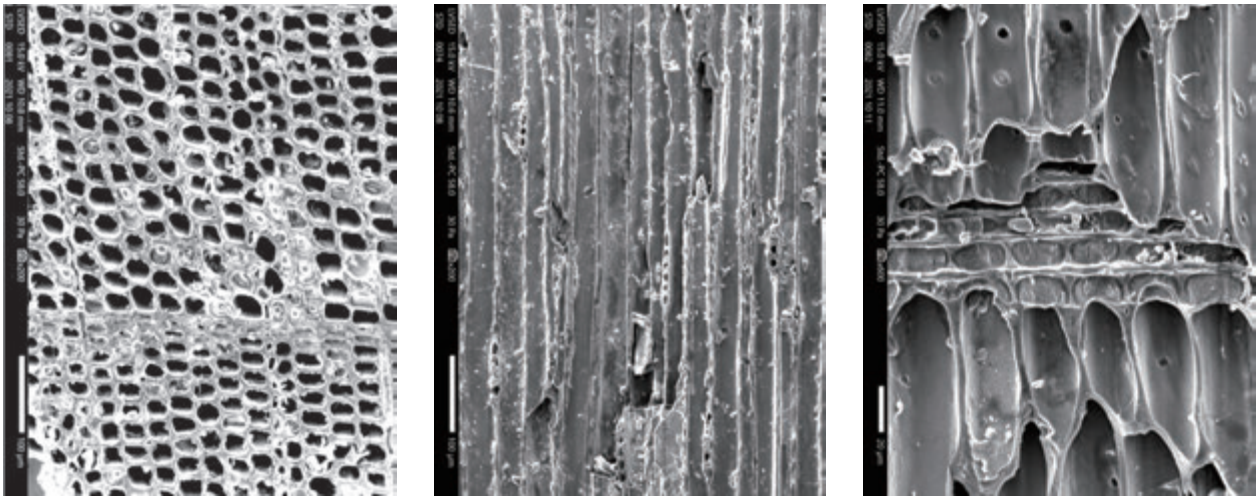


図15. 微小部観察箇所hの拡大観察像

［木材組織の SEM 像］



木口面　　板目面　　柾目面

図16. 木材組織電子顕微鏡写真

［XRF スペクトル］

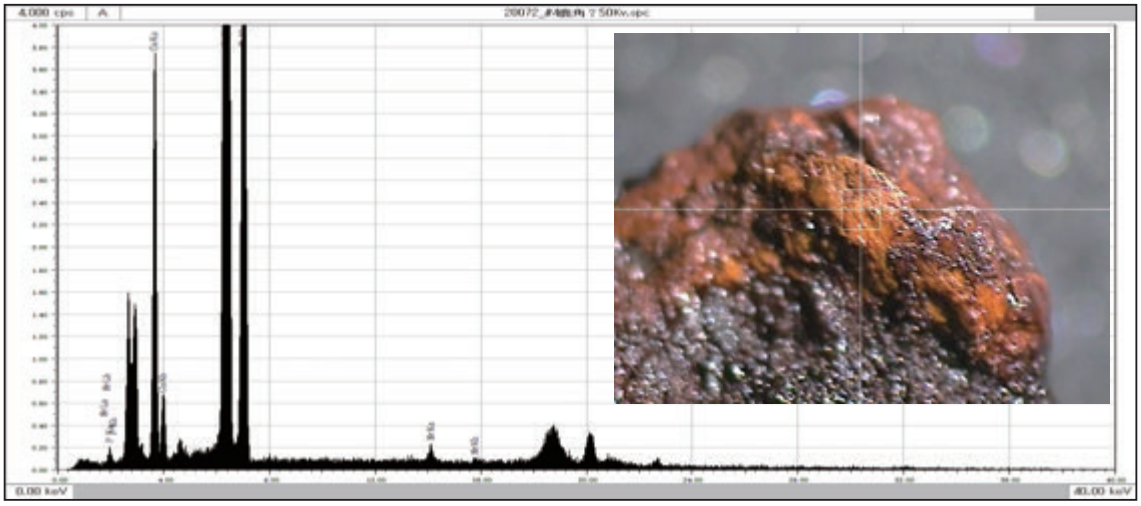


図17. No.4鉄剣の鹿角部分（図７）のXRFスペクトル

［鉄分析］

No.2
短剣
①ﾏｸﾛ組織
②～④鏡寄り
金属鉄部拡大
表層:高炭素域
芯部:低炭素域
硬度:113～188Hv
（200gf）
⑤刃先寄り芯部
⑥刃先寄り表層
金属鉄部拡大

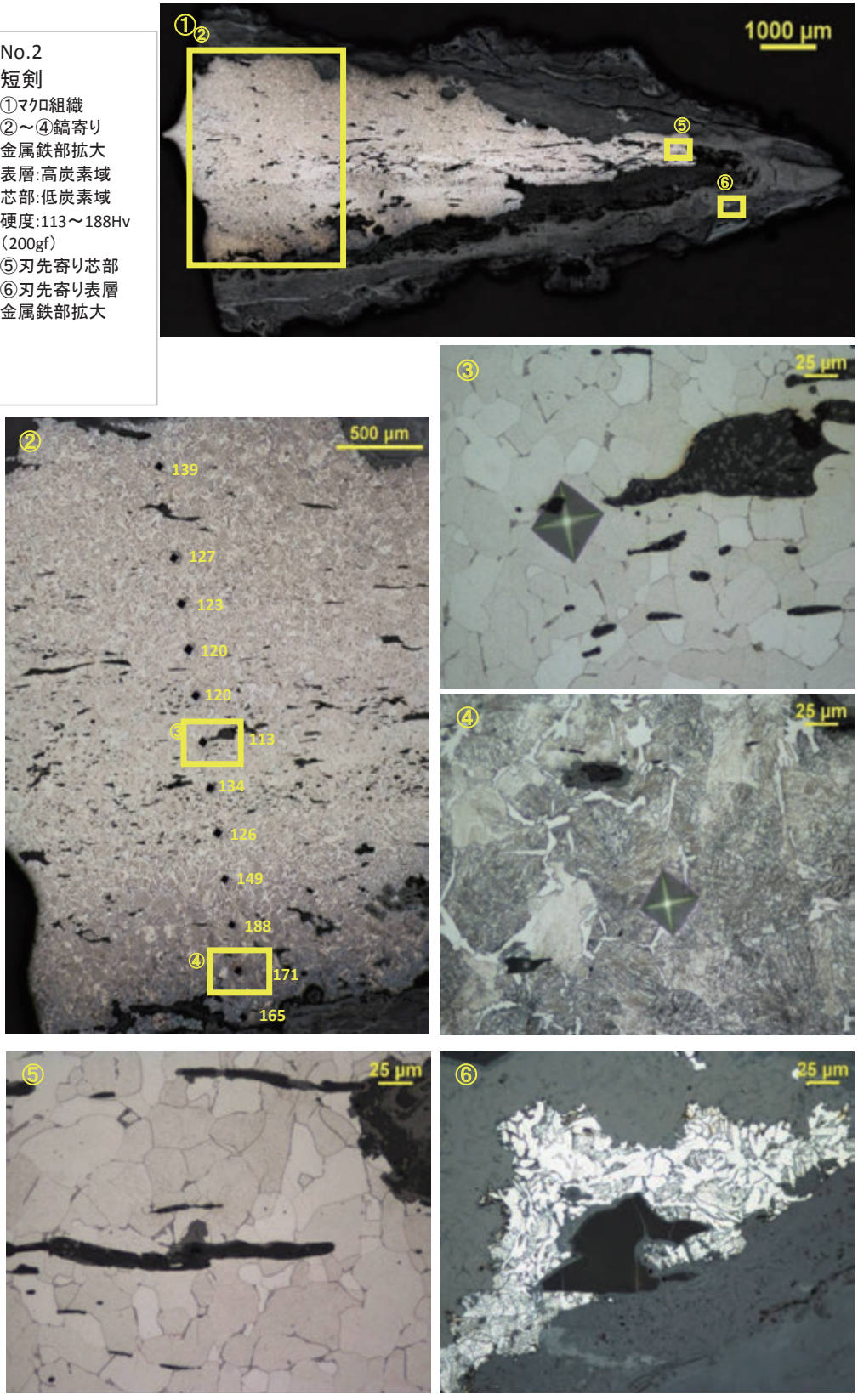
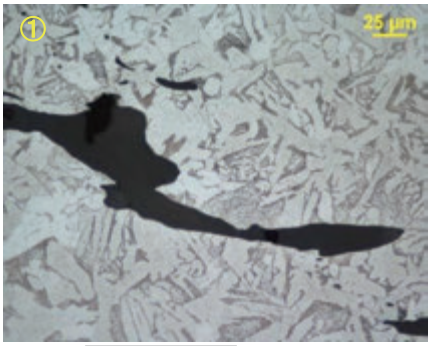
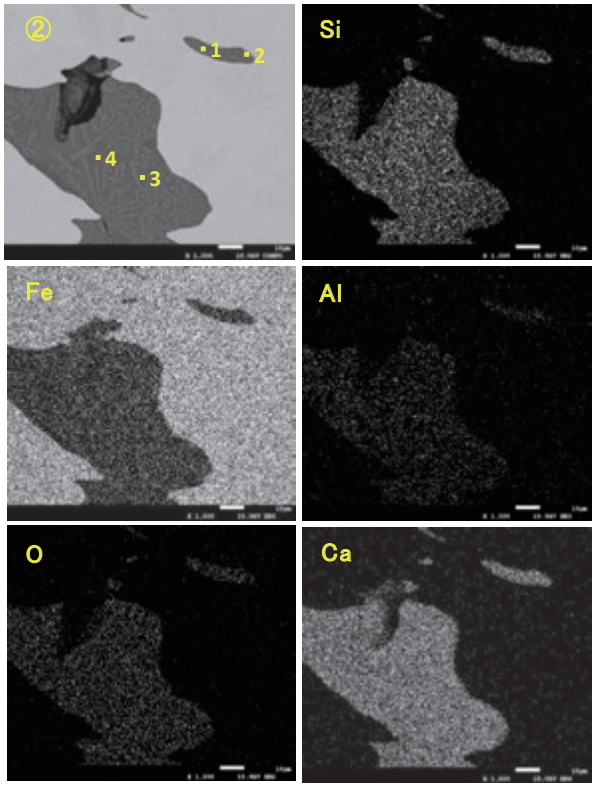


図18. No. 2短剣の断面顕微鏡組織

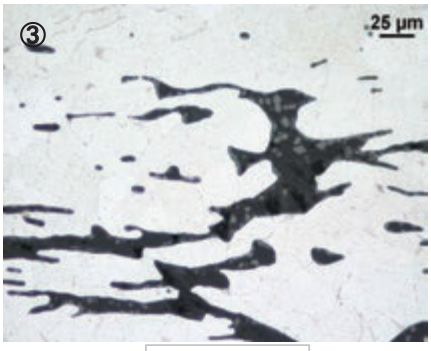


定量分析値

Element	1	2	3	4
MgO	4.487	1.465	7.215	1.549
SiO_2	34.227	38.503	33.359	41.537
Na_2O	0.057	0.099	0.011	0.134
Al_2O_3	4.086	10.159	1.057	11.228
CaO	19.984	19.212	18.274	17.487
TiO_2	0.212	0.563	0.097	0.625
S	0.080	0.257	0.022	0.162
ZrO_2	0.065	0.045	–	0.052
P_2O_5	1.496	2.264	0.708	0.832
SrO	–	–	–	0.057
K_2O	1.327	2.878	0.416	2.962
FeO	33.360	21.418	37.514	20.933
MnO	0.423	0.222	0.638	0.256
Cr_2O_3	–	–	–	0.016
V_2O_3	0.018	0.006	0.016	0.062
Total	99.822	97.091	99.327	97.892

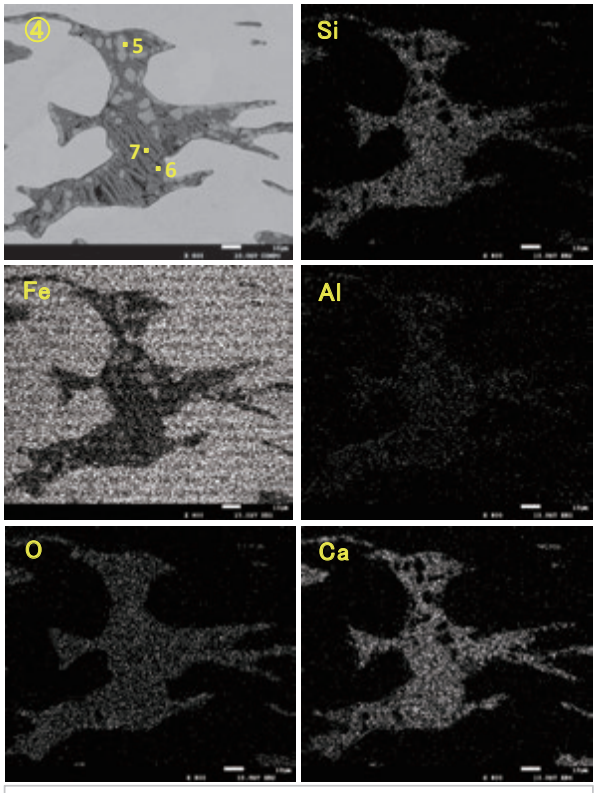


反射電子像(COMP)および特性X線像



定量分析値

Element	5	6	7
MgO	1.008	3.555	0.327
SiO_2	0.213	30.615	34.735
Na_2O	0.01	0.064	0.214
Al_2O_3	0.542	2.943	15.408
CaO	0.137	16.186	10.911
TiO_2	0.488	0.120	0.442
S	–	–	0.164
ZrO_2	0.028	0.065	0.015
P_2O_5	–	0.682	1.059
SrO	–	–	0.350
K_2O	0.050	1.208	5.356
CuO	0.004	0.026	0.022
FeO	91.935	41.246	24.550
MnO	0.127	0.348	0.105
Cr_2O_3	–	0.002	0.017
V_2O_3	0.022	–	0.009
Total	94.564	97.060	93.684



反射電子像(COMP)および特性X線像

図19. EPMAによるNo. 2短剣中の非金属介在物の組成調査

第Ⅶ章　総括

第１節　田原迫ノ上遺跡

１　縄文時代早期

(1)　遺構

縄文時代早期の遺構は，竪穴建物跡1軒，土坑２基，集石15基を検出した。早期の遺構は，過年度調査の配置図に重ねて見ると，調査地中央付近での検出が多い。住居の周辺には集石や土坑が多数検出されている。土坑や集石は北東や西側にかけて広がりを見せる。田原迫ノ上遺跡は，遺構検出の様子から縄文時代早期から人々が繰り返し生活していた遺跡であるといえる。深い掘り込みにこぶし大から人頭大の大きさまでの礫が密集している集石では，炭混じりの土が出土しているものもあり，石置き場，石捨て場，調理場所など多様な活用法の可能性が考えられる。遺跡全体から加工具や狩猟具が出土しており，果樹や狩猟対象の動物が豊富に存在した土地であったことが窺える。

竪穴建物跡22号は，竪穴建物跡が５軒まとまって検出された周辺から南西側で検出された。埋土内から石皿と磨石が出土している。磨石は球形で，全面を使用している。石皿の表面は磨面ができており，日常的に使用されたと考える。使用状況を考えると，ある程度の期間長く居住した可能性が窺える。過年度検出された竪穴建物跡とともに集落を形成していた可能性もある。

集石は深い掘り込みを伴い，人頭大からこぶし大程の大きさまでの礫が密集しているものが竪穴建物跡22号の南東側で３基検出されている。『田原迫ノ上遺跡２』でも同類の集石が数基報告されている。

(2)　遺物

①　土器

縄文時代早期の土器は『田原迫ノ上遺跡２』でⅠ～ⅩⅦ類に分類しており，本報告書もその分類に基づいている。

Ⅰ類の土器は，胴部が直線的に立ち上がり，胴部に貝殻刺突文や貝殻条痕を施している特徴から，前平式土器と判断した。

Ⅳ類の土器は，口縁部は貝殻刺突文，胴部は貝殻条痕を施し，口唇部や底部端部にキザミを施すものもみられ，石坂式土器であると判断した。

Ⅴ類の土器は，外面に貝殻刺突文を施しており，そのほとんどが下剥峯式土器であると判断した。

Ⅸ類の土器は，外面や口唇部，口縁部内面に押型文を施しており，押型文土器であると判断した。

ⅩⅢ類の土器は，胴部が屈曲しており，沈線や粘土紐貼り付けを施している。この特徴から，手向山式土器であると判断した。

ⅩⅥ類の土器は，口縁部がラッパ状に開き，沈線や網目撚糸文を施しており，塞ノ神式土器であると判断した。

②　石器

石器は，石鏃18点，ドリル１点，スクレイパー１点，石核３点，礫器４点，磨製石斧４点，磨敲石類21点，軽石製品１点等が出土している。

石鏃18点はいずれも凹基無茎鏃の打製石鏃で，石材はチャート10点，黒色安山岩３点，黒曜石２点，頁岩２点，珪質安山岩1点である。チャートが多い特徴がある。黒曜石の２点はどちらも南九州の桑ノ木津留の黒曜石と考える。今回の調査で出土した石鏃はほとんどが『田原迫ノ上遺跡２』の分類のⅡb（二等辺三角形を呈し，抉りの深いもの）に属する。『田原迫ノ上遺跡２』で報告されたⅡbの石鏃の石材は黒曜石とチャートを中心としている。

磨石・敲石類は自然の楕円形の安山岩を素材としたものを特に加工することもなく使用しているものが多い。過年度の調査においても磨石・敲石類と凹面をもつ石皿が多量に出土していることから，果樹が豊富な場所で，磨石・敲石類と石皿は製粉具として使用されていたのではないかと考える。

２　縄文時代前～晩期

(1)　土器

219～227は粘土紐を貼り付ける特徴から，縄文時代中期の野久尾式土器，春日式土器と判断した。

228～287は縄文時代後期の土器である。228～245は凹線や沈線の文様帯があり，宮之迫式土器，指宿式土器と判断した。246～249は擬似磨消縄文系の土器と判断した。250・251は口縁内部に文様が施されており，時期は松山式期にあたると考える。252～269は貝殻での特徴的な施文があり，市来式土器の流れをくむ土器と判断した。270～276は沈線やキザミ，刺突連点文などで施文しており，西平式土器と判断した。近隣の牧山遺跡で多く出土している。277～280は口縁部が外反し胴部が張り出す特徴があり，中岳Ⅱ式土器と判断した。

288～301は縄文時代晩期の土器である。288・289は口縁部内外面に1条の沈線を施しており，御領式土器，入佐式土器と判断した。290～292は内外面ともにミガキを行い，丁寧に研磨されており，黒川式土器と判断した。

3　弥生時代以降

(1)　遺構

弥生時代以降の遺構は，竪穴建物跡３軒，掘立柱建物跡１棟，土坑２基，円形周溝１基，集石３基を検出した。

竪穴建物跡３軒，円形周溝は，過年度の調査の続きで調査を行った。掘立柱建物跡１棟と集石３基は，『田原迫ノ上遺跡１』の配置図に重ねてみると，調査区中央から東西に別れた土地に住居跡が多く検出されている。住居跡の密集した検出状況から，集落を形成していた可能性がある。縄文時代早期の住居が多かった場所から，弥生時代の居住区は東西のやや平坦な土地へ移っている。

(2)　遺物

①　土器

土器は主に山ノ口式土器が出土している。刻目突帯を有する甕や二叉口縁を有する壺形土器もみられる。底部は基本的に充実高台であるが，高台内部が中空となる資料が1点出土している。蓋形土器片が６点出土しており，端部に穿孔を有するものもある。暗文が施された丹塗り壺形土器片が４点出土しており，北部九州から流入した可能性がある。

②　石器

石器は，Ⅲ層出土遺物として石鏃９点，剥片石器３点，石核２点，礫器６点，石斧８点，磨製石器１点，磨敲石類６点を掲載している。Ⅲ層からは，縄文時代晩期から古墳時代までの遺物が混在しているため，明確に時代を特定することができなかった。

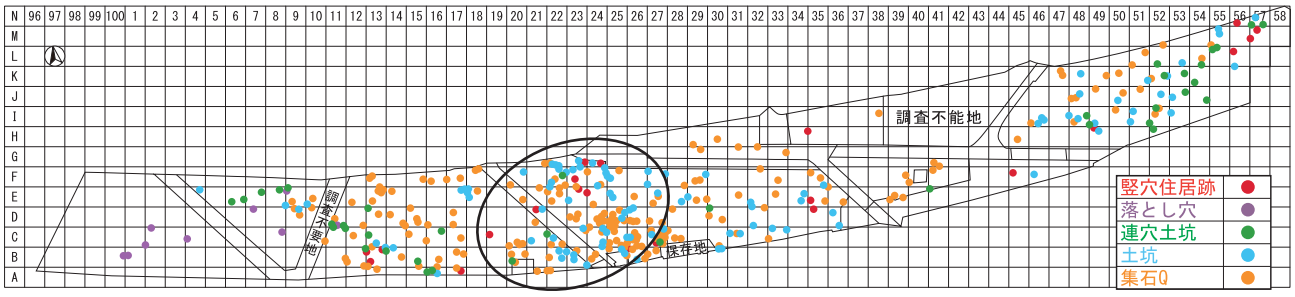
『田原迫ノ上遺跡１』で報告された石鏃の石材はハリ質安山岩が全体の27%と一番多く，次いで黒曜石が24%，チャートが19%となっている。本報告書掲載の石鏃は，９点中５点頁岩製である。黒曜石製の石鏃は欠損品が１点出土しており，黒曜石の産地は腰岳産である。他地域から石材が運び込まれている。

石斧の石材は90%がホルンフェルスである。『田原迫ノ上遺跡１』で報告された石斧の石材は頁岩製が80%を占めている。薄く剥がれやすく，加工しやすい頁岩が周辺で豊富に採取できたと考えられ，在地で採取できる石材として多く活用されたと考える。

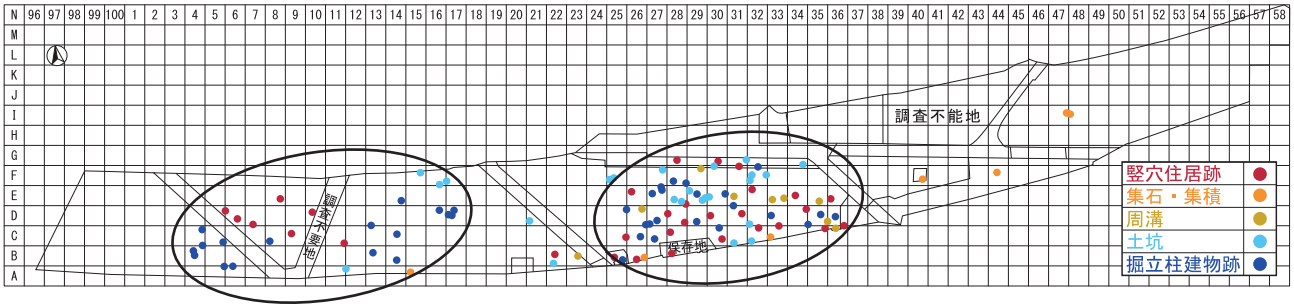
『田原迫ノ上遺跡１』で報告されている磨敲石類は安山岩製が68%を占めている。本報告書掲載の磨敲石類は６点である。石材は安山岩２点，凝灰岩３点，砂岩１点である。円礫の安山岩をそのまま形状を生かして使用するケースが多く見られる。

弥生時代以降の包含層から砥石は数点出土しているが，石包丁などの稲作を裏付けるような遺物はなかった。しかし，土器に籾痕が残るものが数点あること，同じ台地上にある近隣の牧山遺跡で砥石と石包丁の破片が出土していることなどから，遺跡の近辺で稲作が行われていたことは想像に難くない。縄文時代早期から居住区が平坦な土地へ移動していることも，狩猟・採取の生活から稲作への生活様式の変化に伴うものであると考える。

(引用・参考資料)
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2016『田原迫ノ上遺跡１』
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2017『田原迫ノ上遺跡２』
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2017『牧山遺跡１』
公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター　2020『牧山遺跡２』



第98図　縄文時代早期遺構分布図



第99図　弥生時代遺構分布図

第２節　立小野堀遺跡

2017年３月刊行の公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（16）において詳細な総括は行われている。地下式横穴墓は190基報告されており，今回報告を行った３基を加え，立小野堀遺跡検出の地下式横穴墓は総数193基を数えることとなった。

今回検出した地下式横穴墓はエリア13・14と呼称された部分にあたり，地下式横穴墓が比較的密集して検出されている範囲にあたる。

調査では，平面形態の異なる３基が検出された。

191号地下式横穴墓は，平面形Ｂ１類で竪坑のほぼ中央部に狭い羨門と羨道を設けたもので，玄室は平入りで竪坑横軸の方向に対してやや斜めとなるように造られている。

玄室ほぼ中央部から革鞘と思われる有機質の残る刀子が出土した。鞘を留めるための綴孔も確認出来る状態であった。

192号地下式横穴墓は，平面形Ｂ２類で竪坑のやや右側に狭い羨門と羨道を設けたもので，玄室は平入りで竪坑横軸に対してやや斜めとなるように造られている。羨門横に細長い炭化材が出土しており，既刊報告書でも触れていた玄室閉塞に使用された木材の可能性が高いと思われる。

また，玄室中央奥側に遺物が出土している。遺物は短剣で非常に残りがよい。

193号地下式横穴墓は，平面形Ａ類で竪坑のほぼ中央部に狭い羨門と明確な羨道を設けたもので玄室は平入りで竪坑横軸の方向と平行に造られている。今回の調査でもっとも多くの副葬品を出土した遺構である。

遺物は鉄器18点である。剣身長74.7cmを測る鉄剣は刃部に鞘の木質が残存し二枚合わせ式の鞘であることが分かる。ヒノキが材料として使用されている。

また残存状況はきわめて悪いが，鞘にはＺ撚りの繊維と思われる幅４㎜程度の紐が巻かれた痕跡が各所に見られる。しかしながら残存状況が悪いため全てが同一の紐で構成されているかは不明である。

さらに，鞘口，柄縁には骨角製の装飾が施された様子がうかがわれる。

その他の遺物として鉄鏃が多数出土している。腸抉柳葉鏃１点，圭頭鏃１点，特に長頸鏃がまとまって出土していることが特徴的である。15本出土しているが，いずれも逆刺を有する長三角形の刃部で頸部に別造りの片逆刺を有する形状を呈する。矢柄と思われる木質痕跡も確認でき，桜皮と思われる口巻きも確認できるものもみられる。

出土した遺物は，既刊報告書で言う鉄鏃Ⅲ期に位置づけられるものと思われ，今回の発掘調査成果は2017年に刊行した報告書の内容を追認・補完する結果となると考えられる。

既刊報告書では，遺構に伴う墳丘の可能性を遺物の出土状況から推測していたが，今回の調査では，遺構上面が削平されていたため，遺物の出土が見られず墳丘の有無の可能性に言及するには至らなかった。

土坑墓の検出は，地下式横穴墓と比較すると少なく今回検出の１基を加えて，全６基と数少ない。墓と定義する材料は少ないが，地下式横穴墓の密集する範囲に近いこと，床面が平らに掘削されていること，遺構埋土がすぐに埋め戻されたような堆積をしていたこと，さらに付け加えれば伸展葬に適した長軸の規模を呈していたことなど，これらを複合的に判断して土坑墓と認定した。

最後に，地下式横穴墓は調査範囲外にも広がる可能性が非常に高く，高速道路建設後の周辺開発等が行われる場合は慎重な対応が求められる。

参考文献

鹿児島県教育委員会（編）（2017）『立小野堀遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書，16．鹿児島県教育委員会．

橋本達也（編）（2014）『九州南部における古墳時代鉄器の基礎的研究』鹿児島段額総合研究博物館．

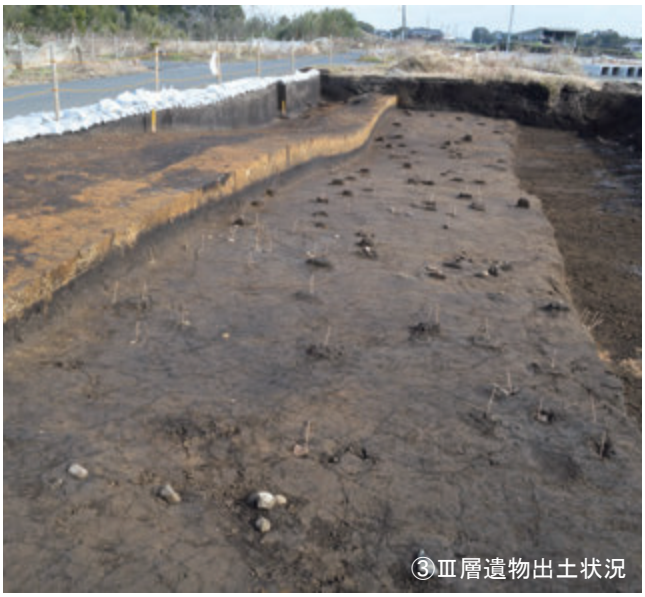
杉山秀宏（1988）「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』８．吉川弘文館．

図　　版

図版1


①G-46 グリッド南壁土層断面


②E～G－35～38 グリッド西壁土層断面


③Ⅲ層遺物出土状況


④作業風景

田原迫ノ上遺跡土層断面図・作業風景

図版2











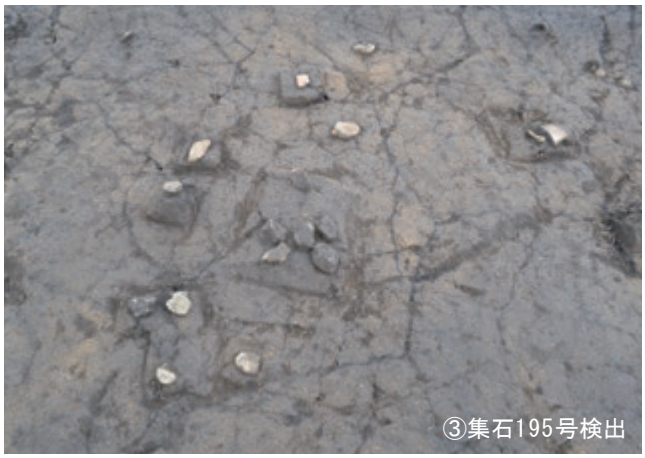




竪穴建物跡21号，土坑105号・106号


①集石193号検出


②集石194号検出


③集石195号検出


④集石196号検出


⑤集石197号検出


⑥集石198号検出


⑦集石199号検出


⑧集石200号検出

集石193号～200号

図版4


①集石201号検出

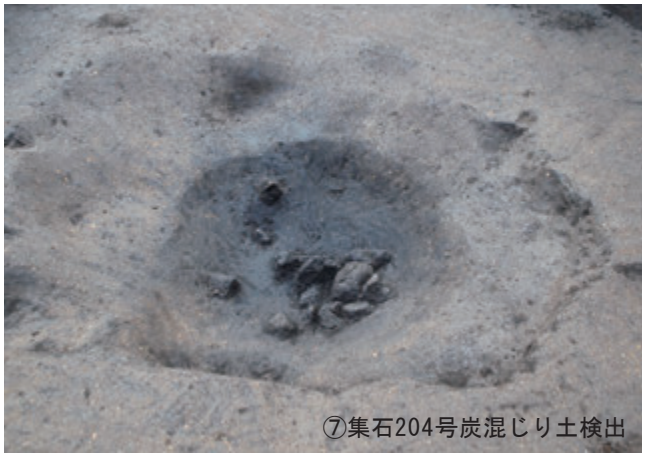

②集石202号検出


③集石203号検出


④集石203号完掘


⑤集石204号検出


⑥集石204号礫堆積状況


⑦集石204号炭混じり土検出

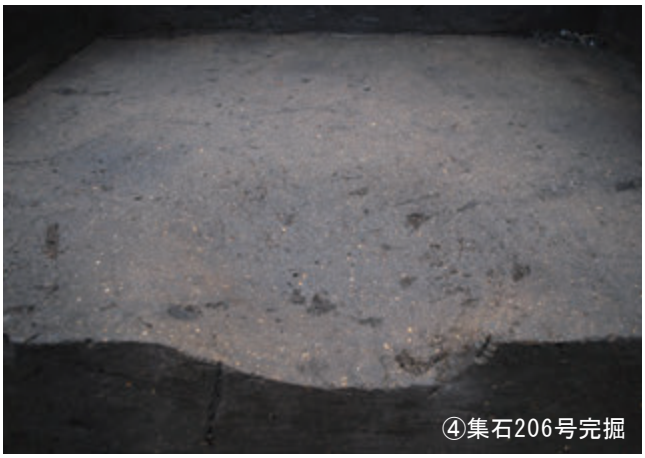

⑧集石204号完掘

集石201号～204号


①集石205号検出


②集石205号完掘


③集石206号検出


④集石206号完掘

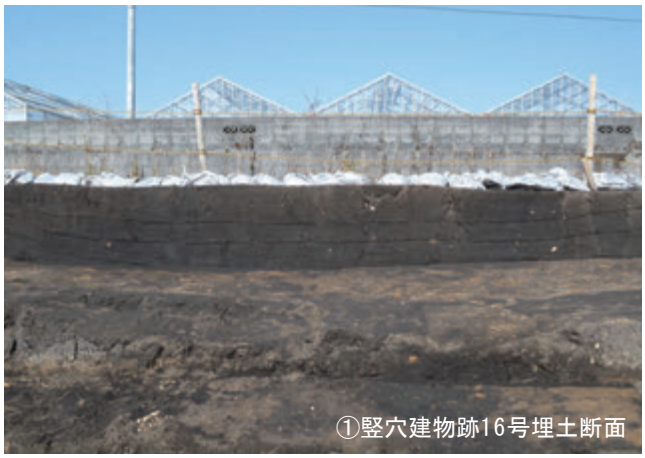

⑤集石207号検出

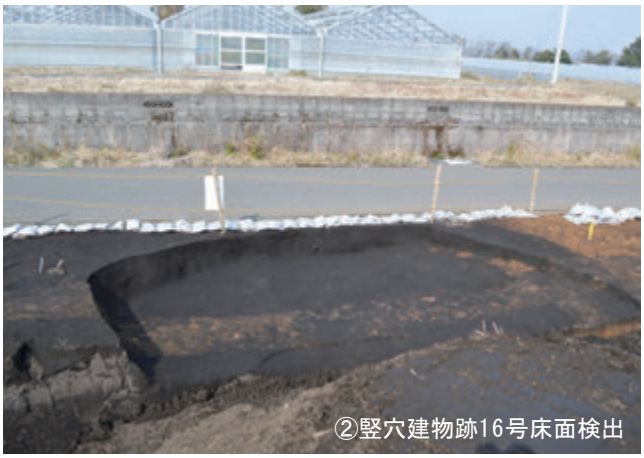

⑦集石207号半掘


⑦集石207号完掘

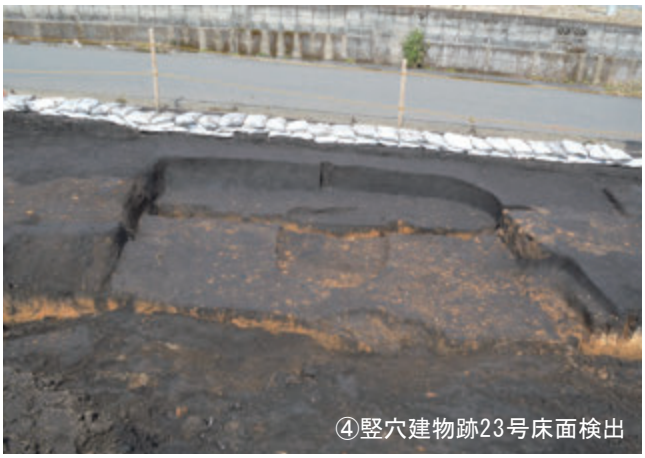
集石205号～207号

図版6

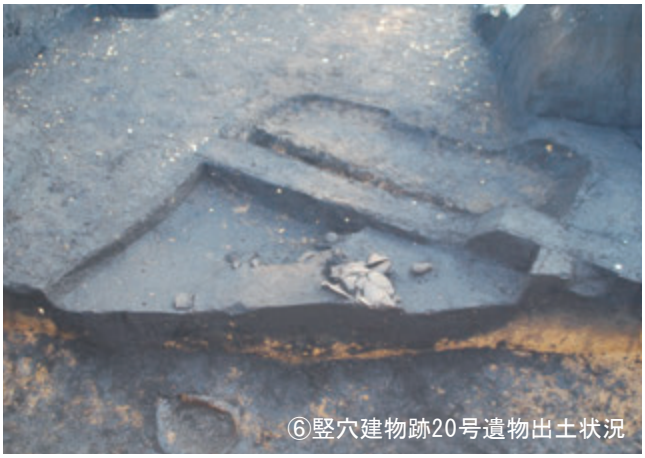

①竪穴建物跡16号埋土断面


②竪穴建物跡16号床面検出


③竪穴建物跡23号ベルト断面

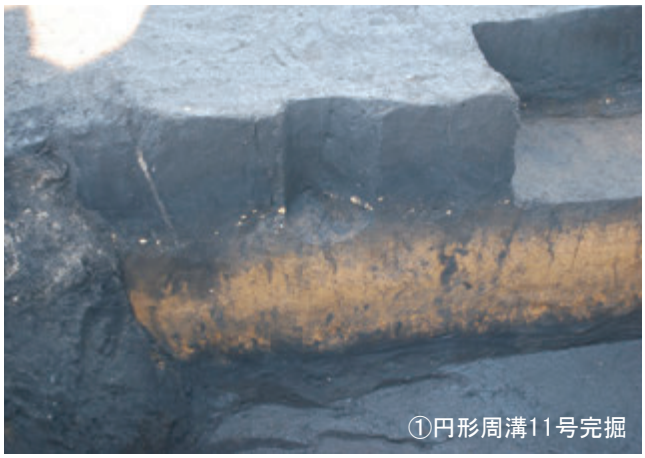

④竪穴建物跡23号床面検出


⑤竪穴建物跡20号検出

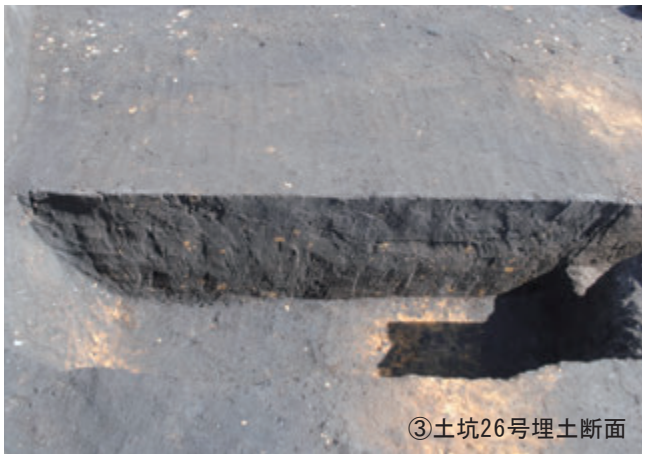

⑥竪穴建物跡20号遺物出土状況


⑦竪穴建物跡20号完掘

竪穴建物跡16号・23号・20号













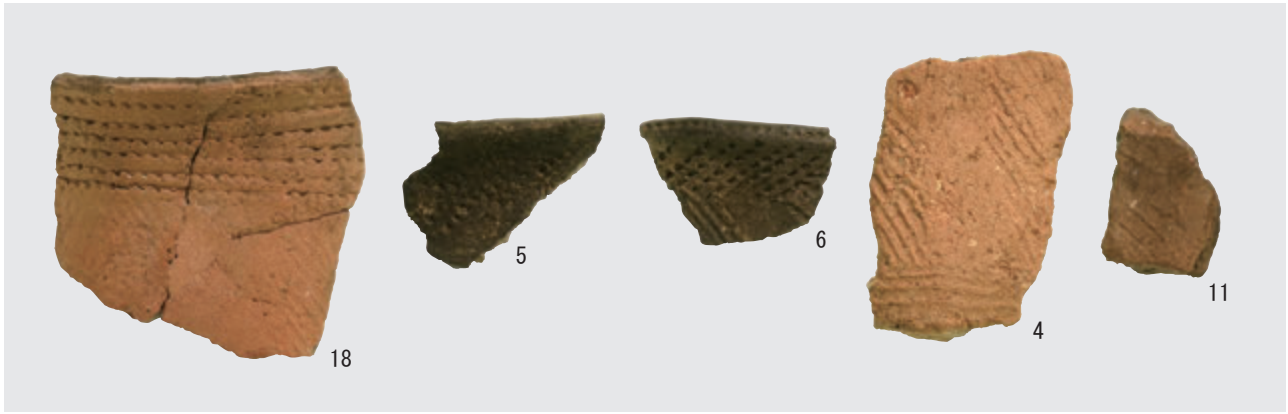




円形周溝11号，掘立柱建物跡41号，土坑26号・27号，遺物出土状況

図版8







縄文時代早期遺構内遺物



縄文時代早期土器（１）

図版10

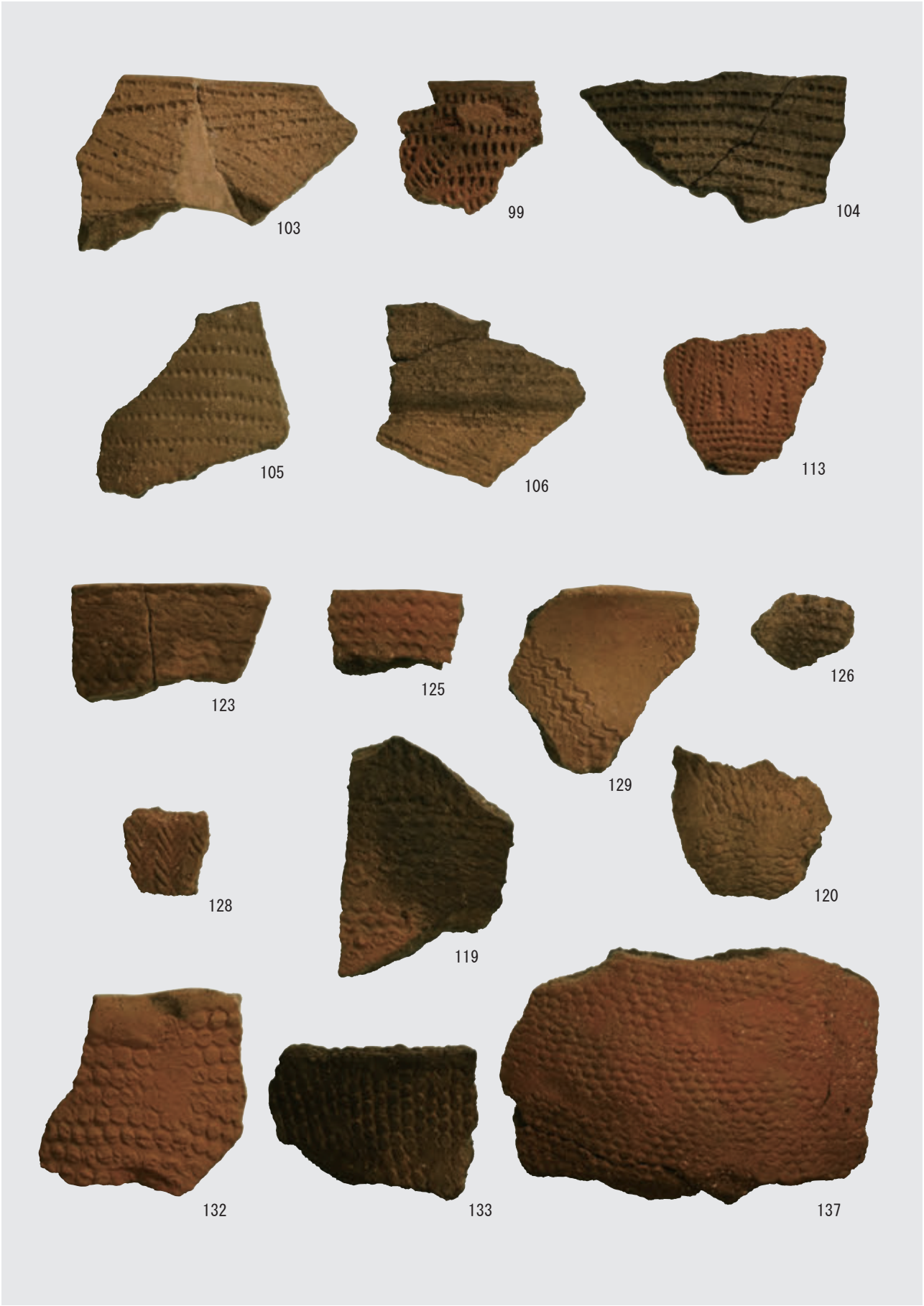






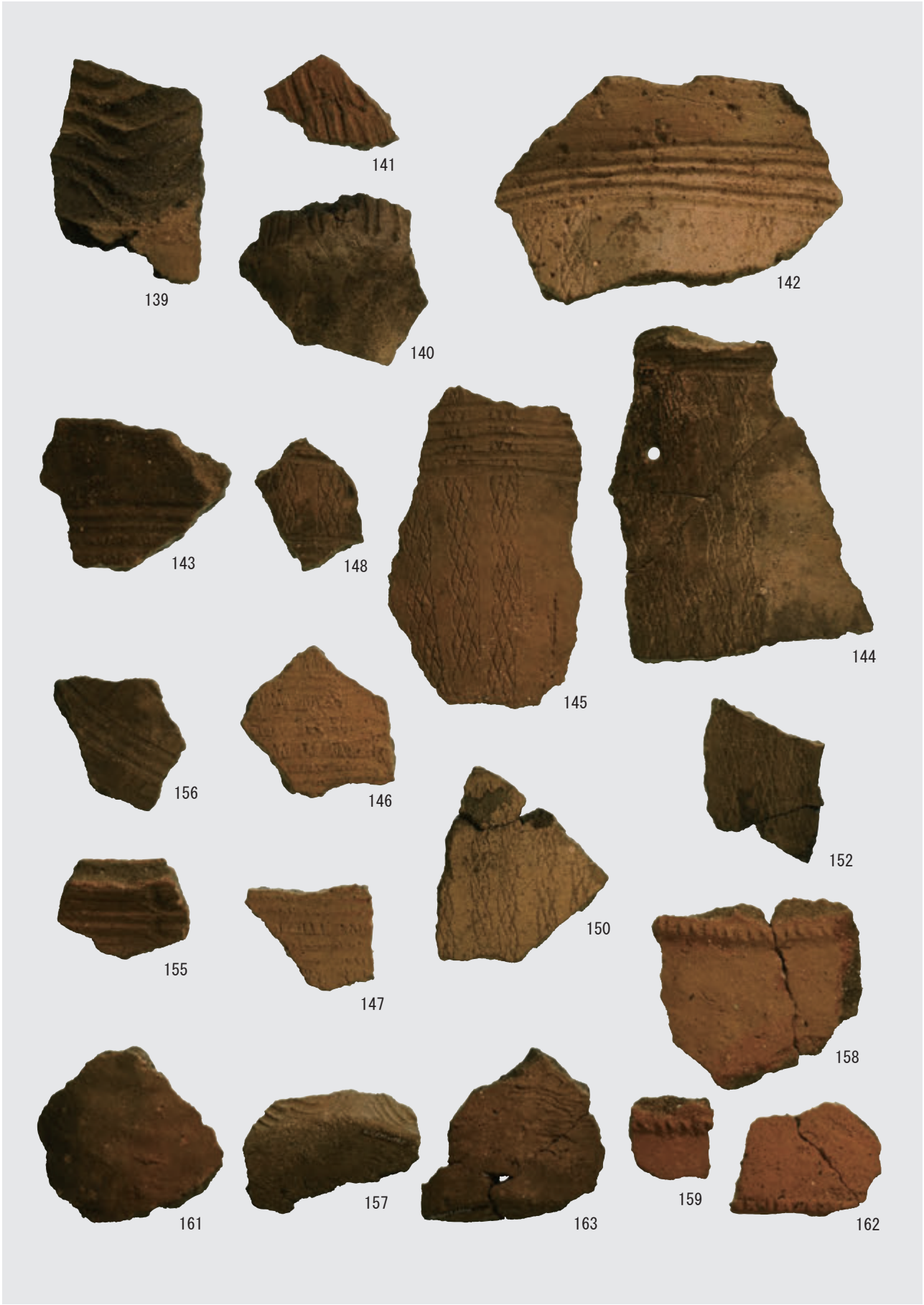


縄文時代早期土器（２）

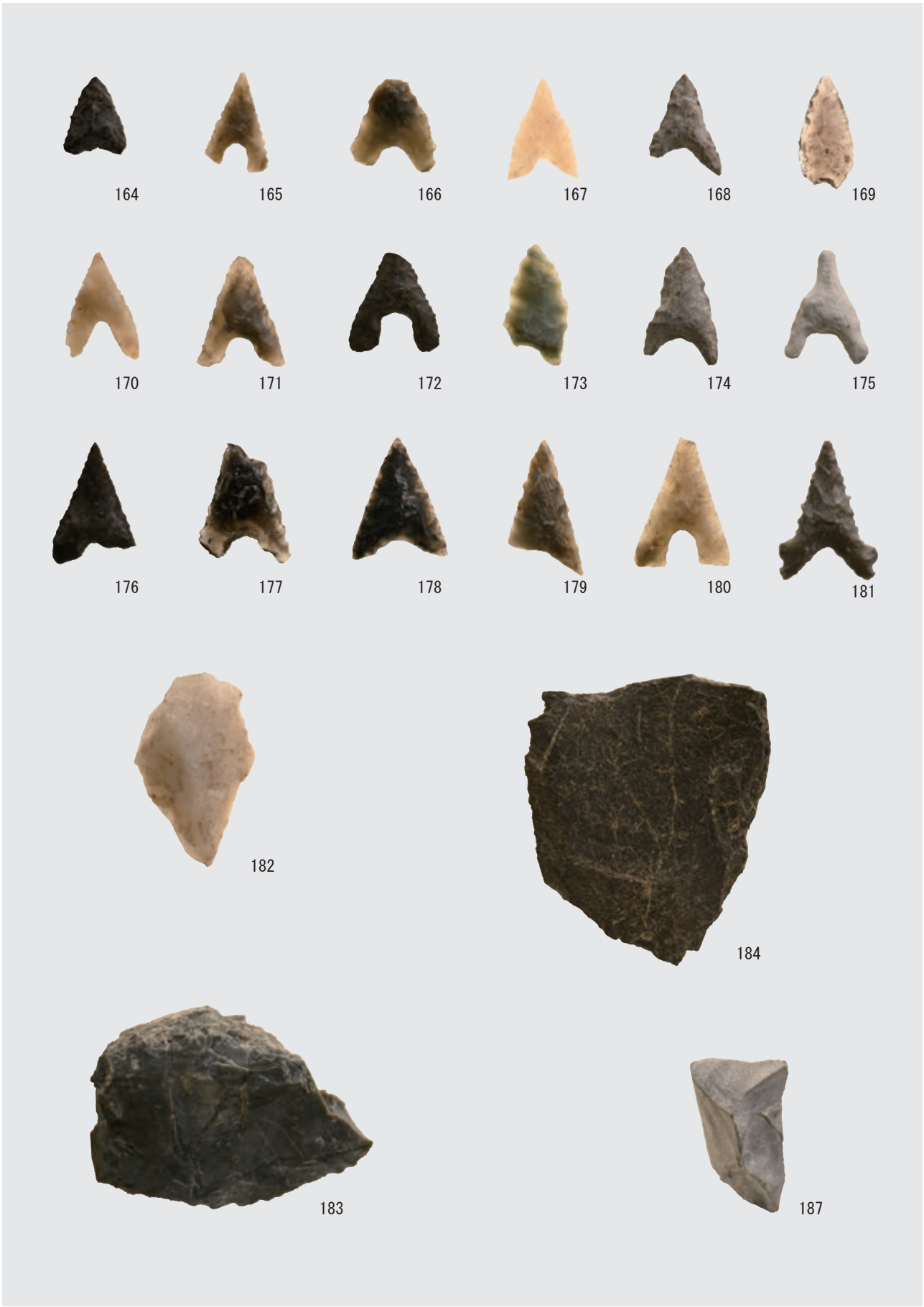


縄文時代早期土器（３）

図版12



縄文時代早期土器（４）


164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
184
183
187

縄文時代早期石器（１）

図版14



縄文時代早期石器（２）



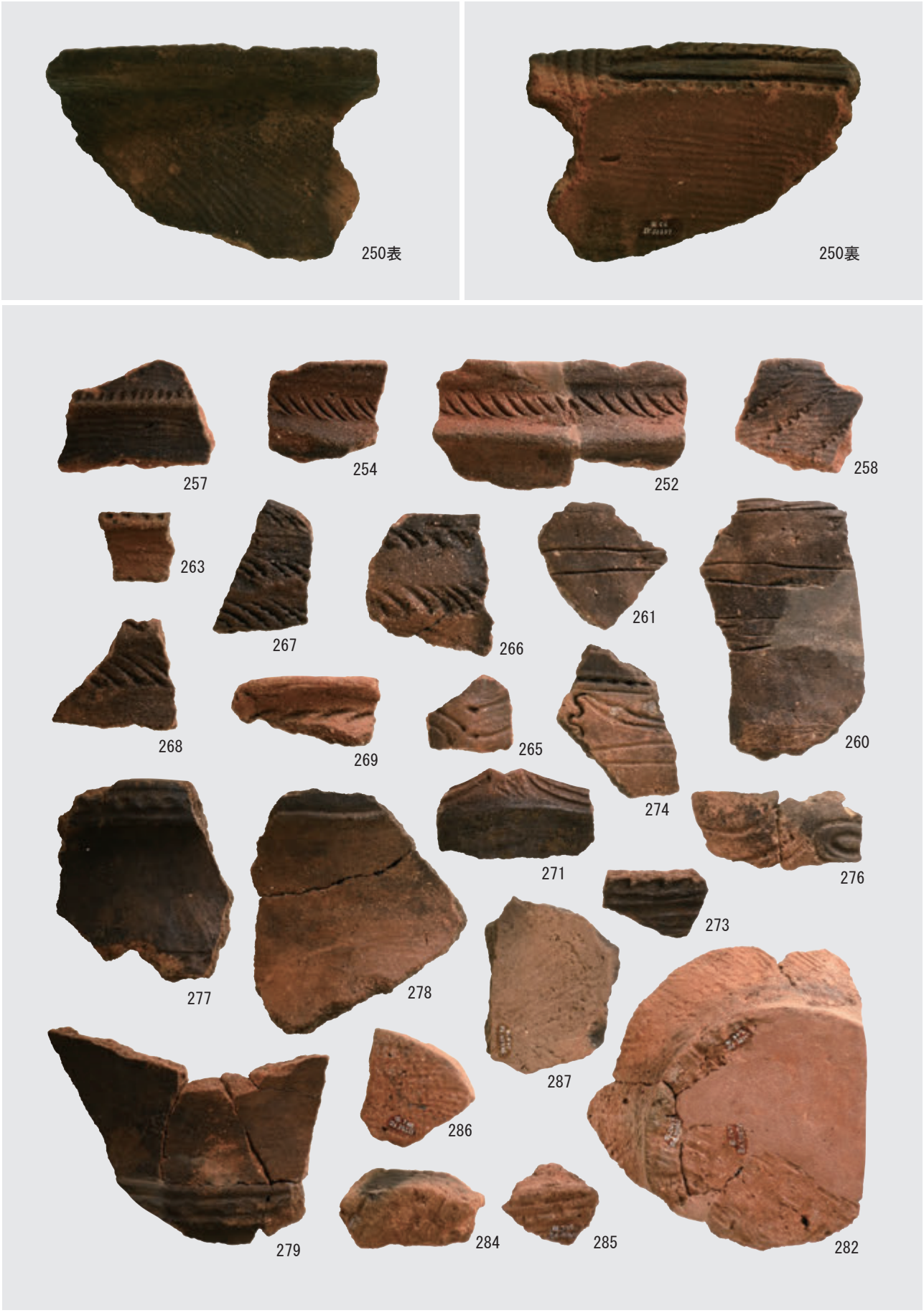


縄文時代中期・後期土器

図版16

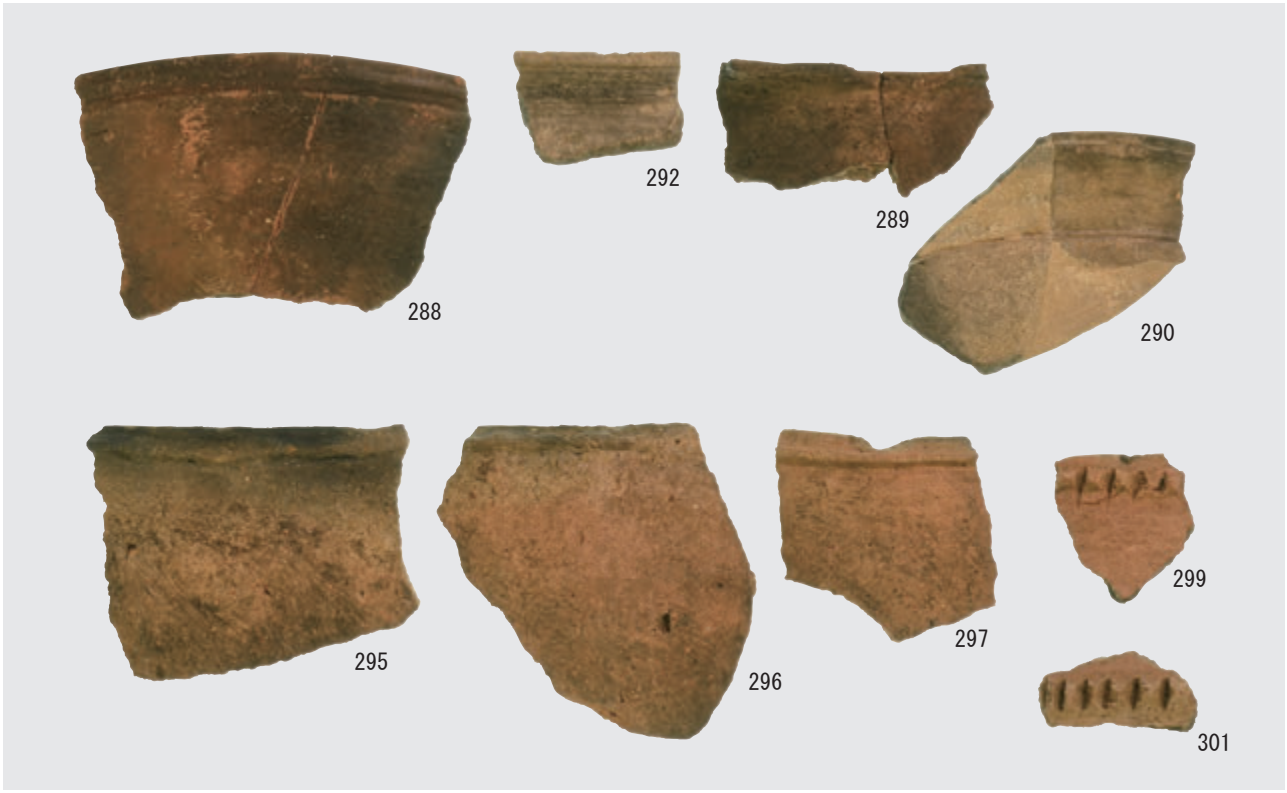


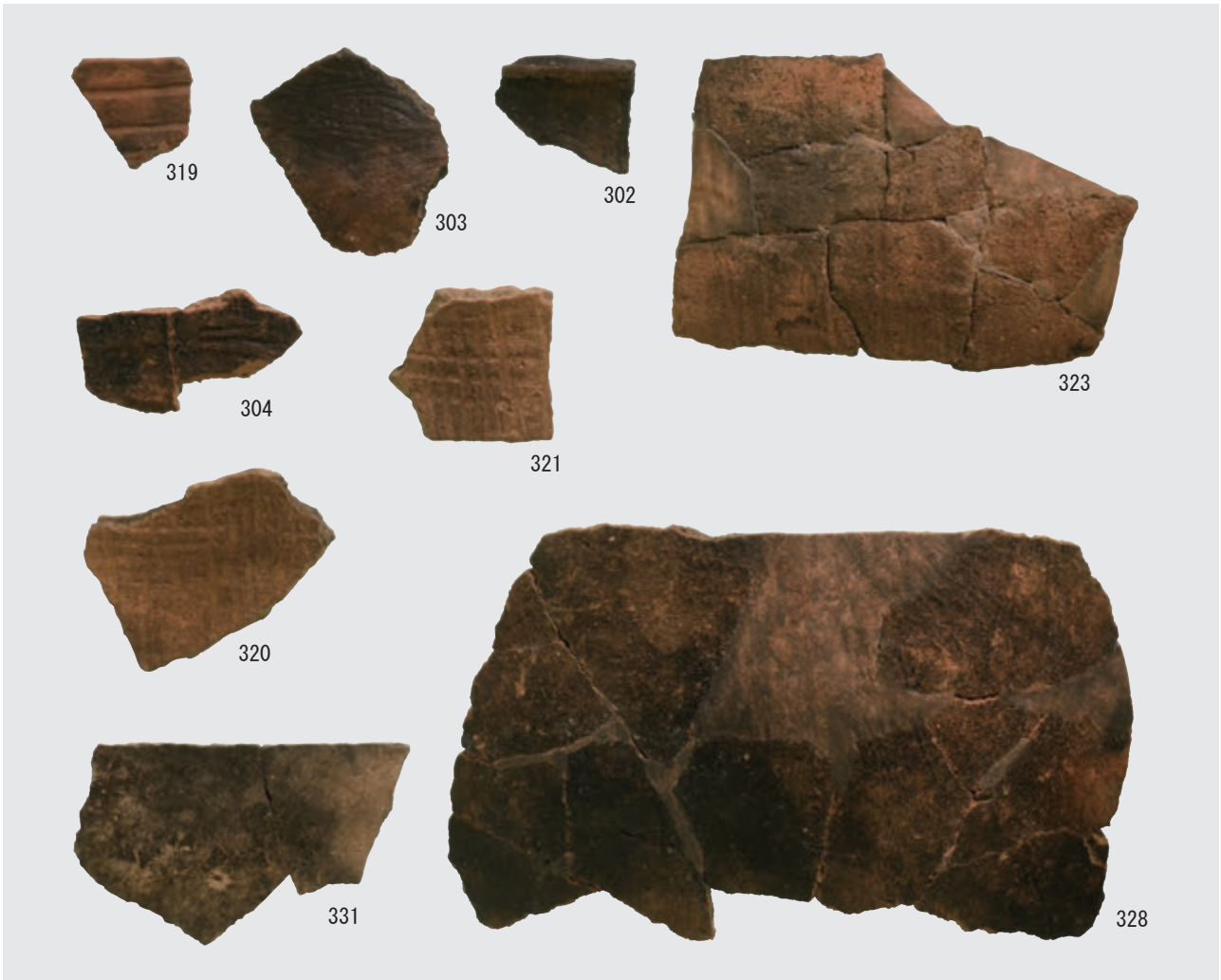
縄文時代後期土器（１）


250表
250裏
257
254
252
258
263
267
266
261
260
268
269
265
274
271
276
273
277
278
287
286
279
284
285
282

縄文時代後期土器（２）

図版18





縄文時代晩期土器，その他土器

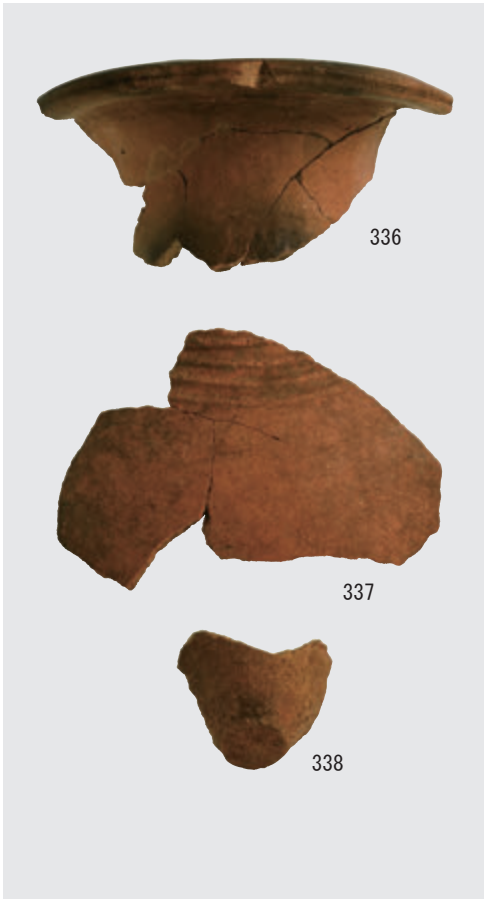


竪穴建物跡20号出土土器

図版20





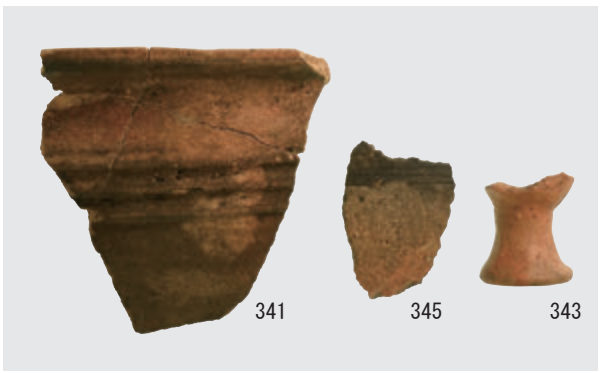


竪穴建物跡23号出土土器


342

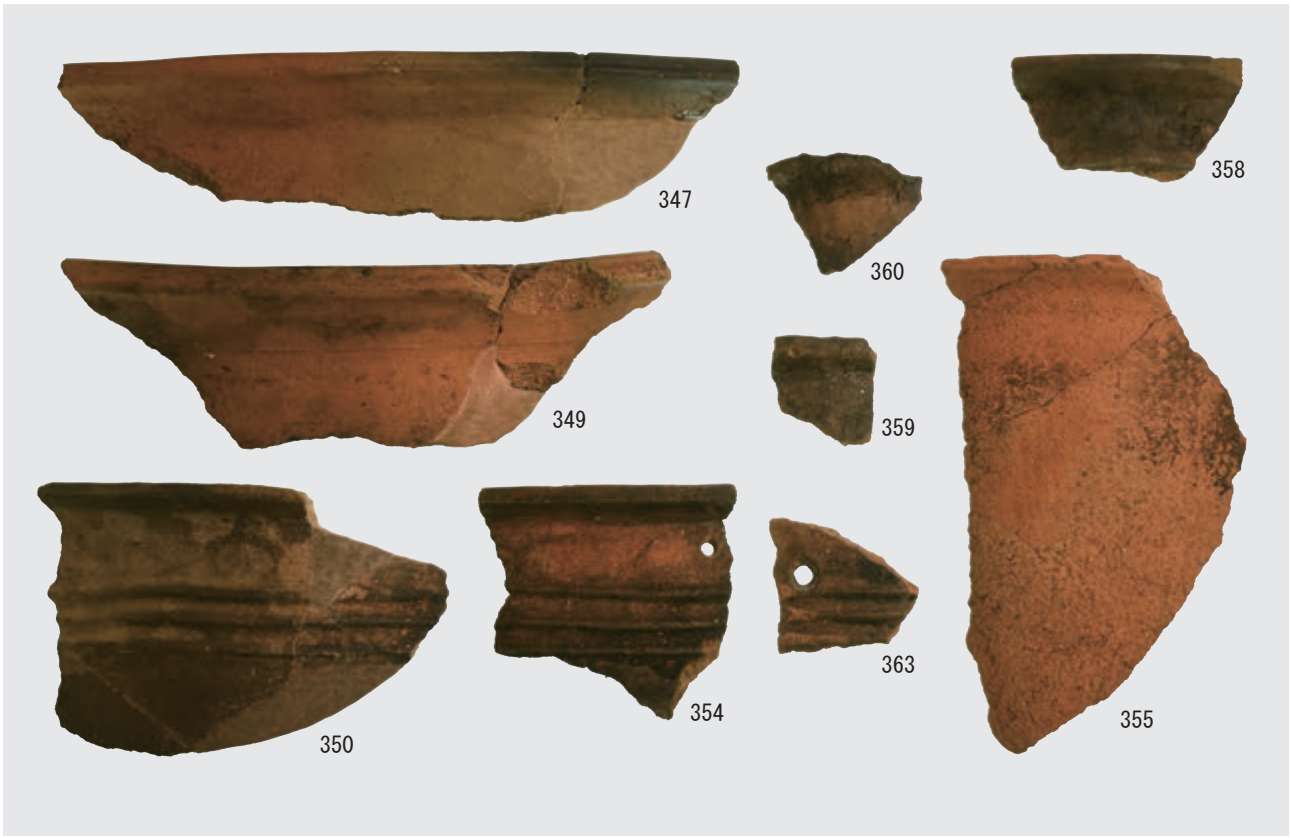

339


340


341 345 343

土坑27号出土土器

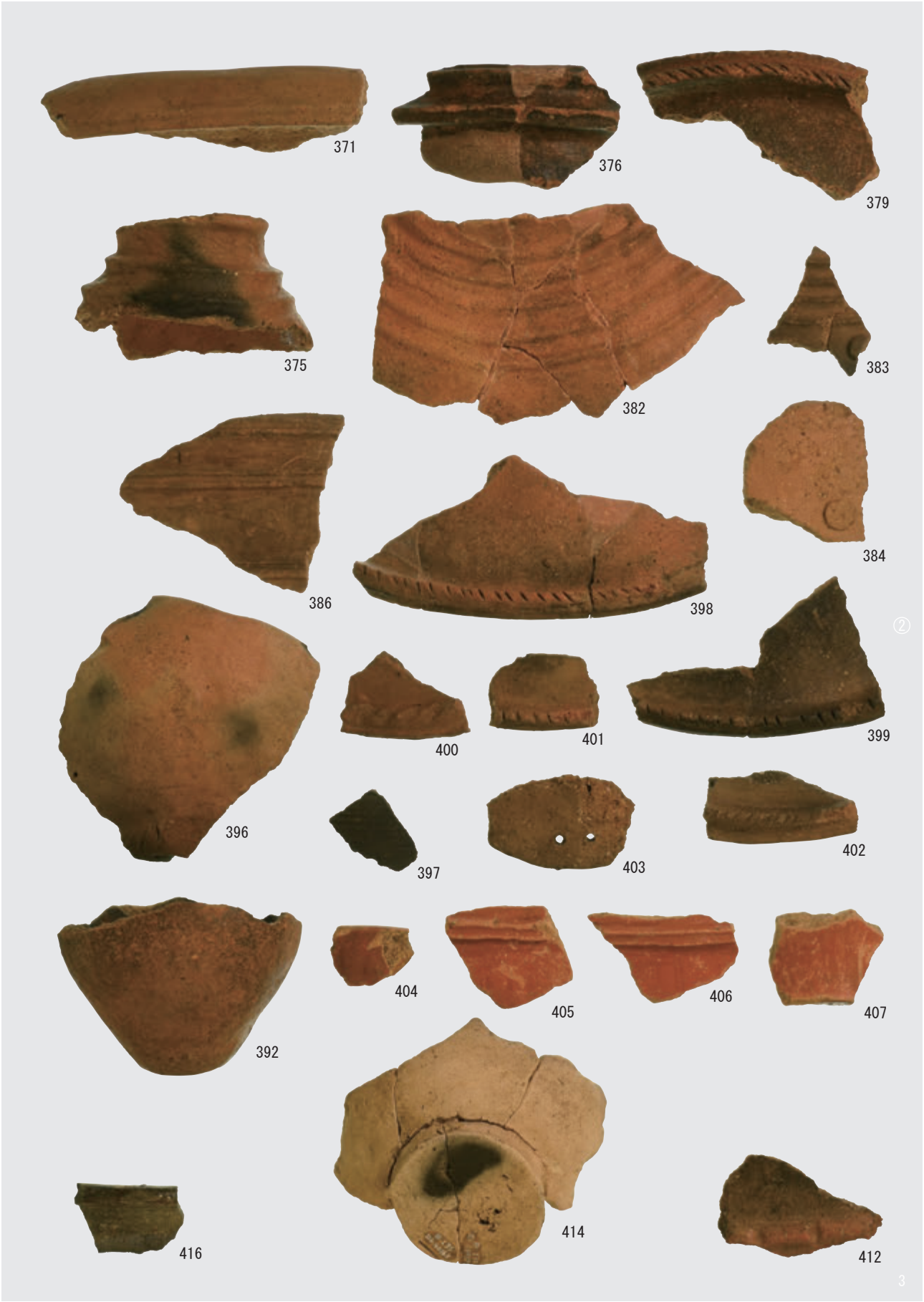
図版22





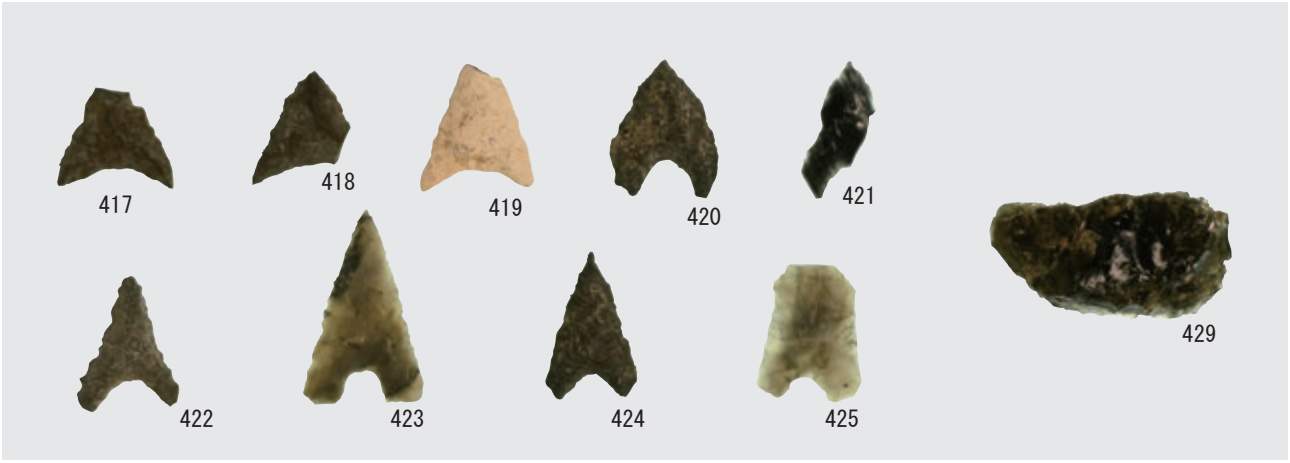


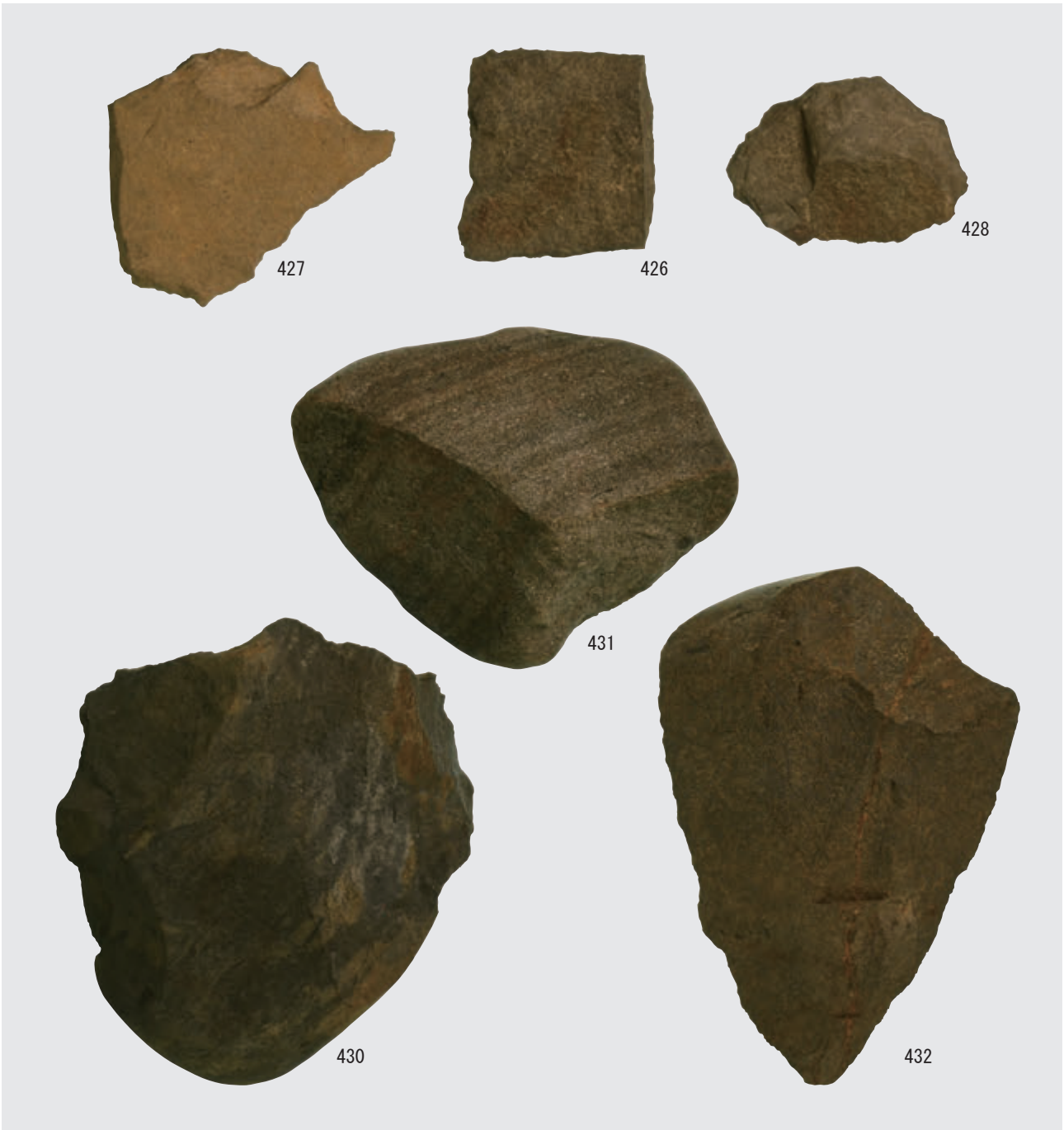
弥生時代出土土器（1）


371
376
379
375
382
383
386
398
384
396
400
401
399
397
403
402
392
404
405
406
407
414
416
412

弥生時代出土土器（2）

図版24





石鏃，石核，剥片，礫器 1

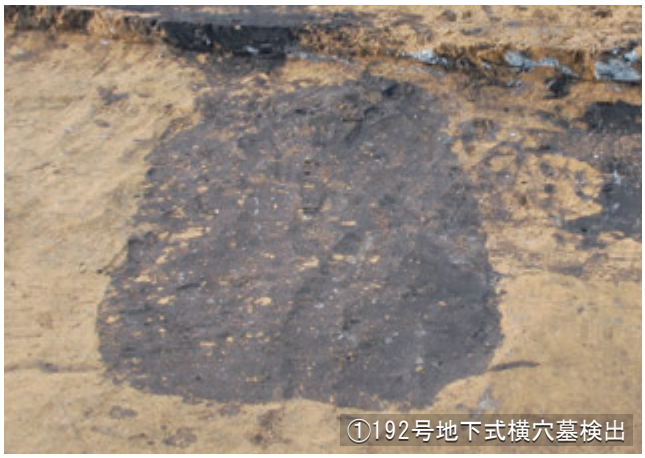


礫器 2，打製石斧，磨製石器，磨製石斧，磨敲石

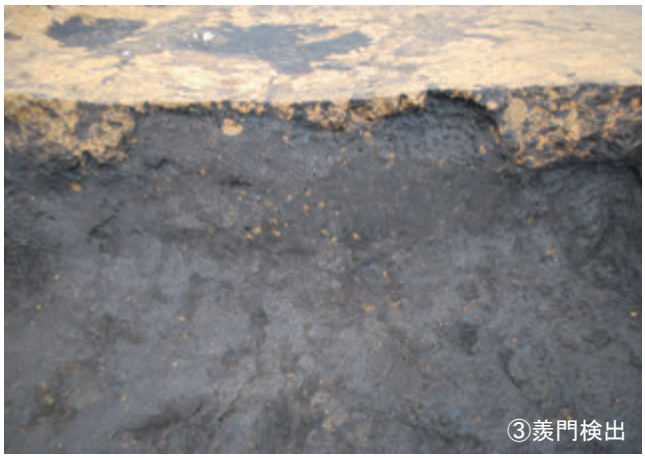
図版26

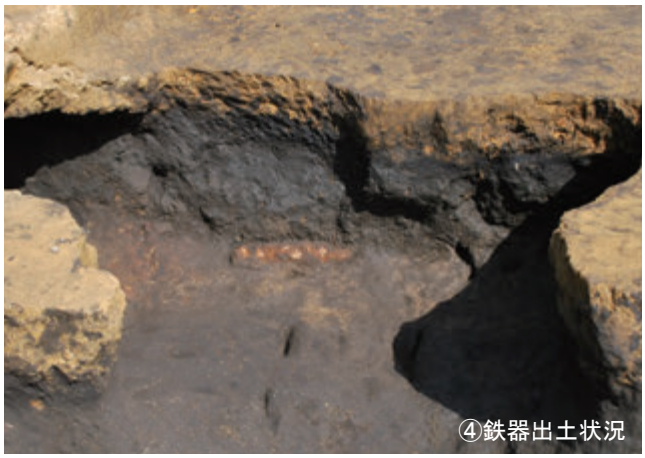


191号地下式横穴墓（SK253）





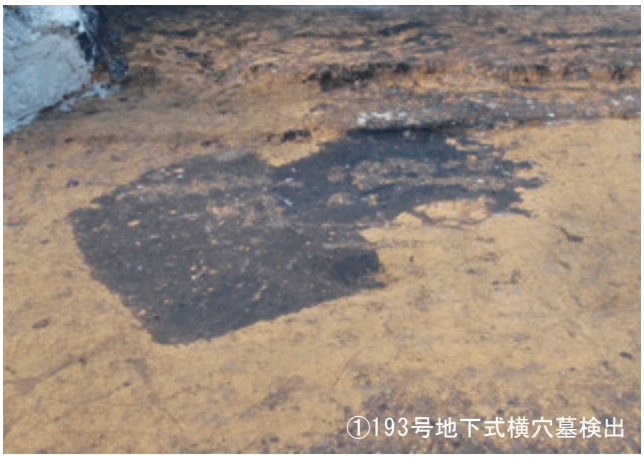




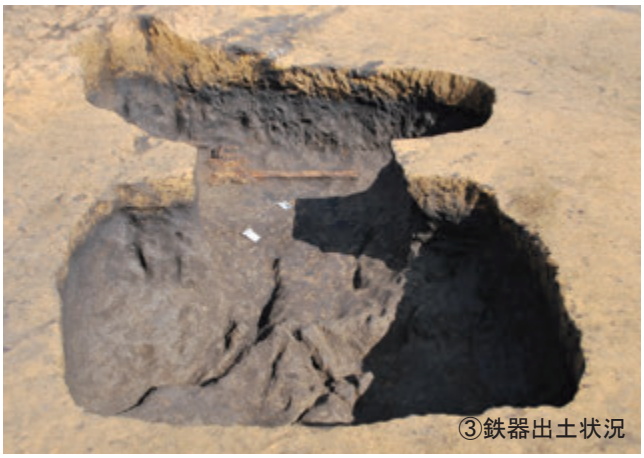


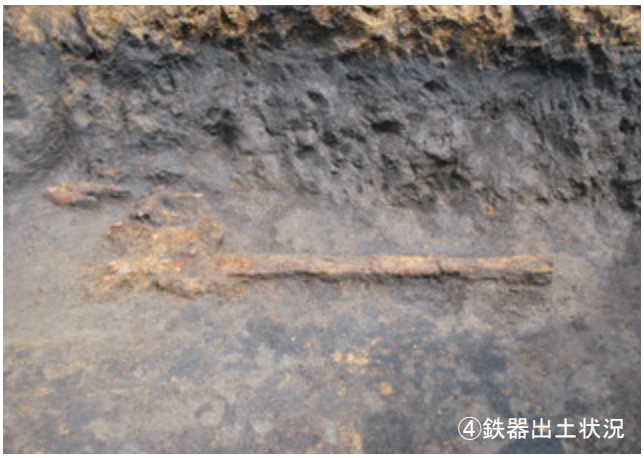
192号地下式横穴墓（SK254）

図版28


①193号地下式横穴墓検出


②埋土断面

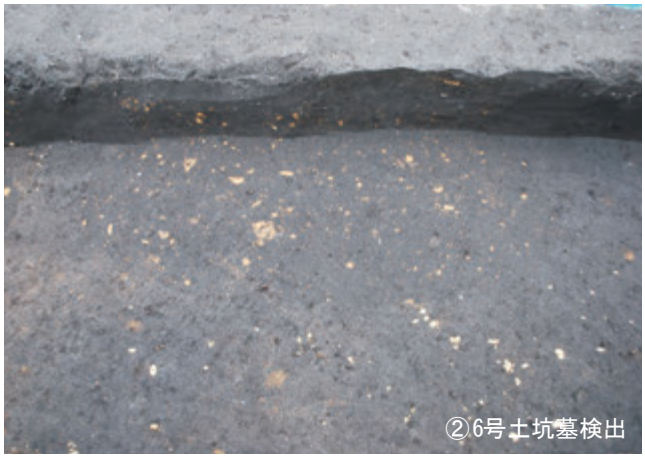

③鉄器出土状況


④鉄器出土状況


⑤完掘

193号地下式横穴墓（SK255）









191・192・193号地下式横穴墓，6号土坑墓

図版30



461～464

①鉄剣･鉄鏃　オモテ



②鉄剣･鉄鏃　ウラ

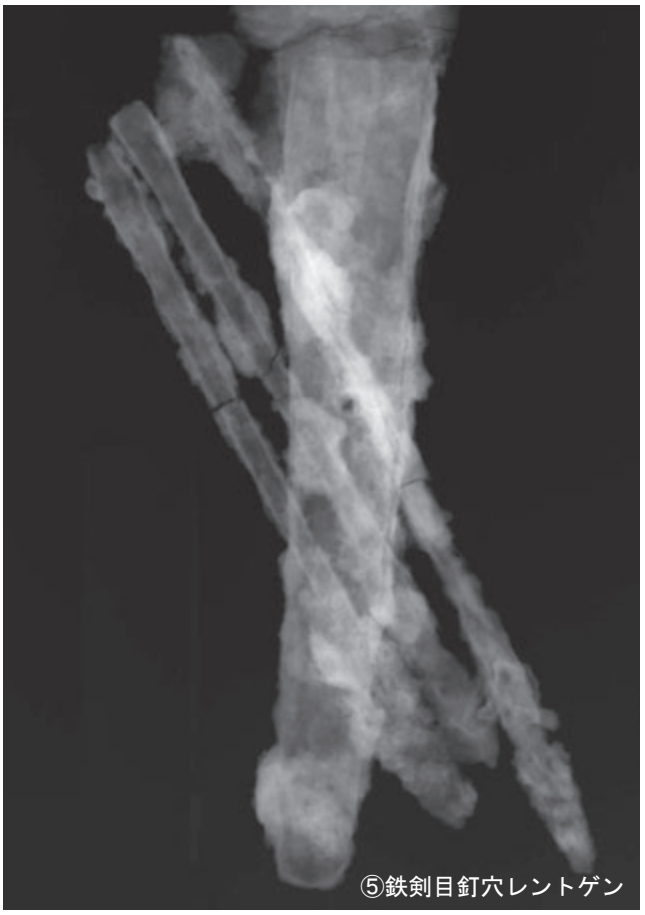


460

③短剣　オモテ



④短剣　ウラ



⑤鉄剣目釘穴レントゲン

192・193号地下式横穴墓出土鉄剣，鉄鏃，短剣



472・473
①鉄鏃　オモテ



②鉄鏃　ウラ



465～471
⑦鉄鏃　オモテ



⑧鉄鏃　ウラ



474
③鉄鏃　オモテ



④鉄鏃　ウラ



477・478
⑨鉄鏃　オモテ



⑩鉄鏃　ウラ



475・476
⑤鉄鏃　オモテ



⑥鉄鏃　ウラ



459
⑪刀子　オモテ



⑫刀子　ウラ

191・193号地下式横穴墓出土鉄鏃，刀子

公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（47）
東九州自動車道（志布志ＩＣ～鹿屋串良ＪＣＴ間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

田 原 迫 ノ 上 遺 跡 3

立 小 野 堀 遺 跡 2

発　行　年　　2022年3月
編集・発行　　鹿児島県教育委員会
公益財団法人 鹿児島県文化振興財団　埋蔵文化財調査センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL　0995-70-0574　　FAX　0995-70-0576

印　　刷　　日進印刷株式会社
〒892－0846　鹿児島県鹿児島市加治屋町16番20号
TEL　099-222-8291　　FAX　099-223-2715



鹿児島県